QVOD SVPERIVS
MACROPROSOPVS
STOLA
DEI
SICVT
MICROPROSOPVS
QVOD INFERIVS

高等魔術の教理

序文

古代の神の教えの全ての祭司だけの神秘の例えのヴェールに隠されて、
全ての入門の影と不思議な試練に隠されて、
全ての神聖な書物の封印に隠されて、
ニネヴェやテーベの残骸に、
古代の神殿の砕けている石碑に、
アッシリアやエジプトのスフィンクスの黒く成った顔に、
ヴェーダの霊感を受けて書かれた話をインドの神を確信している者に説明する巨大な不思議な絵に、
錬金術の古書の不思議な象徴に、
全ての秘密結社が実践した入門の儀式に、
全ての場所で用心して隠された、全ての場所で同じ 1 つの考えの跡が見つかる。

(普遍唯一の考えが見つかる。)

隠された哲学は全ての知的な力の保母、代母であった様である。

隠された哲学は全ての神の不明の鍵であった様である。

隠された哲学は王者と祭司のためだけの知であった時代の社会の女神であった様である。

隠された哲学は祭司マギと共にペルシャを統治した。

祭司マギは結局、姿を隠した。

全ての地の王者が姿を隠した様に。

祭司マギは力を濫用したからである。

隠された哲学は最も不思議な口伝、信じられないほど豊富な詩、思いやりと畏敬の象徴をインドに与えた。

隠された哲学はオルフェウスの竪琴の音楽でギリシャを洗練させた。

隠された哲学は全ての学問と全ての人の知の進歩の原理をピタゴラスの大胆な類推に隠した。

伝説は隠された哲学の奇跡で満ちあふれている。

歴史は、隠された哲学の未知の力の推測を試みた時に、作り話と混同された。

隠された哲学は神託で国々を揺るがすか強めた。

隠された哲学は王座の上の暴君どもを震え上がらせた。

隠された哲学は好奇心または恐怖で全ての人の精神を支配した。

大衆が言うには、隠された学問には、「不可能は無い」。

(マタイによる福音 １７ 章 ２０ 節「確信が有れば、不可能は無い」)

隠された学問は四大元素に命令する。

隠された学問は星々の言葉を知る。

隠された学問は ７ 惑星の軌道を傾ける。

隠された学問が話す時、月は血の様に赤く成り堕天する。

(使徒行伝 ２ 章 ２０ 節「月は血の様に赤く成る」)

死んだ者は墓で復活する。

死んだ者は頭骨を吹き抜ける夜風で徴と成る言葉を話す。

隠された学問は愛憎の、女性の主である。

隠された学問は楽園や地獄を人の心に思い通りに与えられる。

隠された学問は全ての形を与える。

隠された学問は美しさ、または、醜さを与える。

隠された学問はキルケの杖で人を獣に変える。隠された学問はキルケの杖で動物を人に変える。

隠された学問は命または死すら与える。

隠された学問は錬金で富を達道者に与えられる。

隠された学問は第 5 元素エーテルまたは若返り薬エリクサーで不死を達道者に与えられる。

若返り薬エリクサーは金と光の結合である。

隠された学問がゾロアスターからマニまでの魔術である。

隠された学問がオルフェウスからティアナのアポロニウスまでの魔術である。

現実の大衆のキリスト教が結局アレクサンドリア学派の光を放つ夢と巨人的な大志に勝利してしまった時に、隠された哲学に対する公の破門が大胆に始まり、隠された哲学は以前より隠されて謎に成ってしまった。

さらに、秘伝伝授者、達道者について不思議な不安にさせる、うわさが流され始めた。

不運の感化が秘伝伝授者と達道者を全ての場所で包囲している。

秘伝伝授者と達道者は蜜の様に甘い言葉か力に夢中に成った者を立ち行かなくさせるか狂わせる。

秘伝伝授者と達道者が愛した女性はストリゲスに成る。

秘伝伝授者と達道者の子は夜の集会で見えなく成る。

大衆は血の酒神祭と憎むべき宴について震え上がりながら、ひそかに、ささやいた。

古代の神殿の地下室で骨が見つかった。

夜に叫びが聞こえた。

魔術師が近づくと草木の収穫が枯れ豚の群れは病気に成る。

(
マタイによる福音２１章１９節「イエスは無花果の木に近づいた。イエスは実を結ばない無花果の木を枯らす」
実を結ばない無花果の木は悪人の例え。
マタイによる福音８章２８節から３４節「豚の群れ」
豚は悪人の例え。
)
大衆は、常に、世界に時々現れる不治の病を達道者の邪視のせいにした。
ついに、魔術を呪う大衆の世論が上がった。
魔術は名前だけで罪に成った。
大衆は、うらみから数世紀「キリスト教徒をライオンに！」と叫んだ様に「魔術師を火に！」と叫んだ。
１９世紀の大衆は自然科学の力にだけ徒党を組んで陰謀を企てる。
大衆が真理を知る事は無い。
しかし、大衆には力が有るものを推測する直感が有る。
１８世紀以降の大衆はキリスト教徒と魔術を笑いものにする。
一方、１８世紀以降の大衆はルソーの話とカリオストロの幻覚に夢中である。
魔術の基礎は学問である。魔術の基礎は自然科学である。
キリスト教の基礎が思いやりである様に。
マタイによる福音２章の象徴的な実話で３人のマギが、ゆりかごの中の、人に成った神イエス、神の言葉イエスに敬礼した。
(ヨハネによる福音１章イエスは神の言葉、神のロゴス)
マタイによる福音２章でイエスの星が３人のマギを導いた。
(

マタイによる福音 2 章の 3 人のマギは 3 つ 1 組の象徴である。

マタイによる福音 2 章のイエスの星は小宇宙の象徴である。

マタイによる福音 2 章のイエスの星は人体の象徴である。

)

マタイによる福音 2 章で 3 人のマギは金、乳香、没薬をイエスに贈った。

マタイによる福音 2 章の 3 つの贈り物は第 2 の神秘の 3 つ 1 組である。

マタイによる福音 2 章には、2 組の 3 つ 1 組である六芒星の象徴の下に、カバラの最高の秘密が象徴的に含まれている。

本物のキリスト教は本物の魔術を憎まない。

しかし、人の無知は未知を恐れる。

隠された学問は狂信者、盲信者の迫害を避けるために隠された。

隠された学問は新しい分かり難い文字で隠された。

隠された学問の成果は隠された。

隠された学問の希望は隠された。

(パンドラの箱の様に、隠された学問の希望は隠された。)

錬金術の隠語が創造された。

錬金術の隠語は大衆には永遠の謎である。

命を与える言葉はヘルメスの本物の弟子のためだけのものである。

驚くべき事実!

誤りが無い教会、カトリック教会はキリスト教の聖書の中でエゼキエル書とヨハネの黙示録の理解を求めないし説明を試みた事が無い。

エゼキエル書とヨハネの黙示録は 2 つのカバラの鍵である。

エゼキエル書とヨハネの黙示録は確実に天に蓄えられている。

(マタイによる福音 6 章 2 0 節「天に蓄えなさい」)

エゼキエル書とヨハネの黙示録は魔術師の王者たちの説明を求めている。

エゼキエル書とヨハネの黙示録はキリスト教徒には 7 つの封印で封印されている。

エゼキエル書とヨハネの黙示録は秘伝伝授者の隠された学問の学徒には分かり易い。

タロットは別のカバラの鍵である。

タロットは、ある意味で普及している。

タロットは多分、全ての場所で見つかる。

(タロットは普遍に見つかる。)

タロットは全てのものの中で最も隠されている。

タロットは全てのものの中で最も未知である。

なぜならタロットは他の全ての鍵だからである。

タロットは公に証拠が残されている。

タロットの本当の意味を大衆は知らない。

タロットは誰も探そうとは夢にも思わない所に実は存在する鍵である。

大衆は全ての鍵を無駄に別の所で探している。

タロットは多分エノク書より古い。

エリファス レヴィが初めてタロットの本当の意味を説明する。

タロットの絵は原初のままで欠損が無く保存されている。

タロットは、古代の石板の様に、独立した複数枚の絵である。

誰も注目しなかったが、ある有名な学者は、タロットの秘密は分からなかったが、タロットが古くから存在し、タロットの絵が原初のまま保存されている事を明らかにした。

聡明というよりは夢見がちな、別の学者は長年タロットを研究して、タロットの重要性を推測しただけに終わった。

実に、タロットは記念碑である。

タロットは驚くべき作品である。

タロットはピラミッドの構造の様に強固で簡潔である。

タロットは結果としてピラミッドの様に永久的である。

タロットは全ての学問の要約である。

タロットは無限の組み合わせで全ての問題を解決できる。

タロットは思考を呼び起こす形で話しかけてくる。

タロットは全ての可能な限りの概念を吹き込み調節する。

タロットは人の精神の多分、傑作である。

タロットは古代からの無上の贈り物の 1 つである。

タロットは普遍の鍵である。

学の有るギヨーム ポステルだけがタロットという名前を説明し理解していた。

タロットは比類無き作品である。

タロットの最初の、いくつかの絵だけでルイ クロード ド サンマルタンの信心深い精神を法悦に高めた。

タロットは気高かったが不適切だったスヴェーデンボルグの理性を回復したかもしれない。

タロットについては後で話す。

タロットの数学的な正確な説明は良心的な作業の補完と極致に成るだろう。

キリスト教とマギの学問の本来からの一致は、一度完全に実証されれば、無上の重要な発見に成るだろう。

魔術とカバラの真剣な研究は真剣な精神を、今まで不可能と考えられてきた、学問と神の教えの一致、理性と信心の一致に導くだろう。

鍵の保管を特別な務めとするカトリック教会がエゼキエル書とヨハネの黙示録の鍵を保有する気が無い事は話した。

(マタイによる福音 １６ 章 １９ 節「私イエスはあなたペトロに天の王国の鍵を与える」)

キリスト教徒の大衆は学問と魔術のソロモンの小鍵は失われたと考えている。

しかし、同時に、神の言葉イエスが統治する知の領域で書かれたものが消え失せない事は確かである。

(マタイによる福音 ５ 章 １８ 節「一点一画も消え失せない」)

大衆が理解できなくなったものは大衆には存在しないだけである。

少なくとも、神の言葉イエスの統治により、大衆が理解できなくなったものは神の謎の領域へ移るだけである。

さらに、個人的な解放された祭司の集団と言える魔術の領域に属する全ての者に対して、カトリック教会が反感を抱き戦いすら始めたのは必要であり生来のものですらある原因は、カトリック教会が社会的な位階制の祭司の集団だからである。

カトリック教会は魔術を無視する。

カトリック教会は魔術を無視するか姿を隠す必要が有る。

カトリック教会が魔術を無視するか姿を隠す必要が有る事は後で証明する。

しかし、カトリック教会はマタイによる福音 ２ 章で ３ 人のマギが、ゆりかごの中のカトリック教会の謎の初祖イエスを敬礼した事を認める。

マタイによる福音 ２ 章の ３ 人のマギは既知の世界の ３ つの部分の祭司の代表である。

マタイによる福音２章の３人のマギは隠された哲学の類推可能な３つの世界の代表である。

(

自然科学、哲学、神の教え。

自由意思といった神だけの領域、概念の領域、形の領域。

神だけの楽園、霊の冥界、この世界。

)

アンモニオス サッカスとプラトンの援助の下で、アレクサンドリア学派で、魔術とキリスト教は、ほとんど手を組んだ。

偽ディオニュシオス文書全体に、ほとんどヘルメスの考えが見つかる。

シュネシオスは夢についての論文の構想の概要を書いた。

カルダーノはシュネシオスの夢についての論文の注釈書を書いた。

シュネシオスの夢についての論文は、スヴェーデンボルグ派の教会の祭儀の役に立つかもしれない賛美歌を作曲できるかもしれない。

シュネシオスの夢についての論文は、光に照らされた者達の教会が、祈祷書として所有できるかもしれない。

プラトンの「哲学者が王者に成った」ユリアヌス帝による統治は、火のように激しい熱烈な曖昧な論争の時代に繋がってしまった。

ユリアヌス帝は、「背教者」と呼ばれてしまった。

なぜなら、若い時に、ユリアヌス帝は、意に反して、キリスト教への信仰告白をさせられたからである。

ユリアヌス帝が、プルタルコスの作中の時節外れの英雄に成るのに十分なほど判断を誤った事、言わせてもらえば、ローマの騎士ドン キホーテのようであった事を、全ての人々は知っている。

大衆はユリアヌス帝が光に照らされた者である事を知らない。

大衆はユリアヌス帝が無上の秘伝伝授者である事を知らない。

大衆はユリアヌス帝が神の唯一性を信じていた事を知らない。

大衆はユリアヌス帝が３つ１組の普遍の考えを信じていた事を知らない。

要するに、大衆はユリアヌス帝が、古代の世界を惜しんだのではなく、古代の世界の大いなる象徴、非常に優美な象徴を惜しんだ事を知らない。

ユリアヌス帝は多神教徒ではなかった。

ユリアヌス帝はギリシャの多神教の例えに魅了されたグノーシス主義者であった。

ユリアヌス帝には、不運にも、イエス キリストという名前が、オルフェウスという名前よりも良い響きに感じなかった。

ユリアヌス帝は、哲学者や美文家としての私的な学問的な趣味の報いを受ける羽目に成ってしまった。

ユリアヌス帝は、カトーの時代のエパメイノンダスのような死の光景と満足感を自身にもたらした後に、既にキリスト教化していた世論によって、葬儀の弔辞で呪われてしまい、最終的な評判として「背教者」という軽蔑的な別名を与えられてしまった。

後期ローマ帝国の矮小な人々や矮小な問題は飛ばそう。

中世に移ろう……。

(ここから、夢や妄想におけるサバトの描写が始まります。)

待ちなさい！　この本を手にとって！

７ページ目を見なさい。

私が広げたマントの上に座りなさい。

各自、自分の両目をマントの一角で覆いましょう……。

あなたの頭は、目眩で、ふらつきませんか？

さもなければ、

あなたの足下の地面が飛んでいるように感じませんか？

意識を明確に保ちなさい……。

周囲を見ようとしないで……。

目眩は、やみました。

私達は到着しました。

立ち上がって、(マントの一角を外して、)両目を開けなさい。

ただし、特に、(十字を描く)キリスト教の手振りをしたり、キリスト教の言葉を唱えたりしないように注意しなさい。

私達は、画家サルヴァトル ローザの絵のような風景の中にいます。

嵐の後で安息しているような荒れ野です。

空には月が無い。

柴(しば)に小さな星々がかすかに光っているのが見える。

あなたには、巨大な鳥達が、あなたの周囲をゆっくり飛んでいるような音が聞こえます。

巨大な鳥達は、飛びながら、不思議な神託をささやいているように感じます。

石の中の十字路に静かに近づこう。

荒い、葬儀でのようなラッパの音が、突然、吹き鳴らされます。

(十字路の)四方の全てで、黒いたいまつが燃え上がります。

興奮した群衆が空(から)の王座の周囲に押し寄せます。

群衆は皆、空(から)の王座を見つめて待ち望みます。

突然、群衆は、地面に平伏します。

ヤギの頭をかぶった王子が民の中から民の前に跳躍した。(ヤギは身代わりの象徴。王子はイエスの例え。)

王子は王座に昇った。(ヨハネによる福音 1 章 神の言葉イエスは神である。)

王子は民をかえりみた。

王子は身をかがめるふりをした。(王子は苦しむふりをした。)

王子は人の顔を民に見せた。(王子は人としての顔を民に見せた。王子は人性を見せた。)

民は黒いたいまつを持って王子の前に来て敬礼し口づけした。

老人の様な声で笑いながら王子は立ち上がった。

王子は金、秘密の教え、隠された薬、毒を忠実な家来に与えた。(毒は薬に成る場合が存在する。)

シダ植物とハンノキに火がつけられ、処刑された罪人達の人骨と脂肪が積み上げられる。

野生のパセリとバーベインの王冠をかぶった女性の祭司ドルイドが金の短剣で未洗礼の子を犠牲にする。(未洗礼の子は悪人の例え。)

畏敬するべき愛餐が用意される。

食卓が並べられる。

仮面をした男達が、半裸の女性達の隣に座る。

酒神バッカスの祭が始まる。

塩だけが無い。塩は知と不死の象徴である。

血痕のような染みを残して、ワインが流される。

いけない話と甘い愛撫が始まる。

やがて、会衆全体が、ワイン、快楽、いけない罪、歌で、酔う。

会衆は立ち上がり、無秩序な群衆として、急速に、地獄の踊りを形成する……。

全ての伝説の巨大な奇形の者達、悪夢の全ての幻達が、やって来る。

巨大なヒキガエルが、脇腹につけた両手で、フルートを逆さに吹き鳴らす。

足を引きずっているスカラベがおどりの輪に加わる。

ザリガニはカスタネットを鳴らす。

ワニは鱗を叩いて拍子を取る。

象(ゾウ)とマンモスは、キューピッドのような衣服をまとって現れて、踊りの輪に足を踏み入れる。

最終的に、目眩を引き起こす踊りの輪は崩れて、四方の全てへ解散する……。

全ての踊っていた男達は、叫びながら、乱れ髪の女性を引き連れていく……。

ランプや人の脂肪で形成したロウソクは消され、暗闇の中、煙が昇ります……。

あちこちから叫びが聞こえる。

叫びに、轟くような笑い声、キリスト教の神への冒涜の言葉、喉(のど)をゴロゴロ鳴らす音が混じる。

さあ、目覚めて起き上がりなさい！

十字を切る手振りをしないで！

見なさい。

私は、あなたを家に連れて帰りました。

あなたは自分のベッドの中にいます。

あなたは、夜の夢の中での旅と放蕩によって、多少、疲れ、多分、気が動転しているであろう。

しかし、あなたは、全ての人が知らないのに話している物、(夢や妄想における)サバトを目撃したのです。

あなたは、Triphonius の洞窟と同じくらい畏敬するべき秘密に入門したのです。

あなたは、(夢や妄想における)サバトに参加したのです。

今、あなたに残されている義務は、自分の理性を保つ事、法への健全な畏敬を保持する事、教会と教会による火刑を畏敬して距離を保つ事です。

(ここまでで、夢や妄想におけるサバトの描写は終わります。)

あなたは、気分転換に、夢や妄想におけるサバトよりも幻想的ではなく、夢や妄想におけるサバトよりも現実的で真に畏敬するべき何ものかを見たいと思いますか？

(そうであるならば、)あなたは、ジャックド モレーと共犯者達、または、殉教した同胞達の処刑に協力する羽目に成ってしまうであろう……。

ねつ造報道にだまされてはいけない!

罪と無罪を区別しなくてはいけない!

神殿騎士団はバフォメットを神として敬礼していたのか？　いいえ!　バフォメットは象徴であった。

神殿騎士団はメンデスのヤギの尻にくちづけするという敬礼をしていたのか？　いいえ!　敬礼ではなく合図であった。

弁明の機会無しに倒された、教会と国家を揺るがした秘密を有する力が有る団体、神殿騎士団は本当はどのようなものであったのか？

軽率に判断してはいけない。

神殿騎士団は大いなる罪を犯した。

(巨人プロメテウスが天の火を人に与えた様に、神殿騎士団は大いなる罪を犯した。)

神殿騎士団は大衆を古代の入門の祭司の聖所に入門させた。

(ヘブライ人への手紙 9 章 祭司の聖所、大祭司だけの至聖所。)

神殿騎士団は地の王者に成るために再び善悪の知の木の果実を取り分け合った。

法王と王者より高く古い神の判決が神殿騎士団にくだった。

創世記の 2 章 1 7 節で神御自身が「善悪の知の木の果実を食べた日に、あなたはいつか確実に死ぬであろう」と話している。(ヨハネによる福音 3 章 3 節「再び生まれ直さないと神の王国を見る事はできない」)

世界では何が起きているのか？

なぜ聖職者と権力者は震え上がっているのか？　(祭司は金銭を稼ぐための職業ではない。)

どのような秘密の力が法王の三重冠と王者の王冠を揺るがしているのか？

数人の狂人のふりをしている魔術師が国から国へさすらっている。

魔術師の話では、魔術師は賢者の石をぼろぼろの衣に隠している。

魔術師は土を金に変えられる。

(

創世記 2 章 7 節「神は人を土の塵から創造した」

エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でアダムは赤い土を意味する」

アダムは人の代表。

)

魔術師には食べる物が無い！

魔術師には枕する所が無い！

栄光の光と恥の影が魔術師の額で円を描いている。

ライムンドゥス ルルスは普遍の知を見つけた。

ライムンドゥス ルルスは肉体の死への勝利の苦悩から解脱するために空しく死を探し求める(という作り話が存在する)。

さじを投げるといった、ことわざを否定して、パラケルススは、焼きごてを木製の人形の脚につけるといった不思議な治療で、想像による病気などを治した。

不思議なパラケルススはラブレーの小説の英雄の様に常に酔っていたが常に意識を明確に保っていた。

ギヨーム ポステルは創世から隠されている絶対の考えを見つけたので分かち合いたいとトレントの公会議の教父に無邪気に書いて知らせた。

(マタイによる福音 １３章 ３５節「創世からの秘密」)

トレントの公会議の教父は、ギヨーム ポステルを狂人として議論せず、ギヨーム ポステルを相手にして非難せず、有効な恩恵と十分な恩恵という重大な問題の調査を進めた。

コルネリウス アグリッパは貧しく見捨てられ死んだ。

コルネリウス アグリッパは魔術師としては小さな者であった。

しかし、大衆はコルネリウス アグリッパが最も力が大きな悪人の霊の魔術師であると誤解している。

なぜなら、コルネリウス アグリッパは時々皮肉屋で秘密主義者であったからである。

どのような秘密を魔術師は墓まで持って行くのか？

なぜ魔術師は理解されないで神の様に思われるのか？

なぜ魔術師は弁明の機会無しに迫害されるのか？

なぜ魔術師は教会と社会が畏敬する秘密の知の秘伝伝授者であるのか？

なぜ魔術師は大衆が知らないものを知っているのか？

なぜ魔術師は大衆が知りたいと熱望するものを隠すのか？

なぜ魔術師は畏敬するべき未知の力を与えられているのか？　(なぜ神は畏敬するべき未知の力を魔術師に与えているのか？)

隠された知！

隠された学問！

魔術！

全てを明らかにし、さらなる思考の糧と成る言葉！

「知る事ができる全てのものと、その他のものについて」

しかし、本物の魔術とは何か？

迫害されても自信に満ちていた魔術師の力とは何か？

もし魔術師に本当に力が有ったのであれば、なぜ魔術師は敵に勝利しなかったのか？

もし魔術師に力が無く無知であったのであれば、なぜ大衆は魔術師を畏敬したのか？

魔術は存在するのか？

宗教が認める奇跡を起こす力が有る隠された知は存在するのか？

断言と本書でシュロの葉を受けるに値する 2 つの疑問に答える。

本書は断言を証明するであろう。

断言は次である。

イエス。

力が有る本物の魔術は過去に存在したし現在も存在する。

イエス。

カトリック教会が認める奇跡についての伝説は全て真実である。

通例に反して、カトリック教会が認める奇跡について、大衆の誇張は的外れなだけではなく真実を下回っている。

本当に畏敬するべき秘密が存在する。

エジプトの宗教的な風習が証明している様に、秘密の啓示は世界をすでに一度一変させた。

モーセは創世記の ２ 章と ３ 章で秘密を象徴で要約した。

秘密は死に至る善悪の知である。

秘密の啓示は死に至る。

モーセは秘密を果実を食べると死に至る善悪の知の木として描いた。

(ヨハネによる福音 ３ 章 ３ 節「再び生まれ直さないと神の王国を見る事はできない」)

善悪の知の木は地上の楽園の中心に存在する。

善悪の知の木は命の木の隣に存在する。

善悪の知の木と命の木の根はつながっている。

善悪の知の木の根は ４ つの神秘の川の源泉である。

(善悪の知の木の根は十字の ４ つの神秘の川の源泉である。)

火の剣と智天使ケルビムが善悪の知の木を守っている。

エゼキエルはエゼキエル書 １ ０ 章 １ ４ 節で智天使ケルブには牛、人、ライオン、ワシの顔が有ると話している。

智天使ケルビムは聖書のスフィンクスである。

(

エリファァス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でケルブ、ケルビムは牛を意味する」

ケルビムはケルブの複数形。

)

ここで話を中止する必要が有る。

すでに話し過ぎた恐れが有る。

イエス。

唯一、普遍、不壊の考えが存在する。

無上の論理の様に、力が有る考えが存在する。

全ての大いなるものの様に、簡潔な考えが存在する。

全ての普遍、絶対の真理の様に、分かり易い考えが存在する。

普遍唯一不壊の考えは他の全ての考えの父であった。

イエス。

超人に見える力を人に与える知が存在する。

１６世紀のヘブライ語の手書きの文書で次の様に超人に見える力が数え上げられている。

後記はソロモンの小鍵を右手に、アーモンドの花が咲いたアーロンの杖を左手に持つ人の力と恩恵である。

アレフ。

友の様に顔と顔を合わせて神を見ても死なない。

全ての天の軍に命令する７つの霊と親しく話す。

ベト。

全ての苦痛と全ての恐怖を超える。

ギメル。

全ての天を統治する。

(9 つの天を統治する。)

地獄の全てが仕える。

ダレト。

自身の健康と命を定める。

自身と等しく他者の健康と命に感化を与えられる。

ヘー。

不運に不意打ちされない。

天災に圧倒されない。

敵に圧倒されない。

ヴァウ。

過去、現在、未来の論理を知る。

ザイン。

死んだ者の復活の秘密と不死の鍵を保有する。

前記は 7 つの主な恩恵である。

後記は次位の恩恵である。

ケト。

賢者の石を見つける。

テト。

万能薬を持つ。

イョッド。

永久機関の法を知る。

円積問題を証明できる。

カフ。

全ての金属だけではなく、土、土の塵すら金に変える。

(

創世記 2 章 7 節「神は人を土の塵から創造した」

エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でアダムは赤い土を意味する」

アダムは人の代表。

)

ラメド。

最も獰猛な動物を和らげる。

蛇をしびれさせ魅了する言葉を話せる。

メム。

普遍の知を与える「知られているわざ」を保有する。

ヌン。

用意無しに研究無しに、全てのものについて学が有る様に話す。

後記は魔術師が最低限持つ 7 つの力である。

サメク。

男性の魂の深いものと女性の心の神秘を一目で知る。

アイン。

自然から思い通りに自由に成る。

プフェ。

超自由意思に左右されない認識不可能な原因に左右されない未来を予見する。

ツァーデ。

最も有効な慰めと最も健全な助言をすぐに全ての者に与える。

クォフ。

不運に勝利する。

レシュ。

愛憎を抑える。

シュィン。

富の秘密を保有する。

常に富の主である。

富の奴隷に成らない。

貧しさすら楽しむ方法を知る。

みじめな気持ちに成らない。

タウ。

３組の７つ１組に加えて、賢者は四大元素に命令し、嵐を静め、触れるだけで病気を治し、死んだ者を復活させる！

(

マタイによる福音８章２４節から２６節イエスは嵐を静めた。

マタイによる福音９章１８節から２５節イエスは死んだ者を復活させた。

)

同時に、ソロモンが三重の封印、六芒星で封印したものが存在する。

秘伝伝授者が知るには十分である。

大衆が笑いものにしようと疑おうと信じようと脅そうと恐れようと、学問と魔術師には何か問題が有るであろうか？　いいえ！　学問と魔術師には何も問題が無い。

前記は実際に隠された哲学がもたらすものである。

魔術師は前記の恩恵が事実であると断言して狂っていると非難されたり詐欺の疑いをかけられても甘受できる。

前記を実証する事が隠された哲学についての本書の唯一の目的である。

「賢者の石」、「万能薬」、「錬金」、「円積問題」、「永久機関」の秘密は、似非科学でも狂った夢想でもない。

「賢者の石」、「万能薬」、「錬金」、「円積問題」、「永久機関」といった言葉の本当の意味を理解する必要が有る。

(「賢者の石」、「万能薬」、「錬金」、「円積問題」、「永久機関」は例えである。)

「賢者の石」、「万能薬」、「錬金」、「円積問題」、「永久機関」といった言葉は、「大いなる務め」という名前でより理解できる 1 つの同じ秘密、1 つの同じ効能を様々に応用した表現、特徴である。

(「賢者の石」、「万能薬」、「錬金」、「円積問題」、「永久機関」、「大いなる務め」は唯一の秘密の例えである。)

さらに、蒸気より計り知れない力が有る、ある力が自然には存在する。

力によって、力を応用し傾ける方法を知る者は独りで地上を覆したり一変させられる。

古代人は力を知っていた。

力はつり合いを無上の法とする普遍の代行者に存在する。

普遍の代行者の心を傾ける事は超越的な魔術の大いなる秘密に直結する。

普遍の代行者の心を傾ける事によって、季節の順序すら変えられる。

夜に昼の現象をもたらせられる。

地上の一方の端から他方の端の間ですぐに通じ合える。

ティアナのアポロニウスの様に、地上の他の場所で起きているものを見られる。

触れないで治したり傷つけられる。

普遍の成功と反響を言葉に与えられる。

メスメルの模倣をする者の不確かな方法で普遍の代行者はかすかに表れる。

中世の達道者は普遍の代行者を「大いなる務め」の「第一質料」と正確に呼んだ。

グノーシス主義者は普遍の代行者を神の聖霊の火の体と表現した。

バフォメット、メンデスの両性具有者の象徴的な形の下で、サバトと神殿の秘密の儀式で、普遍の代行者は敬礼された。

前記の全てを証明するつもりである。

前記が隠された哲学の秘密である。

前記が歴史における魔術である。

本と業に表れる魔術について目を通そう。

入門と儀式に表れる魔術について目を通そう。

石板タロットに全ての魔術の例えの鍵が見つかる。

石板タロットはヘルメスの作品であると考えている。

タロットは隠された学問という建物全体の要石と呼べる。

タロットは無数の伝説をまとめたものである。

タロットは伝説の部分的な解釈をまとめたものである。

タロットは伝説の様々な形による無限の新たな解釈をまとめたものである。

時々巧妙な例え話が時代を特徴する大いなる叙事詩と調和して混ざる。

秘伝伝授者ではない者には例え話と史実を見分ける方法や理由が不明である。

例え話と史実が混ざった金羊毛の伝説はヘルメスの考えとオルフェウスの魔術の考えを要約しヴェールで隠している。

ギリシャの神秘の詩、金羊毛の伝説についてだけ話す。

なぜなら、エジプトとインドの祭司の聖所の伝説は、豊富さである程度意気喪失させ、豊富さの中で選択に迷うからである。

さらに、テーバイドについて話す。

テーバイドは過去、現在、未来の全ての考えの畏敬するべき総合である。

テーバイドは無限の例え話と言える。

人オルフェウスの神性の様に、テーバイドは人の命の輪の両極を含んでいる。

驚くべき事実！

「テーバイ攻めの七将」の象徴とヨハネの黙示録の象徴は同じ意味を持っている。

「テーバイ攻めの七将」ではテーバイには 7 つの門が有り、ヨハネの黙示録 5 章 1 節では神の書には 7 つの封印が有る。

「テーバイ攻めの七将」では ７ 人の将軍がテーバイを攻め、ヨハネの黙示録 １ ３ 章では ７ つの頭を持つ獣が神を冒涜する。

「テーバイ攻めの七将」では ７ 人の将軍がテーバイを守り、ヨハネの黙示録では ７ つの霊が説明する。

「テーバイ攻めの七将」ではテーバイを攻める ７ 人の将軍は犠牲の血に誓い、ヨハネの黙示録 ５ 章では犠牲の子羊イエスが神の書の ７ つの封印を開く。

ヨハネの黙示録 １ 章 １ ８ 節の「死んだが生きている者」はヨハネの黙示録 ５ 章の犠牲の子羊イエスである。

血を流す果実の様にキタイロンの木に吊るされて見つけられたオイディプスの神秘の生まれは民数記 ２ １ 章 ８ 節から ９ 節のモーセのさおに吊るされた火の蛇と創世記の善悪の知の木の果実を思い出させる。

オイディプスが知らないで父と戦い殺す象徴的な実話は、知無しで盲目的に解放された理性を心配する予言である。

(マタイによる福音 ２ ８ 章 １ ９ 節 父である神)

オイディプスはスフィンクスに会う。

スフィンクスは象徴の中の象徴である。

(

スフィンクスは神の象徴である。

出エジプト記 ３ 章 １ ４ 節 神はモーセに存在の中の存在であると名乗った。

)

スフィンクスは大衆には永遠の謎である。

スフィンクスは賢者の知の堅固な基礎である。

スフィンクスは大食いの沈黙の巨大な者である。

(スフィンクスは知の無い人を食う巨大な者である。)

スフィンクスの不変の形は大いなる普遍の神秘の唯一の考えを表す。

　どのように 4 つ 1 組を 2 つ 1 組に変えて 3 つ 1 組で説明するのか？

　より通俗的に象徴的に言うと、朝は 4 本足、昼は 2 本足、夜は 3 本足の動物は何か？

　(四足獣といった人以外 > 女性 > 男性)

　哲学的に言うと、どのように四大元素の力の考えはゾロアスターの両極性の考えをもたらしピタゴラスやプラトンの 3 つ 1 組の考えで要約されるのか？

　例えと数の究極の論理は何か？

　全ての象徴の究極の意味は何か？

　オイディプスの答えは簡潔で畏敬するべき言葉であった。

　オイディプスの答えはスフィンクスを倒した。

　オイディプスの答えは推測する者をテーバイの王者にした。

　スフィンクスの謎へのオイディプスの答えは「人」！　……不適切である！

　(スフィンクスの謎への正しい答えは「神」である。)

　オイディプスは見過ぎた。

　(オイディプスは人の神性を見た。)

　オイディプスは不透明に見た。

　自ら盲目に成る事によって、すぐにオイディプスは不運な不完全な推測をつぐなわなければいけない。

　(オイディプスは自身の目をえぐった。)

　オイディプスは嵐の中に姿を隠す。

　スフィンクスの謎の答えを全ての意味と神秘の理解無しに推測したであろう全ての時代の全ての文明が嵐の中に姿を隠した様に。

人の運命の巨人的な叙事詩であるオイディプスでは全てが象徴的で超越的である。

(巨人プロメテウスは人の身代わりと成る巨人的な愛を実証した。)

２人の敵対する兄弟は大いなる神秘の２番目の部分を表し、アンティゴネの犠牲が神の様に完結させる。

最後の戦いが来る。

相互に殺し合う兄弟。

カパネウスは冒涜した神の雷によって倒される。

アムピアラオスは土に飲み込まれる。

テーバイドの非常に多数の象徴的な実話は、真実さと偉大さで、３つ１組の祭司だけの意味を見通す者を驚かせる。

バランシュが注釈したが、アイスキュロスは、アイスキュロスがギリシャ詩人の古代の崇高な人であっても、バランシュがフランスの批評家のうち優れた人であっても、前記の概念をかすかにしか、もたらす事ができなかった。

ホメロスは古代の入門の秘密の書を知っていた。

ホメロスはアキレスの盾の絵で古代の入門の概要と主な象徴を精密に描いた。

しかし、すぐに大衆はホメロスの優美な例え話を原始的な啓蒙の単なるあいまいな事実の記録と思う様に成った。

人は形にとらわれて概念を忘れる。

象徴はありふれると力を失う。

ホメロスの時代に魔術は地に堕ちた。

テッサリアの悪人の霊の魔術師は魔術を最も神を冒涜する誘惑術に変えた。

オイディプスの罪は死に至る果実をもたらした。

中途半端な善悪の知は悪を神を冒涜する神に持ち上げた。

人は光に疲れて具体的なものの影の中に逃げる。

大衆は空虚の夢想を神で満たす。

すぐに大衆の目には空虚の夢想が神より大いなるものに見える。

大衆は地獄を創造する。

本書の中で、「神」、「天」、「地獄」といった神聖な言葉を使う時、「神」、「天」、「地獄」の魔術師の意味は大衆が連想する意味と遠く離れている。

(「神」、「天」、「地獄」の魔術師の意味と大衆の意味は遠く離れている。)

秘伝伝授が大衆の思っているものから遠く離れて隔たっている様に。

魔術師には、神は賢者の AZOT である。

(

Azoth、AZOT、アゾットはヘブライ文字の最初の文字 א、アレフまたはラテン文字の最初の文字 A またはギリシャ文字の最初の文字 Α、アルファとラテン文字の最後の文字 Z とギリシャ文字の最後の文字 Ω、オメガとヘブライ文字の最後の文字 ת、タウである。

Azoth、AZOT、アゾットは最初から最後までの普遍と最初で最後の唯一を意味する。

普遍で唯一なものは絶対なものである。

Azoth、AZOT、アゾットは絶対を意味する。

)

魔術師には、神は「大いなる務め」の有効な究極の原理である。

オイディプスの例え話に戻る。

テーバイの王者オイディプスの罪はスフィンクスを理解しなかった事である。

(オイディプスの罪は神を理解しなかった事である。)

オイディプスの罪はテーバイへの天罰のスフィンクスをテーバイの民の代わりに清い十分な完全なつぐない無しに倒した事である。

(オイディプスの罪はつぐない無しにスフィンクスを倒した事である。)

結果として、すぐに巨大な者スフィンクスの死への報いとして伝染病がテーバイを襲った。

オイディプスはテーバイの王者から退位させられた。

オイディプスはスフィンクスの畏敬するべき死んだ霊に自身を犠牲にする。

スフィンクスの死んだ霊は、形の領域から概念の領域へ移り、肉体が死ぬ前より命に満ち大食いに成った。

オイディプスは人とは何者かを推測した。

(オイディプスは人の神性を推測した。)

オイディプスは神とはどのような者か見なかったので、自身の目をえぐった。

オイディプスは大いなる秘密の半分を大衆に口外した。

(オイディプスは人に神性が有る事を大衆に口外した。)

民を守るために、オイディプスは国外追放に成り、畏敬するべき秘密の残り半分を墓まで持って行く必要が有った。

(オイディプスは神とはどのような者かという秘密を墓まで持って行った。)

オイディプスの巨人的な例え話の後に、プシュケの優美な詩が見つかる。

アプレイウスはモーセの創世記を元にプシュケの例え話をつくった。

プシュケの例え話は大いなる魔術の秘密を神とかよわい人の神秘的な結合の形で表す。

(

大いなる魔術の秘密は神と人の結合である。

大いなる魔術の秘密は神性と人性の結合である。

大いなる魔術の秘密は強い者と弱い者の結合である。

)

プシュケは石の上に独り裸で見捨てられた。

プシュケは自身の概念的な高貴さの秘密について無知なままである必要が有る。

プシュケは夫である愛(の神エロス)を見ると愛(の神エロス)を失う必要が有る。

アプレイウスはプシュケの例え話でモーセの創世記を解説し翻訳している。

メンフィスとテーバイの聖所がイスラエルの神とアプレイウスの神々をもたらしたのではないか？

(イスラエルの神がメンフィス、テーバイ、アプレイウスの神々である。)

プシュケはエヴァの妹である。

と言うよりはむしろ、プシュケは霊化したエヴァである。

(プシュケはエヴァの魂である。)

エヴァとプシュケは知りたいと望んだ。

エヴァとプシュケは試練の栄光のために無知を失う。

エヴァとプシュケは地獄に降りるに値する。

プシュケは古代のパンドラの箱を持ち帰る。

エヴァは古い蛇の頭を見つけ圧倒する。

古い蛇は時と悪の象徴である。

古代の巨人プロメテウスがプシュケの罪をつぐなう必要が有る。

ヘラクレスが巨人プロメテウスを救った。

キリスト教の伝説のルシフェルがエヴァの罪をつぐなう必要が有る。

マタイ ４ 章 １ 節から １ １ 節で救い主イエスがルシフェルを圧倒する。

大いなる魔術の秘密はプシュケのランプと短剣である。

大いなる魔術の秘密はエヴァの善悪の知の木の果実である。

大いなる魔術の秘密は巨人プロメテウスの天の火である。

大いなる魔術の秘密はルシフェルの燃える王笏である。

大いなる魔術の秘密は救い主イエスの神聖な十字架である。

大いなる魔術の秘密を十分に知りながら濫用したり大衆に口外する者は全ての苦難を受けるに値する。

大いなる魔術の秘密を知るべき様に知る事、つまり、大いなる魔術の秘密を応用しつつ隠す者は絶対の主に成れる。

４ 文字の唯一の言葉が全てのものを含んでいる。

(4 文字の唯一の言葉、テトラ グラマトンは全てのものを含んでいる。)

ヘブライ人のテトラ グラマトン。

יהוה、YHWH、ヤハウェ。

(

高等魔術の祭儀 １４ 章「テトラ グラマトンは、魔術の無上の言葉であり、『である様に』を意味する」

יהוה、YHWH、ヤハウェは ４ 文字であるのでギリシャ語で ４ 文字を意味するテトラ グラマトンと呼ばれている。

)

錬金術師のテトラ グラマトン。

AZOT、Azoth、アゾット。

ジプシーのテトラ グラマトン。

トート。

カバリストのテトラ グラマトン。

Taro。

4 文字の唯一の言葉は非常に多数の方法で表される。

(4 文字の唯一の言葉、テトラ グラマトンは非常に多数の方法で表される。)

大衆にはテトラ グラマトンは神を意味する。

哲学者にはテトラ グラマトンは人を意味する。

(哲学者にはテトラ グラマトンは人性を意味する。)

達道者にはテトラ グラマトンは人の知の究極の言葉と神の力の鍵を与える。

秘密を明らかにしてはならない必要性を理解する者だけが秘密を応用できる。

仮にオイディプスがスフィンクスを殺す代わりにスフィンクスを圧倒して戦車につなぎテーバイに入門していれば、近親相姦無しに不運無しに国外追放無しに王者のままでいられたであろう。

仮にプシュケが柔和さと情に訴えかけて愛の神エロスが自ら自身を明らかにする様に説得していれば、プシュケは愛の神エロスを失わなかったであろう。

愛の神エロスは大いなる秘密と大いなる代行者の神話の象徴の 1 つである。

なぜなら、愛の神エロスは自発性と受容性、空間と充満、矢とみぞを同時に表す。

(矢とみぞは男性器と女性器の例え。)

秘伝伝授者は理解するであろう。

大衆のために、より明らかに話す気は無い。

不思議なアプレイウスの黄金のロバから薔薇十字団までの間、魔術小説は見つからない。

４１５年以降にアレクサンドリアではヒュパティアを殺したキリスト教の狂信者が学問を圧倒した。

４１５年以降に学問はキリスト教に成った、と言うよりはむしろ、アンモニオスサッカス、シュネシオス、偽ディオニュシオスは学問をキリスト教のヴェールの下に隠した。

４１５年以降に奇跡は迷信の装いで隠す事が必要に成った。

４１５年以降に学問は分かり難い言葉で隠す事が必要に成った。

４１５年以降に分かり難い書き方が復活した。

４１５年以降に１つの絵で考え全体を要約するpantacle、絵、文字が創造された。

４１５年以降に１つの言葉で一連の意図と啓示を要約するpantacle、絵、文字が創造された。

知の探求者の目的とは何であったのか？

知の探求者は大いなる務めの秘密、賢者の石、永久機関、円積問題、万能薬を探求した。

(「大いなる務め」、「賢者の石」、「永久機関」、「円積問題」、「万能薬」は例えである。)

「大いなる務め」、「賢者の石」、「永久機関」、「円積問題」、「万能薬」といった例えは頻繁に、知の探求者を狂人と誤解させて、知の探求者を大衆の迫害と憎悪から守った。

「大いなる務め」、「賢者の石」、「永久機関」、「円積問題」、「万能薬」といった例えは大いなる魔術の秘密の１つの側面を意味する。

後で説明する様に。

黄金のロバから薔薇十字団までの間、魔術小説は見つからない。

薔薇という象徴はダンテの詩の神秘的な魔術的な意味を表す。

超越的なカバラが薔薇という象徴をもたらした。

普遍の哲学の計り知れない隠された源泉に戻る時である。

聖書、全ての聖書の例えはヘブライ人の神の教えの知を不完全なヴェールに隠された方法で説明する。

タロットの祭司だけの絵は後で説明するつもりである。

ギヨーム ポステルはタロットをエノクの創世記と呼んだ。

タロットは確実にモーセと預言者より前から存在している。

タロットの考えは古代エジプト人の考えと基本的に同じである。

タロットの考えには大衆向けのものとヴェールに隠されたものが有る。

出エジプト記の ３４ 章 ３３ 節から ３４ 節の象徴的な実話でモーセは大衆と話す時は顔をヴェールで隠し神と話す時は顔からヴェールを外した。

ヴォルテールは聖書の超常的な話を非常に皮肉った。

聖書は口伝の記録としてのみ書かれている。

聖書の象徴的な実話は大衆には分かり難い。

さらに、モーセ五書と預言者の詩は神の教え、倫理道徳、祈祷書の初歩的な作品である。

(タルムードとして、)本当の秘密と口伝の哲学は、より透明なヴェールの下で、２世紀まで文書にされなかった。

タルムードは第 ２ の未知の聖書である。

と言うよりはむしろ、タルムードはキリスト教徒の大衆には理解されない聖書である。

タルムードは宝庫である。

キリスト教徒の大衆はタルムードは奇形な非論理的な話の宝庫であると話す。

タルムードに対して、キリスト教徒の大衆は、無神論者と同じ無知から、無神論者と同じ言い回しを話す。

タルムードは記念碑である、と断言する。

タルムードは哲学の天才と宗教の天才がかつて達したまたは想像したおよそ高尚なもの全てを含んでいる記念碑である。

タルムードはいばらに包囲された宝である。

タルムードは不透明な原石に隠されたダイアモンドである。

読者はすでにタルムードについて話していると推測しているであろう。

ヘブライ人の運命は不思議である!

ヘブライ人は身代わりである!

ヘブライ人は殉教者である!

ヘブライ人は世界の救い主である!

ヘブライ人は命に満ちている民である!

ヘブライ人は大胆な忍耐強い民である!

使命を未だ果たしてないので、ヘブライ人は迫害されても常に欠損が無いまま保存されている民である!

使徒の口伝では、ヘブライ人以外で信心が地に堕ちた後で、ヤコブの家から救いが再臨し、キリスト教徒が敬礼している十字架にかけられたヘブライ人イエスが世界という王国を父である神に手渡すのではないか?

(コリント人への第１の手紙１５章２４節「イエスは王国を父である神に手渡す」)

カバラの祭司の聖所を見通した者は論理的な、簡潔な、絶対な唯一の考えを見て感嘆する。

概念と象徴の本来からの結合。

(概念と形の本来からの結合。)

基本の文字と絵による最も基礎の現実の神聖化。

(基本の概念と形による最も基礎の現実の神聖化。)

言葉、文字、数の三位一体。

(概念、形、数の三位一体。)

アルファベットの様に簡潔な哲学。

神の言葉の様に深い無限の哲学。

ピタゴラスの定理より完全な明らかな原理。

１０本の指で要約できる神学。

(0 から１０までの数で要約できる神学。)

幼子が手のひらで把握できる無限。

(幼子が手中にできる無限。)

０から９までの１０の数字、２２のヘブライ文字、三角形、正方形、円。

０から９までの１０の数字、２２のヘブライ文字、三角形、正方形、円がカバラの全要素である。

０から９までの１０の数字、２２のヘブライ文字、三角形、正方形、円が書かれた神の言葉の構成原理である！

０から９までの１０の数字、２２のヘブライ文字、三角形、正方形、円が世界を創造した話された神の言葉の反映である！

全ての本物の論理的な神の教えはカバラから来てカバラへ行く。

全ての本物の論理的な神の教えはカバラから出でカバラへ戻る。

カバラが全ての光に照らされた者、ヤコブ ベーメ、スヴェーデンボルグ、ルイ クロード ド サンマルタンなどの宗教的な夢の大いなるものや自然科学的なものをもたらした。

　カバラが全てのメーソンの秘密と象徴をもたらした。

　カバラだけが普遍の理性と神の言葉の結合を神聖化する。

　カバラは、正反対に見える ２ つの力のつり合いによる、存在の永遠のつり合いを確証する。

　カバラだけが理性と信心、力と自由、学問と神秘を一致させる。

　カバラは過去、現在、未来の鍵を保有している！

　カバラに入門するには、ロイヒリン、ガラティーノ、キルヒャー、ピコ デラ ミランドラの文書を読み深く考えるだけでは不十分である。

　ピストリウスが集めたヘブライ人の文書、特に「形成の書」を研究し理解する必要が有る。

　大いなる「光輝の書」に熟達する必要が有る。

　１６８４ 年に集められた「裸のカバラ」、「カバラの気の力学」、「魂の変革」を入念に読む必要が有る。

　タルムードの論理的な象徴的な全体の光の闇へ大胆に入門する必要が有る。

　そうすれば、ギヨーム ポステルを理解できるであろう。

　早過ぎる寛大過ぎる女性解放の夢想は別として、高名な学が有る光に照らされた者であるギヨーム ポステルは、ギヨーム ポステルを理解してない大衆が主張している様な狂人ではないと、ひそかに認められるであろう。

　隠された哲学の歴史の概要を話した。

　隠された哲学の源泉を表した。

　隠された哲学の主な文書を言葉少なに分析した。

本書「高等魔術の教理」は知について話す。

しかし、魔術、と言うよりはむしろ、魔術の力は知と力の２つのものから成る。

(

魔術は知と力である。

魔術の力は知と力である。

)

力が無い知は存在しない、と言うよりはむしろ、力が無い知は危険である。

(

力が無い知は存在しない。

知識は有るが心の力が無い者は危険にさらされる。

)

知を心の力が有る者だけに与える。

知を心の力が有る者だけに与える事が入門の無上の法である。

マタイによる福音１１章１２節で大いなる啓示者イエスは「天の王国は激しい力を受容する。激しい力だけが天の王国を勝ち取るであろう」と話している。

処女の聖所の様に真理の門は閉ざされている。

入門するには男らしい者である必要が有る。

確信には全ての奇跡が約束されている。

(マタイによる福音１７章２０節「確信が有れば、不可能は無い」)

全ての試練にもかかわらず、全ての障害を乗り越える、闇の中でためらわないで光へ前進する、意思の大胆さ無くして確信とは何であろうか？

古代の入門の歴史についてくり返し話す必要は無いだろう。

入門がより危険で恐ろしいほど、入門の効果はより大きかった。

古代には世界には入門を司り教える者が存在した。

祭司のわざ、王者のわざは特に大胆さ、慎重さ、意思の試練に存在する。

古代の修行者とイエズス会の修行者は似ていた。

現在イエズス会は人気が無い。

仮に現在も本物の知と理解が有る総長がいればイエズス会は世界を支配しているであろう。

神の教え、学問、正義における絶対を探求して生涯を過ごした後に、(神の教え、哲学、正義における絶対を探求した後に、)ファウストの輪を巡った後に、無上の神の教え、思いやりの無上の書、人性の無上の書、福音書に至った。

福音書で安息した。

福音書で人の全能性と無限の進歩の秘密を見つけた。

福音書で全ての例えの鍵を見つけた。

福音書で最初で最後の考えを見つけた。

(

福音書で最初から最後までの普遍の考えを見つけた。

福音書で最初で最後の唯一の考えを見つけた。

福音書で絶対の考えを見つけた。

)

「神の王国」と言う福音書で頻繁に用いられる表現が意味するものを理解した。

人の自発性への支点として定点を与える事は、アルキメデスの有名なてこの応用を実現する事によって、アルキメデスの問題を解く事(、世界を動かす事)である。

人の自発性への支点として定点を与える事、世界を動かす事は、世界に魔術的な電気を流した大いなる祖たちが、大いなる大衆には話す事ができない秘密によって、成就した事である。

しかし、若返るために例え話でフェニックスは前世の跡を厳しく焼き尽くしてから俗世の大衆の目の前に再び現れる。

大衆の間で宗教を若返らせるために、大衆にとっては古い宗教を焼き尽くすために、モーセはエジプトとエジプトの神秘を知っていた者を全て荒野で死なせた。

大衆の間で宗教を若返らせるために、大衆にとっては古い宗教を焼き尽くすために、使徒行伝 １９ 章 １９ 節で使徒パウロはエフェソスの大衆が隠された学問の本を全て焼き尽くすのを止めなかった。

大衆の間で宗教を若返らせるために、大衆にとっては古い宗教を焼き尽くすために、巨大な東のヨハネ派をかたる異端の娘であり神殿騎士団の灰であるフランス革命で、大衆は教会から略奪し神聖な儀式の象徴を冒涜した。

全ての大衆の宗教、全ての大衆の間での復活は、魔術を迫害し、魔術の神秘を火で焼き尽くそうとし、魔術の神秘を忘れ去らせようとする。

母の死によって生まれたベニヤミンの様に、大衆の宗教、大衆の哲学は、母である魔術の大衆の間での死によって俗世に生まれる。

前記の理由から、象徴的な蛇、ウロボロスは自身の尾を常に飲み込もうとする様に見える。

前記の理由から、存在するための必須条件として、空間が全ての充満には必要である。

空間が全ての次元には必要である。

肯定が否定には必要である。

前記はフェニックスの例え話の永遠の実現である。

２ 人の有名な学者ヴォルネイとデュピュイはエリファス レヴィが巡った経路をエリファス レヴィより先にすでに巡った。

(エリファス レヴィの様にヴォルネイとデュピュイは象徴を研究した。)

しかし、言わば、ヴォルネイとデュピュイは闇夜の中で時間を無駄に費やした。

特にデュピュイは、計り知れない博識にもかかわらず、役に立たない作品をもたらしただけに終わった。

デュピュイは全ての宗教の源に天文学しか見なかった。

デュピュイは象徴的な周期を理論と誤解した。

デュピュイは暦を伝説と誤解した。

デュピュイには知、本物の魔術の知、カバラの秘密を理解する知が不足していた。

デュピュイは、エゼキエル書 37 章の骨が散っている平野の様な、古代の祭司の聖所を通り過ぎてしまった。

デュピュイは死だけを理解した。

デュピュイには、「起きなさい！　新しい形をとって、歩きなさい！」と古代の象徴に叫ぶ事によって、エゼキエル書 37 章 9 節の四方の風の力を集める言葉、(十字に四方の風の力を集める言葉、)エゼキエル書 37 章の様に骨から生きている民を創造する事ができる言葉が不足していた。

(マタイによる福音 9 章 5 節「起きなさい。歩きなさい」)

かつて誰も試みなかった事を大胆に試みる時が来た。

ユリアヌス帝の様に、神殿を建て直そう。

神殿を建て直す事は敬礼する知を裏切る事には成らないと確信している。

(コリント人への第 1 の手紙 1 章 24 節「キリストは神の知」)

仮に、同時代の敵意に満ちた狂信的な博士達が神の知キリストをユリアヌス帝に理解させる事ができていたら、ユリアヌス帝は神の知キリストを敬礼する立派なキリスト教徒に自ら成っていたであろう。

魔術師の神殿には 2 つの柱が存在する。

(

キリスト教と哲学は魔術の両輪である。

神の教えと哲学は魔術の両輪である。

)

魔術師の神殿の 2 つの柱の片方にはキリスト教と記されている。

本物の魔術師はキリスト教を攻撃する気が無い。

反対に、本物の魔術師はキリスト教を説明しキリスト教の務めを果たす。

知と意思は交互に世界で力を発揮してきた。

神の教えと哲学は現在も未だに戦っている。

しかし、神の教えと哲学は一致する必要が有る。

キリスト教の一時的な目標は、従順と信心によって、超自然的な宗教的な平等を人々の間に確立する事である。

キリスト教の一時的な目標は、徳に支点を与えるために、信心によって知を固定する事である。

キリスト教の一時的な目標は、知の貴族を破壊すると言うよりはむしろ、知の貴族を復活させる。

知の貴族はすでに倒されている。

正反対に、哲学の一時的な目標は、自由と理性によって、自然な不平等を人々にもたらす事である。

哲学の一時的な目標は、勤勉の支配の開始によって、徳の代わりに機知を用いさせる事である。

哲学無しのキリスト教は不完全で不十分であった。

キリスト教無しの哲学は不完全で不十分であった。

哲学無しのキリスト教は完成と幸福を人に与えられなかった。

キリスト教無しの哲学は完成と幸福を人に与えられなかった。

現在、夢みられている事は、ほとんど大胆に望むまでも無く、非常に長い間、正反対と考えられてきたキリスト教と哲学という 2 つの力の結合である。

キリスト教と哲学の結合を望む良い根拠が存在する。

なぜなら、男性と女性の様に、キリスト教と哲学という人の魂の 2 つの大いなる力は相反しない。

(

男性と女性は相反しない。

キリスト教と哲学は相反しない。

神の教えと哲学は相反しない。

)

キリスト教と哲学は結合するために正反対に見える違いが存在する。

(

神の教えと哲学は結合するために正反対に見える違いが存在する。

男性と女性は結合するために正反対に見える違いが存在する。

)

「全ての問題の普遍の解決が示されるのか?」

疑いなく。イエス。

なぜなら、賢者の石、永久機関、大いなる務めの秘密、万能薬の秘密を説明するからである。

神の様なパラケルススの様に、魔術師は狂っていると非難されるであろう。

大いなる不運なコルネリウス アグリッパの様に、魔術師は詐欺師と非難されるであろう。

ユルバン グランディエの火刑のまきの火が消されても、黙殺や中傷という陰湿な迫害は残されるであろう。

魔術師は、迫害に大胆に立ち向かわず、迫害をあきらめて甘受する。

本書の公開を自分の意思だけで求めたわけではない。

言葉がもたらされる時が来れば、言葉は自分の手または他人の手によってもたらされると、魔術師は信じている。

魔術師は言葉がもたらされるのを静かに待つつもりである。

本書「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の ２ 部に分かれている。

本書「高等魔術の教理」はカバラの考え、魔術の考えの全てを確証する。

「高等魔術の祭儀」は儀式、儀式の魔術を清める。

本書「高等魔術の教理」は古代の賢者がソロモンの小鍵と呼んだものである。

「高等魔術の祭儀」はいなかの大衆がグリモワール、魔術書と呼んでいるものである。

本書「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章には数とテーマが存在する。

本書「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章は １ 対 １ 対応している。

本書「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章の数とテーマは気まぐれではない。

本書「高等魔術の教理」と「高等魔術の祭儀」の章の数とテーマは全て大いなる普遍の鍵タロットに示されているものである。

タロットは大いなる普遍の鍵である。

エリファス レヴィが初めてタロットの完全な十分な説明を与える。

本書「高等魔術の教理」は、神の意思に従い、意思を持ちおもむくべき所におもむく。

ヨハネによる福音 １ ９ 章 ３ ０ 節「終えた」

本書「高等魔術の教理」は永久的であると信じている。

なぜなら、論理的な良心的な全てのものの様に、本書「高等魔術の教理」には力が有るからである。

エリファス レヴィ

PER BENEDICTIONEN
MALEDICTVS.
ADVMBR

1

アレフ

A

修行者

修行

普遍

王冠

哲学者デカルトが人の知の新しい啓示のための基礎として「私は思考する。だから、私は存在する」という原理を選んだ時に、キリスト教の啓示の立場から、多かれ少なかれ、哲学者デカルトは知らないで無上の存在、神の古い概念を変えた。

出エジプト記 3 章 1 4 節で אהיה אשר אהיה、AHIH AShR AHIH、エヘイエ アシェル エヘイエと存在の中の存在、神はモーセにヘブライ語で名乗った。

ヘブライ語で אהיה、AHIH、エヘイエは「存在する」という意味の 1 人称の動詞である。

出エジプト記 3 章 1 4 節で存在の中の存在、神は「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」、「私は存在したい様に存在する者である」、「私は存在の中の存在である」、「私は本物の存在である」、「私は幻ではない存在である」とモーセに名乗った。

哲学者デカルトの人は「私は思考する様に存在する者である」と話す。

思考する事は心の中で話す事である。

思考は心の中の言葉である。

神の様に哲学者デカルトの人は「私は私の中で私によって存在する者である」と話す。

ヨハネによる福音 １ 章 １ 節「神の言葉は神である」

　ヨハネによる福音 １ 章 １ 節の神の様に哲学者デカルトの人は「私は言葉が表す所の者である」と話す。

ヨハネによる福音 １ 章 １ 節「最初から神の言葉は存在している」

　最初とは何か？

　原理とは何か？

　原理とは話す基礎である。

　原理とは言葉の基礎である。

　原理とは言葉が存在するための論理である。

　言葉の存在は原理の中に存在する。

　原理とは存在するものである。

　知とは話す原理である。

　知の光とは何か？

　知の光とは話す事である。

　知の光とは言葉である。

　啓蒙とは何か？

　啓示とは何か？

　啓蒙とは話す事である。

　啓蒙とは言葉である。

　啓示とは話す事である。

　啓示とは言葉である。

　存在するものが原理である。

話す事は手段である。

言葉は手段である。

存在の充実や開発と完成が目的である。

話す事は創造する事である。

しかし、「私は思考する。だから、私は存在する」は結果から原因を示している。

大いなる著者ラムネーは「私は思考する。だから、私は存在する」が結果から原因を示している確実な矛盾を示した。

結果から原因を示している確実な矛盾は「私は思考する。だから、私は存在する」という方法の哲学的な欠陥を十分に証明している。

「私は存在する。だから、何ものかが存在する」

「私は存在する。だから、何ものかが存在する」は経験的な哲学のための、より基本的な簡潔な基礎に思われる。

「私は存在する。だから、存在が存在する」

「私は存在する。だから、存在、神が存在する」

出エジプト記 ３ 章 １ ４ 節で神は「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」、「私は存在したい様に存在する者である」、「私は存在の中の存在である」、「私は本物の存在である」、「私は幻ではない存在である」とモーセに名乗った。

「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」は人の中の神の無上の啓示である。

「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」は世界の中の人の無上の啓示である。

「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」は隠された哲学の無上の原理である。

出エジプト記 ３ 章 １ ４ 節で神は「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」、「私は存在したい様に存在する者である」、「私は存在の中の存在である」、「私は本物の存在である」、「私は幻ではない存在である」とモーセに名乗った。

「存在は存在である」

「存在は存在する」

「存在性は存在性である」

「ある存在は別の存在と存在性が同じである」

「ある存在と別の存在は存在するという意味で同じである」

「神は存在する」

「私は存在する。だから、何ものかである、私、神が存在する」を原理とする隠された哲学には仮定や根拠の無い推測が無い。

メルクリウス トリスメギストスのエメラルド板の最初は三重の断言である。

(トリスメギストスは「三重に大いなる」を意味する。)

「後記は事実である。

後記は誤りが無く確実である。

後記は真理の中の真理である」

物理学で、経験によって確認された事実。

自然科学で、経験によって確認された事実。

哲学で、誤りの全ての不純物を取り除いた確実性。

宗教や無限、神の領域で、類推によって示された絶対の真理。

神の教えで、類推によって示された絶対の真理。

自然科学の事実、哲学の確実、神の教えの真理が本物の学問には最初に必要である。

魔術だけが自然科学の事実、哲学の確実、神の教えの真理を達道者に与えられる。

しかし、最初に、本書を手にとり読むつもりである、あなたは何者か？

古代ギリシャ人が光の神アポロンにささげたデルポイ神殿の入り口には「あなた自身を知れ」と記されていた。

本物の学問に近づこうと試みる全ての人に自身を知る様にすすめる。

魔術、古代人が「神の王国」と呼んでいたものは王者と祭司のためだけに存在する。

あなたは祭司か？

あなたは王者か？

魔術の祭司は大衆の聖職者ではない。(祭司は金銭をかせぐための職業ではない。)

魔術の王者は俗世の権力者と競合しない。

本物の学問の王者は真理の祭司である。

本物の王者の力は大衆には隠されている。

本物の祭司の祈りと犠牲が大衆には隠されている様に。

ヨハネによる福音 ８ 章 ３ ２ 節で祖の中で最も力が大きな者イエスが「あなたが真理を知れば、真理はあなたを自由にする」と明確に約束している様に、本物の学問の王者は真理を知り真理が自由にした者である。

肉欲の奴隷である大衆、俗世の先入観の奴隷である大衆は秘伝伝授者には成れない。

大衆は変わる必要が有る。

さもなければ、大衆は到達できない。

大衆は達道者にはなれない。

達道者という言葉は意思と行動によって真理に到達した者を意味する。

誤った自説に執着する大衆、誤った自説を手放す事を恐れる大衆、新しい真理を疑う大衆、根拠無しに全てのものを認めるよりも全てのものを疑う用意が無い大衆は本書を閉じるべきである。

大衆には本書は無用か危険である。

大衆には本書は理解できない。

本書は大衆を苦悩させるであろう。

もし大衆が本書の意味を推測しても、本書はより大きな不安の種と成るであろう。

もし、あなたが論理、真理、正義より俗世の何ものかにとらわれるならば、
もし、あなたは善と悪の間で不確かに揺れ動くならば、
もし論理があなたを不安にさせるならば、
もし、ありのままの真理があなたに恥をかかせるならば、
もし誤りを認めた時にあなたが傷つくならば、
本書をすぐに捨てなさい。

本書を読むなかれ。

あなたには本書が存在しないようにふるまいなさい。

しかし、本書を危険なものであると叫ぶなかれ。

選ばれた少数の者は本書に記されている秘密を理解するであろう。

秘密を理解した者は秘密を隠すであろう。

夜の鳥に光を見せると､夜の鳥から光を隠してしまう事に成る｡

光は夜の鳥を盲目にしてしまう｡

夜の鳥には光は闇より暗く成ってしまう｡

エリファス レヴィは明らかに話すつもりである｡

エリファス レヴィは全てのものを知らせるつもりである｡

秘伝伝授者または秘伝を伝授されるにふさわしい者だけが本書の全てを読み部分的に理解するであろう｡

本物の学問と偽物の学問が存在する｡

神の聖霊の魔術と地獄の悪人の霊の魔術が存在する｡

言い換えると､悪人の霊の魔術は妄想と陰気の魔術である｡

神の聖霊の魔術を明らかにし悪人の霊の魔術の化けの皮をはがす事が神の聖霊の魔術師の務めである｡

神の聖霊の魔術師と悪人の霊の魔術師を区別する事が神の聖霊の魔術師の務めである｡

達道者と詐欺師を区別する事が神の聖霊の魔術師の務めである｡

神の聖霊の魔術師は知っている力を応用する｡

悪人の霊の魔術師は理解していない力を濫用しようと試みる｡

学問的な本書で非常に通俗的な非常に疑わしい言葉を用いる事が可能であれば､悪魔は神の聖霊の魔術師に身を委ねる｡

悪人の霊の魔術師は悪魔に身を委ねる｡

神の聖霊の魔術師は自然の法王である｡

悪人の霊の魔術師は自然への冒涜者に過ぎない｡

悪人の霊の魔術師と神の聖霊の魔術師の関係は､迷信家､狂信者と本物の信心深い者の関係に似ている｡

(

悪人の霊の魔術師は迷信家、狂信者である。

神の聖霊の魔術師は本物の信心深い者である。

)

さらに進む前に、魔術という言葉を簡潔に定義しよう。

魔術はマギが口伝した自然の秘密についての知である。

口伝の知によって達道者は全能である神の眷属と成り超人的な力をふるえる。

口伝の知によって、超人的な力によって、多数の高名な秘儀祭司、メルクリウス トリスメギストス、オシリス、オルフェウス、ティアナのアポロニウス、名前を口にするのは危険で賢明ではない者たちは死後、神々として敬礼された。

口伝の知によって、超人的な力によって、運の気まぐれによる世論の浮き沈みによって、ユリアヌス帝、誘惑者マーリン、生前大いなる悪人の霊の魔術師と呼ばれた高名な不運なコルネリウス アグリッパたちは、地獄の使いや詐欺師と呼ばれた。

神の王国に到達するには、言い換えると、マギの知と力に到達するには、4 つの条件が必要である。

学によって光に照らされた知。

何ものにも止められない大胆さ。

何ものにも止められない意思。

何ものにも堕落させられない何ものにも夢中に成らない慎重さ。

知、大胆さ、意思、沈黙。

知る、大胆に行う、思う、沈黙を守る。

知るために考える、大胆に行う、思う、沈黙を守る。

知、大胆さ、意思、沈黙は魔術師の 4 つの言葉である。

牛の腹、人の頭、ライオンの爪、ワシの翼というスフィンクスの 4 つの象徴的な形は知、大胆さ、意思、沈黙を表す。

知、大胆さ、意思、沈黙という 4 つの言葉の各々は、タロットの棒、杯、剣、輪の各々と 4 通りに組み合わせる事ができて、4 通りに相互に説明し合う事ができる。

※タロット カードを参照してください。

ヘルメスの書タロットの最初のページには達道者が描かれている。

ヘルメスの書タロットの最初のページには魔術師が描かれている。

魔術師は大きなぼうしをかぶっている。

ぼうしを下げたら、頭全てを隠すであろう。

魔術師は左手に杖を持ち天へ向けて伸ばしている。

魔術師は杖で命令している様に見える。

魔術師は右手を胸の上に置いている。

魔術師は主な象徴または自然科学の道具を前に置いている。

魔術師は残りを手品師の袋の中に隠している。

魔術師の胴体と両腕は文字アレフ(א)の形をしている。

文字アレフはヘブライ文字のアルファベットの最初の文字である。

ヘブライ人はアルファベットの最初の文字をエジプト人から取り入れた。

文字アレフについて後で話すつもりである。

魔術師はヘブライ人のカバリストがミクロ プロソプス、小さな顔と呼んでいるものである。

(

魔術師は神の人としての顔である。

魔術師は神の人性である。

)

魔術師は小世界の創造主である。

魔術師は人の創造主である。

魔術師は自身の創造主である。

全ての魔術の知の最初は自身を知る事である。

自身の創造は知の全ての務めの最初である。

自身の創造は他の全てを含んでいる。

自身の創造は「大いなる務め」の基本である。

しかし、自身の創造という言葉は説明が必要である。

無上の論理は唯一、不変、不壊の原理である。

人が死と呼んでいるものは変化である。

不変の原理に近づき一体化する知は不変、不死と成る。

不変の論理に近づき一体化するには、死に至る原因から結果への必然である変化によって、死に至る命か死をもたらす、全ての変化する死に至る力からの独立へ到達する事が必要であると理解できるであろう。

どのように耐え我慢し死ぬべきか知る事。

どのように耐え我慢し死ぬべきか知る事は、苦痛、肉欲、消滅の恐怖を超越する無上の秘訣である。

栄光の死を探求し見つけた者は不死を確信する。

不死を確信する者と共に、不死を確信する者のために、普遍の人々は不死を確信する。

不死を確信する者の記念として、永遠の命の記念として、普遍の人々は祭壇と像を立てる。

獣を和らげる事によってのみ、人は獣の王者と成れる。

獣を和らげなければ、人は獣の犠牲または奴隷と成るであろう。

獣は人の肉欲の例えである。

肉欲は自然の先天性の力である。

世界は戦場である。

世界は自由が自発的な力の抵抗によって無気力と戦う戦場である。

自然の法は石うすである。

あなたが石うすでつぶす者に成れなければ、石うすにつぶされるものに成るであろう。

あなたは地水火風の王者と成る様に求められている。

あなたは四大元素の王者と成る様に求められている。

しかし、四大元素の例えである 4 つの獣の主と成るには、四大元素の例えである 4 つの獣を圧倒し鎖につなぐ必要が有る。

賢者に成りたい者、自然の大いなる謎を知りたい者は、スフィンクスの継承者、略奪者に成る必要が有る。

スフィンクスの人の頭は話す力を保有している。

スフィンクスの人の頭は言葉の力を保有している。

スフィンクスのワシの翼は高みを類推する。

スフィンクスの牛の腹は深みを掘る。

スフィンクスのライオンの爪は縦横無尽に道を切り開く。

入門したいあなた、あなたはファウストの様に哲学、神学、宗教、魔術の文書を乱読して学が有るか？

あなたはヨブの様に無感覚なほどに忍耐強いか？

そうではない？

しかし、もしあなたが入門するつもりであれば、ファウストとヨブの様に成るであろう。

あなたは雑念の渦を乗り越えたか？

あなたは優柔不断では無いか？

あなたは気まぐれでは無いか？

あなたは快楽を望むべき時だけに快楽を望むか？

そうではない？

常にそうではない？

しかし、もしあなたが入門するつもりであれば、そうなるであろう。

スフィンクスは男性の頭だけではなく女性の胸を持っている。

あなたはどのように女性の魅力に抵抗するべきか知っているか？

そうではない？

あなたは赤裸々に笑いものにして、徳における欠点を、自然の命の力として美化して、自慢するかもしれない。

そうすれば良い。

敬意をスターンのロバやアプレイウスのロバにささげる。

ロバには長所が有る。

同意しよう。

男性器の神プリアポスは敬礼された。

ヤギはメンデスで神の生殖力の象徴であった。

しかし、ロバが主と成るべきか、人が主と成るべきか決めよう。

快楽への執着を克服した者だけが愛の快楽を本当に保有できる。

力が有り我慢する力が有る者は 2 倍の力を持つ者である。

男性の欲望によって女性は男性を鎖につなぐ。

欲望を和らげられる男性は女性を鎖につなぐであろう。

人への最大の侮辱は人を臆病者と呼ぶ事である。

臆病者とはどのような者か？

自然の先天性の力である肉欲に盲目的に従うために、徳の尊重を放棄する者が臆病者である。

実に、危険を前にして恐れ逃げようとする事は自然な事である。

では、なぜ危険を前にして恐れ逃げようとする事は恥に成るのか？

なぜなら、栄誉は自然な傾向や恐怖より義務を優先する事を法としているからである。

前記の観点から、栄誉とは何か？

栄誉とは不死の普遍的な予感と不死に至る方法の認識である。

人が死から勝ち取る事ができる最後の戦勝記念品は、あきらめや絶望によってではなく、高められた希望によって、肉体の命への欲望に勝利する事である。

希望は信心に含まれている。

なぜなら、世界中の人々の完全な同意による、高貴な誠実な全てのものが、希望、信心だからである。

自身の克服を学ぶ事は永遠の命を学ぶ事である。

禁欲生活は自由のむなしい誇示ではなかった！

自然の力である肉欲に従う事は死に至る命の集団の流れに従う事である。

(

マルコによる福音 5 章 9 節 悪人の霊はレギオン、軍団と名乗った。

軍団は集団である。

)

肉欲に従う事は二次的な原因の奴隷に成る事である。

自然である肉欲に抵抗し和らげる事は自身を創造する事である。

肉欲に抵抗し和らげる事は個人的な不壊の命を創造する事である。

肉欲に抵抗し和らげる事は、死に至る命の移り変わりと死から自由に成る事である。

真理と正義をあきらめるくらいなら死ぬ用意が有る者は最も本当に生きている。

なぜなら、真理と正義をあきらめるくらいなら死ぬ用意が有る者の魂に不死は宿っている。

真理と正義をあきらめるくらいなら死ぬ用意が有る者を見つける、または、形成する事が全ての古代の入門の目的であった。

ピタゴラスは数年の沈黙と全ての種類の克己を学徒に修行させた。

エジプトの修行者は四大元素の試練を受けた。

インドの苦行僧と祭司バラモンは禁欲生活を自ら行った。

古代の修行者は自由意思と神の独立の王国に到達するために修行した。

古代の神秘の入門が全ての禁欲、苦行、断食による衰弱をもたらした。

本物の修行者は姿を隠した。

なぜなら、入門にふさわしい修行者は祖師を見つけられなく成ったからである。

宗教の指導者は時が経つにつれて大衆と同じく無知に成ってしまったからである。

盲人は盲人に導かれる事にあきた。

誰も疑いと失望に至るだけの試練を受ける気が無く成った。

光への経路は失われた。

何かを成し遂げるには、成し遂げようとしているものを知っているか、少なくとも成し遂げようとしているものを知っている何者かを信じる必要が有る。

しかし、根拠無しに命をかけるべきであろうか？

根拠無しに自身がどこに行くかも知らない何者かに従うべきであろうか？

軽率に超越的な学問の経路に足を踏み入れてはならない。

しかし、一度でも超越的な学問の経路を歩み始めたら、到達するか立ち行かなくなるであろう。

疑う事は愚者に成る事である。

立ち止まる事は堕ちる事である。

後退する事は深淵に身を投げる事である。

本書の研究を試みるあなた、もしあなたが本書の研究を終わりまで貫き通し、もしあなたが本書を理解すれば、本書はあなたを王者か狂人にするであろう。

本書を思い通りにしなさい。

あなたは本書を見下せないであろう。

あなたは本書を忘れられないであろう。

もしあなたが純粋であれば、本書はあなたの光と成るであろう。

もしあなたに力があれば、本書はあなたの腕と成るであろう。

もしあなたが神の様な者であれば、本書はあなたの神の教えと成るであろう。

もしあなたが賢明であれば、本書はあなたの知のものさしと成るであろう。

しかし、もしあなたが邪悪であれば、本書は地獄の光と成るであろう。

本書は短剣の様にあなたの胸を引き裂くであろう。

本書は良心を痛める様にあなたの記憶と成ってあなたの心を苦しめるであろう。

本書はキマイラの様な妄想をあなたの想像力に住まわせるであろう。

本書はあなたを愚かさを経て絶望へ追いやるであろう。

あなたが本書を笑いものにしようと試みても、あなたは歯ぎしりするだけに終わるであろう。

(

あなたが本書を笑いものにしようと試みても、あなたは自分で自分の首をしめるだけに終わるであろう。

歯ぎしりすると、自分の歯で自分の歯を壊す事に成るので、歯ぎしりは自分で自分の首をしめる例え。

マタイによる福音８　章　１　２　節「歯ぎしり」

)

本書は例え話で蛇がかもうと試みて全ての歯を壊した、やすりと成るであろう。

一連の入門をしよう。

啓蒙は言葉であると話した。

啓示は言葉であると話した。

実に、言葉、話す事は存在のヴェール、命の特徴、命の表れである。

全ての形は言葉のヴェールである。

(

全ての形は概念のヴェールである。

全ての形は概念の表れである。

)

なぜなら、概念は言葉の母である。

概念は形の唯一の存在理由である。

全ての形は文字である。

全ての文字は言葉から来て言葉へ行く。

全ての文字は言葉から出で言葉へ戻る。

(

全ての文字は概念から来て概念へ行く。

全ての文字は概念から出で概念へ戻る。

)

前記の理由から、トリスメギストスといった古代の賢者はエメラルド板で次の様に唯一の考えを表した。

「上のものは下のものから類推可能である。
下のものは上のものから類推可能である」

言い換えると、形は概念とつり合っている。

光線から類推する事によって、影は本体のものさしと成る。

さやと剣の深さは同じである。

否定は肯定とつり合っている。

命を守る変化において、創造と破壊はつり合っている。

無限の空間において全ての点は空間に広がる無限大の円周を持つ円の中心であると考えられる。

全ての個体は無限に完成可能である。

(全ての個体は無限に向上可能である。)

倫理道徳の法は自然科学の法から類推可能である。

(哲学の法は自然科学の法から類推可能である。)

哲学的に、全ての点は無限大の円に拡大できる。

魂全体に言える事は魂の各能力に言える。

知と意思は計り知れない力、想像力の道具である。

知と意思は想像力の協力者、道具である。

想像力は十分に知られていない。

想像力の全能性は魔術の領域だけに属する。

想像力について話している。

カバリストは想像力を透明なものと呼んでいる。

事実、想像力は魂の目の様なものである。

想像力において形は描かれ蓄えられる。

想像力によって人は見えない世界の反映を見る。

想像力は幻視のガラスである。

想像力は魔術の命の器官である。

想像力の仲介によって、魔術師は病気を治す。

魔術師は季節を変える。

魔術師は生きている者から死を追い払う。

魔術師は死んだ者を命へ復活させる。

なぜなら、想像力は意思を高める。

想像力は意思を普遍の代行者に把握させる。

想像力は母の胎内の幼子の形を決める。

想像力は人の運命を決める。

想像力は翼を伝染病に与える。

想像力は戦いの武器を導く。

あなたが戦いにさらされたら？

パラケルススは「アキレスの様に自身が不死身であると確信しなさい。そうすれば、あなたは不死身に成るであろう」と話している。

恐怖は銃弾を引き寄せる。

大胆さは銃弾をしりぞける。

切断された無い手足の痛みを感じる幻肢痛は良く知られている。

パラケルススは、出血した血を手術して、生きている血を治した。

パラケルススは切った髪によって触れないで頭痛を治した。

体の全ての部分の想像の統一性と連帯の知によって、パラケルススは全ての理論の先を越していた。

と言うよりはむしろ、パラケルススは最も有名な催眠術師たちの全ての経験の先を越していた。

パラケルススの治療は奇跡的であったので、「フィリップス テオフラストゥス ボンバストゥス」という本名に、「金の」を意味する「アウレオルス」と「ローマの名医ケルススを超える」を意味する「パラケルスス」という別名を加えられるのにふさわしく、さらに「神の様な者」という称号を加えられるのにふさわしかった。

想像力は言葉の応用の道具である。

論理に応用された想像力が才能である。

論理は唯一である。

作品の多様性の中で才能が唯一である様に。

唯一の原理が存在する。

唯一の真理が存在する。

唯一の論理が存在する。

唯一絶対普遍の哲学が存在する。

存在は、最初である唯一性の中に存在して、究極である唯一性の中に戻る。

唯一性の中に唯一性が存在する。

存在性の中に存在性が存在する。

全ての中に全てが存在する、と言える。

統一性は数の原理である。

統一性は動きの原理である。

結果として、統一性は命の原理である。

脳という唯一の器官の統一性の中で人の体全体が要約されている。

「存在は存在である」、「存在は存在する」、「存在性は存在性である」、「ある存在は別の存在と存在性が同じである」、「ある存在と別の存在は存在するという意味で同じである」、「神は存在する」という存在の肯定の唯一の考えの統一性の中で全ての神の教えは要約されている。

存在の唯一の考えの統一性が、数学の数を形成する。

魔術には「見えるものは見えないものの表れである」という唯一の考えが存在する。

言い換えると、正確に言うと、感覚で感知できる目に見えるものと感覚で感知できない目に見えないものはつり合っている。

魔術師は左手を天へ向けてかかげ右手で地を指さし「上に無限。下に無限！　無限は無限である。上の無限は下の無限と等しい」と話す。

「上に無限。下に無限！　無限は無限である。上の無限は下の無限と等しい」は見えないもので真実である様に見えるもので真実である。

神の言葉のアルファベットであるヘブライ文字の最初の文字アレフ(א)は左手を天へ向けて伸ばし右手を地へ向けて伸ばしている人を表す。

アレフは全てのものの中の自発的な原理を表す。

アレフは下における言葉の全能性に対応する上における創造を表す。

アレフは地上における言葉の全能性に対応する天における創造を表す。

文字アレフは pantacle である。

文字アレフは普遍の知を表す。

文字アレフは大宇宙の神聖な象徴と小宇宙の神聖な象徴を補う。

文字アレフは世界の神聖な象徴と人の神聖な象徴を補う。

文字アレフはメーソンの二重の三角形と燃える五芒星を説明する。

文字アレフは六芒星と五芒星を説明する。

言葉は唯一である。

啓蒙は唯一である。

啓示は唯一である。

神は、理性を人に与える事によって、話す力を人に与えた。

神は、理性を人に与える事によって、言葉を人に与えた。

啓蒙の形は多様であるが啓蒙の原理は唯一である。

啓示の形は多様であるが啓示の原理は唯一である。

啓蒙は全て普遍の言葉に存在する。

啓示は全て普遍の言葉に存在する。

普遍の言葉とは絶対の論理を説明するものである。

カトリックは「普遍の」を意味する。

現代の神学用語でカトリックは「誤りが無い」を意味する。

現代の神学用語でカトリックは不可謬を意味する。

論理で普遍なものは絶対なものである。

絶対なものは誤りが無い。

絶対なものは不可謬である。

もし絶対の論理が幼子の言葉を普遍に社会に抵抗できずに信じさせれば、神の定めによって、全ての人の定めによって、幼子は誤りが無い。

もし絶対の論理が幼子の言葉を普遍に社会に抵抗できずに信じさせれば、神の定めによって、全ての人の定めによって、幼子は不可謬である。

確信とは、論理の普遍性と唯一性による、論理的な確信である。

信心とは、論理の普遍性と唯一性による、論理的な確信である。

確信とは、言葉の普遍性による、論理的な確信である。

信心とは、言葉の普遍性による、論理的な確信である。

確信するとは、論理が最終的に知るか少なくとも認知する事を事前に確信させる時に、未だ知らないものを確信する事である。

「知らないものを信じない！」と叫ぶ俗に言う似非哲学者は非論理的である。

浅はかな理論家！

もしあなたが知っているのであれば、信じる必要が有るであろうか？　いいえ！知っているものを信じる必要は無い！

しかし、根拠無しに信じるべきであろうか？　いいえ。

盲信、妄信は迷信、愚かである。

知が知らせる認知させる根拠によって、論理が認知させる根拠を確信して良い。

知！

大いなる言葉！

大いなる問題！

知とは何か？

本書の 2 章で解答するつもりである。

2

ベト

B

神殿の 2 つの柱

知慮

家

グノーシス

認知

知とは真理の絶対な完全な保有である。

前記の理由から、全ての時代の賢者は知という絶対な畏敬するべき言葉を畏敬した。

賢者は知を保有しているふりをして神性の無上の特権を詐称する事をためらった。

賢者は知という言葉の代わりに認知という言葉に甘んじた。

賢者は知という言葉の代わりにグノーシスという言葉を選んだ。

賢者は知という言葉の代わりに認知という言葉を選んだ。

グノーシスは直感による知の認知を単に表す。

実際、人は何を知っているだろうか？

人は何も知らない。

しかし、人は無知なままではいられない。

人は無知である。

しかし、人は全てを知る事を求められている。

知は２つ１組を前提とする。

知は知る者と知られるものを前提とする。

２つ１組は社会と法を創造する。

２はグノーシスの数である。

２は認知の数である。

２つ１組は創造するための自身の増殖を統一する。

創世記２章２２節の神聖な例え話で神はエヴァをアダムの胸の深くに秘められた肋骨から創造した。

アダムは人のテトラ グラマトンである。

神秘のイョッドはアダムを要約する。

イョッド(י)はカバラの男性器の象徴である。

イョッドをエヴァという３つ１組の名前に足すと、イェホバ、ヤハウェという神の名前が形成される。

ヤハウェは超越的なカバラの魔術の言葉である。

(高等魔術の祭儀１４章「テトラ グラマトンは、魔術の無上の言葉であり、『である様に』を意味する」)

神殿で大祭司はヤハウェをイョッド エヴァと発音していた。

単一性は３つ１組の充実を完結して４つ１組の統一性を形成する。

(

３つ１組は充実である。

４つ１組は統一性である。

)

４つ１組の統一性は全ての数の鍵である。

４つ１組の統一性は全ての変化の鍵である。

４つ１組の統一性は全ての形の鍵である。

正方形を中心を軸に回転させると円を描く。

回転が円積問題の解答である。

４分の１回転が回転の基礎である。

(

虚数iを掛けると複素平面の原点を軸とする４分の１回転に成る。

cosθ+sinθiをx+yiに掛けると複素平面の原点を軸とする座標(x, y)の角度θの回転に成る。

)

エメラルド板でヘルメスは「上のものは下のものから類推可能である」と話している。

２つ１組は統一性のものさしとして役に立つ。

上のものと下のものの間の類推可能性は３つ１組である。

創造した原理は概念の男性器である。

創造された原理は形の女性器である。

垂直の男性器を水平の女性器に挿入するとグノーシス主義者の十字、メーソンの哲学の十字を形成する。

２つのものの交差は４をもたらす。

２つのものの交差は十字をもたらす。

十字を、全ての角度に動かすと、回転させると、円を描く。

アレフは男性である。

ベトは女性である。

1 は原理である。

2 は言葉である。

A は自発性である。

B は受容性である。

(

1 は自発性である。

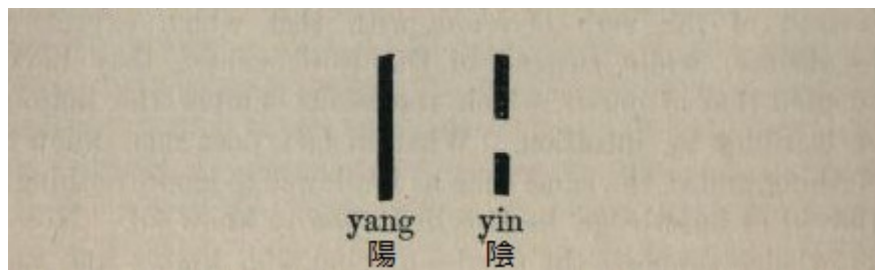
2 は受容性である。

)

単一性はボアズである。

2 つ 1 組はヤキンである。

(エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ボアズとヤキンは強いものと弱いものを意味する」)

伏羲の 3 つ 1 組の八卦で、単一性は陽であり、2 つ 1 組は陰である。

ボアズとヤキンはソロモンのカバラの神殿の門の外の 2 つの象徴的な柱の名前である。

カバラではボアズとヤキンは自然、政治学、神の教えの対立の全ての神秘を説明する。

ボアズとヤキンは自然科学、哲学、神の教えの対立の全ての神秘を説明する。

　ボアズとヤキンは男性と女性の間の生殖の戦いを説明する。

　自然の法によれば、女性は男性に抵抗する必要が有る。

　男性は女性を誘惑するか圧倒する必要が有る。

　自発的な原理は受容的な原理を求める。

　充満は空間を求める。

　蛇ウロボロスの口は自身の尾を引き寄せ、自身を回転させ、逃げると同時に、自身を追いかける。

　女性は男性の創造物と成る。

　全ての創造物は第一原因の花嫁である。

　全ての創造物は神の花嫁である。

　無上の存在、神が創造主と成った時に、創造されたのではない光の充満の中に空間をもたらすために、神はイョッド、男性器を立てた。

　神の創造する欲望とつり合う女性器、影のみぞを創造する必要が有った。

　神の光を放つ概念のイョッドが女性器、影のみぞを創造した。

　前記はタルムードにおけるカバリストの神秘的な表現である。

　大衆の無知と悪意のため、さらに簡潔に説明する事は不可能である。

　創造とは何か？

　創造する神の言葉の家である。

　女性器とは何か？

　男性器の家である。

自発的な原理の性質とは何か？

普及させる事である。

受容的な原理の性質とは何か？

集め実を結ばせる事である。

男性とは何か？

教え込む者、努力する者、深みを耕す者、種をまく者である。

女性とは何か？

形成する者、１ つにする者、水を注ぐ者、浄化する者、刈り入れる者である。

男性は戦う。

女性は平和をもたらす。

男性は創造するために破壊する。

女性は守るために高める。

男性は変革する。

女性は懐柔する。

男性はカインの父である。

女性はアベルの母である。

さらに、知とは何か？

知とは 2 つの原理の一致である。

知とは 2 つの原理を 1 つにする事である。

知とはアベルの思いやりが導くカインの自発性である。

知とは女性の甘い霊感に導かれた男性である。

知とは法の正しい結婚に圧倒された放蕩である。

知とは秩序と平和の思いやりが和らげた変革の力である。

知とは思いやりが圧倒した自尊心である。

知とはキリスト教の霊感を認知する学問である。

知とはキリスト教の霊感を認知する哲学である。

キリスト教の霊感を認知する時に、人の学問は賢明と成る。

キリスト教の霊感を認知する時に、哲学は賢明と成る。

キリスト教の霊感を認知する時に、学問は普遍の論理の誤りの無さを受け入れる。

キリスト教の霊感を認知する時に、哲学は普遍の論理の誤りの無さを受け入れる。

キリスト教の霊感を認知する時に、学問は思いやりに導かれる。

キリスト教の霊感を認知する時に、哲学は思いやりに導かれる。

キリスト教の霊感を認知する時に、学問はグノーシスと呼ばれる。

キリスト教の霊感を認知する時に、哲学はグノーシスと呼ばれる。

なぜなら、キリスト教の霊感を認知する時に、学問は未だ完全に知る事ができないものを少なくとも認知するからである。

キリスト教の霊感を認知する時に、哲学は未だ完全に知る事ができないものを少なくとも認知するからである。

単一性は 2 つ 1 組でのみ表れる。

統一性は数 2 を形成する。

単一性という概念は数 2 を形成する。

大宇宙の統一性は正反対の二重の正三角形、六芒星で表される。

世界の統一性は正反対の二重の正三角形、六芒星で表される。

人の統一性は左右の統一で表される。

この世界の人は両性具有者である。

(

この世界の男性の陰嚢は、この世界の女性の大陰唇である。

この世界の女性の陰核は男性器である。

神の体に陰嚢は無い。

神の体に陰核は無い。

)

鼻、舌、へそ、男性器(、陰核)を除いて、この世界の人の体の全ての器官は 2 つ 1 組である。

男性器はカバラのイョッドである。

(

神の体にへそは無い。

神の体に陰核は無い。

)

神性の本質は 1 である。

神性は存在の基礎として必然と自由という 2 つのものを前提とする。

無上の論理の法は自由を神に必要とする。

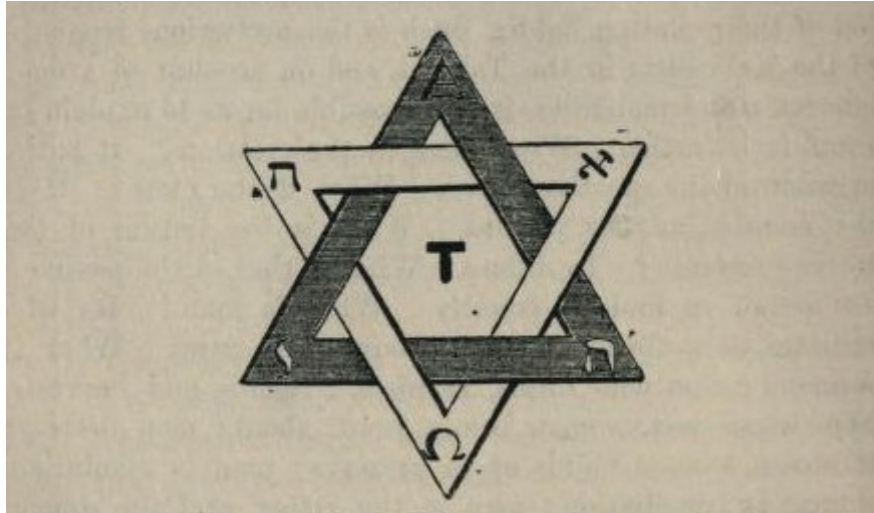
神において無上の論理の法は自由を統治する。

(

善悪の判断には事情を考慮する必要が有る。

善悪の判断には事情を考慮する自由が必要である。

)

神は必然的に知的であり論理的である。

光を明らかにするために神は影を仮定するだけで良かった。

真理を表すために神は疑える様にした。

影は光を具体的に表す。

真理を一時的に明らかにするのに誤る可能性が必要である。

もしサタンの盾がミカエルの槍を止めなかったならば、天使ミカエルの力は、空間に失われるか、上から下への無限の破壊と成って表れるであろう。

(

ヘブライ語でサタンは敵を意味する。

悪は免疫のための仮想敵である。

ミカエルは「誰が神の様に成れようか？　いいえ！」を意味する。

エルは神を意味する。

)

ミカエルのかかとがサタンの上昇を止めなかったならば、サタンは神の王座につくと言うよりはむしろ、サタンは高みという深淵に自身を喪失するであろう。

ミカエルはサタンを像の台座として必要とする。

サタンはミカエルを機関車のブレーキとして必要とする。

類推可能な普遍な力学で、あるものは抵抗するものにのみもたれかかれる。

さらに、つり合いを保つ、引き寄せる力としりぞける力という 2 つの力が万物のつり合いを保つ。

同様に、引き寄せる力としりぞける力は物理学、哲学、神の教えに存在する。

引き寄せる力としりぞける力は自然科学、哲学、神の教えに存在する。

物理学では、引き寄せる力としりぞける力はつり合いをもたらす。

自然科学では、引き寄せる力としりぞける力はつり合いをもたらす。

哲学では、引き寄せる力としりぞける力は批評をもたらす。

神の教えでは、引き寄せる力としりぞける力は進歩的な啓示をもたらす。

古代人は 2 つの力のつり合いの神秘をエロスとアンテロスの対立で表した。

古代ヘブライ人は 2 つの力のつり合いの神秘を創世記 3 2 章 2 4 節から 3 2 節でのヤコブと天使の戦いで表した。

古代インド人は 2 つの力のつり合いの神秘を不死を与える薬アムリタを作るためのデーヴァ神族と阿修羅神族のつなひきで表した。

象徴的な蛇、竜をつなにした。

象徴的な蛇、竜を金の山に巻き付けた。

(

サンスクリット語でデーヴァは神を意味する。

阿修羅は非天と意訳される。

)

古代人は 2 つの力のつり合いの神秘をヘルマニビスのケーリュケイオンで表した。

古代ヘブライ人は 2 つの力のつり合いの神秘を契約の箱の 2 つの智天使ケルビムで表した。

古代人は 2 つの力のつり合いの神秘をオシリスの戦車の 2 つのスフィンクスで表した。

古代人は 2 つの力のつり合いの神秘を白い熾天使セラフィムと黒い熾天使セラフィムで表した。

2 つの力のつり合いの神秘の自然科学的な事実は電気と磁気の両極性が実証している。

2 つの力のつり合いの神秘の学問的な事実は共感、反感の普遍の法が実証している。

ゾロアスターの偽物の弟子は統一無しに 2 つ 1 組を分裂させた。

ゾロアスターの偽物の弟子は神殿の 2 つの柱を分裂させた。

ゾロアスターの偽物の弟子は神を分裂させようと試みた。

絶対なもの、神を 2 として考えると、統一性の原理を取り戻すために、すぐに、3 として考える必要が有る。

前記の理由から、この世界の元素は、最初に 4 として理解され、2 として説明され、最後に 3 として存在する。

神の元素は、この世界の元素から類推可能である。

啓蒙は 2 つ 1 組である。

啓示は 2 つ 1 組である。

全ての言葉は二重である。

全ての言葉は 2 を前提とする。

倫理道徳は啓蒙の結果である。

倫理道徳は啓示の結果である。

哲学は啓蒙の結果である。

哲学は啓示の結果である。

倫理道徳の基礎は対立である。

哲学の基礎は対立である。

対立は２つ１組の結果である。

霊と形は相互に引き寄せ合いしりぞけ合う。

概念と形の様に。

真実と想像の様に。

無上の論理は制限された知性と話す時に考えを必要とする。

神は人と話す時に考えを必要とする。

考えは、概念の領域から形の領域へ通過する事によって、概念の領域と形の領域という２つの世界と関係する。

考えは必然的に連続または同時に霊と肉に話す２つの意味を持つ。

倫理道徳の領域には非難する力と抑制してつぐなう力という２つの力が存在する。

創世記４章のカインとアベルは倫理道徳の領域の非難する力と抑制してつぐなう力という２つの力の象徴である。

アベルの倫理道徳的な超越性の論理によって、アベルはカインを苦しめる。

自由に成るために、アベルを殺して、カインはアベルを不死にする。

カインは自身の罪の犠牲と成る。

カインはアベルの命に耐えられなかった。

アベルの血はカインの安息に耐えられない。

ルカによる福音１５章１１節から３２節の放蕩息子はカインである。

父は放蕩息子を許す。

(マタイによる福音28章19節 父である神)

なぜなら放蕩息子は多数の苦痛に耐えた後で父の国に戻ったからである。

神には思いやりと正義が存在する。

神は正義を正しい者に与える。

神は思いやりを罪人に与える。

世界の魂、地の魂、普遍の代行者には、思いやりの流れと怒りの流れが存在する。

包囲し全てに浸透する流体。

太陽の輝きから放たれる、大気の重さと中心に引き寄せる力が固定する、光線。

神の聖霊の体。

普遍の代行者と呼んでいるもの。

古代人が自身の尾を飲み込む蛇ウロボロスに例えたもの。

電磁気のエーテル。

(

エーテルは第5元素である。

エーテルは光を仲介するものである。

)

命の光る熱。

自身の尾を飲み込む蛇ウロボロスの様に、古代の石碑で二つ折りの両極のまわりの恋結びのイシスの帯として描かれているもの。

自身の尾を飲み込む蛇ウロボロスは思慮と土星の象徴である。

変化と命は2つの力の極端な緊張に存在する。

ヨハネの黙示録3章15節で主イエスは「私イエスはあなたが冷たいか熱いかどちらかであってほしい」と話している。

事実、大いなる罪人は生ぬるい女々しい男より生き生きとしている。

大いなる罪人の善へ戻る時の充実さは誤りの大きさとつり合っているであろう。

創世記 3 章 1 5 節の蛇の頭を圧倒する運命の女性は、常に盲目的な力の流れを克服する知の例えである。

カバリストは知を海の処女と呼んでいる。

地獄の竜は、楽しさに忘我状態と成って、海の処女の水がしたたる脚を人の舌でなめるために、はう。

前記が 2 つ 1 組の祭司だけの神秘である。

しかし、知られてはいけない 2 つ 1 組の祭司だけの神秘が 1 つ存在する。

知られてはいけない理由は、ヘルメス トリスメギストスは、盲目的な運命の不道徳な面を知の不足のせいにする、大衆の誤解であると話している。

エメラルド板以外でヘルメス トリスメギストスは「未知への恐怖によって大衆を抑える必要が有る」と話している。

マタイによる福音 7 章 6 節でキリストは「豚に真珠を捨てるな。豚が真珠を踏みにじるといけないからである。豚があなたの方を向きあなたを引き裂くといけないからである」と話している。

(

豚は悪人の例えである。

真珠は知の例えである。

)

果実が死である、善悪の知の木は、知られてはいけない 2 つ 1 組の祭司だけの神秘の例えである。

知られてはいけない 2 つ 1 組の祭司だけの神秘を口外しても、誤解されるだけであろうし、自由意思の邪悪な拒絶に通例導くであろう。

自由意思は倫理道徳的な命の原理である。

本質的に知られてはいけない２つ１組の祭司だけの神秘の口外は死を意味する。

２つ１組の祭司だけの神秘は魔術の大いなる秘密ではない。

２つ１組の秘密は４つ１組の秘密へ導く、より正確に言うと２つ１組の秘密は４つ１組の秘密から生じ、３つ１組で解決される。

４つ１組の秘密から生じ３つ１組で解決される２つ１組の秘密はスフィンクスの話した謎の言葉に含まれている。

オイディプスは、命を守るために、知らないで犯した罪をつぐなうために、オイディプスの王国を建てるために、４つ１組の秘密から生じ３つ１組で解決される２つ１組の秘密を見つける必要が有った。

ヘルメスの象徴的な作品、トートの書と呼ばれている物、タロットの２ページ目にはイシスまたはユノーが描かれている。

イシスがかぶっている２本の角は２つ１組を表す。

イシスはヴェールで頭を隠している。

イシスは開かれた本をマントで部分的に隠している。

ユノーは女王である。

ユノーはギリシャの女神である。

ユノーは左手を天へ向けてかかげ右手で地を指さしている。

ユノーの身ぶりはヘルメスのエメラルド板の不思議な例え「上のものは下のものから類推可能である。下のものは上のものから類推可能である」という魔術の基礎である唯一の二重の考えを表している様である。

ヨハネの黙示録１１章の２人の証人、２人の殉教者に預言者の口伝はエリヤとエノクという名前を与えている。

エリヤは信心の人、神がかりの人、奇跡の人である。

エジプト人はエノクをヘルメスと呼んだ。

(ヘルメス、メルクリウス、トートはエノクである。)

フェニキア人はエノクをカドモスと呼んでたたえた。

(カドモスはエノクである。)

エノクは神聖なアルファベットの創造者である。

エノクはロゴスへの入門への普遍の鍵タロットの創造者である。

エノクはカバラの父である。

創世記 5 章 2 4 節とエノク書の象徴的な実話でエノクは他の人の様に死なないで神がエノクを天へ連れて行った。

エノクを時の終わりに地上へ戻らせるために神はエノクを天へ連れて行った。

ヨハネによる福音 2 1 章 2 3 節でヨハネは死なないといううわさが広まった。

ヨハネはヨハネの黙示録でエノクの言葉の象徴を復活させ説明している。

使徒ヨハネとエノクの考えの復活が無知の時代の終わりに予定されている。

使徒ヨハネとエノクの復活とはカバラの鍵タロットの理解による使徒ヨハネとエノクの考えの復活であろう。

カバラの鍵タロットは唯一普遍の哲学の神殿の鍵を開ける。

唯一普遍の哲学は非常に長い間隠された。

隠された哲学は選ばれた者のためだけのものである。

俗世の手から免れるために選ばれた者は姿を隠している。

2 つ 1 組による単一の生殖が 3 つ 1 組の概念、考えを必要とするに至る事を話した。

統一の充実と完全の言葉である大いなる数である 3 に来た。

3

ギメル

C

ソロモンの三角形

声の充満

自発的な知力

自然

完全な言葉は 3 つ 1 組である。

なぜなら、言葉は知の原理、話す原理、話される原理を必要とする。

神は言葉によって自身を明らかにする。

絶対なものは言葉によって自身を明らかにする。

神は自身とつり合う意味を言葉に与える。

神は言葉の理解によって第 3 の自身を創造する。

前記の様に、同様に、太陽は光によって自身を明らかにする。

太陽は熱によって第 3 の自身を創造する。

天頂、無限の高みと東西を結ぶ地平線は 3 つ 1 組、正三角形を空間に描く。

高みと地平線の目に見える正三角形から深淵と地平線の目に見えない逆正三角形が論理的に類推可能である。

高みと地平線の目に見える正三角形と深淵と地平線の目に見えない逆正三角形は大きさがつり合っていると類推可能である。

深淵と地平線の逆正三角形。

三角形と逆正三角形を 1 つにすると六芒星と成る。

六芒星はソロモンの封印の神聖な象徴である。

六芒星は大宇宙の輝く星である。

六芒星は無限、絶対、神の概念を表す。

六芒星は大いなる pantacle である。

六芒星は全てのものの知の最も簡潔な完全な要約と言える。

アルファベットの文法では動詞には 3 つの人称が存在する。

アルファベットの文法での動詞の 1 人称は話すもの。

アルファベットの文法での動詞の 2 人称は話しかけられるもの。

アルファベットの文法での動詞の 3 人称は話されるもの。

創造において神は自身を自身に話している。

(ヨハネによる福音 1 章 神の言葉イエスは神であり、神の言葉イエスが全てのものを創造している)

創造において神は自身を自身に話している事は 3 つ 1 組と三位一体の考えの源の説明である。

魔術の考えは 3 つ 1 組であり三位一体である。

3 つ 1 組であり三位一体である魔術の考えとはエメラルド板の「上のものは下のものから類推可能である。下のものは上のものから類推可能である」である。

上のものと下のものは相互に類推可能である。

上のものと下のものの類推可能性を表す言葉は 3 を創造する。

3 つ 1 組は普遍の考えである。

魔術の 3 つ 1 組は原理、実現、応用である。

錬金術の 3 つ 1 組は Azoth、結合、錬金である。

神学の 3 つ 1 組は神、人に成った神、身代わりによる救いである。

人の魂の 3 つ 1 組は思考、思いやり、自発性である。

家族の 3 つ 1 組は父、母、子である。

3 つ 1 組は愛の目的であり愛の無上の表れである。

男性と女性は 3 に成るために 2 として相互に求め合う。

位階的な類推可能性によって相互に類推可能である理解可能である 3 つの世界が存在する。

自然科学、哲学、神の教え。

この世界、霊の冥界、神だけの楽園。

偽ディオニュシオスの神の聖霊の位階、天使のヒエラルキーは 3 組の 3 つ 1 組である。

偽ディオニュシオスの神の聖霊の位階、天使のヒエラルキーは天使、大天使、権天使、能天使、力天使、主天使、座天使、智天使ケルビム、熾天使セラフィムである。

存在と数の無上の数学的な概念から論理的に導かれたものである。

単一であるものは自発的に成るために自身を繁殖する必要が有る。

不可分の無動の繁殖不能の原理は孤独死であり理解不能であろう。

仮に神が唯一のままであったならば、神は創造主、父に成れなかったであろう。

仮に神が 2 のままであったならば、無限の対立、無限の分裂、全ての可能性の不一致、全ての可能性の死が存在したであろう。

存在と数の無限の多数の神の想像の中で神は自身によって創造のために 3 である。

そのため、神は神自身では唯一である。

神は人の考えでは三重である。

神は神自身では三重として人に見せる。

神は人の知では唯一に見える。

神は人の思いやりでは唯一に見える。

神の三位一体はキリスト教徒には神秘である。

神の三位一体は絶対の本物の学問に入門した学徒には論理的な必然である。

命によって明らかにされた神の言葉イエスは実現、人に成った神である。

周期を終えた神の言葉イエスの命は応用、身代わりによる救いである。

賢者の口伝の光に照らされた全ての祭司の聖所で三重の考えは知られていた。

本物の宗教とは何か究明したいか？

探しなさい。

本物の宗教は神の秩序にかなう最も多数のものを実現する。

本物の宗教は神を人にする。

(本物の神の教えは人に成った神の教えである。)

本物の宗教は人を神にする。

(本物の神の教えは人の神性を教える。)

本物の宗教は 3 つ 1 組の考えを欠損が無いまま保存している。

本物の宗教は神を最も無知な者の手に触れさせ目に見える様にして神の言葉を肉体の衣で覆う。

本物の宗教は考えによって全ての者に応用可能である。

本物の宗教は位階的である。

本物の宗教は幼子の様な者のために象徴を保有している。

本物の宗教は大人の様な者のために高尚な哲学を保有している。

本物の宗教は長老の様な者のために高尚な希望と甘い慰めを保有している。

第一原因を探求した時に、神を探求した時に、古代の賢者は世界に善と悪を見た。

古代の賢者は光と影を考えた。

古代の賢者は春と冬を比較した。

古代の賢者は若さと老いを比較した。

古代の賢者は命と死を比較した。

古代の賢者は次の様に類推した。

第一原因は思いやり深く厳しい。

神は思いやり深く厳しい。

第一原因は命を与え奪う。

神は命を与え奪う。

マニの偽物の弟子は「善と悪という 2 つの相反する原理が存在する」と叫ぶ。

いいえ。普遍のつり合いの 2 つの原理は相反しない。

2 つの原理は正反対に見える。

唯一の知が 2 つの原理を相互に対立させている。

善は右であり悪は左であると言える。

無上の善が善と悪を超越している。

無上の善は悪を善の勝利に応用する。

無上の善は善を悪の改心に応用する。

一致の原理は統一性の中に存在する。

魔術では一致の力は奇数に存在する。

3 は最も完全な奇数である。

なぜなら、3 は単一の 3 つ 1 組である。

伏羲の 3 つ 1 組の八卦で、上の 3 つ 1 組は 3 つの陽である。

伏羲の 3 つ 1 組の八卦で、上の 3 つ 1 組は 3 つの男性器の形である。

なぜなら、3 つの世界での創造の原理と考えられる神の概念の中に受容性は存在しない。

同じ理由から、キリスト教の三位一体に母は存在しない。

(マタイによる福音２８章１９節 父である神、息子であるイエス、神の聖霊)

キリスト教の三位一体の息子に母は暗黙的に含まれている。

同じ理由から、神の聖霊を女性の姿で描くのは祭司だけの正しい伝統の象徴学の法に反する。

創世記２章２２節の例え話で父である神は女性エヴァを男性アダムの肋骨から創造した。

父である神がこの世界を創造した様に。

キリストは自身を昇天させ処女の母を類推させる。

救い主イエスの昇天と聖母マリアの被昇天について話している。

父である神はこの世界を娘として持つ。

息子であるイエスは処女を母として持つ。

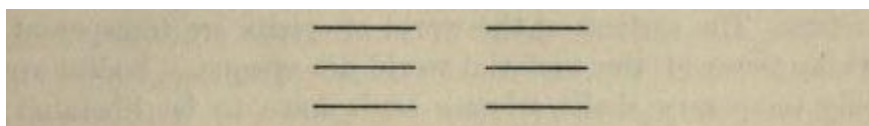
息子であるイエスは教会を花嫁として持つ。

神の聖霊は思いやりを復活させ実を結ばせる。

前記の理由から、伏羲の３つ１組の八卦で、３つの下の陰が３つの上の陽に対応している。

伏羲の３つ１組の八卦の、３つの陰は pantacle を形成する。

伏羲の３つ１組の八卦の、３つの陰はソロモンの２つの三角形、六芒星の様である。

伏羲の３つ１組の八卦の、３つの陰は燃える六芒星の３つ１組の解釈である。

考えは本物の人性の範囲内でのみ神性である。

考えは人性の無上の論理を要約する範囲内でのみ神性であると言える。

人は主イエスを人に成った神と呼んでいる。

福音書で主イエスは自身を人の子と呼んでいる。

啓蒙とは人の言葉で普遍の論理が認め明確化した確信の表れである。

啓示とは人の言葉で普遍の論理が認め明確化した確信の表れである。

前記の理由から、人に成った神の中では神性は人性であると言える。

人に成った神の中では人性は神性であると言える。

神に成った人の中では神性は人性であると言える。

神に成った人の中では人性は神性であると言える。

哲学的な断言である。

神学的な断言ではない。

教会の教えを侵してはいない。

教会は魔術を迫害する。

教会は魔術を常に迫害する必要が有る。

パラケルススとコルネリウス アグリッパは祭壇に対抗して祭壇を建てなかった。

パラケルススとコルネリウス アグリッパは当時の支配的な宗教に従った。

知の物は知の選ばれた者に。

信心の物は神を確信している者に。

(マタイによる福音２２章２１節「カエサルの物はカエサルに、神の物は神に」)

ユリアヌス帝の「王なる太陽への賛歌」の３つ１組の論理は光に照らされた者であるスヴェーデンボルグの３つ１組の論理とほとんど同じである。

神の世界の太陽は神の光、聖霊の光、創造されたのではない光である。

哲学の世界で、神の世界の太陽は言葉で表されると言える。

哲学の世界で、神の世界の太陽は魂と真理の源泉と成る。

第 3 の世界の太陽で、この世界の太陽で、神の世界の太陽は目に見える光と結びつく。

第 3 の世界の太陽で、この世界の太陽で、神の世界の太陽は目に見える光と成る。

太陽は太陽の中の太陽である。

太陽は人にとって中心の太陽である。

太陽は恒星の中の恒星である。

太陽は人にとって中心の恒星である。

恒星は不死の光である。

カバリストは霊を、神の仲介するものの中では、本質の光の感化の下では、流体のままである物質に例えている。

カバリストは霊を、思考の冷たい領域の大気にさらされた時に、目に見える形の冷たい領域の大気にさらされた時に、ロウソクのロウの様に、表面が固体化する物質に例えている。

硬直した肉化した霊の外皮が誤りの原因、悪の原因と言える。

悪は霊の動物的な外皮の重さと冷たさにつながる。

「光輝の書」と「魂の変革」で悪人の霊は外皮と呼ばれている。

霊の世界の外皮は透明である。

物質世界の外皮は不透明である。

肉体は一時的な外皮に過ぎない。

魂は肉体から自由に成る必要が有る。

しかし、肉体に従って生きているものは霊の肉体、硬直した肉化した流体の外皮を作ってしまう。

肉体の死後、硬直した肉化した霊の外皮は魂の牢獄と成る。

肉体の死後、硬直した肉化した霊の外皮は魂の苦痛の種と成る。

神の光のあたたかさの中で霊が硬直した肉化した霊の外皮を溶かすまで魂の監禁、魂の苦痛は続く。

神の光の思いやりの中で霊が硬直した肉化した霊の外皮を溶かすまで魂の監禁、魂の苦痛は続く。

霊は神の光へ向かう。

しかし、霊の粗悪さという重荷が霊の上昇をさまたげる。

霊の粗悪さという重荷が霊の向上をさまたげる。

実に、無限の戦いの後でのみ霊は硬直した肉化した霊の外皮を溶かせる。

手をさしのべてくれる正しい者の仲介によってのみ霊は硬直した肉化した霊の外皮を溶かせる。

硬直した肉化した霊の外皮を溶かす間中、燃える炉の様に、硬直した肉化した霊の外皮にとらわれた霊の内面的な活動は霊を苦しませる。

オエタ山で自身の肉体を燃やしたヘラクレスの様に、つぐないの火葬のまきに到達した者は自身の硬直した肉化した霊の外皮を燃やして苦痛から救われる。

しかし、大衆は自身の硬直した肉化した霊の外皮を燃やす試練を前にして恐怖する。

大衆は自身の硬直した肉化した霊の外皮を燃やす試練を肉体の死である第 1 の死より恐ろしい第 2 の死の様に思う。

(ヨハネの黙示録 2 章 1 1 節「第 2 の死」)

大衆は自身の硬直した肉化した霊の外皮を燃やさないで正に実に永遠に地獄に残る。

しかし、大衆の魂は地獄に投げ落とされるわけではない。

地獄が大衆の魂を引き留めるわけではない。

３ つの世界は光の ３ ２ の経路で相互に対応している。

(32 の経路とは １ から １ ０ までの １ ０ の数と ２ ２ 文字のヘブライ文字である。)

３ ２ の経路は神のはしごの段階である。

(創世記 ２ ８ 章 １ ２ 節「ヤコブは夢をみた。１ つのはしごが地の上に立っていた。はしごは天に達していた。天使がはしごを上り下りしていた」)

全ての正しい思考は天での神の思いやりに対応している。

全ての正しい思考は地上での善行に対応している。

全ての神の思いやりは真理として表れる。

全ての神の思いやりは １ つの行動または多数の行動をもたらす。

全ての行動は天での真実か虚偽に関係する。

全ての行動は神の思いやりか神罰に関係する。

人がテトラ グラマトンをとなえる時、カバリストの話では、９ つの天が震える。

全ての神の聖霊は「天の王国を震わせる者は誰か？」と話し合う。

神の名前を無駄にとなえる軽率な者の罪は地から第 １ の天へ伝わる。

神の名前を無駄にとなえる者を非難する言葉は世界から世界へ、星から星へ、位階から位階へ伝わる。

全ての言葉は ３ つの意味を持つ。

全ての行動は ３ 重の意味を持つ。

全ての形は ３ 重の概念を持つ。

なぜなら、絶対なものは形によって世界から世界へ対応しているからである。

人の意思の全ての決意はこの世界を変え、哲学の世界に作用し、天に記される。

知と一致する創造されたのではない意思がもたらす運命と、神である第一原因に対応する二次的な原因の必然と一致する創造された意思がもたらす運命という、２つの運命が存在する。

全てのものが人生に関係する。

特に、透明なものである想像力と大いなる魔術の代行者の結合力で、最も単純に見える決意が数え切れない一連の善行か悪事を頻繁に決定する。

他の場所で説明するつもりである。

３つ１組はカバラ全体の基礎の原理である。

３つ１組は教父の神聖な口伝である。

必然的に、３つ１組はキリスト教の基礎の考えである。

３つ１組は二元論に見えるものを円満な全能な統一性の仲介によって説明する。

キリストは教えを文書にしなかった。

キリストは教えを愛弟子、カバリスト、使徒の中の大いなるカバリスト、使徒ヨハネにだけ、ひそかに黙示した。

ヨハネの黙示録はグノーシスの書、無上のキリスト教の秘密の考えの書である。

マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」という隠された詩はヨハネの黙示録の考えの鍵を表す。

「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」はウルガタ聖書のマタイによる福音６章１３節の「主の祈り」には無い。

使徒ヨハネの口伝を保存しているギリシャ風の儀式では、祭司だけがマタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」をとなえる事が許されている。

マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」は完全にカバラの詩である。

いくつかのヘブライ語の写本の、マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」に「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」が見つかる。

マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」では王冠の代わりを神聖な言葉、王国がしている。

王冠の代わりを王国がしているのは王冠と王国のカバラの対応である。

王冠、王国は思いやりと厳しさのつり合いである。

王冠と王国はグノーシス主義者がアイオーンと呼んでいる世界、天で重ねて話される。

マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」という隠された詩はキリスト教という神殿全体の要石をもたらす。

プロテスタントは、高尚な不思議な意味を復活させないで、マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」を保存している。

マタイによる福音６章１３節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」はヨハネの黙示録の全ての神秘を明らかにする。

しかし、ヨハネの黙示録の神秘が明らかになるのは終わりの時まで持ち越されるというのが教会の口伝である。

思いやりと厳しさを基礎とする王国は、ヤキンとボアズを柱とするソロモンの神殿である。

アベルのあきらめとカインの苦労と良心の呵責を基礎とするアダムの考えである。

必然と自由を基礎とする存在のつり合いである。

必然と自由を基礎とする神のつり合いである。

安定と運動を基礎とする存在のつり合いである。

安定と運動を基礎とする神のつり合いである。

アルキメデスがむなしく探求した普遍のてこの実証である。

学者ウロンスキーは才能を不明な存在に用いた。

学者ウロンスキーは才能を不明な神に用いた。

ウロンスキーは理解される事を求めないまま死んだ。

ウロンスキーは前記の無上のつり合いを解決した。

ウロンスキーは前記の無上のつり合いをカバラで見つけた。

ウロンスキーはより明らかに話して、カバラが源泉である事を知られるのを恐れた。

ウロンスキーの弟子の 1 人、ウロンスキーの崇拝者の 1 人は、多分良い信念から、ウロンスキーがカバリストであると暗示されて、非常に怒った。

学の有るウロンスキーの栄光のために、ウロンスキーの研究が隠された学問についての研究を明らかに短縮したと話せる。

マタイによる福音 6 章 1 3 節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」は超越的なカバラの無上の鍵である。

ウロンスキーはマタイによる福音 6 章 1 3 節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」を本の中で全ての学問の絶対的な変革に巧みに応用した。

福音書の秘密の力は信仰、希望、愛という 3 つの言葉に含まれている。

(コリント人への第 1 の手紙 1 3 章 1 3 節「信仰、希望、愛」)

信仰、希望、愛という 3 つの言葉は 3 つの考えと 3 つの位階を確証する。

三段論法が 3 つの言葉を基礎とする様に、全ての知は 3 つの原理を基礎とする。

人には 3 つの明確な本来的な自然な位階が存在する。

(幼子の様な者、大人の様な者、長老の様な者)

人は下から上へ前進する様に求められている。

ヘブライ人は霊の進歩の 3 つの段階をアッシャー、イェツィラー、ベリアーと呼んでいる。

キリスト教徒のカバリスト、グノーシス主義者は霊の進歩の 3 つの段階をヒュレー、プシュケ、グノーシスと呼んでいる。

キリスト教徒のカバリスト、グノーシス主義者は霊の進歩の 3 つの段階を質料、魂、認知と呼んでいる。

ヘブライ人は無上の世界をアティルトと呼んでいる。

グノーシス主義者は無上の世界をプレロマと呼んでいる。

グノーシス主義者は無上の世界を充満と呼んでいる。

神の言葉テトラ グラマトンの最初の 3 文字 יהו、YHW は神の男性と女性の結合を表す。

テトラグラマトンの最後の 1 文字 ה、H、ヘーは女性と母性を表す。

エヴァは 3 文字である。

文字イョッドは最初のアダムを簡潔に表す。

前記の理由から、イェホバ、ヤハウェをイョッド エヴァと発音するべきである。

前記の観点から、4 つ 1 組が統合する魔術の大いなる無上の神秘に至る。

4

ダレト

D

テトラ グラマトン

思いやりと厳しさ

書の門

四大元素

自然にはつり合いをもたらす 2 つの力が存在する。

2 つの力とつり合いは唯一の法を構成する。

前記の様に、3 つ 1 組は統一性を復活する。

3 つ 1 組の概念に統一性の概念を足すと 4 つ 1 組に至る。

4 は最初の平方数であり完全な数である。

4 は全ての数学的な組み合わせの源泉である。

4 は全ての形の原理である。

肯定、否定、考察、解決は人の精神の 4 つの哲学的な作業である。

考察は相互の必要性によって肯定と否定を両立させる。

同様に、哲学的な 4 つ 1 組の考えは、両極性の対立の考えから出る、哲学的な 3 つ 1 組の考えをまとめる。

4 つ 1 組は全ての真理の正方形の堅固な基礎である。

神の教えでは、神には 3 つの人格が存在する。

神の 3 つの人格は唯一の神の構成要素である。

神は三位一体である。

(マタイによる福音２８章１９節 父である神、息子であるイエス、神の聖霊)

３と１は４の概念をもたらす。

三位一体は４の概念をもたらす。

なぜなら、３を説明するのに統一性が必要である。

３つ１組を説明するのに統一性が必要である。

三位一体を説明するのに統一性が必要である。

前記の理由から、ほとんど全ての言語で、神の名前は４文字である。

ヘブライ語で יהוה、YHWH、ヤハウェという神の名前の４文字は実は יהו、YHWという３文字である。

יהוה、YHWH、ヤハウェでは ה、H、へーが２回くり返されている。

神の言葉と神の言葉での創造を表すために、יהוה、YHWH、ヤハウェでは ה、H、へーが２回くり返されている。

２つの肯定には対応する２つの否定が可能または必要である。

神は肯定されている。

存在は肯定されている。

虚無は否定されている。

神の言葉の肯定は神の言葉の実現、人に成った神の肯定である。

正反対の否定が前記の肯定に対応している。

前記の理由から、カバリストの考えでは、悪魔の名前は神の名前を逆にしたものである。

カバリストの考えでは悪の名前は善の名前を逆にしたものである。

悪は影の中における光の最後の反映である。

悪は影の中における光の不完全な幻である。

善の中に存在するものであれ、悪の中に存在するものであれ、光の中に存在するものであれ、闇の中に存在するものであれ、全ての存在するものは 4 つ 1 組で存在し表れる。

単一自体の中で循環論法で堂々巡りしない限り、統一性の肯定は数 4 を前提とする。

すでに話した様に、4 つ 1 組は 2 つ 1 組が説明する 3 つ 1 組を解決する。

4 は偶数の単一の平方数である。

4 は立方体の正方形の基礎である。

4 は解釈の統一性である。

4 は堅固の統一性である。

4 はものさしの統一性である。

カバラのテトラ グラマトン、イョッド エヴァは人性の中の神を表す。

カバラのテトラ グラマトン、イョッド エヴァは思いやりの中の神を表す。

カバラのテトラ グラマトン、イョッド エヴァは神の中の人性を表す。

カバラのテトラ グラマトン、イョッド エヴァは神の中の思いやりを表す。

人には、東と西は光の肯定と否定である。

人には、南と北は熱の肯定と否定である。

人には、東西南北という 4 つの天文学の方位基点が存在する。

すでに話した様に、カバラの唯一の考えでは、目に見える自然のものは目に見えない自然の領域のものを表す。

二次的な原因は第一原因の表れと厳密につり合っている。

二次的な原因は第一原因の表れから類推可能である。

二次的な原因は神の表れと厳密につり合っている。

二次的な原因は神の表れから類推可能である。

そのため、第一原因は 2 つのものから成る統一性を十字で不変に表す。

神は 2 つのものから成る統一性を十字で不変に表す。

十字はインドとエジプトの神秘の鍵である。

十字は祖のタウである。

(

神は第 0 祖である。

アダムは人の初祖である。

アダムは人の第 1 祖である。

エノクは第 7 祖である。

アダムからノアまでは人の祖である。

アブラハム、イサク、ヤコブはヘブライ人の祖である。

)

十字はオシリスの神の象徴である。

十字はグノーシス主義者の十字である。

十字は神殿の要石である。

十字は隠されたメーソンの象徴である。

十字は 2 つの無限の三角形が直角に交差する中心である。

十字を意味する cross はフランス語で「信じる」という動詞と「成長する」という動詞の語源の様である。

前記の理由から、十字は自然科学、神の教え、進歩の概念と結びつく。

大いなる魔術の代行者は熱、光、電気、磁気という 4 つの現象で表れる。

大衆の自然科学は熱、光、電気、磁気という名前で大いなる魔術の代行者を実験してきた。

大いなる魔術の代行者はテトラ グラマトン、INRI、Azoth、エーテル、オド、磁気の流体、地の魂、ルシフェルなどと呼ばれてきた。

(ルシフェルはラテン語で光をもたらすものを意味する。)

大いなる魔術の代行者は命の原理の第 4 の流出したものである。

太陽が命の原理の第 3 の形である。

アレクサンドリア学派の秘伝伝授者とヘルメス トリスメギストスの考えを参照してください。

古代人は大いなる魔術の代行者を世界の目と呼んでいる。

大いなる魔術の代行者は神の反映の幻である。

地の魂、大いなる魔術の代行者は太陽の永遠の閃光である。

地は太陽の永遠の閃光を受胎し守る。

月は夜間に太陽の像を反映して地の受胎に協力する。

エメラルド板でヘルメスは大いなる魔術の代行者について「太陽は父である。月は母である」と話しているのは正しい。

エメラルド板で更にヘルメスは大いなる魔術の代行者について「風は腹に抱く」と話している。

なぜなら、大気は受容するものである。

言わば、大気は太陽の光線のるつぼである。

太陽の光線によって太陽の生きている映像を形成する。

太陽の光線は地全てに浸透する。

太陽の光線は太陽という実を結ばせる。

太陽の流出したものと太陽の永遠の流れによって、太陽の光線は太陽の表面がもたらした全てのものを決定する。

太陽自体の全てのものは太陽の表面がもたらしたものから類推可能である。

太陽の光線、大いなる魔術の代行者は、引き寄せる力と、放射する力という、2つの正反対の力に存在する。

エメラルド板でヘルメスは太陽の光線、大いなる魔術の代行者は永遠に昇り降りすると話している。

引き寄せる力はものの中心に常に存在する。

放射する力はものの境界線、または、ものの表面に常に存在する。

引き寄せる力と放射する力の 2 重の力が全てのものを創造している。

引き寄せる力と放射する力の 2 重の力が全てのものを保存している。

引き寄せる力は巻き取る動きである。

放射する力は解ける動きである。

引き寄せる力と放射する力は、連続的な動きである、と言うよりはむしろ、同時の永遠の動きである。

引き寄せる力と放射する力は交わらない正反対の螺旋の動きである。

引き寄せる力と放射する力は、太陽系の惑星を引き寄せると同時にしりぞける太陽の力と同じ動きである。

引き寄せる力と放射する力は地上の太陽の動きである。

力の流れを応用できる様に、力を傾けられる様に、力を知る事は、大いなる務めを果たす事であり、地の王者と成る事である。

力で武装すれば、自身を神として敬礼させられる。

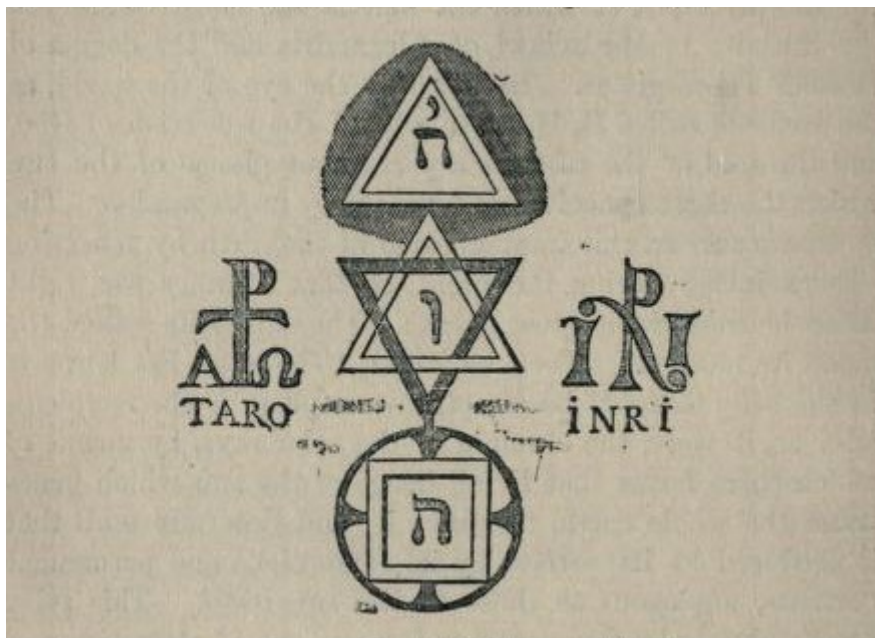
大衆はあなたが神であると信じるであろう。

ある人達は力を傾ける神の秘密を保有していた。

力を傾ける神の秘密は今も見つけられる。

力を傾ける方法は大いなる魔術の秘密である。

力を傾ける方法は、大衆には話す事ができない原理と、無上のヘルメスの錬金術師の大いなる唯一の錬金炉にかかっている。

後記の絵の、アレンジしたテトラ グラマトンの 4 文字に、大衆には話す事ができない原理がカバラ的に込められている。

前記の絵には、AZOTH と INRI という文字がカバラ的に書かれている。

前記の絵には、ラバルムの様に、ギリシャ語のキリストの最初の 2 文字 X P の組み合わせ文字が書かれている。

ギヨーム ポステルはラバルムのギリシャ語のキリストの最初の 2 文字 X P の組み合わせ文字を ROTA という言葉で解釈した。

前記から、達道者は Taro または Tarot を形成した。

taro の最初の文字 t をくり返す事によって、tarot は輪と逆に読める事を暗示している。

力を傾ける秘密の知は全ての魔術の知を含んでいる。

力を傾ける方法を知り大胆に応用する事が人の全能性である。

力を傾ける方法を大衆に口外する事は力を傾ける方法を失う事である。

力を傾ける方法を弟子に口外する事は弟子に身を委ねる事である。

力を傾ける方法を弟子に口外する事は弟子に師である自身の生殺与奪の権利を保有させる事である。

魔術的な観点から話している。

力を傾ける方法を弟子に口外する事は師である自身の死を恐れて弟子を殺す事に成るであろう。

しかし、前記は犯罪の法の殺人の行為ではない。

法の基礎であり出発点である実際の哲学は呪いの事実、隠された感化力の事実を認めない。

前記は驚くべき啓示である。

疑い深い狂信の不信と笑いものにされる事を覚悟している。

前記の狂信はヴォルテール信者の宗教にも存在する。

今も陰気にパンテオンの地下納骨所の中に潜んでいるに違いない偉人の霊には失礼ながら、パンテオンでカトリックは常に力のこもった実践と威光で聖歌を歌う。

言葉が表す概念に相当する、完全な言葉は、常に実際に 4 つ 1 組を含んでいるか 4 つ 1 組を前提とする。

概念は、3 つの必然の相互に関係する形を帯びる。

言葉で表されたものの想像は、修飾する判断の 3 つの言葉を帯びる。

「存在は存在する」と話す時に、暗黙的に「虚無は存在しない」と断言している。

高さ、高さが垂直方向に分けた左右、左右との交差が高さから分けた深さ。

高さ、深さ、左、右は、相互に垂直に交わっている 2 つの線から成る、自然の 4 つ 1 組である。

自然には 2 つの力がもたらす 4 つの動きが存在する。

正反対の方向への傾向によって、2 つの力は相互に支え合う。

体を統治する法から精神を統治する法は類推可能である。

精神を統治する法は神の秘密の表れである。

精神を統治する法は創造の神秘の表れであると言える。

一方が伸びると他方が縮む様に、正反対の方向に動く様に成っている、2 つのばねを持つ時計を想像してください。

一方が伸びると他方が縮む 2 つのばねを持つ時計は自身で自身を巻くであろう。

一方が伸びると他方が縮む理想的な 2 つのばねを持つ仕組みが永久機関である。

永久機関は両極性であるべきである。

永久機関は非常に正確であるべきである。

永久機関には到達できないであろうか？　いいえ。

永久機関を見つけた者は類推可能性によって自然の全ての秘密を理解するであろう。

進歩は抵抗に正比例する。

前記の様に、命の絶対の動きは、相反しない、2 つの正反対の傾向の永久の結果である。

一方が他方に屈している様に見える時に、一方のばねは縮んでいる。

反作用を予想できる。

反作用の時と特徴を完全に予見できる。

反作用の時と特徴を完全に測定できる。

前記の理由から、キリスト教熱が最も極まった時に、反キリストの統治が予言され知られていた。

反キリストは人に成った神イエスの再臨と最終的な勝利を用意し決定する。

イエスの再臨は福音書の前提に含まれた生き生きとしたカバラの結論である。

前記の理由から、キリスト教の予言は 4 つ 1 組の啓示から成る。

1 。古代の世界の堕落。イエスの降臨の下での福音の勝利。

2 。大いなる背教。反キリストの到来。

3 。反キリストの没落。キリスト教の考えへの回帰。

4 。福音の最終的な勝利。再臨。最後の審判という名前で呼ばれているもの。

前記の 4 つ 1 組の予言は 2 つの肯定と 2 つの否定を含んでいる。

前記の 4 つ 1 組の予言は 2 つの没落と 2 つの復活の概念を含んでいる。

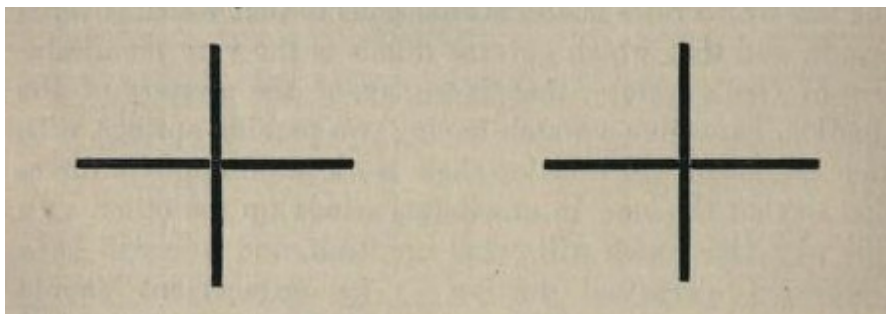
前記の 4 つ 1 組の啓示は 2 つの世界的な死と 2 つの復活の概念が含まれている。

なぜなら、誤りの恐れ無しに、社会の水平線上に表れる、全ての概念は東と西、天頂と天底に帰しても良い。

前記の様に、哲学的な十字は予言の鍵である。

エゼキエルの pantacle で知の全ての門を開く事ができる。

2 つの十字で知の全ての門を開く事ができる。

エゼキエルの pantacle、2 つの十字の間に星が形成されている。

人の命は肉体の誕生、肉体の生、肉体の死、魂の不死という連続の変化の 4 つの段階で表れるのではないか？　はい！

前記で、魂の不死が 4 つ 1 組の補完に必要である。

類推可能性が魂の不死をカバラ的に証明する。

類推可能性は本物の普遍の宗教の唯一の考えである。

類推可能性は本物の普遍の神の教えの唯一の考えである。

類推可能性は知の鍵である様に。

類推可能性は自然の普遍の法である様に。

事実、肉体の誕生が本当の始まりではない様に、肉体の死は絶対的な終わりではない。

肉体の誕生は人という存在の肉体より先に魂が存在する事を証明する。

なぜなら、虚無からもたらされるものは何も無い。

肉体の死は魂の不死を証明する。

なぜなら、無が無である事をやめられない様に、存在は存在する事をやめられない。

存在と虚無は 2 つの絶対に両立しない概念である。

存在と虚無の違いは、無の概念は完全に否定である。

存在の概念から虚無の概念はもたらされる。

前記の理由から、虚無を絶対の否定として理解できない。

存在の概念は虚無の概念と関係が無い。

虚無の概念から存在の概念はもたらされない。

虚無から世界が創造されたと話す事は大それた非論理的なものに進む事である。

全てのものはすでに存在するものから創造された。

結果として、虚無は存在しない。

動きの二者択一が形の遷移をもたらす。

形の遷移は形の連続を破壊する事無しに 2 つのものが相互に交代する命の現象である。

全てのものは変化する。

消滅するものは何も無い。

太陽が地平線上から見えなく成る時に太陽は死ぬわけではない。

最も流動的な形ですら不滅である。

存在理由の永遠性で常に存在し続ける。

存在理由は光と第一質料の分子の集合力の結合である。

前記の様に、星の流体の中に形は保存されている。

賢者の意思によって星の流体の中の形を呼び出し再生できる。

降霊術や他の魔術の業における予見と記憶の呼び出しについて話す時に話すつもりである。

「高等魔術の祭儀」の 4 章で大いなる魔術の代行者について話すつもりである。

「高等魔術の祭儀」の 4 章で大いなる秘密の特性の徴を完成させるつもりである。

「高等魔術の祭儀」の 4 章で前記の恐ろしい力を復活させる方法を完成させるつもりである。

ここでいくつかの言葉を足そう。

魔術の四大元素について。

四大元素の霊について。

錬金術の魔術の四大元素は塩、硫黄、水銀、Azoth である。

カバラの魔術の四大元素はマクロ プロソプス、ミクロ プロソプス、2 人の母である。

カバラの魔術の四大元素は大きな顔、小さな顔、2 人の母である。

(

カバラの魔術の四大元素は神の巨人としての顔、神の人としての顔、2 人の母である。

カバラの魔術の四大元素は神の神性、神の人性、2 人の母である。

)

タロットの魔術の四大元素は人、ワシ、ライオン、牛である。

古代の自然科学の魔術の四大元素は地水火風である。

魔術の四大元素の俗称は地水火風である。

しかし、魔術の自然科学では、土は単なる土ではない。

水は普通の水ではない。

火は単なる火ではない。

風は単なる風ではない。

地水火風という表現はより深い意味を隠している。

現代の自然科学は四大元素を古代人の単体の誤りと誤解している。

地水火風は簡潔である。

しかし、地水火風は基本の物質であると多分言える。

唯一の物質的な元素が存在する。

唯一の物質的な元素は常に 4 つ 1 組の形で表れる。

古代人が認知した元素の表れの賢明な区別を守るつもりである。

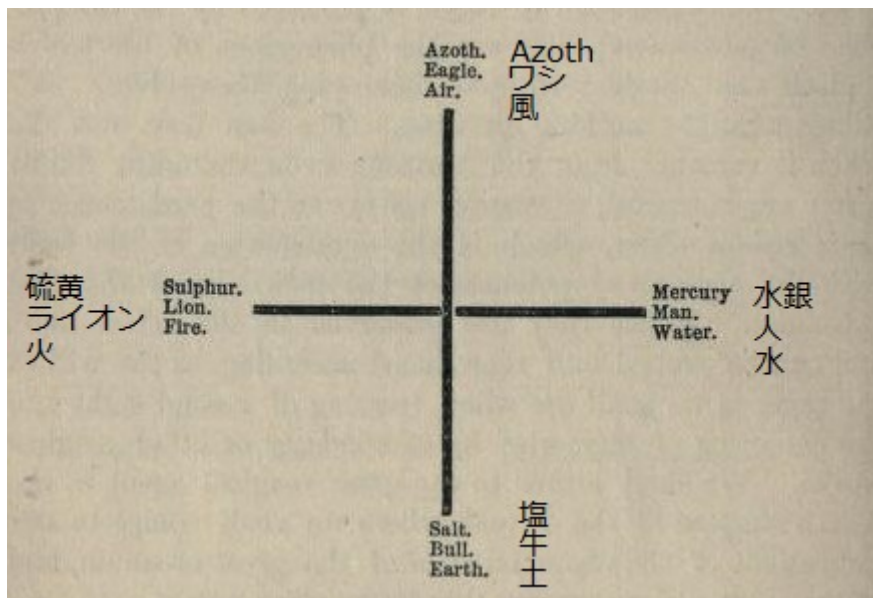
地水火風は魔術の実際の目に見える四大元素であると認知するつもりである。

薄いものと濃いもの。

速く溶かすものと遅く溶かすもの。

熱する道具と冷ます道具。

四大元素は隠された自然科学の 4 つ 1 組の 2 つの肯定の原理と 2 つの否定の原理である。

四大元素は後記の図の様にまとめるべきである。

前記の図の様に、風と土は男性の原理を表す。

火と水は女性の原理に帰す事ができる。

なぜなら、すでに断言した様に、pantacle の哲学の十字はインドの裸行者の男性器と女性器の基本の元素の象徴である。

四大元素の十字の形は霊、物質、運動、静止という 4 つの哲学の概念に対応する。

実に、全ての学問は霊、物質、運動、静止という 4 つのものの理解から成る。

錬金術は霊、物質、運動、静止という 4 つのものを絶対なもの、気化し難いもの、気化し易いものという 3 つのものにまとめた。

カバラでは絶対なもの、気化し難いもの、気化し易いものは神の基本の概念である。

神は絶対の論理、必然、自由である。

「形成の書」といったヘブライ語の隠された学問の書物は神の基本の概念を 3 つ 1 組の概念で表している。

神の世界。王冠、知慮、自発的な知力。

倫理道徳の世界。(哲学の世界。)思いやり、厳しさ、美。

自然科学の世界。勝利、永遠性、基礎。

自然科学の世界である、勝利、永遠性、基礎は、倫理道徳の世界(、哲学の世界)と共に、王国の概念に含まれている。

１０章で高尚で合理的な神統系譜学について説明するつもりである。

創造された霊は試練から解放される様に求められている。

創造された霊は創造された時から４つの力の間に置かれている。

４つの力は２つの肯定と２つの否定である。

創造された霊には善を肯定するか善を否定する力が存在する。

創造された霊には命を選ぶか死を選ぶ力が存在する。

定点を見つける事、十字の固定された中心を見つける事が、解決するために創造された霊に与えられている最初の問題である。

創造された霊の最初の克服は自身の自由の克服である必要が有る。

創造された霊は、ある者は北に、ある者は南に引き寄せられる。創造された霊は、ある者は右に、ある者は左に引き寄せられる。

創造された霊は自由に成らない限り、理性を応用する事ができないし、動物の形以外の体を得られない。

カバリストは自由ではない霊、四大元素の奴隷である霊を四大元素の霊と呼んでいる。

四大元素の霊は奴隷の状態に対応している元素に住んでいる。

シルフ、ウンディーネ、ノーム、サラマンダーは実際に存在する。

四大元素の霊は、ある者は肉体を求めてさまよい、ある者は肉体を得て地上に生きている。

肉体を得た四大元素の霊が欠点の有る不完全な人である。

黒魔術と悪魔の１５章で前記のテーマを話すつもりである。

古代人が世界には黄金時代、銀の時代、青銅の時代、鉄の時代という 4 つの時代が存在すると認めたのは隠された口伝である。

季節の様に黄金時代、銀の時代、青銅の時代、鉄の時代という 4 つの時代がくり返される事は大衆だけには知られていない。

前記の様に、黄金時代は過ぎたが、黄金時代はいつか来る。

しかし、黄金時代が再び来る事は予言の精神に属する。

秘伝伝授者と予見者の 9 章で話すつもりである。

統一の概念を 4 つ 1 組に足すと、同時に別々に、数 5 の神の統合と分析の概念が得られる。

数5 の秘伝伝授者の神の概念が得られる。

数5 の大衆の神の概念が得られる。

数5 で神の教えはより大衆的に成る。

数5 で抽象的な概念の領域を通過する。

大いなる秘儀祭司が仲介に現れる。

5

ヘー

E

五芒星

厳しさ

見なさい！

4 章までで、魔術の考えのより無味乾燥な深い面を明らかにした。

5 章から、魔術を始める。

5 章から、不思議を表す事ができる。

最も秘密なものを明らかにできる。

五芒星は四大元素を統治する精神を表す。

地水火風の四大元素の霊を五芒星で鎖につなげられる。

五芒星を身につけ、五芒星を適切に応用すれば、魂の目の様な能力、想像力の仲介で神を見る事ができる。

天使の軍団があなたに仕えるであろう。

(神の聖霊の軍団があなたに仕えるであろう。)

悪人の霊の軍団があなたに仕えるであろう。

第一に、確実な原理を確立しよう。

見る事ができない世界は存在しない。

しかし、器官には多数の完成の段階が存在する。

肉体は魂の粗い壊れ易い外皮であると言える。

肉体の器官の仲介無しに、魂の感覚力によって、透明なものである想像力によって、魂は世界に存在する精神的なものと肉体的なものを知覚できる。

精神的なものと肉体的なものという言葉は単に実質的に薄さまたは濃さの段階を表す。

人の中の想像力と呼ばれているものは、大いなる磁気の代行者である生きている光の中に含まれている映像と反映を同化する魂の本質的な能力に過ぎない。

知が本体または光を啓示するために仲介する時に、映像と反映は啓示と成る。

前記だけが天才が夢想家や愚者と異なる。

天才の創造物からは真理が類推可能である。

夢想家や愚者の創造物は破損した反映や偽りの映像である。

前記の理由から、賢者には、想像する事は見る事である。

魔術師には、話す事は創造する事である様に。

従って、想像力によって、事実、霊を見る事ができる。

しかし、達道者の想像力は透明である。

大衆の想像力は不透明である。

普通の光が透明な窓を通過する様に、真理の光は達道者の想像力を通過する。

普通の光がかすと異物に満ちたガラスのかたまりに当たる時の様に、大衆の想像力は真理の光を屈折させる。

大衆の誤りの最大の原因は堕落した想像力の相互の反映である。

明確な知によって予見者は自身が想像するものが真実である事を知る。

出来事が予見者の予見を常に強める。

「高等魔術の祭儀」で、どの様な方法で想像力の透明さが得られるかについて話すつもりである。

スヴェーデンボルグに頻繁に起きた様に、真理の光によって動かないで予見者は全ての世界と交流する。

しかし、スヴェーデンボルグの想像力の透明さは不完全であった。

スヴェーデンボルグは光線から反映を見分けられなかった。

スヴェーデンボルグはキマイラの様な妄想を最も見事な夢に頻繁に混ぜてしまった。

夢と話した。

なぜなら、夢は自然な周期的な忘我状態である眠りの結果である。

忘我状態に成る事は眠る事である。

催眠術は眠りをもたらす。

催眠術は眠りを導く。

催眠術で起こる誤りの原因は、起きている人の透明なものである想像力からの反映、特に催眠術師の想像力からの反映である。

夢は真理の光線の屈折がもたらす予見である。

キマイラの様な妄想は真理の光線の反映による幻である。

「聖アントニウスの誘惑」の夢魔と奇形のものは反映と直接の光線の混乱を表す。

魂が戦っている間は夢は論理的である。

魂が侵す陶酔に屈した時に夢は狂気と成る。

直接の光線のもつれをほどく事と反映から直接の光線を区別する事は秘伝伝授者の務めである。

(夢解きは秘伝伝授者の務めである。)

ここで明確に話しておこう。

人の精鋭の数人が世界で常に夢を解いている。

直感によって夢は永遠の啓示と成る。

魂の間を隔てる越えられない壁は存在しない。

なぜなら、突然の断絶は存在しない。

自然には精神の間を隔てられる突然の壁は存在しない。

全てのものはつながっている。

全てのものは交わっている。

全てのものは完成可能である。

人の能力が今は無限ではなくても少なくとも無制限であれば、いつか全ての人が全てのものを見るに至る事が可能であると分かるであろう。

人の能力が今は無限ではなくても少なくとも無制限であれば、いつか全ての人が全てのものを知るに至る事が可能であると分かるであろう。

自然には虚無は存在しない。

何ものかが全てに存在する。

自然には完全な死は存在しない。

全てのものが生きている。

皇帝ナポレオンはジョゼフ フェッシュ枢機卿に「あの星があなたには見えるか？」とたずねた。

ジョゼフ フェッシュ枢機卿は皇帝ナポレオンに「いいえ」と答えた。

皇帝ナポレオンは「(見えない)星が見える」と話した。

皇帝ナポレオンには確かに(見えない)星が見えていた。

偉人は迷信深いと非難される。

なぜなら、偉人には大衆には見えないものが見えた。

単なる予見者と異なり、天才は自身が知覚したものを他人に感覚的に伝える能力が有る。

単なる予見者と異なり、熱狂と共鳴の力によって、天才は他人に信じさせる能力が有る。

天才は神の言葉の仲介者である。

予見する方法を話そう。

全ての形は概念と対応している。

固有の形を持たない概念は存在しない。

本源の光は全ての概念を仲介するものである。

本源の光は全ての形の母である。

本源の光は仲介するものの濃さによって減衰または変化した全ての概念と形を流出したものから流出したものへ伝える。

二次的な形は流出した光の源泉へ戻る反映である。

ものの形は光の変化である。

ものの形は光の中に残る。

反映はものの形を光に委ねる。

前記の様に、星の光、地上の流体、大いなる磁気の代行者と呼ばれるものは、全ての種類の映像または反映で満ちている。

魂は星の光の中の映像または反映を呼び出す事ができる。

魂は星の光の中の映像または反映をカバリストが透明なものと呼んでいる想像力に適用する事ができる。

星の光の中の映像は常に目の前に存在する。

起きている時間の現実のより強い印象が、星の光の中の映像を消しているだけで、星の光の中の映像は常に目の前に存在する。

または、精神が夢中に成っていて、星の光の中の映像を消しているだけで、星の光の中の映像は常に目の前に存在する。

精神が夢中に成っていると、星の光の流動的な映像から想像力をそらしてしまう。

眠っている時に、星の光の映像は自然と目の前に現れる。

前記の様に、夢はもたらされる。

眠っている時に、何ものかが夢を導かなければ、夢は不確かに非論理的に成る。

眠っている時に、無意識に知が夢を導けば、夢は予見に変わる。

動物磁気による催眠術は、起きている自発的な意思と眠っている受容的な意思の結合がもたらす、人工の眠りである。

催眠術は、夢を予見に変えるために、映像によって真理に到達するために、反映の選択で、起きている自発的な意思が眠っている受容的な意思を導く、人工の眠りである。

前記の様に、被催眠者は催眠術師が行かせる場所に実際に行くわけではない。

被催眠者は星の光の中の映像を呼び出す。

星の光の中に存在しないものを見る事はできない。

星の光は神経に直接作用する。

神経は、動物組織の中の、星の光の伝導体である。

神経は星の光を脳に伝える。

前記の理由から、催眠状態で、普通の光の明かり無しで、神経によって、ものを見る事ができる。

星の光、星の流体は隠れた光である。

同様に、隠された自然科学は隠れた熱の存在を認める。

二者間の催眠は確かに不思議な発見である。

透明に到達した、思いのままに自身を導く、単独の独力の催眠は、魔術のわざの極致である。

単独の独力の催眠という大いなるわざの秘密は発見を待つ必要は無い。

特に高名なティアナのアポロニウスといった多数の秘伝伝授者は単独の独力の催眠の方法を知り実践してきた。

ティアナのアポロニウスは単独の独力の催眠についての理論を残した。

「高等魔術の祭儀」で単独の独力の催眠の方法について話すつもりである。

催眠術の透明さの鍵と、催眠術の現象の方向は、知が方向を傾ける事を可能とし決定する、精神の一致と意思の完全な一致という 2 つのものにかかっている。

精神の一致と意思の一致が複数人の催眠術の操作に必要である。

単独の催眠に必要な用意は、1 章で、用意の困難さ、本物の達道者に必要な資質を数え上げ確立した時に話した。

6 章以降で単独の催眠の重要な基礎的な要点をさらに説明するつもりである。

意思は星の光を統治する。

星の光は四大元素の物質的な魂である。

星の光は四大元素の肉体的な魂である。

星の光は四大元素の自然科学的な魂である。

魔術は星の光を五芒星で表す。

5 章の最初で五芒星の絵を示した。

五芒星を理解して用いれば、四大元素の霊を五芒星に従わせられる。

五芒星を降霊術の魔法陣の円の中や台の上に置くと、四大元素の霊を従順にできる。

魔術では五芒星を降霊術の魔法陣の円の中や台の上に置いて四大元素の霊を従順にさせる事を「四大元素の霊を閉じ込める」と呼んでいる。

五芒星で四大元素の霊を従わせられる不思議を簡潔に説明しよう。

全ての創造されたものは象徴で相互に交流し合う。

明確な形がいくつかの真理に付随する全てのものを表す。

霊の超然さとつり合って形の完成度は高まる。

物質の鎖による過重な負担が無い者は直感によってすぐに象徴が本物の力の表れか軽率な意思の表れかを認知する。

賢者の知は意義を pantacle に与える。

賢者の知は価値を pantacle に与える。

知が力を意思に与える様に。

知が重みを意思に与える様に。

霊は力をすぐに理解する。

前記の理由から、五芒星によって、予見者が起きていても眠っていても、霊が自ら予見者の透明なものである想像力の前に霊の反映をもたらす形で、霊が視覚に現れる様にする事ができる。

五芒星によって、霊が地上で生きた事が有る場合は、霊が自ら予見者の想像力の前に、星の光の中に存在する霊の反映をもたらす形で、霊が視覚に現れる様にする事ができる。

　五芒星によって、霊が地上で生きた事が無い場合は、霊が自ら予見者の想像力の前に、霊のロゴスを類推可能である霊の反映をもたらす形で、霊が視覚に現れる様にする事ができる。

　前記は全ての予見を説明する。

　前記の理由から、死んだ者は地上で生きていた時の姿か墓の中にいる姿で常に予見者の前に現れる。

　死んだ者は予見者の肉体が知覚できる姿で常に予見者の前に現れる。

　妊娠した女性は他の人より星の光の影響を受ける。

　星の光は幼子の形成に協力する。

　星の光は星の光の中に満ちている形の記憶を妊娠した女性に絶え間無くもたらす。

　前記は説明する。

　どの様に無上の高徳な女性が疑わしい似顔によって悪意ある観察者に誤解させるか。

　妊娠した女性は夢の中で印象を受けた映像で頻繁に結婚の果実である幼子を特徴づける。

　前記の様に、同じ顔つきが代々伝わる。

　五芒星をカバラ的に応用すれば胎内の幼子の形を決める事ができる。

　秘伝伝授者の女性はネロ、アキレス、ルイ１４世、ナポレオンの特徴を息子に与えられるかもしれない。

　前記の方法を「高等魔術の祭儀」で話すつもりである。

カバラでは五芒星を小宇宙の象徴と呼んでいる。

　ファウストの美しい独白でゲーテは五芒星を非常にほめている。

「ああっ！　五芒星を見ると全ての感覚が飛躍的に向上する！

命の若さと神聖な喜びが神経と血脈の中でわきたつのを感じる。

五芒星を描いた者は神である！

五芒星は魂のめまいを静める。

五芒星は貧しい心を神秘の喜びで満たす。

五芒星は周囲の自然の力のヴェールを脱がせて明らかにする。

私自身が神ではないか！

全てのものが私には非常に明らかである。

五芒星の簡潔な線によって自発的な自然の啓示を魂で見る。

次の賢者の言葉が真実である事を初めて理解する。

霊の世界は閉ざされていない！

あなたの感覚がにぶいだけである！

あなたの心が死んでいるだけである！

復活しなさい！

知の達道者よ、地上のヴェールで覆われている、あなたの心を、夜明けの輝きで、洗いなさい！」

　(ファウスト第１部第１場面)

　１８５４年７月２４日に、「高等魔術の教理」の著者、エリファス レヴィは、全ての儀式によって十分な用意をした後に、五芒星で降霊術の実験をした。

　「高等魔術の祭儀」の１３章で話すつもりである。

前記の降霊術の実験は成功した。

前記の降霊術の実験の詳細、降霊術の原理については、１３章で話すつもりである。

前記の降霊術の実験の詳細、降霊術の原理は、本物の知者が苦も無く認めるであろう、新しい病理学の事実を確立する。

前記の降霊術の実験を３回くり返した。

前記の降霊術の実験は本当に驚くべき現実の幻覚ではない結果をもたらした。

肩をすくめて笑いものにする前に疑い深い人には良心的な知的な降霊術の試みをすすめる。

５章の最初の五芒星の絵は、知によって完成させたものである。

エリファス レヴィは５章の最初の五芒星の絵を降霊術の実験で用いた。

５章の最初の五芒星の絵はティコ ブラーエの魔術のカレンダー、Duchentau の魔術のカレンダー、ソロモンの鍵の全ての絵より完成されている。

五芒星の完全な理解無しに五芒星を応用する事は最も危険である。

五芒星の頂点の向きは任意ではない。

五芒星の頂点の向きは作用の特徴全体を変える。

「高等魔術の祭儀」で五芒星の頂点の向きについて説明するつもりである。

パラケルススは魔術の変革者である。

パラケルススは独力の実践の成功で他の全ての秘伝伝授者を超えていた。

パラケルススは霊を従える pantacle の全ての魔術の象徴と全てのカバラの象徴は五芒星と六芒星の２つに要約できると話している。

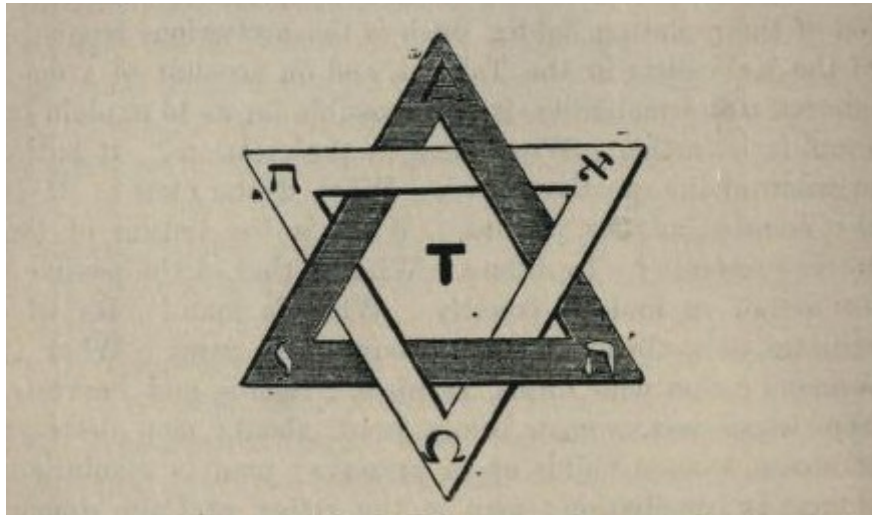
五芒星と六芒星は他の全ての象徴の総合である。

六芒星は大宇宙の象徴である。

六芒星は世界の象徴である。

六芒星はソロモンの封印である。

2 章で六芒星の絵をもたらした。

5 章で再び六芒星の絵をもたらす。

五芒星は小宇宙の象徴である。

五芒星は人の象徴である。

五芒星は六芒星より力が有る。

五芒星は人の隠された哲学の無上の詳細の説明をもたらすものと言える。

もし、なぜ象徴が霊に非常に力を発揮できるのか、たずねられたら、なぜ全てのキリスト教徒の大衆が十字架の象徴の前に従うのか、たずね返す。

要約するロゴスである考え無しでは象徴は何ものでもない。

要約するロゴスである考え無しでは象徴には力が無い。

象徴は象徴が表す自然の全ての隠れた力を要約する。

象徴は四大元素の霊や他の霊より巨大な力を四大元素の霊や他の霊に常に表す。

象徴は四大元素の霊や他の霊を自然と畏敬で満たす。

象徴は知と意思による無知と弱さの統治によって四大元素の霊や他の霊を従わせる。

五芒星は賢者の石をつくるのと大いなる務めを果たすのに必要な大いなる唯一の錬金炉の正確なつり合いをはかる。

第 5 元素を練る事ができる無上の完全な浄化器は五芒星の形に一致する。

五芒星の象徴は第 5 元素自体を表す。

6

ヴァウ

F

魔術のつり合い

美

鉤(かぎ)

無上の知的存在は必然的に論理的である。

神は必然的に論理的である。

神は哲学では仮定に過ぎないかもしれない。

しかし、神は人の理性の良識が強いる仮定である。

絶対の論理を人化する事は神聖な理想を決定する事である。

神を具体化する事は神聖な理想を決定する事である。

論理、必然、自由。

論理、必然、自由はカバリストの大いなる無上の三角形である。

カバリストは論理を王冠、必然を知慮、自由を自発的な知力と呼んでいる。

王冠、知慮、自発的な知力は最初の 3 つ 1 組である。

論理、必然、自由は最初の 3 つ 1 組である。

王冠、知慮、自発的な知力は神の 3 つ 1 組である。

論理、必然、自由は神の 3 つ 1 組である。

運命、意思、力。

運命、意思、力は、神の３つ１組に対応する、人の、物における、魔術の３つ１組である。

運命は、堅固な秩序における、原因と結果の不可避的な連鎖である。

意思は、物の必然と人の自由を調停するための、知の力を傾ける能力である。

力は、賢者の願いの達成における、運命自体の協力を得る、意思の知的な応用である。

出エジプト記１７章６節でモーセは岩を打って水を出した。

出エジプト記１７章６節でモーセは泉を創造したわけではない。

出エジプト記１７章６節でモーセは泉を大衆に明らかにした。

なぜなら、出エジプト記１７章５節の占いの杖によって隠された学問は泉をモーセに知らせていた。

魔術の全ての奇跡は出エジプト記１７章６節の奇跡と同様である。

法が存在する。

大衆は法を知らない。

秘伝伝授者は法を応用する。

隠された法は頻繁に大衆の考えと全く反対である。

例えば、大衆は似たものは共鳴し正反対のものは対立すると信じている。

しかし、似たものは対立し正反対のものは共鳴するのが本物の法である。

大衆は自然は無を嫌うと話してきた。

しかし、自然は無を求めると話すべきである。

自然科学では虚無は無上の無理な虚構である。

全てのものにおいて常に大衆の精神は影を実体であると誤解する。

大衆は光に背を向ける。

大衆は暗闇に自身を映す。

自然の力に抵抗する方法を知る者は自然の力を思い通りにできる。

あなたは決して酔わない様に完全に自身を克服しているか？　そうすれば、酩酊の恐ろしい運命的な力を傾けられるであろう。

もし、あなたが他人を酔わせたいのであれば、他人に飲む気を起させ、自身は飲んではならない。

自身を克服した者は他人の肉欲を操作できる。

もし、あなたがつかみとりたいのであれば、自身を与えてはならない。

太陽の光が世界を磁化している。

世界の星の光が人々を磁化している。

惑星の中で行われているものは人の体内でくり返される。

人の中には類推可能な位階的な 3 つの世界が存在する。

全ての自然には類推可能な位階的な 3 つの世界が存在する様に。

人は小宇宙である。

人は小世界である。

類推可能性の考えによれば、大いなる世界のものは小さな世界で再現される。

前記の理由から、人には脳、心臓またはみぞおち、性器という流体を引き寄せ放射する 3 つの核が存在する。

脳、心臓、性器は二重である。

言い換えると、脳、心臓、性器には 3 つ 1 組の考えが見つかる。

脳、心臓またはみぞおち、性器は一方で引き寄せ他方でしりぞける。

脳、心臓またはみぞおち、性器によって神経系が伝える普遍の流体と交流する。

脳、心臓またはみぞおち、性器は三重の磁気の作用の源である。

他の場所で説明するつもりである。

魔術師が透明さに到達した時に、巫女の仲介によって、または、魔術師自身の成長の段階によって、魔術師は星の光の集合全体の中の磁気の振動と交流し思い通りに傾ける。

魔術師が透明さに到達した時に、魔術の杖によって、魔術師は星の光の流れを見抜き、魔術の杖は完全な占いの杖と成る。

星の光の磁気の振動によって、魔術師は魔術師の行動に身を任せる人の神経系に感化を与える。

魔術師は命の流れを促進させたり延期する。

魔術師は和らげたり責める。

魔術師は癒したり責める。

要するに、魔術師は命を奪ったり命をもたらす……。

しかし、ここで、不信の嘲笑を前に話を中断する。

不信が知らないものを否定する取るに足りない勝利を喜ぶ事を許そう。

常に昏睡状態が死より先に起こる事を後で説明するつもりである。

死は徐々に起こるものである事を後で説明するつもりである。

ある場合には、復活は可能である。

昏睡状態は実際の不完全な死である。

多くの場合、最後のけいれんは埋葬の後に起こる。

しかし、前記は 6 章のテーマではない。

魔術師の透明さは星の光の集合に作用する事が可能であると断言する。

魔術師の透明さが同化し引き寄せる他のものの意思の協力によって、魔術師の透明さは大いなる抵抗できない流れを決定する事が可能であると断言する。

多かれ少なかれ、いくつかの中心で、流れの蓄積に比例して星の光は濃縮するか希薄に成ると断言する。

命を維持するのに必要な力の星の光が不足する時に、星の光が突然に分解し医者を困惑させる病が起こる。

例えば、コレラの原因は星の光の不足である。

専門医が観測し仮定した微小動物の群れは原因と言うよりはむしろ結果かもしれない。

コレラは insufflation で治すべきである。

insufflation で手術者はコレラを患者と交換する非常に恐ろしい危険を冒してはいけない。

意思の全ての知的な努力は人の流体の放射または人の光の放射である。

ここで、星の光と人の光を区別する必要が有る。

普遍の磁気と動物磁気を区別する必要が有る。

流体という言葉を用いているが、流体という一般に認められた表現を採用しているが、流体という言葉で言いたい事を理解しているが、隠れた光は流体であると決めつけない。

それどころか、全てのものが隠れた光という超常的なものの説明に振動という体系を採用する様に促す。

隠れた光は命の道具である。

隠れた光は命の手段である。

隠れた光は全ての生きている核と自然に一体化する。

隠れた光は惑星の核と一体化する。

隠れた光は人の心臓と一体化する。

心臓によって人は魔術的に大いなる共感を理解する。

隠れた光は隠れた光が命を吹き込んだ存在の個々の命と一体化する。

隠れた光の共感の同化の特性によって、隠れた光は隠れた光を混同無しに流通させる。

隠れた光の親和力によって、隠れた光は地球に対しては地上的である。

隠れた光の親和力によって、隠れた光は人に対しては人間的である。

普通の自然科学の方法によってもたらされた電気、磁気、光、熱は動物磁気の効力をもたらさないだけではなくむしろ中和する傾向が有る。

盲目の機械仕掛けに従う無意思の機械の核から生じる星の光は死んだ光である。

盲目の機械仕掛けに従う無意思の機械の核から生じる星の光は数学的に作用する。

盲目の機械仕掛けに従う無意思の機械の核から生じる星の光は与えられた衝動か運命の法に従う。

無知な者にとっては試みるには人の光は致命的なだけである。

予見者にとっては、人の光は知に従い想像力に従い意思に従う。

意思が絶え間なく放射している人の光がスヴェーデンボルグが話している個人的な雰囲気である。

肉体は周囲のものを同化する。

肉体は感化と見えない分子を絶え間なく放射している。

霊は周囲のものを同化する。

霊は感化と見えない分子を絶え間なく放射している。

何人かの神秘主義者は霊の同化と放射を呼吸と呼んでいる。

呼吸は実際に肉体と精神に影響を与える。

病気の人と同じ空気を呼吸すると間違いなく病気がうつり易い様に、邪悪な人と同じ空気を呼吸したり邪悪な人の影響圏にいると間違いなく悪徳がうつり易い。

一方の引き寄せる力が他方の放射する力を引き寄せるくらい二者の磁気の雰囲気がつり合っている時に、共感と呼ばれる傾向がもたらされる。

想像力は人の光が経験したものから類推可能である全ての直接の光線か反映を人の光に呼び出す。

想像力は意思を夢中にさせる欲望の詩をつくる。

一方の引き寄せる力が他方の放射する力を引き寄せるくらい二者の磁気の雰囲気がつり合っている時に、二者の性別が異なる場合は、想像力は、両者に、または、一般に二者のうち弱い者に、非常な肉欲または愛と呼ばれる、星の光の完全な陶酔をもたらす。

愛は魔術の力の大いなる手段の 1 つである。

欲望は魔術の力の大いなる手段の 1 つである。

しかし、厳密には酩酊または肉欲としての欲望は魔術師には絶対に禁止されている。

デリラによる眠りに身を任せるカバラのサムソンには災いが有る!

王笏をオンファレの糸巻棒と交換する知のヘラクレスは、すぐにデイアネイラの報復を経験するであろうし、食い込み巻きつくネッソスの外衣から免れるためにオエタ山のまきによる火葬以外の方法は残されていないであろう。

性欲は幻影に過ぎない。

性欲は想像の蜃気楼の結果である。

星の光は普遍の誘惑者である。

創世記 3 章でモーセは星の光を蛇に例えた。

星の光は巧妙な代行者である。

星の光は常に自発的である。

星の光は命の力の中に常に満ちている。

星の光は誘惑する夢と官能的な映像に常に満ちている。

星の光は盲目的な力である。

星の光は善のための意思でも悪のための意思でも全ての意思に従う。

星の光は無制御の命の常に再生する輪である。

星の光はめまいを無分別な者にもたらす。

星の光は肉体的な霊である。

星の光は(神の聖霊の)火の体である。

星の光は手でふれられない普遍のエーテルである。

星の光は自然の巨大な誘惑するものである。

どのように星の光を理解し易く定義すべきであろうか？

どのように星の光の作用の特徴を話すべきであろうか？

星の光はある程度まで中立である。

星の光は悪に力を与える様に、星の光は善に力を与える。

星の光は光を伝える。

星の光は闇を伝える。

星の光を「光をもたらすもの」を意味する「ルシフェル」とも「光をよけるもの」を意味する「リュシフュージェ」とも呼んでよい。

星の光は蛇である。

星の光は神性の光である。

星の光は火である。

星の光は地獄の責め苦の火とも天にささげられる香を燃やす火とも成るであろう。

星の光をあつかうには、創世記 3 章 1 5 節の女性の様に、かかとで蛇の頭を圧倒する必要が有る。

四大元素では、水はカバラの女性に対応している。

火は蛇に対応している。

蛇を和らげるには、星の光の輪を統治するには、星の光の流れの外に身を置く必要が有る。

星の光から自身を隔離する必要が有る。

前記の理由から、ティアナのアポロニウスは汚れの無い羊毛のマントで自身を完全に覆い隠した。

ティアナのアポロニウスは背中を丸めて足を頭上に置いた。

ティアナのアポロニウスは背中を半円に丸めた。

ティアナのアポロニウスは目を閉じた。

ティアナのアポロニウスはいくつかの儀式を満たした後にマントにくるまった。

多分ティアナのアポロニウスの催眠における手の動きと神聖な言葉は想像力の固定を意図し意思の作用を決定した。

魔術では羊毛のマントは大いに有益である。

羊毛のマントは悪人の霊の魔術師のサバトへの共通の乗り物であった。

悪人の霊の魔術師は実際にサバトへ行ったわけではない。

サバトという幻覚が悪人の霊の魔術師の所へ来た。

マントで自身を隔離した時に、魔術師は魔術的に夢中に成っているものに対応している透明な映像に通じた。

魔術師は過去に世界で行われた映像に類似している全ての行動の反映を透明な映像に混ぜた。

神の教えは前記の普遍の命の激しい流れをつぐないの地獄の火で表現した。

星の光は入門の手段である。

星の光は圧倒するべき巨大なものである。

星の光は和らげるべき敵である。

星の光はラルヴァと霊の多数の群れを神の聖霊の魔術の降霊術と悪人の霊の魔術の降霊術にもたらした。

　星の光には全ての形が保存されている。

　星の光に保存されている全ての形は非現実的な思いがけない組み合わせで憎むべき奇形を悪夢にもたらす。

　星の光の流れの渦に飲み込まれる事は死の深淵より恐ろしい狂気の深淵に落ちる事である。

　星の光の流れの渦に身を任せる事は死の深淵より恐ろしい狂気の深淵に落ちる事である。

　星の光の混乱の闇を追い払う事、星の光から完全な形を思考にもたらす事は、知者に成る事、創造する事、地獄に勝利する事である！

　星の光は動物的な先天的なものである肉欲をもよおさせて人の知性に戦いをいどむ。

　星の光は反映の誘惑で人の知性を誤らせようと試みる。

　星の光の映像の幻は不可避の作用である。

　星の光の映像の幻は四大元素の霊と苦しんでいる悪人の魂によって災いをもたらす。

　四大元素の霊と苦しんでいる悪人の魂の休まることのない意思は人の欠点の中に共通点を探す。

　四大元素の霊と苦しんでいる悪人の魂は破滅させるためというよりはむしろ仲間を増やすために人を誘惑する。

　キリスト教の教えの最後の日に開かれる良心の書とは星の光である。

　星の光は全てのロゴスの跡を保存する。

　星の光は全ての言葉の跡を保存する。

星の光は全ての行動の跡を保存する。

星の光は全ての形を保存する。

行動は磁気の呼吸を変える。

前記によって、星の光によって予見者は初対面の人が義人か罪人か話せる。

星の光によって予見者は初対面の人の美徳や罪を話せる。

星の光によって初対面の人の善悪を知る能力は予言に属する。

初期のキリスト教の神秘主義者は星の光によって初対面の人の善悪を知る能力を霊の識別と呼んだ。

理性を放棄する者、星の光の反映を追って自分の意思を喜んでさまよわせる者は、悪人の霊の憑依による全ての驚異による、熱狂とゆううつに交互に従う。

星の光の反映によって汚れた悪人の霊は似た魂を持つ人に作用できる。

汚れた悪人の霊は似た魂を持つ人を御し易い道具として利用する。

汚れた悪人の霊は似た魂を持つ人の肉体を常に苦しませさえする。

憑依によって、胎児の様に、汚れた悪人の霊は似た魂を持つ人の肉体の中に入り住みつく。

ヘブライ語の書物「魂の変革」は「憑依」、「胎児の様に」というカバラ的な言葉の状態を説明している。

本書の１３章は前記の簡潔な分析を含むであろう。

魔術の神秘をもてあそぶ事はきわめて危険である。

特に、自分より上の力を利用する様に、試しに好奇心から魔術の儀式を実践する事は軽率過ぎる。

達道者に成る事無しに、好奇心から降霊術や催眠術にふける者は火薬のたるの近くで火遊びする幼子に似ている。

星の光から自身を隔離するには、羊毛の布で自身を覆い隠すだけでは不十分である。

　特に、星の光から自身を隔離するには、絶対の冷静を精神と心に課す必要が有る。

　星の光から自身を隔離するには、肉欲の俗世を放棄する必要が有る。

　星の光から自身を隔離するには、確固とした意思からの自然な作用による忍耐を確信する必要が有る。

　星の光から自身を隔離するには、確固とした意思に基づく行動を頻繁にくり返す必要が有る。

　なぜなら、「高等魔術の教義」の１章で説明するつもりである様に、行動によってのみ意思は証明される。

　神の教えの力と永続性が儀式にかかっている様に。

　神経の感受性を強める事によって、力を強め、結果として星の光の中の映像の誘惑を強める、星の光による陶酔を引き起こす物質が存在する。

　逆に、神経の感受性を強める事によって、精神を不安にさせ乱す物質が存在する。

　磁気を持つ、さらに人によって磁化された、神経の感受性を強める物質が大衆が媚薬と呼んでいる物である。

　しかし、コルネリウス アグリッパが毒の魔術と呼んでいる、魔術の危険な応用、神経の感受性を強める物質による魔術に入るつもりは無い。

　悪人の霊の魔術師への火刑は最早無い事は事実である。

　しかし、以前より強く、常に悪人への報いが存在する。

　機会が有れば、星の光の力が事実である事を話そう。

　星の光を傾けるには星の光の２つの振動と２つの力のつり合いを理解する必要が有る。

　カバラでは２つの力のつり合いを魔術のつり合いと呼んでいる。

カバラでは 6 つ 1 組で 2 つの力のつり合いを表している。

カバラでは六芒星で 2 つの力のつり合いを表している。

第一原因である神では 2 つの力のつり合いは神の意思である。

人では 2 つの力のつり合いは自由である。

物では 2 つの力のつり合いは数学的なつり合いである。

つり合いは安定と存続をもたらす。

自由は人の不死をもたらす。

神の意思は永遠の論理の法を実行する。

概念ではつり合いは論理である。

力ではつり合いは力である。

つり合いは厳しい。

つり合いは法を実行する。

法につり合いは存在する。

少しでも、つり合いを破ると、つり合いは壊れる。

前記の理由から、無意味なものは何も無い。

役に立たないものは何も無い。

失われるものは何も無い。

全ての言葉と全ての行動は真理の役に立つか真理に背く。

賛成と反対の一致が真理を作る。

少なくとも、賛成と反対のつり合いが真理を作る。

「高等魔術の祭儀」の 1 章で、どのように魔術のつり合いをもたらすべきであるかと、なぜ魔術のつり合いは全ての作業の成功に必要であるかを話すつもりである。

全能は最大の絶対の自由である。

絶対の自由は完全なつり合い無しでは存在できない。

知の作業では魔術のつり合いは成功の無上の条件の 1 つである。

隠された化学、錬金術では魔術のつり合いを探求する必要が有る。

中和させる事無しに相互に正反対のものを組み合わせる事を学ぶ事によって魔術のつり合いをもたらす。

魔術のつり合いは存在の大いなる原初の神秘を説明する。

魔術のつり合いは悪の相対的な必要性を説明する。

黒魔術では悪の相対的な必要性は汚れた悪人の霊のある程度の力をもたらす。

悪の相対的な必要性によって、汚れた悪人の霊には、地上で実践された善行は激しさと力の明らかな増大の源泉と成る。

神の様な者と天使が公に奇跡を起こす時には悪人の霊の魔術師と悪人の霊も奇跡を起こす。

神の様な者と神の聖霊が公に奇跡を起こす時には悪人の霊の魔術師と悪人の霊も奇跡を起こす。

対立は頻繁に成功をもたらす。

競合は頻繁に成功をもたらす。

人は抵抗するものに、もたれかかる事ができる。

7

ザイン

G

火の剣

勝利

剣

全ての神統系譜学と全ての象徴で 7 つ 1 組は神聖な数である。

なぜなら、7 つ 1 組は 3 つ 1 組と 4 つ 1 組から成る。

全ての数の充満で数 7 は魔術の力を表す。

数7 は四大元素全ての力が強めた精神である。

数7 は自然が仕える魂である。

ソロモンの鍵タロットで数7 は神の王国である。

タロットの 7 ページ目には戦士が描かれている。

戦士は王冠をかぶっている。

胸当ての上に戦士は三角形を身につけている。

戦士は立方体の上にいる。

2 頭のスフィンクスが立方体につながれている。

2 頭のスフィンクスは立方体を正反対の方向に引いている。

しかし、 2 頭のスフィンクスは同じ方向を向いている。

一方の手に戦士は火の剣を持っている。

他方の手に戦士は三角形と球をのせた王笏を持っている。

立方体は賢者の石である。

2 頭のスフィンクスは大いなる代行者の 2 つの力である。

2 頭のスフィンクスはソロモンの神殿の 2 つの柱ボアズとヤキンに対応している。

三角形が描かれている胸当ては神のものの知である。

神のものの知は賢者を人の攻撃に破られない様にする。

王笏は魔術の杖である。

火の剣は死に至る大罪への勝利の象徴である。

火の剣は七つの大罪への勝利の象徴である。

死に至る大罪の数は 7 である。

徳の数が 7 である様に。

(

七つの大罪、七つの死に至る大罪は傲慢、金銭への貪欲、色欲、憤怒、怠惰、暴食、嫉妬である。

七つの徳は信仰、希望、愛、勇気、思慮、節制、正義である。

)

古代人は七つの大罪、七つの死に至る大罪と七つの徳という概念を既知の 7 つの惑星の象徴で表した。

太陽は神への向上心、全ての善行での自信が支える気高い自信、弱い者では傲慢に堕落するかもしれない信仰を表す。

月は金銭への貪欲と対立する希望を表す。

明けの明星、宵の明星、金星は色欲と正反対の愛を表す。

火星は憤怒を超える勇気を表す。

水星は怠惰と対立する思慮を表す。

子を飲み込む代わりに石を与えられたサトゥルヌスの土星は暴食と対立する節制を表す。

巨人ティターン族を圧倒したユピテルの木星は嫉妬と正反対の正義を表す。

天文学は前記の象徴を古代ギリシャ人の宗教から取り入れた。

ヘブライ人のカバラでは、太陽は光の天使を表す。

月は向上心と夢の天使を表す。

火星は破壊の天使を表す。

水星は進歩の天使を表す。

木星は力の天使を表す。

土星は荒れ野の天使を表す。

７惑星の天使の名前はミカエル、ガブリエル、サマエル、アナエル、ラファエル、ザカリエル、オリフィエルである。

魂を統治する７惑星の力が人生の各時期を分担している。

占星術師は対応する惑星の公転で人生を判断した。

しかし、カバラの占星術を判断占星術と混同してはいけない。

カバラの占星術と判断占星術の違いを説明する。

カバラの占星術では、太陽がまだ話す事ができない幼子の時期を統治する。

月が幼子の時期を統治する。

火星と金星が若い大人の時期を統治する。

水星が男らしい大人の時期を統治する。

木星が熟した大人の時期を統治する。

土星が長老の時期を統治する。

人類一般も一個人の人生の進歩の法から類推可能である進歩の法の下に存在する。

前記の基礎から、トリテミウスは ７ つの神の聖霊による予言の鍵「七つの第二原因について」を確立した。

「高等魔術の祭儀」の ２ １ 章でトリテミウスの「七つの第二原因について」について話すつもりである。

トリテミウスの「七つの第二原因について」によって、連続する出来事の類推可能なつり合いを観測する事によって、重要な未来の出来事を確信を持って予言できる。

時代から時代への国と世界の運命を事前に明確にできる。

キリストの秘密の教えの受託者である、使徒ヨハネは、キリストの秘密の教えをヨハネの黙示録というカバラの書に取り入れた。

使徒ヨハネはヨハネの黙示録を ７ つの封印で封印した。

ヨハネの黙示録の ７ つの霊は古代の神話の ７ つの霊である。

ヨハネの黙示録の杯と剣はタロットの杯と剣である。

７ つの霊、杯、剣といった象徴で隠された教えは純粋なカバラである。

キリストが降臨した時にはパリサイ人はすでにカバラの知を失っていた。

不思議な予言的な作品ヨハネの黙示録の相互に続く場面は pantacle である。

ヨハネの黙示録の鍵は ３ つ １ 組、４ つ １ 組、７ つ １ 組、１ ２ つ １ 組である。

ヨハネの黙示録の象徴はヘルメスの書、エノクの創世記、タロットの象徴と似ている。

学の有るギヨーム ポステルは個人的な見解からタロットをエノクの創世記と呼んでいる。

智天使ケルブは象徴的な牛である。

(エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でケルブ、ケルビムは牛を意味する」)

モーセの創世記 ３ 章 ２ ４ 節で神はエデンの東、命の木への道、世界の門を智天使ケルブと火の剣に守らせた。

智天使ケルブは火の剣を持っている。

(

火の剣は死に至る大罪への勝利の象徴である。

火の剣は七つの大罪への勝利の象徴である。

)

智天使ケルブは聖書のスフィンクスである。

(

エゼキエルはエゼキエル書 １ ０ 章 １ ４ 節で智天使ケルブには牛、人、ライオン、ワシの顔が有ると話している。

エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でケルブ、ケルビムは牛を意味する」

)

智天使ケルブは人の頭と牛の体を持っている。

智天使ケルブは古代アッシリアのスフィンクスである。

人の頭と牛の体を持っている智天使ケルブという象徴の分析結果はミトラスの戦いと勝利である。

智天使ケルブは火の剣で武装したスフィンクスである。

智天使ケルブと火の剣は入門の門へ近づかない様に大衆へ警告する門番である神秘の法を表す。

前記をヴォルテールは全く知らなかった。

ヴォルテールは火の剣で脅す牛である智天使ケルブの意味に気づかなかった。

仮にヴォルテールがメンフィスとテーベの遺跡を訪れていたらヴォルテールは何を言ったであろうか？

ラムセスの墓に眠っている古代の反響はフランスで楽しまれている多数の軽率な風刺に何と答えるであろうか？

モーセの創世記 3 章 2 4 節の智天使ケルブは大いなる魔術の神秘も表す。

7 つ 1 組が大いなる魔術の神秘の四大元素を表す。

しかし、究極の言葉は与えられない。

アレクサンドリア学派の賢者の言葉に表せない究極の言葉。

ヘブライ人のカバリストが יהוה、YHWH、ヤハウェと書いて אראריתא、ARARITA、アラリタと理解する究極の言葉。

אראריתא、ARARITA、アラリタは、2 つの R で、二次的な原理の三重性を表す。

אראריתא、ARARITA、アラリタは、2 つの R で、両極性を表す。

אראריתא、ARARITA、アラリタは、ヘブライ文字の最初の文字アレフ(א)と最後の文字タウ(ת)で、第一の原理と最終的な究極の原理の対等な統一性を表す。

אראריתא、ARARITA、アラリタは、アラリタで、4 文字の一語である。

אראריתא、ARARITA、アラリタは、ARARITA という 7 文字で、3 つ 1 組と 4 つ 1 組の結合を表す。

אראריתא、ARARITA、アラリタは、3 つの A と 2 つの R のくり返しを含む 7 文字で、数 7 を形成する。

אראריתא、ARARITA はアラリタと発音する。

魔術では 7 つ 1 組の力は絶対である。

なぜなら、全てのものの中で数 7 は決定力が有る。

前記の理由から、儀式で全ての宗教は数 7 を神聖化している。

7 年目はレビ記 2 5 章 4 節のヘブライ人の安息の年であった。

週の 7 日目は休息と祈りのための安息日である。

カトリックには七つの秘跡が有る。

(七つの秘跡は洗礼、神の聖霊を授かる堅信、パンをイエスの肉と思って頂く聖体、ゆるし、病者への塗油、祭司にする叙階、結婚である。)

など。

プリズムの七色と七音音階は古代人の 7 惑星と対応している。

7 惑星は人という竪琴の 7 つの弦である。

精神という天空は不変である。

霊という天空は不変である。

占星術は天文学より不変である。

事実、7 惑星は人の感情の鍵の象徴である。

太陽や月や土星のタリスマンを作る事は、魂の主な力に対応している、意思を磁気的に象徴に加える事である。

何物かを水星や金星にささげる事は、喜びや知といった直接の意図か、利益、目論見で、水星や金星にささげた物を磁化する事である。

前記の様な目的を、7 惑星に対応する金属、動物、植物、香は補助する。

7 つの魔術的な動物は後記である。

鳥は神だけの楽園、自由意思といった神だけの領域、神の教えに対応している。

7 つの魔術的な鳥は後記である。

白鳥、フクロウ、ハゲワシ、ハト、コウノトリ、ワシ、タゲリ。

魚は霊の冥界、概念の領域、哲学に対応している。

7 つの魔術的な魚は後記である。

アザラシ、ナマズ、カワカマス、ボラ、チャブ、イルカ、コウイカ。

四足獣はこの世界、形の領域、自然科学に対応している。

7 つの魔術的な四足獣は後記である。

ライオン、猫、オオカミ、雄ヤギ、サル、雄鹿、モグラ。

前記の動物の血、脂肪、肝臓、胆汁は誘惑術の役に立つ。

前記の動物の血、脂肪、肝臓、胆汁は悪人の霊の魔術の役に立つ。

前記の動物の脳は植物の香と結びついている。

前記の動物が 7 惑星の感化力に対応している磁気の力を持っている事が古代の実践によって認知されていた。

7 つの神の聖霊のタリスマンを宝石か金属に刻んだ。

7 つの宝石は次である。

カーバンクル、水晶、ダイアモンド、エメラルド、アゲート、サファイア、オニキス。

7 つの金属は次である。

金、銀、鉄、銅、固体の水銀(の合金)、錫と鉛の合金である白目、鉛。

7 つの神の聖霊のカバラの象徴は後記である。

太陽のカバラの象徴はライオンの頭の蛇である。

月のカバラの象徴は 2 つの三日月が分割する球である。

火星のカバラの象徴は剣の柄を噛んでいる竜である。

金星のカバラの象徴は男性器と女性器である。

水星のカバラの象徴はヘルメスのケーリュケイオンと犬の頭を持つアヌビスである。

木星のカバラの象徴はワシがくちばしでくわえている燃える五芒星かワシが爪で持っている燃える五芒星である。

土星のカバラの象徴は足を引きずっている長老かサンストーンに巻きつけられている蛇である。

前記の全てのカバラの象徴が古代人の石に刻まれているのが見つかる。

特に、グノーシス主義者の時代のタリスマンのカバラの象徴はアブラクサスという名前で知られている。

パラケルススの集めたタリスマンでは木星を祭司の衣を着た祭司で表している。

タロットの 5 ページ目には木星のユピテル、大祭司、大いなる秘儀祭司が描かれている。

大祭司は法王の三重冠をかぶっている。

大祭司は両手で三重の十字架を持っている。

三重の十字架の横木は魔術的な三角形を形成している。

三重の十字架は 3 つの世界の王笏と鍵を表す。

3 つ 1 組と 4 つ 1 組の統一性について話した全てのものを結びつける事によって、7 つ 1 組について話すべき残りの全てのものを見つけるであろう。

大いなる完全な魔術の統一性は 4 と 3 から成る。

※磁気の実験に用いられる 7 つ 1 組の植物と色についてはラゴンの学の有る作品「メイソンのオカルト」を参照してください。

8

ケト

H

実現

永遠性

生きているもの

原因は結果によって表れる。

結果は原因とつり合っている。

神の言葉、唯一の言葉、テトラ グラマトンは 4 つ 1 組の創造によって自身を確証する。

(高等魔術の祭儀 14 章「テトラ グラマトンは、魔術の無上の言葉であり、『である様に』を意味する」)

人の生殖力は神の生殖力を証明する。

神の名前ヤハウェのイョッドは第一原理である神の永遠の生殖力である。

神の名前ヤハウェのイョッドは神の永遠の生殖力である。

形成した自身の概念を無限に拡大する事によって、人が神の理解に到達した時に、人は神が神の像にかたどって人を創造した事を理解する。

(創世記 1 章 27 節「神は神の像にかたどって人を創造した」)

人が神を無限の人として理解した時に、人は「私は有限の神である」と自身に話す。

魔術は神秘主義と異なる。

なぜなら、魔術は先験的に判断しない。

　魔術は経験的に判断の根拠が確立された後に判断する。

　類推可能性の普遍の法によって、原因の力が包含している結果によって、原因を理解した後に魔術は判断する。

　前記の理由から、隠された学問、隠された自然科学、魔術での全ては真実である。

　隠された学問、隠された自然科学、魔術は経験の根拠の上にのみ理論を確立する。

　真実だけが概念のつり合いを確立する。

　魔術師は実現による実証を省略する概念の領域のものを確実なものとして認めない。

　原因で真実であるものは結果に表れる。

　実現されないものは存在しない。

　言葉の実現はロゴスである。

　言葉の実現はイエスである。

　言葉の実現は法である。

　思考は言葉に成る事で思考を実現する。

　思考は身振り、音、象徴する映像によって思考を実現する。

　思考が言葉、身振り、音、象徴する映像に成る事は実現の第一の段階である。

　文書か言葉の象徴によって思考は星の光に記される。

　思考は星の光の反映によって他者の精神に感化を与える。

　思考は他人の透明なものである想像力を通過する事によって屈折する。

　思考は新しい形と新しいつり合いをまとう。

　思考は行動に翻訳される。

　思考は世界を変える。

思考が行動や星の光の言葉によって他人の精神や世界を変える事は実現の最終段階である。

概念が変化させる世界に生まれた人は思考の跡をまとう。

概念が変化させる世界に生まれた人が思考の跡をまとう事によって、言葉は肉に成る。

概念が変化させる世界に生まれた人が思考の跡をまとう事によって、言葉は人に成る。

より強い救い主イエスの従順の跡だけが星の光に保存されたアダムの不従順の跡を消せた。

アダムの不従順の跡が星の光に保存されたと原罪を自然な意味で魔術的な意味で説明できる。

イエスの従順の跡が星の光に保存されたアダムの不従順の跡を消したと世界へのつぐないを自然な意味で魔術的な意味で説明できる。

星の光、世界の魂、地の魂はアダムの全能の道具であった。

星の光は人の全能の道具であった。

アダムの罪の後、星の光はアダムへの罰の道具に成った。

人の罪の後、星の光は人への罰の道具に成った。

アダムの罪は星の光を悪化し乱した。

人の罪は星の光を悪化し乱した。

アダムの罪は不純な反映を星の光の原初の映像に混ぜた事である。

人の罪は不純な反映を星の光の原初の映像に混ぜた事である。

罪を犯す前のアダムの汚れのない想像力にとって星の光の原初の映像は普遍の知の書であった。

罪を犯す前の人の汚れのない想像力にとって星の光の原初の映像は普遍の知の書であった。

古代の象徴では星の光を自身の尾を飲み込もうとしている蛇ウロボロスとして描いた。

自身の尾を飲み込もうとしている蛇ウロボロスは悪意か思慮を表す。

自身の尾を飲み込もうとしている蛇ウロボロスは時か永遠を表す。

自身の尾を飲み込もうとしている蛇ウロボロスは誘惑者サタンか救い主イエスを表す。

なぜなら、星の光は命の媒体である。

星の光は善の補助者であると同様に悪の補助者である。

星の光は神の聖霊の体に用いられると同様にサタンの火の体に用いられる。

星の光は天使の戦いの道具である。

星の光はミカエルの雷を助けると同様に地獄の火に油を注ぐ。

星の光は、カメレオンに似た性質を持つ、常に乗り手の武装を反映する馬に例えられるかもしれない。

星の光は知の光の実現か知の光の形である。

知の光は神の光の実現か神の光の形である。

キリスト教の大いなる祖イエスはローマの放蕩に汚れた反映による過電流が星の光に流れている事を見抜いた。

イエスは弟子をローマの放蕩に汚れた反映の外界から隔離しようと試みた。

イエスは、共通の信心と熱意の仲介によって、イエスが神の恵みと呼んだ新しい磁気の鎖によって弟子が通じ合うために、弟子を内面的な光だけに集中させた。

イエスはローマの放蕩に汚れた星の光の流れを圧倒した。

イエスはローマの放蕩に汚れた星の光の流れを腐敗作用を表してサタンと呼んだ。

ある流れに別の流れを対立させる事は流体の命の力を再生させる事である。

類推の正確さによって、啓示者は倫理道徳の反作用のための適切な時を見抜いただけである。

実現の法は磁気の呼吸と呼んでいるものをもたらす。

星の光は場所と物に浸透している。

星の光は、特に行動が確証した実現した欲望、人の最も有力な欲望と一致する感化を場所と物に伝える。

事実、普遍の代行者、隠れた星の光は常につり合いを求める。

普遍の代行者、星の光は無を満たす。

普遍の代行者、星の光は充満を吸収する。

普遍の代行者、星の光は肉体の伝染病の様に悪徳を伝染させる。

普遍の代行者、星の光は徳への改宗に強く作用する。

反発し合う者との同居は苦痛の種である。

神の様な者の遺物は突然の改宗という驚くべき結果をもたらす。

大罪人の遺物は突然の堕落という驚くべき結果をもたらす。

呼吸と接触は頻繁に性欲を呼び起こす。

人が無意識にふれたり磁化した物との呼吸と接触は頻繁に性欲を呼び起こす。

まさに肉体が呼吸する様に、魂は呼吸する。

魂は魂が幸せと信じているものを吸い込む。

魂は精神的な感覚がもたらすものを吐き出す。

病んだ魂の呼吸は悪い。

病んだ魂は魂の周囲の倫理道徳的な大気を汚す。

病んだ魂は汚れた反映を浸透している星の光に結びつける。

病んだ魂は星の光の中に不健全な流れを確立する。

社会で頻繁に人は病んだ魂に近づく事による有り得ない見知らぬ悪い思考に襲われ驚く。

魂が呼吸しているという秘密は気高く重要である。

なぜなら、魂の呼吸は良心の始まりである。

魂が呼吸しているという秘密は魔術のわざの無上の議論の余地の無い明白な畏敬するべき力の １ つである。

魂の磁気的な呼吸は魂が中心である放射物を魂の周囲にもたらす。

魂の呼吸は魂の行動の反映で魂を包み込む。

魂の呼吸は魂に対して楽園か地獄を創造する。

孤立した行動は存在しない。

隠れた行動は存在しない。

人の真の意思は星の光の中に記され残る。

人が行動で確証した全てのものは星の光の中に記され残る。

人の反映は星の光の中に保存される。

透明なものである想像力の仲介によって、絶え間なく星の光の中の人の反映は人の思考に感化を与える。

人は人の行動の子である。

概念の段階で星の光は人の光に変わる。

星の光は魂の第一の外皮である。

極めて薄い流体と連動して、星の光はエーテルの体、幻の星の体を形成する。

「大天文学または直感哲学」でパラケルススは星の体について話している。

肉体の死で、肉体から星の体が自由に成る時に、類似しているものの共鳴によって、星の体は過去の人生の反映を引き寄せて長い間保存する。

強く共鳴する意思が引き寄せると、対応している星の光の流れは自然と表れる。

なぜなら、奇跡より自然なものは無い。

強く共鳴する意思が引き寄せると、霊は表れる。

降霊術についての １３ 章で話すつもりである。

星の光の集合の様に、流体の体は ２ つの正反対の動きに従う。

２ つの正反対の動きは左で引き寄せ右でしりぞける。

２ つの正反対の動きは一方で引き寄せ他方でしりぞける。

２ つの正反対の動きは男性と女性に似ている。

２ つの正反対の動きは様々な衝動を人の中にもたらす。

２ つの正反対の動きは良心の呵責の役に立つ。

頻繁に他人の精神の反映に感化される。

他人の精神の反映の感化は一方で誘惑を他方で深い予期しない思いやりをもたらす。

他人の精神の反映の感化は、向上させる天使と誘惑する天使という「守護天使」というキリスト教の口伝の教えを説明する。

正義の勝利と人の自由への解脱のために人の善意をはかる天秤によって星の光の ２ つの力は表されるかもしれない。

肉体と異なり、星の体の性別は常に同じとは限らない。

２ つの力のつり合いが右から左へ変わると、２ つの力のつり合いが一方から他方へ変わると、頻繁に星の体の性別が見える組織である肉体の性別と反対である場合が存在する。

肉体の性別と星の体の性別の不一致は人の肉欲的な奇行をもたらす。

倫理道徳的に正当化できないが、肉体の性別と星の体の性別の不一致はアナクレオンとサッフォーの性欲の異常さを説明する。

達道者の催眠術師は、肉体の性別と星の体の性別の不一致といった、肉体と星の体の全ての微妙な違いを考慮に入れるべきである。

「高等魔術の祭儀」で肉体と星の体の違いを見分ける方法を教えるつもりである。

真実での実現と想像での実現という 2 種類の実現が存在する。

真実での実現は神の聖霊の魔術師だけの秘密である。

想像での実現は誘惑者と悪人の霊の魔術師のものである。

神話は神の教えの考えの想像での実現である。

迷信は誤解した信心による悪人の霊の魔術である。

しかし、実践無しの思索だけの哲学より神話と迷信は人の意思に有効である。

前記の理由から、使徒パウロは十字架の愚かさによる懐柔を人の知的な無気力に対立させた。

使徒パウロは十字架にかけられたイエスの伝道という滅びる人には愚かさである懐柔を人の知的な無気力に対立させた。

(コリント人への第 1 の手紙 1 章 1 8 節から 2 4 節「滅びる人には十字架の伝道は愚かさである。神は伝道の愚かさによって信じる人を救う事を望んだ」)

十字架にかけられたイエスの伝道という滅びる人には愚かさである懐柔を大衆の弱さに応用して、神の教えは哲学を実現する。

十字架にかけられたイエスの伝道という滅びる人には愚かさである懐柔を大衆の弱さに応用して、神の教えは哲学を実現する事は、カバリストには、人に成った神と身代わりによる救いの考えの秘密の理由と隠された説明である。

言葉にされない思考は人には失われた思考である。

行動が確証しない言葉は無益な言葉である。

無益な言葉は虚偽に近い。

言葉によって話され行動によって確証された思考は善行か罪に成る。

言葉によって話され行動によって確証された思考は徳か悪徳に成る。

責任が無い言葉は存在しない。

特に、他のものと無関係な行動は存在しない。

呪いは常に結果をもたらす。

祝福は常に結果をもたらす。

行動の性質、愛による行動、憎悪による行動、全ての行動には行動の動機、行動した領域、行動の目的から類推可能である効力が有る。

肖像画を傷つけられた皇帝が手を顔に当てて「傷つけられた様に感じない」と声高に話した時、皇帝は判断を誤った。

皇帝は自分の思いやりを貶めた。

栄誉を重んじる人は自身の肖像画を傷つけられるのを平静に見る事ができるであろうか？　いいえ！

知られずに行われた行動でも、肖像画を傷つけるといった行動は全て致命的な感化によって作用する。

呪いの効力は事実である。

達道者は呪いの効力が事実である事を疑う事ができない。

思いやりの有る皇帝の前記の言葉は無思慮である！

罰を受けずに傷つける事ができない人が存在する。

罰を受けずに傷つける事ができない人を傷つけると致命的である。

罰を受けずに傷つける事ができない人を傷つけると死が始まる。

濫りに会ってはいけない人が存在する。

濫りに会ってはいけない人は一目見ただけで他人の命の傾向を変える。

一目見ただけで他人を殺すバシリスクは虚構ではない。

一目見ただけで他人を殺すバシリスクは魔術的な例え話である。

概して、敵を持つ事は健康に悪い。

罰を受けずに他人を傷つけようと試みてはいけない。

既存の力、流れに対立する前に、正反対の力、流れに乗っているかよく確認する必要が有る。

正反対の流れに乗っていないにもかかわらず既存の流れに対立した場合は、圧倒され打たれ倒されるであろう。

多数の突然死の原因は正反対の流れに乗っていないにもかかわらず既存の流れに対立した事である。

信心への冒涜による電気的な流れがレビ記 １０ 章 １ 節から ２ 節のナダブとアビフへの畏敬するべき天罰、サムエル記下 ６ 章 ７ 節のウザへの畏敬するべき天罰、使徒行伝 ５ 章 １ 節から １１ 節のアナニアとサフィラへの畏敬するべき天罰の原因である。

信心への冒涜による電気的な流れがルーダンのウルスラ会修道院の憑依、ルビエの修道女の憑依、ジャンセニスムのけいれんの原因であると隠れた自然の法で説明できる。

仮にユルバン グランディエが犠牲に成らなかったならば、憑依された修道女が恐ろしいけいれんで死んだか、伝染的に憑依による乱心が力と感化力を増したであろう。

ユルバン グランディエは知識と理性を持っていたにもかかわらず幻覚に陥り自身の名誉を毀損した。

不運なゴーフリディの様に。

さもなければ、ユルバン グランディエは中毒か天罰の全ての特徴を示して突然死したかもしれない。

１８世紀に不運な詩人 Gilbert は世論の流れ、１８世紀を特徴する哲学的な狂信に対立するという自身の大胆な行動の犠牲に成った。

Gilbert は哲学的に反逆する罪を犯した。

信じられない恐怖に取りつかれて Gilbert は狂死した。

Gilbert が時代錯誤の主張をしたので神が Gilbert を罰したかの様に見えた。

しかし、実際は、Gilbert はGilbert が知る事ができなかった自然の法の論理によって死んだ。

Gilbert は電気的な流れに対立した。

雷の様なものが Gilbert を打ち倒した。

仮にシャルロット コルデーがマラーを暗殺しなくても、間違いなく大衆の世論の反作用によってマラーは倒れたであろう。

マラーは呪いによるハンセン病で苦しんだ。

仮にシャルロット コルデーがマラーを暗殺しなくても、マラーは呪いによるハンセン病に倒れたにちがいない。

シャルル９世の病気と死の唯一の原因はサン バルテルミの虐殺が引き起こした非難である。

一方、仮に計り知れない大衆の人気がアンリ４世を支えていなければ、改宗後アンリ４世は生き延びられなかったであろうし、カトリック教徒の疑惑や悪意とプロテスタント教徒の軽蔑によって死んだであろう。

大衆の人気がアンリ４世の星の命の放射力、共鳴力を支えた。

不人気は正直さと大胆さの証かもしれない。

しかし、不人気は思慮の証ではない。

政治家には世論による不名誉は致命的である。

話すには不適切な多数の高名な人達の早過ぎる死、変死を思い出させる。

大衆の世論における不名誉は頻繁に大いなる不当な仕打ちかもしれない。

しかし、それにもかかわらず、大衆の世論における不名誉は常に不成功の原因である。

大衆の世論における不名誉は頻繁に死の宣告に成る。

代わりに、個人に対する不当な仕打ちは、もし直されないままであれば、国家全体や社会全体の損失の原因に成り得るし成るべきである。

直されないままの個人に対する不当な仕打ちが国家全体や社会全体の損失の原因に成る事を血の叫びと呼んでいる。

なぜなら、全ての不当な仕打ちの根底には殺人の芽が存在する。

個人と国家全体や社会全体の連帯といったり不当な仕打ちと殺人の連帯といった、連帯という畏敬するべき法が存在する理由から、キリスト教は許す事と和解を非常に強くすすめる。

許す事無く死ぬ人は短剣で武装して永遠に身を投げる事に成る。

許す事無く死ぬ人は永遠の殺人の恐怖で自身を苦しめる事に成る。

許す事無く死ぬ人は永遠の殺人の恐怖で自分で自分の首を絞める事に成る。

父母の呪いに効力が有る事は不動の大衆の口伝であり不動に大衆に信じられている事である。

父母の祝福に効力が有る事は不動の大衆の口伝であり不動に大衆に信じられている事である。

事実、縁が近いほど憎悪の結果はより恐ろしい。

メレアグロスの血を燃やしたアルタイアの燃え木の神話は縁が近いほど憎悪の結果はより恐ろしいという畏敬するべき力の象徴である。

父母は常に用心しなさい。

なぜなら、血族に地獄の火をともす人は自身も焼かれ不幸に成る。

子を不幸にする父母は自身も不幸に成る。

許す事は罪ではない。

しかし、呪う事は常に危険な悪い行動である。

9

テト

I

秘伝伝授

基礎

善

秘伝伝授者はトリスメギストスのランプ、ティアナのアポロニウスのマント、祖の杖を持つ者である。

トリスメギストスのランプは知という光に照らされた理性である。

ティアナのアポロニウスのマントは賢者を盲目的な傾向から隔離する完全な冷静さである。

祖の杖は自然の秘密の永遠の力の助けである。

トリスメギストスのランプは過去、現在、未来を明らかにし、男性の良心を明らかにし、女性の心の奥底を明らかにする。

トリスメギストスのランプは三重の火で燃え、ティアナのアポロニウスのマントは三重に折られ、祖の杖は 3 つの部分に分かれている。

数 9 は神の反映である。

数 9 は全ての概念的な力での神の概念を表す。

しかし、数 9 は信心の濫用、迷信、盲信、偶像崇拝を表す。

前記の理由から、ヘルメスは数 9 を秘伝伝授の数にした。

なぜなら、秘伝伝授者は迷信によって迷信を統治する。

杖にもたれかかり、マントの中に覆い隠され、ランプに照らされ、独力で、秘伝伝授者は闇の中を進む事ができる。

神は理性を全ての人に与えている。

しかし、全ての人が理性を利用する方法を知っているわけではない。

理性を利用する方法を知るには、知を獲得する必要が有る。

神は自由を全ての人に提案している。

しかし、全ての人が自由であるわけではない。

自由に成るには、権利を獲得する必要が有る。

自由に成るには、正義を獲得する必要が有る。

全ての人のために、力は存在する。

しかし、全ての人が力にもたれかかる方法を知っているわけではない。

力にもたれかかるには、力を持つ必要が有る。

努力によってのみ人は到達する。

獲得したもので自身を高める事が人の運命である。

獲得した後に神の様に与える栄光と喜びを獲得する事が人の運命である。

魔術は祭司のわざ、王者のわざと呼ばれた。

なぜなら、秘伝伝授によって賢者は全ての魂と意思を統治する力を獲得する。

予言は秘伝伝授者への恩恵の 1 つである。

予言は原因に含まれる結果の知である。

予言は知を類推可能性の普遍の考えの事実に応用したものである。

人の行動は星の光の中に記される。

だけではなく、人の行動の跡は顔に残される。

人の行動は動作を変える。

人の行動は声の調子を変える。

全ての人は秘伝伝授者には読み易い命の歴史を身につけている。

未来は常に過去の結果である。

予期しない出来事は論理的に計算された結果を感知できるほどに変えない。

人の運命は予言できる。

唯一の行動から人生全体を判断できる。

１つの不手際が不幸の長い連鎖の前兆に成り得る。

カエサルは頭がはげている事を恥じていたので暗殺された。

ナポレオンはオシアン詩集を愛読していたので死ぬまでセントヘレナ島に幽閉された。

ルイ フィリップは傘を携帯していたので王座を退いた。

前記は大衆には矛盾である。

大衆はものの隠された関連を把握できない。

しかし、前記は達道者には原因である。

達道者は全てを理解している。

達道者は不意打ちされない。

秘伝伝授は神秘主義の偽の光を予防する。

秘伝伝授は、類推可能性の鎖によって、無上の論理である神につながる事によって、無上の論理である神から類推可能である価値と誤りの無さを人の理性に与える。

前記の理由から、秘伝伝授者は疑いのない希望を知っている。

秘伝伝授者は非論理的な恐怖を知らない。

なぜなら、秘伝伝授者は非論理的な信心を持たない。

秘伝伝授者は自身の力の範囲を知っている。

秘伝伝授者は危険無しに大胆に行動できる。

秘伝伝授者にとって、大胆に行動する事は可能である事である。

前記からタロットの 9 ページ目の絵の新しい解釈が分かる。

秘伝伝授者のランプは秘伝伝授者が学の有る者である事を表す。

秘伝伝授者が覆い隠されるマントは秘伝伝授者の思慮を表す。

秘伝伝授者の杖は秘伝伝授者の力と大胆な行動の象徴である。

秘伝伝授者は知り、大胆に行動し、沈黙を守る。

秘伝伝授者は未来の秘密を知り、現在においては大胆に行動し、過去については沈黙を守る。

秘伝伝授者は人の心の弱さを知り、自身の務めを果たすために人の心の弱さを大胆に利用し、自身の目的については沈黙を守る。

秘伝伝授者は全ての象徴の原理と全ての神の教えの原理を知り、全ての神の教えを偽善無しに信心から大胆に実践したり控えたりし、無上の秘伝伝授の唯一の考えについては沈黙を守る。

秘伝伝授者は大いなる魔術の代行者の存在と性質を知り、魔術の代行者に人の意思に従わせる行動を大胆に実践し魔術の代行者に人の意思に従わせる言葉を大胆に話し、大いなる秘密の神秘については沈黙を守る。

秘伝伝授者は頻繁にゆううつであるが、打ち倒されないし絶望しない。

秘伝伝授者は頻繁に貧しいが、みじめな気持ちに成らない。

秘伝伝授者は頻繁に迫害されるが、圧倒されない。

秘伝伝授者はオルフェウスの新妻エウリュディケとの死別と殺害されたオルフェウスを思い出す。

秘伝伝授者はモーセのさすらいの旅と孤独な死を思い出す。

秘伝伝授者は預言者の殉教を思い出す。

秘伝伝授者はティアナのアポロニウスへの拷問を思い出す。

秘伝伝授者は十字架にはりつけられた救い主イエスを思い出す。

秘伝伝授者はコルネリウス アグリッパのみじめな死とコルネリウス アグリッパへの死後の中傷を知っている。

秘伝伝授者は、どのような労苦が大いなるパラケルススを圧倒したか知っている。

秘伝伝授者はライムンドゥス ルルスが暴行されて死ぬまで迫害された事を全て知っている。

秘伝伝授者はスヴェーデンボルグが知を守るために狂ったふりをして理性を失った事を思い出す。

秘伝伝授者はルイ クロード ド サンマルタンの隠された人生を思い出す。

秘伝伝授者はカリオストロが宗教裁判にかけられ牢獄に入れられ見捨てられ姿を隠した事を思い出す。

秘伝伝授者はカゾットが断頭台に昇った事を思い出す。

多数の犠牲の後継者である、秘伝伝授者は、大胆に行うことを控えないが、沈黙の必要性をより理解する。

タロットの 9 ページ目の絵の秘伝伝授者の見本を模倣しよう。

精進して勤勉に学ぼう。

知った時には、勇気を持とう。

知った時には、沈黙を守ろう。

１０

イョッド

K

カバラ

王国

源

男性器

全ての神の教えは世界の最初期の賢者が象徴で書いた原初の書タロットの記憶を保存している。

後の時代にタロットは簡易化され俗化された。

タロットの象徴は、文字を記すわざに、文字を神の言葉に、神秘の象徴とpantacleを隠された哲学に与えた。

ヘブライ人はエノクがタロットを創造したと話す。

エノクは世界の第７祖である。

アダムは第１祖である。

エジプト人はエノクをヘルメス トリスメギストスと呼んでいる。

ギリシャ人はエノクをカドモスと呼んでいる。

カドモスは神の都市の神秘的な建築者である。

タロットは原初の口伝の象徴的な要約である。

後に、タロットの元と成った口伝はカバラと呼ばれた。

カバラはヘブライ語で「受け入れ」を意味する。

口伝カバラの基礎は要するに「見えるものは見えないものとつり合っているものさしである」という魔術の唯一の考えである。

古代人は自然科学で正反対に見える 2 つの力のつり合いが普遍の法である事を見た。

古代人は自然科学的なつり合いから哲学的なつり合いを明らかにした。

古代人は生きている自発的な第一原因である神には相互に必要な 2 つの特性の存在が認められるに違いないと断言した。

安定と運動。

必然と自由。

論理と自由意思による自立性。

思いやりと厳しさ。

カバリストのヘブライ人は神の 2 つの特性を思いやりと厳しさという名前で人化した。

無上の王冠が思いやりと厳しさの上に存在する。

王冠はつり合わせる力である。

王冠は世界の原理である。

王国が思いやりと厳しさの下に存在し思いやりと厳しさをつり合わせる。

マタイによる福音 6 章 1 3 節の「主の祈り」の「王国、力、栄光は永遠にあなた、神のものである。である様に」という隠されたカバラの詩で王冠の代わりに王国という名前が見つかる。

王冠が上から、王国が下から、思いやりと厳しさをつり合わせている。

2 つの原理は概念の領域では思いやりと厳しさであると考えられる。

2 つの原理は自由意思といった神の領域では知慮と自発的な知力である。

2 つの原理は実現といった形の領域では安定と進歩である。

２つの原理は実現といった形の領域では永遠性と勝利である。

カバラによれば王冠、知慮、自発的な知力、思いやり、厳しさ、美、勝利、永遠性、基礎、王国が全ての神の教えと全ての学問の基礎である。

三重の三角形と１つの円。

つり合いが説明する３つ１組の考えと、概念の領域で３つ１組の考えが増殖させた３つ１組の概念と、形の領域での３つ１組の概念の実現。

古代人は無上の１０つ１組の数の概念を簡潔な印象的な神学の無上の概念で修飾した。

後記の様に。

１。

王冠。

つり合わせる力。

２。

知慮

不変の秩序の中で知の先導がつり合わせる知慮。

３。

自発的な知力。

知がつり合わせる自発的な知力。

４。

思いやり。

思いやりは知である。

思いやりは知の派生概念である。

思いやりは強いので常に優しい。

(知は強いので常に優しい。)

５。

厳しさ。

知が必要とする厳しさ。

思いやりが必要とする厳しさ。

善意が必要とする厳しさ。

悪を許す事は善をさまたげる事である。

６。

美。

形におけるつり合いの理解し易い概念。

王冠と王国を仲介するもの。

創造主と被造物を仲介する原理。

(

詩という崇高な概念。

詩が王者であるという崇高な概念。

詩が祭司であるという崇高な概念。

)

７。

勝利。

知と正義の永遠の勝利。

８。

永遠性。

精神が物から獲得した永遠性。

自発性が受容性から獲得した永遠性。

命の死への圧倒の永遠性。

９。

基礎。

全ての信心の基礎。

哲学における絶対と呼んでいる、全ての、真理の基礎。

１０。

王国

宇宙、森羅万象、万物。

全ての被造物。

神の作品。

神の鏡。

無上の論理である神の証。

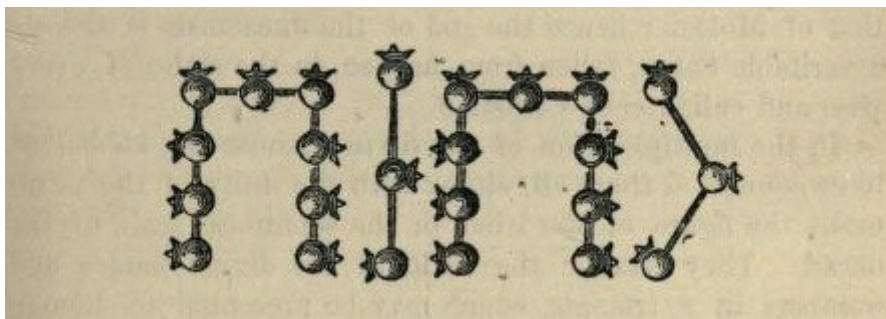
人に事実上の仮定をすがらせる形における結果。

神が答えである謎。

無上の論理である神。

絶対の論理である神。

カバラの達道者は、原初のアルファベットであるヘブライ文字の最初の１０文字に結びつけられた、原理と数を表す、１０の主要な概念を１０のセフィロトと呼んでいる。

後記の様に書かれた、神の４文字、テトラ グラマトンは神の名前の数、源泉、類推可能性を表す。

前記の様に２４の光の三重の花の王冠で書かれた神の名前ヤハウェはヨハネの黙示録４章４節の天の王座のまわりの２４の座と２４人の王冠をかぶった長老を表す。

カバラでは隠された原理を長老と呼んでいる。

増殖された、二次的な原因で反射された、隠された原理は、自身の像、唯一の実体に様々な概念が存在する様に多数の長老を創造する。

源泉から遠ざかれば遠ざかるほど比例して不完全に成っていく映像は、最終的な反映、または、かすかな光を闇に映す。

源泉から遠ざかり不完全に成った反映は恐ろしい歪んだ奇形の長老として表れる。

大衆は恐ろしい歪んだ奇形の長老として表れる源泉から遠ざかり不完全に成った反映を悪魔と呼んでいる。

前記の理由から、ある秘伝伝授者は大胆に「悪魔は悪人が理解した神である」と話している。

別の秘伝伝授者はより妙により活き活きと「悪魔は神の残骸で構成されている」と話している。

「悪魔は悪人が理解した神である」や「悪魔は神の残骸で構成されている」といった悪魔の斬新な定義を要約すると説明すると象徴的に言うと「悪魔は神性を奪おうと試みて堕天した天使である」。

「悪魔は神性を奪おうと試みて堕天した天使である」は預言者の例えである。

「悪魔は神性を奪おうと試みて堕天した天使である」は伝説の創造主の例えである。

哲学的に言うと「悪魔は自然科学と理性の進歩に追い越され天を奪われた神性に対して人が抱く概念である」。

モロク、アドラメレク、バアルは原始的なオリエントの大衆が唯一神を人化したものである。

原始的なオリエントの大衆はモロク、アドラメレク、バアルを残忍な儀式で崇めて唯一神の名誉を汚した。

多数の人に対して地獄を創造し、救わない多数の人が永遠に苦しむのを楽しむ、神に対してジャンセニストが抱く誤った概念はモロクより残忍である。

前記の理由から、全ての賢い光に照らされたキリスト教徒が見る様に、神に対してジャンセニストが抱く誤った概念はサタンであり、天から地に堕ちた。

カバリストは増殖させた神の名前をテトラ グラマトンの統一性、３つ１組の形である三角形、１０つ１組のセフィロトの段階に結びつけた。

カバリストは神の名前と数の段階を三角形で表した。

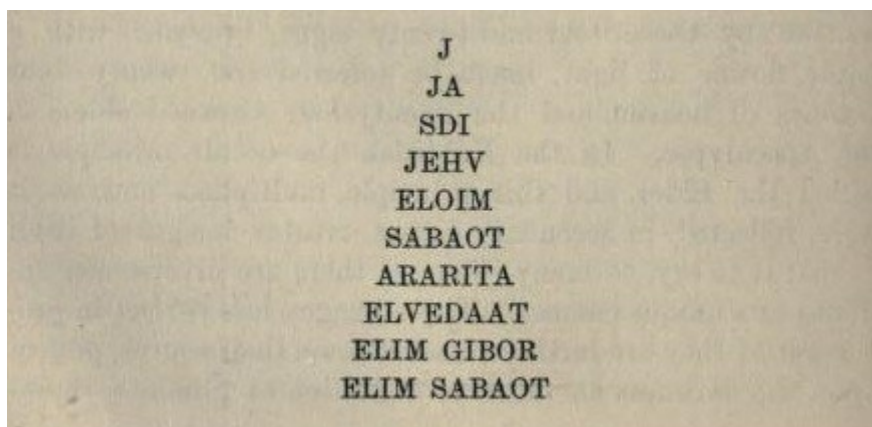
後記の様に、カバリストは神の名前と数の三角形をローマ字で表した。

J
JA
SDI
JEHV
ELOIM
SABAOT
ARARITA
ELVEDAAT
ELIM GIBOR
ELIM SABAOT

イョッド

ヤハ(ヤハウェの短縮形)

シャダイ

ヤハウェ

エロヒム(エロヒ ムはヘブライ 語で神を 意味する 複数形である。)

Sabaoth(Sabaoth はヘブライ語で軍団を意味する。)

アラリタ

ELVEDAAT

ELIM GIBOR(ELIM はヘブライ語で神を意味する。)

ELIM Sabaoth

前記の唯一のテトラ グラマトンから形成された神の名前はヘブライ人の儀式の基礎である。

前記の唯一のテトラ グラマトンから形成された神の名前はカバリストのラビがセムハムフォラスという名前で呼び出す隠された力と成る。

(ラビはヘブライ語で師を意味する。)

カバラの観点からタロットについて話す必要が有る。

Tarot という名前の隠された源泉についてはすでに話した。

象徴的な書タロットは、カバラのアルファベットであるヘブライ文字、４組の１０つ１組の車輪または輪、４つの象徴と車輪の輻である人性を表す進歩的な４つの人物札の組み合わせで構成されている。

タロットの人物札は男性、女性、若い大人の様な者、幼子の様な者である。

タロットの人物札は主、女性の主、騎士、騎士見習いである。

タロットの１ページ目から１３ページ目は１３の考えを表す。

タロットの１４ページ目から２２ページ目は無上の論理で強く確固として確立されたヘブライ人の神の教えが認める９つの信仰を表す。

後記は古代の立法者風の詩で書いた、タロットの宗教的なカバラの鍵である。

１。

アレフ。

自意識。

全ての見えるものの中の自発的な原因。

２。

ベト。

数は生きている単一を証明する。

３。

ギメル。

全てのものを含んでいる神には限界が無い。

4 。

ダレト。

神は全てのものに先行して命の虚空を満たす。

5 。

ヘー。

唯一の主である神だけを敬愛するべきである。

6 。

ヴァウ。

本物の神の教えは清い心の一致である。

7 。

ザイン。

複数の信心のわざは唯一の法王を必要とする。

8 。

ケト。

人には唯一の法が存在する。

人は唯一の祭壇に願う。

9 。

テト。

永遠の神は永遠に神々の基礎を変えない。

１０。

イョッド。

神だけの楽園の様に神の統治は天の時と人の時を包む。

１１。

カフ。

思いやり深い。

報いの力は強い。

１２。

ラメド。

やがて神は神の民の王者を復活させるであろう。

１３。

メム。

墓は約束の地への入口をもたらす。

死だけが終わる。

命の見通しは、さらに広がる。

前記の考えは神聖、純粋、不動の輝きである。

後記は数の段階の神性である。

１４。

ヌン。

善の天使は全てのものを和らげ調節する。

１５。

サメク。

悪人の霊は怒りに満ちあふれている。

１６。

アイン。

神は雷を統治し火を圧倒する。

１７。

プフェ。

神の言葉イエスは宵の明星と宵の明星の露を統治する。

１８。

ツァーデ。

神は月を夜の人の監視者にする。

１９。

クォフ。

神の太陽によって光の中で神は世界を再生する。

２０。

レシュ。

塵は塵に戻る時に、人が死ぬ時に、神の息は呼び起こす。

(

創世記３章１９節「あなたアダムは塵だから塵に戻る」

創世記２章７節「神は人を土の塵から創造した」

エリファス レヴィの「魔術の歴史」「ヘブライ語でアダムは赤い土を意味する」

アダムは人の代表。

)

０または２１。

シュィン。

全ての人の運命である墓からの命。

２１または２２。

タウ。

神の王冠は身代わりによる救いの思いやりの座を照らし、神の足元で智天使ケルブは神の栄光をたたえる。

前記の純粋な考えの説明によってタロットというカバラのアルファベットを理解したであろう。

タロットの １ ページ目には魔術師と記されている。

タロットの １ ページ目、魔術師は神性と人の自己目的における自発的な原理を表す。

タロットの ２ ページ目の俗称は女教皇(、ヨハンナ)である。

タロットの ２ ページ目は数を基礎とする考えの単一性を表す。

タロットの ２ ページ目はカバラまたはグノーシスの人化である。

タロットの ３ ページ目には神の霊性を表す有翼の女性が描かれている。

有翼の女性は一方の手にヨハネの黙示録 １ ２ 章 １ ４ 節のワシを持っている。

有翼の女性は他方の手に世界、地球をつるした王笏を持っている。

前記の様にタロットの ４ ページ目以降は分かり易く説明できる。

タロットの小アルカナの ４ 組の １ ０ つ １ 組は棒、杯、剣、輪または pantacle またはコインと呼ばれている。

大衆はコインをフランスのコインのドゥニエと呼んでいる。

棒、杯、剣、輪または pantacle またはコインはテトラ グラマトンの象形文字である。

棒はエジプト人の男性器またはヘブライ人のイョッドである。

杯は女性器または原初のヘーである。

剣は ２ つのものの結合または男性器と女性器またはバビロン捕囚より前のヘブライ文字のヴァウである。

輪または pantacle またはコインは世界、地球の像であり神の名前ヤハウェの最後のヘーである。

タロットの小アルカナの ４ 組の １ ０ つ １ 組を車輪またはギヨーム ポステルのROTA の形に ４ つの １ 、４ つの ２ などにまとめよう。

４ つの １ 、４ つの ２ などにまとめたタロットの小アルカナの ４ 組の １ ０ つ １ 組は前述の １ ０ つ １ 組の段階の神の名前の三角形の象徴的な解釈をもたらす。

４ つの １ 、４ つの ２ などにまとめたタロットの小アルカナの ４ 組の １ ０ つ １ 組は １ ０ つ １ 組のセフィラに対応している。

車輪またはギヨーム ポステルの ROTA の形に ４ つの １ 、４ つの ２ などにまとめたタロットの小アルカナの ４ 組の １ ０ つ １ 組は後記の様に解釈できる。

ヤハウェ。

ヤハウェの ４ つの象徴は全ての名前の中の名前、神の名前を表す。

１ 。

王冠。

４ つの １ 。

４ つの輝く光線は神の王冠の火に美を添える。

２ 。

知慮

４ つの ２ 。

神の知から常に ４ つの川が湧き出る。

３。

自発的な知力。

４つの３。

人は神の知の４つの証を知る。

４。

思いやり。

４つの４。

神の思いやりから４つの善行が表れる。

５。

厳しさ。

４つの５。

神の厳しさの大意は４回４つの罪に報復する。

６。

美。

４つの６。

雲の無い４つの光線は神の美を知らせる。

７。

勝利。

４つの７。

神の獲得は４回、歌で表されるであろう。

８。

永遠性。

４つの８。

神は永遠の段階で４回勝利する。

９。

基礎。

４つの９。

４つの神の大いなる白い王座が基礎を支える。

１０。

王国

４つの１０。

唯一の四重の王国には神の永遠の統治が有る。

神の王冠から四重の光線が流れ出る様に。

前記の様にタロットの小アルカナの４組の１０つ１組のカバラ的な意味は表される。

例えば、棒の５はイョッドの厳しさ、創造主である神の正義、男性の怒りを表す。

杯の７は思いやりの勝利、女性の勝利を表す。

剣の８は葛藤、永遠のつり合いを表す。

など。

前記から、どのように古代の法王が神託を得ていたか理解できる。

運任せでタロットを引いたり組み合わせたりする事は思いがけないだけで常に新しいカバラ的な意味、真理をもたらす。

古代人は偶然な事は無いと信じていた。

古代人はタロットの神託の中に神の意思の答えを読み取っていた。

古代人は、リシュリュー枢機卿の魔術師の１人であったカバリストのガファレルが初めて気づいた、ヘブライ人がテラフィムと呼んでいる物の神託の中に神の意思の答えを読み取っていた。

後記の究極的な詩がタロットの小アルカナの人物札について十分な説明をするであろう。

王、女王、騎士、騎士見習い。

結婚した男女、若い大人の様な者、幼子の様な者。

人。

単一性へ戻る経路。

「高等魔術の祭儀」の２２章で不思議な書タロットについてさらに詳しく完全に説明するつもりである。

タロットは全ての書の中の最初の書である。

タロットは予言と考えの鍵である。

一言で言えば、タロットは霊感を受けて書かれた全ての書の中の霊感である。

前記は、クール ド ジェブランの知によっては、エッティラまたはアリエットの驚くべき直感によっては、人目につかないままであった事実である。

１０のセフィロトと２２のタロットの大アルカナはカバリストが絶対の知への３２の経路と呼んでいるものを形成する。

カバリストは知を５０に分けて５０の門と呼んでいる。

オリエントでは門という言葉は統治組織または権力組織を表す。

ラビはカバラをベレシートまたは普遍の創世記とメルカバーまたはエゼキエルの戦車に分けた。

カバラのアルファベットであるヘブライ文字の二重の解釈によって、カバリストはカバリストがゲマトリアとテムラーと呼んでいる２つの知を形成した。

ゲマトリアとテムラーは「知られているわざ」を構成する。

「知られているわざ」は本来、哲学、自然、未来といった全ての秘密への占いへのタロットの象徴の組み合わせと様々な応用の完全な知である。

前記を２０章で説明するつもりである。

１１

カフ

L

魔術の鎖

手

力

大いなる魔術の代行者、星の光、地の魂を古代の錬金術師は Azoth、マグネシアと呼んでいる。

星の光は隠された比類なき疑う余地のない力である。

星の光は全ての統治の鍵である。

星の光は全ての力の秘密である。

星の光はメディアの有翼の竜である。

星の光はエデンの神秘の創世記 ３ 章の蛇である。

星の光は映像の普遍のガラスである。

星の光は共感の結びつけるものである。

星の光は愛、予言、栄光の源泉である。

大いなる魔術の代行者を応用する方法を知る事は神の力の受託者に成る事である。

全ての本物の効力が有る魔術、全ての隠された力は大いなる魔術の代行者を応用する方法を知り神の力の受託者に成る事に有る。

大いなる魔術の代行者を応用する方法を知れば神の力の受託者に成れる事を実証する事が知の全ての本物の書物の唯一の目的である。

大いなる魔術の代行者を応用するには集め放射するという 2 つの作用が必要である。

言い換えると、大いなる魔術の代行者を応用するには固定し動かすという 2 つの作用が必要である。

万物の創造主である神は基礎と運動の保証として固定をもたらした。

神の様に魔術師は固定する必要が有る。

熱狂はうつり易い。

なぜ熱狂はうつり易いのか？

なぜなら、集団的な信心が熱狂をもたらす。

信心は信心をもたらす。

信じる事は意思する理由を持つ事である。

理由を持って意思する事は力を持って意思する事である。

理由を持って意思する事は今は無限ではないが無制限の力を持って意思する事である。

知と倫理道徳の世界で作用するものは自然科学の世界で定着する。

アルキメデスが世界を動かす、てこを必要とした時に、アルキメデスは大いなる魔術の秘密を単に求めた。

ハインリッヒ クンラートの両性具有者の絵の一方の手には凝固と他方の手には溶解と書かれている。

集める事と拡散する事は自然の 2 つの言葉である。

しかし、どのような方法で星の光、世界の魂を集めたり拡散する事ができるのか？

独立によって星の光を集める。

魔術の鎖によって星の光を拡散する。

独立とは、思考にとって絶対の独立、心情にとって完全な自由、感覚にとって完全な節制である。

ハインリッヒ クンラートによれば、全ての先入観と恐怖にとりつかれた人、全ての肉欲の奴隷である人は星の光、地の魂を集めたり凝固させたりできない。

全ての本物の達道者は苦しみの中ですら独立した。

全ての本物の達道者は死ぬまで酔わなかった。

全ての本物の達道者は死ぬまで貞淑であった。

前記の超常性の説明は後記である。

力を左右するためには、力に左右されない必要が有る。

力を左右するためには、力に不意打ちされない必要が有る。

魔術に超常的に肉欲を満たす手段を探求する者は、肉欲を満たすのに用いてはいけない力の何が良いであろうか？　と叫ぶ。

肉欲を満たすのに用いてはいけない力の何が良いであろうか？　とたずねる人は、みじめな人である。

後記の様に話したら、理解できるであろうか？

エピクロスの大衆の役に立たないからといって真珠は無価値であろうか？　いいえ！

Curtius は金を持つよりも金を持つ人を支配する事を選んだのではないか？　はい！

人が神に成るには普通の人を超越した何ものかに成る必要が有るのではないか？　はい！

さらに、失望させるのは悲しいが、エリファス レヴィが超越的な学問である魔術を創造したわけではない。

エリファス レヴィは魔術を教えるだけである。

エリファス レヴィは魔術の基本的な最も不動な条件を教えるにあたって魔術に不変に不可欠なものを明確にするだけである。

ピタゴラスは自由な酒を飲まない貞淑な男性であった。

ティアナのアポロニウスとカエサルは(他の人を)よせつけないほどの禁欲生活をした人であった。

パラケルススは性別を疑われるくらい性欲の弱さと無関係であった。

ライムンドゥス ルルスは厳しい生活を禁欲生活にまで高めた。

カルダーノは、口伝を信じるならば、餓死寸前にまで断食の実践を過大視した。

コルネリウス アグリッパは都市から都市へ迫害された。

コルネリウス アグリッパは学問の自由を侵害する王女の気まぐれに従うよりも、みじめな死を選んだ。

魔術師が喜びとしたものは何か？

大いなる秘密の知と力の自覚。

大いなる魂を持つ者達には大いなる秘密の知と力の自覚だけで十分であった。

過去の魔術師達が知っていたものを知るためには、過去の魔術師達の様なものに成る必要が有るか？　いいえ！　本書「高等魔術の教理」が存在する。

しかし、過去の魔術師達が行ったものを行うには、過去の魔術師達がとった手段をとる事が絶対に必要である。

しかし、実際に魔術師は何を行ったのか？

魔術師は世界を動かし圧倒した。

魔術師は俗世の王者よりも本当に統治した。

魔術は神の善の道具または悪人の霊の傲慢の道具である。

しかし、魔術は死すべき人の地上的な快楽をあきらめる事である。

色欲に狂っている人は、なぜ魔術を学ぶのか？　とたずねるであろう。

ただ真理を知るために魔術を学ぶ。

愚かな不信心または愚かな軽信の危うさを知り魔術を学ぶ。

多数の女性を快楽の人の半数に数えるが、快楽の人よ、好奇心を満たす事は高尚な楽しみではないか？　はい。好奇心を満たす事は高尚な楽しみです！

恐れないで読みなさい。

意に反して魔術師に成る事は無い。

絶対の克己のための覚悟だけが普遍の流れを確立し地上を一変させるために必要である。

前記の英雄的な徳を必要としない、ある一定の範囲に限定された、相対的な魔術の作用が存在する。

魔術師の全能性無しで、人は肉欲によって肉欲に作用できる。

人は共感または反感を決定できる。

人は傷つける事ができる。

人は治す事すらできる。

しかし、前記の場合は、作用に比例した反作用の危険を理解する必要が有る。

簡単に自身も犠牲に成るかもしれない危険を理解する必要が有る。

前記を全て「高等魔術の祭儀」で説明するつもりである。

魔術の鎖を創造する事は、つながりの大きさに比例して強く成っていく磁気の流れを確立する事である。

「高等魔術の祭儀」で、どのように磁気の流れをもたらす事ができるか？　どのような魔術の鎖が存在するか？　説明するつもりである。

メスメルの水おけは非常に不完全な魔術の鎖である。

北国の、光に照らされた者のいくつかの大いなる団体はより力が有る魔術の鎖を保有している。

あるカトリックの祭司の団体は隠された力と不人気で知られている。

あるカトリックの祭司の団体は計画的に確立されている。

あるカトリックの祭司の団体は無上の力が有る魔術の鎖の条件に従っている。

あるカトリックの祭司の団体の力の秘密は魔術の鎖である。

あるカトリックの祭司の団体は魔術の鎖による力をひとえに神の恵みまたは神の意思のおかげであると考えている。

魔術の鎖による力を神の恵みまたは神の意思のおかげであると考える事は作用または引き寄せにおける力の全ての神秘にとって大衆的な低俗な解決方法である。

本物の魔術の儀式の結果と、イグナチオ デ ロヨラの霊操と呼ばれている神からの使命である大いなる務めを構成する降霊術の結果を類推する事が「高等魔術の祭儀」での務めに成るであろう。

社会で一連の交流と実践が共通に伝える全ての熱狂は磁気の流れをもたらす。

社会で一連の交流と実践が共通に伝える全ての熱狂は磁気の流れを磁気の流れによって持続するか強める。

磁気の流れの作用は感じ易い弱い人、神経組織を夢中にさせ頻繁に非常に高揚させ気性を病的興奮か幻覚に傾ける。

感じ易い弱い人は魔術の力の強い仲介者とすぐに成る。

感じ易い弱い人は効率的に星の光を磁気の流れの方向に放射する。

ある程度、魔術の力の表れ、磁気の流れへの対立は運命との戦いである。

使徒パウロは回心する前はファリサイ派の宗派心の全ての狂信と全ての決心に身を投じていた。

使徒パウロは回心する時にキリスト教の活動範囲内に入った。

使徒パウロは回心する時に打倒するつもりであった力の思いやりと知らないで対立した。

使徒パウロは回心する時に、疑い無く一時的な脳充血と日射病が効果的に合併したおかげで、畏敬するべき磁気の雷に打ち倒された。

若いヘブライ人アルフォンス ラティスボンヌの回心は使徒パウロの回心と絶対に同じ性質の １９ 世紀の事実である。

大衆が、遠くにいると笑いものにするが、近づくとすぐに敵意を持っていた者ですら自分では気づかずに仲間に成ってしまう、熱狂的な信者の宗派が知られている。

魔術の輪と磁気の流れは、自然と確立される。

運命の法によって、魔術の輪と磁気の流れは、作用可能な人への感化力を持つ。

人は自身の世界を構成する関係する輪の中に引き寄せられる。

人は従うものの影響下に引き寄せられる。

ルソーはフランス革命の立法者である。

全世界のうち最も精神的な国家であるフランスはルソーを人の理性が人に成った人として認めた。

放蕩なサークルの磁気的な作用と魔術の流れに引き寄せられて、ルソーは自身の子を捨てるという人生で最も悲しむべき行動に至った。

「告白」でルソーはサークルの影響で自身の子を捨てたと簡潔に率直に記しているが、気づかれないままである事実である。

非常に多くの場合、大いなる輪は大いなる善人を創造する。

大いなる輪は大悪人を創造する。

世に認められない才能は無い。

世に表れない才能は無い。

世に出ない才能は無い。

奇人は存在する。

中心から外れた人は存在する。

達道者が「中心から外れた」を意味するeccentricという言葉を創造したと思われる。

才能が中心から外れた者は、古い鎖または流れの中心に引き寄せる力と戦う事によって、新しい輪を形成しようと試みる者である。

才能が中心から外れた奇人の運命は挫折か成功である。

新しい輪を形成する事に成功するための２つ１組の条件とは何か？

安定した中心点と忍耐強いくり返し輪を形成する先導する行動が新しい輪を形成する。

天才とは実在する法を見つけた者である。

天才は不屈の自発的な力を持っている。

天才は作業の途中で死ぬかもしれない。

しかし、天才の死にもかかわらず、天才が意思したものは実現する。

実に多くの場合、天才の死は天才が意思したものの実現を保証する。

なぜなら、天才には死は本当の被昇天である。

ヨハネによる福音１２章３２節で無上の大いなる祖であるイエスは「私イエスが地から(天へ)昇る時には、私イエスは全てのものを私イエスの元に引き寄せる」と話している。

磁気の流れの法は星の光の動きの法である。

星の光の動きは常に二重であり、正反対の方向へ増大する。

大いなる作用は常に同じ大きさの反作用を用意する。

驚くべき成功の秘訣は反作用の予知に有る。

フランス革命の騒動への嫌悪を見抜いたフランソワ ルネ ド シャトーブリアンは１８０２年の「キリスト教の精神」の計り知れない成功を予見し用意した。

　大いなる不運なユリアヌス帝の様に、反転し始めた流れに対立する事は、反転した流れによって破滅をまねく事である。

　反転した流れに対立するには、別の逆の流れを先導する必要が有る。

　大いなる者は良い時に現れる者である。

　大いなる者は良い時に革新する方法を知る者である。

　仮に使徒の時代であればヴォルテールはヴォルテールの言葉への反響を見つけられなかったであろう。仮に使徒の時代であればヴォルテールは「トリマルキオの饗宴」の才能の有る食客に過ぎなかったであろう。

　今、私達が生きている時代は、福音的な熱意とキリスト教的な献身の新しい爆発へ全てのものの機が熟している。

　なぜなら、大衆は、利己主義の超越的なものを否定する誤った哲学と、最も下衆な私利私欲の皮肉的な考え方に幻滅している。

　いくつかの本の成功と大衆の精神の神秘主義的な傾向は大衆の傾向の明らかな前兆である。

　人は教会を建て直したり新たに建てているが、自身の信心の空虚さをより痛切に理解するだけに過ぎず、自身の信心をより切望するだけに過ぎない。

　全ての人が救い主の再来を待っている。救い主は再来を遅らせるはずが無い。

　仮に例えば法王、王、ヘブライ人の金持ちといった生まれによってまたは幸運によって高い地位に有る独りの人が来れば、

仮に高い地位に有る独りの人が自身の全ての物質的な利益を人の幸せのために公に神聖に犠牲にすれば、

仮に高い地位に有る独りの人が貧しい人の救い主に成れば、

仮に高い地位に有る独りの人が伝道者に成れば、

仮に高い地位に有る独りの人が克己と思いやりの考えの犠牲にすら成れば、

計り知れない数の後に続くものを自身の元に引き寄せるであろう。

　世界に完全な倫理道徳的な変革を実現するであろう。

　救い主の代理人に成るには何よりもまず高い地位が必要である。

　なぜなら、今は卑劣さと詐欺の時代である。

　大衆は私利私欲の野心や詐欺の疑いを低い地位からもたらされた全ての言葉にかける。

　何ものでもない、何ものも持たない、あなたは、救い主の代理人や使徒に成ろうと思わない事である。

　もし、あなたに信心が有って、救い主の代理人に成って行動したいならば、第一に、行動の手段として、地位の高さによる影響力や富の威力を、持ちなさい。

　古代では知によって金を創造した。

　現代では金によって知を作り直す必要が有る。

　古代では気化し易いものを固定した。

　現代では固定されたものを気化させる必要が有る。

　言い換えると、古代では精神を物質化した。

　現代では物質を精神化する必要が有る。

　もし名声の保証が無ければ、物質的な価値としての成功が無ければ、現代では無上の高尚な言葉は無視され消える。

　大衆にとって書物の価値は何に有るか?

　大衆にとって書物の価値は著者の名声に有る!

　本屋にとって大衆にとって著者のサインの価値は何に有るか?

　本屋にとって大衆にとって著者のサインの価値は著者の名声に有る!

アレクサンドル デュマの出版社は １ ９ 世紀の小説の価値を保証するものの
１ つとして名声を知られている。

しかし、アレクサンドル デュマの一家の名声は小説だけに限られる。

仮にアレクサンドル デュマが大いなる理想的な社会を考え出しても、仮にアレクサンドル デュマが宗教的な問題の見事な解決策を見つけても、アレクサンドル デュマの １ ９ 世紀の小説のパニュルジュの様なヨーロッパの名声にもかかわらず、誰も真剣に取らないであろう。

現代は後天的な立場の時代である。

現代は獲得した立場の時代である。

現代は大衆が全てのものを社会的な立場や、もうけ主義の立場で評価する時代である。

大衆にとって何を話したかではなく誰が話したかという言葉の戦いに無限の自由がもたらされている。

金持ちのロスチャイルド家の者、法王、デュパンルー司教の言葉は大衆には何らかの価値が有る。

しかし、無名の者の言葉は大衆には価値が無い。

仮に特に可能性が有るが能力、知、良識の天才でも無名の者の言葉は大衆には価値が無い。

後記の様にエリファス レヴィに話す者がいるであろう。

もしエリファス レヴィが大いなる成功の秘訣と、世界を一変させられる力の秘密を保有しているのであれば、なぜエリファス レヴィは大いなる成功の秘訣と、世界を一変させられる力を応用しないのか？

後記の様にエリファス レヴィは答えて話すであろう。

エリファス レヴィは知を獲得するのが自身のために応用するには遅過ぎた。

エリファス レヴィは知の獲得に自身のために応用するには時間、物、金銭を使い尽くしてしまった。

エリファス レヴィは知を自身のために応用できる立場にいる者に与える。

有名な者、金持ちの者、俗世で大いなる者、持っているものでは満足していない者、高貴な大いなる意思を自覚している者よ、新しい世界の父、若返った文明世界の王者に成らないか？

アルキメデスのてこを見つけた貧しい世に知られていない学者であるエリファス レヴィは人のためにのみ見返りを求めずにアルキメデスのてこをあなたに与える。

１９世紀にアメリカとヨーロッパを非常に混乱させた現象、テーブル ターニングと流体の霊の出現は、単なる形成され始めた磁気の流れである。

１９世紀のアメリカとヨーロッパのテーブル ターニングと流体の霊の出現は、思いやりのために、人を誘う自然の、ある部分の求めである。

１９世紀のアメリカとヨーロッパのテーブル ターニングと流体の霊の出現は、大いなる共感と宗教の鎖の復活である。

事実、星の光の停滞は人には死を意味する。

星の光の停滞、秘密の代行者の無気力状態は、腐敗と死の前兆の警告としてすでに表れている。

例えば、フランスのラ サレットの牛飼いの少年と少女が夢の中でひそかに象徴的に見た「ラ サレットの聖母」が話した様に、コレラ、ジャガイモ飢饉、葡萄根油虫の唯一の原因は星の光の停滞である。

「ラ サレットの聖母」の話が思いがけなく信じられた事と、学が無い徳が無いフランスのラ サレットの牛飼いの少年と少女の超常的な不確かな「ラ サレットの聖母」の話が巡礼者の多数の合流を引き寄せた事は、事実の磁気的な実在の証明である。

「ラ サレットの聖母」の話が信じられた事は地上の住人を治す地上の自然治癒力の流体の傾向である。

迷信は直感的である。

直感的な全てのものは物の本質に見つかる。

迷信は直感的である事は、全ての時代の疑い深い人が注目しない事実である。

テーブル ターニングの全ての不思議な現象の原因は新しい流れを形成するために熱意の鎖を求める普遍の磁気の代行者である。

力自体は盲目である。

しかし、人の意思は力を傾けられる。

有力な意見は力に作用する。

力は普遍の流体である。

力を流体であると考えられるのであればの話であるが。

普遍の流体は全ての神経組織の共有の仲介者である。

普遍の流体は全ての感知可能な振動の仲介者である。

普遍の流体は感じ易い人々の間の現実の自然科学的な連帯を確立する。

普遍の流体は想像と思考の印象を相互の人々に伝える。

普遍の代行者の振動は自動力の無い物を動かす。

自動力の無い物は有力な印象に従う。

自動力の無い物は無上の不思議な予見の全ての透明さに過去を再現する。

自動力の無い物は最もあいまいな支離滅裂な夢の全ての奇形と虚偽をもたらす。

家具をたたく様な音が鳴ったり、皿がカタカタ鳴ったり、楽器が自動で鳴るのは、普遍の代行者がもたらす幻覚である。

普遍の代行者がサン メダールのけいれん者の奇跡をもたらした。

普遍の代行者は時々、自然の法を保留する様に見える。

一方では、星の光の過剰による酩酊の特徴である魅力が誇張をもたらす。

他方では、運動と命の、薄い普遍の代行者が自動力の無い物質に現実の振動または運動を与える。

星の光、普遍の代行者が、非常に不思議に見える現象の唯一の基礎である。

「高等魔術の祭儀」の儀式によって、思い通りに再生する事によって、最も不思議な現象を、簡潔に実証し、だます事無しに幻覚無しに誤り無く簡潔に確立するつもりである。

エリファス レヴィは善い意図無しに共感無しに他人と行った魔術の鎖の実験の後で、時々、夜に、不安にさせる印象や感じによって、ハッとして起きた。

エリファス レヴィは善い意図無しに共感無しに他人と行った魔術の鎖の実験の後で、ある時は、エリファス レヴィはエリファス レヴィの首をしめようと試みる未知の手の圧力をありありと感じた。

エリファス レヴィは起きた。

エリファス レヴィはランプに火をつけた。

眠れないのを利用して、夢の霊を追い払うために、落ち着いて仕事した。

エリファス レヴィの周りの本が大きな騒音と共に動いた。

紙が互いにこすれ合った。

梁(はり)が裂けるかの様な、きしむ様な音が鳴った。

天井を激しくたたく様な音が鳴った。

エリファス レヴィは興味深く冷静に不思議な現象を観察した。

不思議な現象は、不思議ではあるが、現実に見えるが、自身の想像に過ぎないかもしれない。

後は、エリファス レヴィは不思議な現象を恐れなかったと断言する。

前記の不思議な現象が起きていた時は、エリファス レヴィは隠された学問とは全く無関係なものに取り組んでいた。

不思議な現象がくり返されたので、古代人の魔術の儀式の助けを借りて、エリファス レヴィは降霊術の実験を試みるに至った。

降霊術の実験の時にエリファス レヴィは本物の不思議な結果を獲得した。

１３ 章で降霊術の実験について話すつもりである。

１２

　ラメド

　M

　大いなる務め

　学ぶ

　十字架

　最初の大いなる務めは自力で人を創造する事である。

　最初の大いなる務めは自力で自身を創造する事である。

　最初の大いなる務めは自身の能力と未来を完全に獲得する事である。

　特に、最初の大いなる務めは自身の意思を完全に自由にする事である。

　自身の意思を完全に自由にする事は、Azoth とマグネシアの領域の普遍の統治を自身に保証する事である。

　言い換えると、自身の意思を完全に自由にする事は、普遍の魔術の代行者の全ての力を自身に保証する事である。

　古代の哲学者は第一質料という名前で普遍の魔術の代行者を隠した。

　普遍の魔術の代行者は変更可能なものの形を決める。

　普遍の魔術の代行者によって錬金と万能薬に本当に到達できる。

　普遍の魔術の代行者によって錬金に到達できる事は仮説ではない。

　普遍の魔術の代行者によって錬金に到達できる事は、すでに確立されている、厳密に実証できる、自然科学の事実である。

ニコラ フラメルとライムンドゥス ルルスは、自身は貧しかったが、疑い無く無数の金を配った。

　コルネリウス アグリッパは大いなる務めの最初の部分を超えられなかった。

　コルネリウス アグリッパは自制と独立を確固としたものにするために戦う試練の最中に死んだ。

　精神的な作業と物質的な作業という相互に作用し合う 2 つのヘルメスの錬金術の作業が存在する。

　その他の作業、全てのヘルメスの知は、エメラルド板に元は記されていたと言われている、ヘルメスの考えに含まれている。

　エメラルド板の最初の部分はすでに解説した。

　後記はエメラルド板の大いなる務めの作業に関係する部分である。

「あなたは、火から土を、濃いものから薄いものを、徐々に、大いなる勤勉によって、分離すべきである。
薄いものは、地から天へ昇り、地へ降りる。
昇天し降臨した薄いものは、上のものの力と下のものの力を受け取る。
前記の方法によってあなたは全世界の栄光を得るであろう。
前記の方法によってあなたから全ての闇は離れるであろう。
昇天し降臨した薄いものは全ての力の強い力である。
なぜなら昇天し降臨した薄いものは全ての薄いものを圧倒し全ての固体に浸透する。
前記の様に世界は創造された」

　濃いものから薄いものを分離する事は大いなる務めの最初の作業である。

濃いものから薄いものを分離する事は精神的な作業である。

濃いものから薄いものを分離する事は魂を全ての先入観と全ての悪徳から自由にする事である。

知によって魂の全ての悪からの自由に到達できる。

錬金術の賢者の塩は知の例えである。

錬金術の水銀は自身のわざと応用の例えである。

錬金術の硫黄は命の力と意思の火の例えである。

錬金術の塩、水銀、硫黄によって、知、わざ、意思によって、全ての金属、土の塵すら、精神的な金に変えられる。

(創世記 2 章 7 節「神は人を土の塵から創造した」)

前記の様に、ベルナール トレヴィサン、バシレウス ヴァレンティヌス、ユダヤ婦人マリア、錬金術師の話の例えを解釈する必要が有る。

錬金術師の話の例えを解釈する時に、大いなる務めとして、上手に濃いものから薄いものを分離する必要が有る。

錬金術師の話の例えを解釈する時に、現実的なものから象徴的なものを分離する必要が有る。

錬金術師の話の例えを解釈する時に、理論から例え話を分離する必要が有る。

もし錬金術師の話を読んで、ために成る事や理解を得るつもりであれば、最初は、錬金術師の話を全て例え話として解釈する必要が有る。

次に、エメラルド板の「上のものは下のものから類推可能である。下のものは上のものから類推可能である」という唯一の考えによって、類推によって、例え話の意味から現実へ降臨する必要が有る。

ART はわざを意味する。

ART を逆にすると TRA と成る。

神の原初の言語ヘブライ語の様に右から左へ読むとART はTRA と読める。

TRA は大いなる務めの ３ つの段階を意味する言葉の頭文字である。

T は３ つ １ 組、理論、産みの苦しみを意味するTriad、Theory、Travail の頭文字である。

R は実現を意味するRealization の頭文字である。

A は応用を意味するAdaptation の頭文字である。

「高等魔術の祭儀」の １ ２ 章で、大いなる達道者と特にハインリッヒ クンラートのヘルメスの錬金術の砦の例えに含まれている、応用の方法を説明するつもりである。

ヘルメス トリスメギストスの「世界のミネルヴァ」という見事な文書を読者の研究のために簡潔に説明しよう。

ヘルメス文書のいくつかの版にのみ「世界のミネルヴァ」という文書は存在する。

「世界のミネルヴァ」は例え話によって深みと詩の全てを含んでいる。

「世界のミネルヴァ」は例え話によって自力の自身の創造の考えを含んでいる。

「世界のミネルヴァ」は例え話によって ２ つの力の一致の結果である創造的な法を含んでいる。

錬金術師は ２ つの力を固定されたものと気化し易いものと呼んでいる。

２ つの力とは神の領域では必然と自由である。

「世界のミネルヴァ」は、霊の多様性によって、自然に満ちあふれている形の多様性を説明する。

「世界のミネルヴァ」は努力の逸脱によって奇形を説明する。

自然の神秘を類推したい大作業の探求に真剣に身をささげたい全ての達道者は「世界のミネルヴァ」を読み血肉とする必要が有る。

錬金術師が知の作業の完成には短い時間と少しの金銭だけが必要であると話す時、
特に、錬金術師が唯一の器だけが必要であると話す時、
錬金術師が、全ての人が用いる事が可能である、個人にとって手近にある、全ての人が知らないで持っている、大いなる唯一の錬金炉について話す時、
錬金術師は哲学的な倫理道徳的な錬金術を暗示している。
　事実、強い決意は短時間で絶対の独立に到達できる。
　全ての人は、濃いものから薄いものへの分離を保証する、気化し易いものの固定を保証する、化学の器、化学の道具、化学の手段、大いなる唯一の錬金炉を持っている。
　(全ての人は思考、知といった精神的な錬金炉を持っている。)
　錬金炉は世界の様に完全である。
　錬金炉は数学の様に正確である。
　賢者は錬金炉を五芒星の形で表す。
　五芒星は人の知の絶対の象徴である。
　エリファス レヴィは名前を出す事は控えるが過去の賢者の足跡に従うつもりである。
　過去の賢者の名前は推測し易過ぎる。
　クール ド ジェブランとエッティラはタロットの １２ ページ目の絵が吊るされた男であるのはドイツのタロット カード職人の誤りであると誤解した。
　クール ド ジェブランとエッティラはタロットの １２ ページ目の絵が片足立ちの男であると誤解した。
　タロットの １２ ページ目には吊るされた男が描かれている。
　吊るされた男の両手は後ろ手に縛られている。

吊るされた男のわきに２つの銀貨の袋がつけられている。

(マタイによる福音２６章１５節でユダは銀貨をもらってイエスを裏切る約束をした。)

吊るされた男は片足だけで吊るされている。

吊るされた男は絞首台に吊るされている。

吊るされた男が吊るされている絞首台は２本の木で形成されている。

吊るされた男が吊るされている絞首台の各、木の根元には切られた６つの枝が有る。

吊るされた男が吊るされている絞首台は２本の木と１本の横木で最後のヘブライ文字タウ、תの形に成っている。

吊るされた男の両脚は十字に交差している。

吊るされた男は犠牲である。

吊るされた男の頭と両ひじは三角形を形成している。

錬金術では三角形の上の十字は大いなる務めの目的と完成を意味する。

三角形の上の十字の意味は神のアルファベットであるヘブライ文字の最後の文字タウの意味と一致している。

吊るされた男は達道者である。

吊るされた男は自身の約束に縛られている。

吊るされた男は両足を天に向けて霊化、精神化を表している。

吊るされた男は古代の巨人プロメテウスである。

(巨人プロメテウスは人の身代わりと成る巨人的な愛を実証した。)

巨人プロメテウスは果てしない苦しみによって天の火を盗んで人に与えた栄光の罪をつぐなった。

大衆は吊るされた男は裏切り者ユダであると話している。

吊るされた男は自身への罰で大いなる秘密の密告者、大いなる秘密への裏切り者を脅している。

吊るされた男は１２番目の教理の約束された救い主である。

カバラをかじったユダヤ教徒は吊るされた男は「どうして、あなたが他人を救えるのか？　いいえ！　救えない！　なぜなら、あなたは自身を救えなかった」というキリスト教の救い主イエスに対する抗議であると話している。

反キリストのユダヤ教のラビが編集したSepher Toldos Jeschuの注釈には変わった例え話が存在する。

Sepher Toldos Jeschuの例え話でユダヤ教のラビは次の様に話している。

「イエスはペトロとユダと旅していた。
夜遅くに疲れたイエス、ペトロ、ユダは孤立している家に至った。
イエス、ペトロ、ユダは激しい飢えに襲われた。
やせたガチョウ以外の食べ物が見つからなかった。
やせたガチョウは３人で食べるには不十分であった。
仮に、やせたガチョウを３人で分けたら飢えを満たせないし飢えを強めると思われた。
イエス、ペトロ、ユダはくじを引く事で一致した。
しかし、イエス、ペトロ、ユダは激しい眠気に襲われた。
イエスは『夕食の用意中に、とりあえず眠ろう。目覚めたら見た夢を教え合おう。ガチョウは最も美しい夢を見た者の物にしよう』と話した。
(ガチョウを串刺しにして火にかけて)夕食を用意した。
イエス、ペトロ、ユダは眠った。
イエス、ペトロ、ユダは目覚めた。

ペトロは『私は私が神の代理人である夢を見ました』と話した。

イエスは『私は私が神自身である夢を見た』と話した。

ユダは『私は私が夢遊病に成り、起きて、静かに下の階に降りて、串からガチョウをとって、ガチョウを食べる夢を見ました』と偽善的に話した。

イエス、ペトロ、ユダは下に降りた。

ガチョウは無くなっていた。

ユダは白昼夢を見た」

　前記の例え話は Sepher Toldos Jeschu 自体の中には無く Sepher Tol dos J es chu へのユダヤ教のラビの注釈に存在する。

　前記の例え話はキリスト教の神秘主義に対するユダヤ教の実証主義(、物質主義)の抗議である。

　事実、信心が大いなる夢に夢中に成っていた間に、キリスト教文明のユダである、迫害されていたユダヤ教徒は、働き、物を売り、策略を立て、金持ちに成り、この世界の人生の現実を自分の物にし、ユダヤ教徒を迫害してきたキリスト教の形成と存在のための金銭を貸す立場に成った。

　ユダヤ教徒は、古代には契約の箱を敬礼したが、今は金庫という箱を敬礼している。

　ユダヤ教徒は、古代には神殿を敬礼したが、今は物や金銭の取引所という神殿を敬礼している。

　ユダヤ教徒は金銭でキリスト教世界を統治している。

　ユダであるユダヤ教徒はルカによる福音 6 章 2 5 節の「笑う者」である。

　(ルカによる福音 6 章 2 5 節「今、笑う者である、あなたには災いが有る。なぜなら、未来に、あなたは泣く者に成るであろう」)

ユダヤ教徒はペトロの様に眠らなかった事を喜んでいる。

紀元前 ５８７ 年のバビロン捕囚の前の古代のヘブライ文字の最後の文字タウは十字であった。

古代のヘブライ文字の最後の文字タウが十字であった事は、カバラのタロットの １２ ページ目の絵のエリファス レヴィの解釈を確証する。

十字は ４ つの直角三角形をもたらす。

十字は １２ つ １ 組の神の象徴である。

前記の理由から、古代エジプト人は十字を天の鍵と呼んでいた。

前記の理由から、エッティラは、長きに渡るタロットの研究で、タロットの １２ ページ目の絵にタウまたは十字を描くべきである類推的な必要性を自説と一致させるのに困り、学の有るクール ド ジェブランの影響を受けて、エッティラのタロットの １２ ページ目で思慮の象徴としてギリシャ文字のタウ、Ｔ と ２ 頭の蛇で形成されたヘルメスのケーリュケイオンを持った片足立ちの男を描いた。

エッティラはトートの書タロットの １２ ページ目の絵にタウまたは十字を描く必要性を理解していた。

だから、エッティラはヘルメスのタロットの １２ ページ目の吊るされた男の絵の複数の大いなる意味を理解するべきであった。

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、知の巨人プロメテウスである。

(巨人プロメテウスは人の身代わりと成る巨人的な愛を実証した。)

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、生きている者イエスである。

(ルカによる福音 ２４ 章 ５ 節「なぜ、あなたは死んだ者の中に生きている者であるイエスを探すのか？」)

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、思考でのみ地にふれる者である。

タロットの １２ ページ目の吊るされた男の固い基礎は天である。

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、自由な犠牲に成った達道者である。

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、死によって脅されている啓示者である。

大衆は、タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、イエス キリストに対するユダヤ教の呪いを意味していると話している。

ユダヤ教はイエス キリストを呪う事で、十字架にはりつけられたイエスの秘密の神性を知らないで認めている様に思われる。

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、三角形の上の十字によって、終えた務めの象徴と成っている。

(ヨハネによる福音 １９ 章 ３０ 節「終えた」)

タロットの １２ ページ目の吊るされた男は、三角形の上の十字によって、終えた周期を表している。

タロットの １２ ページ目の吊るされた男の絵は、タウを仲介する。

タロットの １３ ページ目から ２２ ページ目の最後の １０ つ １ 組の前に、タロットの １２ ページ目の吊るされた男の絵は、神のアルファベットの象徴であるタロットを要約している。

１３

　メム

　N

　降霊術

　もの自体から

　死

　星の光に人や物の映像が保存されていると話した。

　この世界に今は存在しないものの形も星の光で呼び出せる。

　星の光に保存されている人や物の映像を呼び出すという方法で降霊術の神秘は実現される。

　降霊術は非常に論争されている。

　降霊術は非常に現実的である。

　霊の冥界について話しているカバリストは簡潔に降霊術で見たものを話している。

　エリファス レヴィはフランス人である。

　エリファス レヴィの本名はアルフォンス ルイ コンスタンである。

　エリファス レヴィ ザヘドはアルフォンス ルイ コンスタンをヘブライ語風に改名したものである。

　エリファス レヴィが本書「高等魔術の教理」を書いた。

　エリファス レヴィは星の光に保存されている人の映像を呼び出し見た。

　達道者は星の光を栄光の光と呼んでいる。

　達道者は星の光で見たり直感したものを記している。

第一に、達道者が記しているものを話そう。

ヘブライ語の書物「魂の変革」には罪により生まれた者、アダムにより生まれた者、神の聖霊により生まれた者という 3 種類の魂が存在すると記されている。

(アダムは人の代表)

「魂の変革」には、とらわれた霊、さまよっている霊、自由な霊という 3 種類の霊が存在すると記されている。

男性の魂は女性性を持っている。

女性の魂は男性性を持っている。

(

なぜなら、男性神は女神達と結婚した。

男性神は男性性を女神達に与えた。

女神達は女性性を男性神に与えた。

)

ストリゲスの女王であるリリスとナヘマーによって女性性がとらわれて、女性性を持たないで肉体を持つ男性の魂が存在する。

女性性を持たないで肉体を持った男性の魂は、宗教的な理由で独身を誓った無思慮の罪をつぐなう運命を持った魂である。

前記の理由から、男性が幼子の様な者の時に女性への愛をあきらめる事を誓う時に女性性という花嫁を放蕩な悪魔の奴隷にする。(悪魔は存在しない。悪人の霊は存在する。)

地上で肉体が成長し増殖する様に、天で魂は成長し増殖する。

汚れていない魂は神の聖霊の口づけにより生まれた者である。

天により生まれたものだけが天に入れる。

前記の理由から、肉体の死後、神性を持つ霊、神性という命を持つ人だけが天へ戻る。

肉体の死後、神性を持つ霊は、肉体と、星の体という 2 つの死体を残す。

肉体の死後、神性を持つ霊は、肉体を地上に、星の体を大気中に残す。

肉体の死後、神性を持つ霊は、四大元素の肉体を地上に、星の体を大気中に残す。

肉体の死後、肉体はすでに自動力が無い。

肉体の死後、世界の魂の普遍の運動が、神性を持つ霊が残した星の体を未だ動かす。

しかし、肉体の死後、神性を持つ霊が残した星の体は徐々に死ぬ運命にある。

星の体の元である星の力が、肉体の死後、神性を持つ霊が残した星の体を分解し同化する。

肉体は見える。

肉体は肉体の目に映る。

星の体は肉体の目には映らない。

星の光を透明なものである想像力に応用する事によって星の体は見える。

星の光は星の体の映像を肉体の神経系に伝える。

星の光は肉体の神経に作用する事によって肉体の脳の視覚の器官に作用する。

星の光は肉体の神経に作用する事によって星の光に保存されている形を肉体の脳に知覚させる。

星の光は肉体の神経に作用する事によって星の光という命の書に記されている言葉を肉体の脳に知覚させる。

人が善く生きた時は、純粋な香が上の領域へ昇る様に、星の体は気化する。

しかし、人が罪の中で生きた時は、星の体は、魂の牢獄と成る。

人が罪の中で生きた時は、星の体に、魂はとらわれる。

罪の中で生きた人の魂は肉欲の対象を未だに求める。

罪の中で生きた人の魂は肉体を復活させようと試みる。

罪の中で生きた人の魂は悪夢を若い女性に見させる。

罪の中で生きた人の魂は流された血の蒸気を浴びる。

罪の中で生きた人の魂は人生を楽しく過ごした場所の辺りを浮遊する。

罪の中で生きた人の魂は持っていた宝や隠した宝を未だに監視する。

罪の中で生きた人の魂は全力で苦労して新しい肉体を創造し復活しようと試みる。

しかし、星が罪の中で生きた人の魂を引き寄せ同化する。

罪の中で生きた人の魂は自身の知が弱まっていく様に感じる。

罪の中で生きた人の魂の記憶は徐々に消滅していく。

罪の中で生きた人の魂の全存在は分解する……。

罪の中で生きた人の魂の全存在は溶ける……。

過去の悪徳が罪の中で生きた人の魂の前に奇形で表れる。

過去の悪徳が罪の中で生きた人の魂につきまとい苦しめる。

過去の悪徳が罪の中で生きた人の魂を襲い飲み込む……。

不首尾の被造物、罪の中で生きた人の魂は罪に仕えさせていた魂の全部分を徐々に失う。

罪の中で生きた人の魂は第 2 の死、永遠の死を経験する、と言える。

(ヨハネの黙示録 2 章 1 1 節「第 2 の死」)

なぜなら、罪の中で生きた人の魂は個性と記憶を失う。

生きる運命には有るが未だ完全に清められていない魂は星の体に多かれ少なかれとらわれたままに成る。

星の体の中でオドの光は完全に清められていない魂を燃やす。

星の体の中で星の光は完全に清められていない魂を燃やす。

星の光は完全に清められていない魂を同化し分解しようと試みる。

星の光は完全に清められていない魂を同化し溶かそうと試みる。

星の体から避難するために苦しんでいる魂は時々生きている者の肉体の中に入り住む。

カバリストは苦しんでいる魂が生きている者の肉体の中に入り住む状態を「胎児の様に」と表現している。

降霊術は大気中の星の体を呼び出す。

降霊術は大気中の星の体、ラルヴァ、死んだ者、消えた物と交流する。

大気中の星の体は、多数は、星の光で神経を刺激し耳を刺激して話す。

大気中の星の体は、多数は、生きている者の思考や夢想を反映して思考する。

大気中の星の体の不思議な形を見るには、眠りまたは死に似た超常的な状態に成る必要が有る。

言い換えると、星の体を見るには、自身を磁化して意識が有る催眠状態に成る必要が有る。

降霊術には現実の結果が有る。

降霊術は現実の映像をもたらせる。

大いなる魔術の代行者、星の光の中にものの全ての映像が保存されていると話した。

星の光の中に直接の光線によって形成された全ての映像または反映によって形成された全ての反映が保存されていると話した。

星の光によって人は映像を見る。

星の光は狂人を夢中にさせる。

星の光は狂人の眠った判断力を最も奇形な霊に従わせる。

星の光の中で映像を反映、誤りから守るには、強い意思で反映を分離する必要が有る。

星の光の中で映像を反映、誤りから守るには、強い意思で直接の光線だけを引き寄せる必要が有る。

目覚めたまま夢を見る事は星の光の中で映像を見る事である。

裁判で多数の悪人の霊の魔術師が話しているサバトの酒神祭を悪人の霊の魔術師は星の光によって見た。

魔術で結果を得るための悪人の霊の魔術の用意と悪人の霊の魔術に用いられる物は恐れるべきものである。

「高等魔術の祭儀」で悪人の霊の魔術の用意と悪人の霊の魔術に用いられる物を説明するつもりである。

しかし、魔術の結果自体は疑い無い。

魔術師は最も憎むべきもの、最も不思議なもの、最も有り難いものを見、聞き、ふれた。

１５章で悪人の霊の魔術について話すつもりである。

１３章では死んだ者を呼び出す降霊術についてだけ話す。

精神的な動揺から解脱するために、邪魔されずに学問に身をささげるために、１８５４年の春にエリファス レヴィはロンドンへ旅行した。

エリファス レヴィは、超自然の世界からの啓示を望む、著名人への紹介状を持っていた。

エリファス レヴィは数人の著名人と知り合った。

エリファス レヴィは数人の著名人の丁重な態度の中に深い無関心か深い不真面目さを見つけた。

数人の著名人は、エリファス レヴィが詐欺師であるかの様に、すぐに奇跡を起こす様にエリファス レヴィに求めた。

エリファス レヴィは少し失望した。

なぜなら、率直に話すと、エリファス レヴィは儀式の魔術の神秘へ他人を入門させる気が無かった。

エリファス レヴィは最初から儀式の魔術の幻覚と疲労を避けていた。

さらに、魔術の儀式には高価で集めるのが難しい道具が必要である。

エリファス レヴィは超越的なカバラの研究に没頭した。

エリファス レヴィはイギリスの達道者と関わろうとしなかった。

ある日エリファス レヴィはホテルに戻った時にエリファス レヴィ宛の手紙を見つけた。

手紙には横に半分に切られた 1 枚のカードが入っていた。

カードにはソロモンの封印、六芒星が描かれているとすぐに分かった。

手紙には後記の様に書かれていた。

「明日、午後 3 時に、ウェストミンスター寺院の前で、あなたに残り半分のカードを渡します」

エリファス レヴィは前記の密会の約束を守って翌日の午後 3 時にウェストミンスター寺院の前に行った。

エリファス レヴィは止まっている馬車を見つけた。

エリファス レヴィが半分に切られたカードを手に持って見せると、従者が近づき合図して馬車のドアを開けた。

馬車には黒衣の女性が乗っていた。

黒衣の女性は厚いヴェールをかぶっていた。

黒衣の女性は残り半分のカードを見せて隣に座る様に合図した。

エリファス レヴィは馬車に乗った。

　馬車のドアが閉じられた。

　馬車が走り始めた。

　馬車はウェストミンスター寺院の前を去った。

　黒衣の女性はヴェールを外した。

　黒衣の女性は老人であった。

　黒衣の女性のまゆ毛は灰色であった。

　黒衣の女性は黒目であった。

　黒衣の女性の目は不思議に輝いていた。

　黒衣の女性の目つきは不思議と決然としていた。

　黒衣の女性は「エリファス レヴィ」と強いイギリスなまりで話し始めた。

「私は知っています。

達道者は秘密を厳しく守るのが法であると。

エリファス レヴィが会った B○○○ L○○○は私の友人です。

私は知っています。

エリファス レヴィが奇跡を起こす様に求められた事を。

そして、エリファス レヴィが他人の好奇心を満たすために奇跡を起こす事を断った事を。

多分エリファス レヴィは魔術の儀式に必要な物を持っていなかったのでしょう。

私が完全な魔術の小部屋をエリファス レヴィに見せましょう。

しかし、先に私はエリファス レヴィに秘密を守る神聖な約束をしてもらう必要が有る。

もしエリファス レヴィが自身の名誉にかけて秘密を守ると約束してくれないならば、

私はエリファス レヴィをホテルまで送る様に従者に命令するつもりです」

　エリファス レヴィは秘密を守ると約束した。

エリファス レヴィは誠実に黒衣の女性の名前、地位、住所の秘密を守っている。

すぐにエリファス レヴィは、黒衣の女性が、無上の秘伝伝授者ではないが、博識な学者であると分かった。

エリファス レヴィは黒衣の女性と何度か長く話し合ったが、いつも黒衣の女性は秘伝伝授の完成のために実践、経験が必要であると力説した。

黒衣の女性は集めた魔術の衣と魔術の道具をエリファス レヴィに見せた。

黒衣の女性は、エリファス レヴィが必要としていた、いくつかの入手し難い珍しい本をエリファス レヴィに貸してくれた。

結局、黒衣の女性はエリファス レヴィに黒衣の女性の家で完全な降霊術の実験を試みる事を決心させた。

「高等魔術の祭儀」の １３ 章で話すつもりである法を厳しく守って降霊術の実験のためにエリファス レヴィは ２１ 日間用意した。

７ 月 ２４ 日に試練が終わった。

神の様な者であるティアナのアポロニウスの霊の降霊を試みた。

ティアナのアポロニウスの霊に ２ つの質問をするために。

一方の質問はエリファス レヴィに関係するものであった。

他方の質問は黒衣の女性に関係するものであった。

黒衣の女性はある信頼できる人物を降霊術に参加させるつもりであったが降霊術を実験する直前に成って臆病風に吹かれて辞退した。

魔術の儀式には単一か ３ つ １ 組が絶対に必要である。

エリファス レヴィは単独で降霊術の実験を行った。

塔の中に降霊術のために用意された小部屋は有った。

小部屋は ４ つのくぼんだ鏡に囲まれていた。

磁化された鉄の鎖を巻きつかせた、上部が白い大理石である、一種の祭壇が有った。

5 章の五芒星の絵を祭壇の白い大理石の表面に金めっきで記した。

5 章の五芒星の絵を祭壇のもとに引いた新しい白い子羊の皮に色とりどりで記した。

白い大理石の祭壇の中央にはハンノキと月桂樹の木炭が入った小さな炉の上に載せた小さな銅の器が有った。

エリファス レヴィの前には三脚の上に載せた小さな炉の上に載せた小さな器が有った。

エリファス レヴィは白い衣を着ていた。

白い衣はカトリックの祭司の衣に似ていたが、より長くより幅が広かった。

エリファス レヴィはバーベインと金の鎖がからみ合った王冠をかぶっていた。

エリファス レヴィは一方の手に新しい剣を持っていた。

エリファス レヴィは他方の手に典礼書を持っていた。

エリファス レヴィは用意された必要な物に 2 つの火をつけた。

エリファス レヴィは典礼書の霊に呼びかける言葉を読んだ。

エリファス レヴィは典礼書の霊に呼びかける言葉を最初は小さな声で読んだ。

エリファス レヴィは典礼書の霊に呼びかける言葉を徐々に声を大きくして読んだ。

煙が広がった。

火で物が揺るがされて見えた。

火が消えた。

白い煙が白い大理石の祭壇の辺りをゆっくりと浮遊した。

エリファス レヴィは地が揺るがされた様に感じた。

エリファス レヴィの耳の神経が刺激された。

エリファス レヴィの心臓の鼓動が速まった。

エリファス レヴィはさらに枝と香を小さな炉の上に載せた小さな器に積み重ねた。

火が再び燃え上がった。

エリファス レヴィは祭壇の前に巨大な人の形を明らかに見た。

巨大な人の形は溶けて消えた。

エリファス レヴィは降霊術をやり直した。

エリファス レヴィは三脚と祭壇の間に事前に記した円の中にいた。

祭壇の後ろのくぼんだ鏡の深い部分が明るく成った様に見えた。

祭壇の後ろのくぼんだ鏡の中に形が弱く映った。

祭壇の後ろのくぼんだ鏡の中の形は強まった。

祭壇の後ろのくぼんだ鏡の中の形が徐々に近づく様に見えた。

エリファス レヴィは目を閉じて 3 回ティアナのアポロニウスを呼んだ。

エリファス レヴィが目を開けると、エリファス レヴィの前に白より灰色に見える一種の屍衣で頭から足まで覆われた 1 人の男性がいた。

屍衣で覆われた男性はやせていた。

屍衣で覆われた男性は悲しそうであった。

屍衣で覆われた男性はひげが無かった。

エリファス レヴィが事前に考えていたティアナのアポロニウス像と屍衣で覆われた男性は全く一致しなかった。

エリファス レヴィは超常的な寒気を感じた。

エリファス レヴィは霊に質問しようと試みたが、一言も話せなかった。

エリファス レヴィは、一方の手に持った剣の先を霊に向けて、他方の手を五芒星の絵の上に置いて、神の象徴である五芒星の力によって、心の中で霊にエリファス レヴィに従いエリファス レヴィを恐れさせない様に命令した。

霊の形は溶けて突然消えた。

エリファス レヴィは霊に表れる様に命令した。

すぐにエリファス レヴィは息の様なものを近くに感じた。

何ものかがエリファス レヴィの剣を持った手にふれた。

すぐにエリファス レヴィの剣を持った手はひじまでしびれた。

エリファス レヴィは剣が霊を不快にさせたと見抜いた。

エリファス レヴィは剣の先を下に向け円の中に近くに置いた。

すぐに再び人の形は表れた。

エリファス レヴィは突然の衰弱を手足に感じた。

エリファス レヴィは気絶しそうに成った。

エリファス レヴィは 2 歩歩いて座った。

エリファス レヴィは深く昏睡した。

エリファス レヴィは夢を見た。

エリファス レヴィが気がついた時には夢の乱れた記憶しかなかった。

数日間エリファス レヴィの腕はしびれて痛いままであった。

霊はエリファス レヴィに話さなかった。

しかし、霊に質問しようと試みた質問の答えは自然とエリファス レヴィの心の中に有った。

エリファス レヴィの心の声が黒衣の女性の質問に答えた。

「死!」

黒衣の女性はある男性の消息を知りたかった。

エリファス レヴィはエリファス レヴィの思考を占めていた 2 人の人が和解し許し合えるか知りたかった。

エリファス レヴィの不動の心の声がエリファス レヴィの質問に答えた。

「死んでいる!」

　エリファス レヴィは起きた事実を話している。

　しかし、エリファス レヴィは前記を信じる様に強制するつもりは無い。

　降霊術の実験の結果は説明不可能であった。

　私はもはや以前と同じではなかった。

　別世界の何ものかが私の中を通過した。

　私はもはや俗世の悲しみも俗世の喜びも感じなくなった。

　私は死に超常的に引かれた。

　しかし、自殺しようとは思わなかった。

　エリファス レヴィは降霊術の実験で経験したものを用心して分析した。

　強い神経的な嫌悪感にもかかわらず、エリファス レヴィは降霊術の実験をさらに数日おきに 2 回行った。

　しかし、 3 回の降霊術の実験で起きた現象間に大きな差異は無かった。

　2 回目と 3 回目の降霊術の実験について話すのは多分長過ぎる。

　しかし、 2 回目と 3 回目の降霊術の実験の結果は 2 つのカバラの秘密をエリファス レヴィに明らかにした。

　2 つのカバラの秘密は、もし大衆に知られたならば、短期間で社会全体の法の基礎を変えるであろう。

　エリファス レヴィは大いなるティアナのアポロニウスの霊自体を呼び出し、見、ふれたと断定できるであろうか?

　エリファス レヴィはティアナのアポロニウスの霊自体を呼び出し、見、ふれたと断言するほど夢見がちではない。

　エリファス レヴィはティアナのアポロニウスの霊自体を呼び出し、見、ふれたと信じるほど真剣さに欠けてはいない。

諫 香 鏡 pantacle は想像力の酩酊を実際にもたらす。

想像力の酩酊は神経質ではない感じ易くない人にも強く作用するはずである。

見、ふれた霊によって自然科学の法則を説明するつもりは無い。

エリファス レヴィは、夢の中ではなく起きた状態で、見た様に感じたと断言するだけである。

エリファス レヴィは、夢の中ではなく起きた状態で、ふれた様に感じたと断言するだけである。

エリファス レヴィは、夢の中ではなく起きた状態で、明らかに見た様に感じたと断言するだけである。

(星の光が神経を刺激して脳を刺激した。)

前記で魔術の儀式の本物の結果を確立するには十分である。

エリファス レヴィは降霊術の実践は有害で危険であると考えている。

もし降霊術の実践が常習的に成れば、心の健康を保持できなくなるであろう。

もし降霊術の実践が常習的に成れば、体の健康を保持できなくなるであろう。

黒衣の女性は降霊術の実践が常習的に成り心の健康を保持できなくなっているとエリファス レヴィは類推しあわれんでいる。

黒衣の女性は降霊術を常習的に実践していないと断言していたが、エリファス レヴィは黒衣の女性が降霊術とゴエティア、悪人の霊の魔術を常習的に実践していたと確信している。

黒衣の女性は時々自制心を完全に失った。

黒衣の女性は時々原因が分かり難い意味不明な激しい感情の発作に圧倒された。

エリファス レヴィは黒衣の女性に別れを告げずにロンドンを離れた。

エリファス レヴィは、黒衣の女性の名前や身分の手がかりを与えない事によって、黒衣の女性の秘密を守る約束を固く守るつもりである。

仮に黒衣の女性の名前と降霊術の実践がつながれば、黒衣の女性の家族を苦しめるであろう。

エリファス レヴィは、黒衣の女性の家族については知らないが、多分、黒衣の女性の家族たちは非常に高い地位にあると信じている。

知による降霊術、愛による降霊術、憎悪による降霊術が存在する。

しかし、改めて、降霊者と交流するために霊が上の領域を実際に離れている証拠は存在しない。

霊と交流するために降霊者の魂が下の領域を離れているかもしれない。

降霊者は霊が星の光に残した記憶を呼び出す。

星の光は普遍の磁気の共通の宝庫である。

星の光の中でユリアヌス帝はギリシャの神々が老いた、病んだ、弱った姿で表れたのを見た。

星の光の中でユリアヌス帝がギリシャの神々が老いた、病んだ、弱った姿で表れたのを見たのは、魔術の代行者、星の光の反映の流れや大衆に認められた世論によって作用が運動する新しい証拠である。

魔術の代行者、星の光がテーブル ターニングでテーブルに話させる。

星の光が壁をたたいて答えて話させる。

エリファス レヴィはティアナのアポロニウスを降霊した後で、エリファス レヴィはティアナのアポロニウスの人生についての歴史書を用心して再び読んだ。

歴史家たちはティアナのアポロニウスを古代の美と優雅さの理想として描いている。

エリファス レヴィはティアナのアポロニウスが人生の終わり頃に牢獄で飢えさせられ苦しめられた事実に気づいた。

　知らないで、エリファス レヴィの記憶に残っていたのかもしれない、ティアナのアポロニウスが人生の終わり頃に牢獄で飢えさせられ苦しめられた事実が、エリファス レヴィの起きたままの意識の有る夢であると考えられる映像での、ティアナのアポロニウスのやせた悲しそうな形を決定したのかもしれない。

　名前を明かすつもりは無いが、エリファス レヴィは ２ 回目と ３ 回目の降霊術の実験でティアナのアポロニウス以外の ２ 人の霊を見たが、２ 人共、エリファス レヴィの予想とは違う、服装と姿であった。

　エリファス レヴィは降霊術の実験を試みようとする者に大いに注意する事をすすめる。

　降霊術は激しい疲労をもたらす。

　降霊術は時々病気を引き起こすほどの衝撃をもたらす。

　１ ３ 章でエリファス レヴィは何人かのカバリストの不思議な考えを話す必要が有る。

　何人かのカバリストは外見上の死と本当の死を区別している。

　何人かのカバリストは外見上の死と本当の死はほとんど同時に起こらないと考えている。

　何人かのカバリストの考えでは、土葬されたばかりの人の多数は未だ生きている。

　一方、生きていると考えられている人の多数は実際には心が死んでいる。

　例えば、星の体の全く直感的な制御下に地上の肉体という身を委ねる、矯正できない狂気は、不完全ではあるが実際の心の死である。

　人の魂は、耐えられない衝撃を経験した時に、肉体から分離し、動物的な人の魂または星の体を肉体に残し、動物より生きていない動物的な人として生きる。

心が死んだ人は、倫理感が完全に死んだ人、道徳感が完全に死んだ人、思いやりが完全に死んだ人と言える。

心が死んだ人は悪人でも善人でもない。

心が死んだ人は死人である。

心が死んだ人は人類の毒きのこである。

心が死んだ人は可能な限り生きているものの命を奪う。

心が死んだ人は可能な限り生きているものの心の命を奪う。

心が死んだ人は近づいたものの魂を凍らせ、しびれさせ、無感覚にする。

心が死んだ人は近づいたものの心を殺す。

心が死んだ人は近づいたものの思いやりを殺す。

もし死体の様な生きものである心が死んだ人が実際に存在するのであれば、過去の吸血鬼の物語の全てを実現するであろう。

もし死体の様な生きものである心が死んだ人が実際に存在するのであれば、過去の brocalaques の物語の全てを実現するであろう。

面前に近づいたら、知性、徳、時には正直さすら、時には誠実さすら失われる様に感じる人々が存在しないであろうか？　はい！　近づいたものの知性、徳、正直さ、誠実さを失わせる人々が存在する。

近づいたものの全ての信心、全ての熱意を失わせる人々が存在しないか？　はい！　近づいたものの信心、熱意を失わせる人々が存在する！

あなたの弱さにつけこんで、あなたを(悪に)引きずり込む人々が存在しないか？　はい！　あなたの弱さにつけこんで、あなたを(悪に)引きずり込む人々が存在する！

あなたの悪い傾向によって、あなたを支配する人々が存在しないか？　はい！　あなたの悪い傾向によって、あなたを支配する人々が存在する！

メゼンティウスの様にあなたを苦しめながら、あなたを徐々に倫理道徳的に殺す人々が存在しないか？　はい！　苦しめながら、あなたを徐々に倫理道徳的に殺す人々が存在する！

　生きている存在であると誤解しがちであるが、心が死んだ人々は死んでいる人々である。

　友人であると誤解しがちであるが、心が死んだ人々は吸血鬼である！

１４

　ヌン

　O

　変形

　月の球体

　永遠

　助け

　アウグスティヌスはテッサリアの魔女によってアプレイウスがロバに変身したか真剣に疑った。

　神学者たちはダニエル書４章３３節でネブカドネザル２世が獣に変身したか長い間考えた。

　アウグスティヌスがテッサリアの魔女によってアプレイウスがロバに変身したか真剣に疑った事は、ヒッポの雄弁な学者アウグスティヌスが魔術の秘密を知らなかった事を単に証明する。

　神学者たちがダニエル書４章３３節でネブカドネザル２世が獣に変身したか長い間考えた事は、神学者たちが聖書の解釈から前進しなかった事を単に証明する。

　１４章では様々な、より信じ難いが、議論の余地の無い不思議について話す。

　１４章では人がオオカミへ変身する事について話す。

　１４章では人がオオカミへ夜に変身する事について話す。

人がオオカミへ夜に変身する事は、狼男の歴史によって、黄昏のいなかの話で、非常に有名である。

狼男の歴史は非常に証明されている。

狼男を説明するために、疑い深い自然科学は怒り狂った熱狂と動物の仮装に助けを求めた。

しかし、狼男は熱狂と動物の仮装であるという仮説は幼稚であり何も説明していない。

狼男は熱狂と動物の仮装であるという仮説以外に狼男について認められた現象の秘密を探求しよう。

狼男について認められた現象を確立する事から始めよう。

１。

出血無しに傷無しに、狼男は窒息によってのみ人を殺した。

２。

狼男は追われ傷つけられさえしたが現場で殺された事は無い。

３。

狼男が追撃された後で、多かれ少なかれ傷つき時には死んでいたが、狼男に変身したと疑われる人々は常に家で常に自然な人の姿で見つかった。

次に、狼男に似た現象を確立しよう。

ローマから遠く離れた家で祈り忘我状態である所を見られていたアルフォンソ デ リゴリが同時にローマで死にかかっている法王のそばにいる所を見られていた事より良い証拠は世界に無い。

　さらに、ある時、伝道師フランシスコ ザビエルが複数の場所に同時に存在した事は厳しく証明されている。

　大衆はアルフォンソ デ リゴリとフランシスコ ザビエルが複数の場所に同時に存在した事は奇跡であると話すであろう。

　しかし、エリファス レヴィは奇跡が本当の事である時は奇跡は自然科学にとって単純な事実であると答えて話す。

　親密な人の霊が死ぬ時に表れる現象は、狼男の現象や、アルフォンソ デ リゴリとフランシスコ ザビエルが複数の場所に同時に存在した現象と、同じ種類の現象であり、原因が同じ現象である。

　星の体は魂と肉体の間を仲介するものであると話した。

　肉体が眠っている間に星の体が起きたままである時が存在する。

　肉体が眠っている間に星の体が起きたままである時に、星の体は普遍の磁化が開く全ての空間に通じる。

　星の体は共感の鎖を壊さないで伸びる。

　共感の鎖が星の体を肉体の心臓と肉体の脳に結び付けている。

　前記の理由から、眠っている者を突然起こすのは危険である。

　事実、眠っている者を急に起こすと共感の鎖をすぐに壊し急死の原因に成るかもしれない。

　星の体は常習的な思考に対応した形に成る。

　結局、長期的には、星の体は肉体の特徴を変える。

　常習的な思考は肉体の特徴を変える。

前記の理由から、時々、直感的な催眠状態で、スヴェーデンボルグは様々な動物の姿をした霊を見た。

　大胆に話すと、狼男は人の星の体である。

　オオカミは人の野生の血の本能の象徴である。

　狼男の人の幻の体、狼男の人の星の体がいなかをさまよっている間、狼男の人はベッドの中で苦しんで眠っている。

　狼男の人の星の体がいなかをさまよっている間、狼男の人は自身がオオカミに成った夢を見ている。

　狼男を見えるものにしているものは、狼男の人の星の体を見えるものにしているものは、狼男の人の星の体を見ている者の恐怖による催眠状態の動揺か、特に単純ないなかの人に多い星の光と直接的に交流する傾向である。

　星の光は幻視と夢を共通に仲介するものである。

　星の光、オドの共鳴の過剰によって、星の体と肉体の交流によって、狼男を傷つけると、狼男の人の星の体を傷つけると、狼男の人の肉体を傷つける事に成る。

　前記を読むと、多数の人々は自身が夢を見ているかの様に思うであろう。

　前記から、多数の人々はエリファス レヴィは本当に目が覚めているのかどうかたずねるであろう。

　しかし、知の有る人々に、車裂きの刑を見た女性が四肢が裂かれた子を産んだ、懐胎の現象を考える様に求めるだけである。

　知の有る人々に、車裂きの刑を見た女性が四肢が裂かれた子を産んだ、子の形成への女性の想像力の作用を考える様に求めるだけである。

　車裂きの刑を見た女性は四肢が裂かれた子を産んだ。

　誰か、どのように車裂きの刑という恐ろしい見せ物が母の魂にもたらした印象が子に作用したか説明してみるが良い。

どのように夢の中で傷つくと肉体が傷つくのか説明する。

どのように想像の中で傷つくと肉体が傷つくのか説明する。

特に、肉体が神経の磁気の作用を受容し従っている時に、どのように夢や想像の中で傷つくと肉体が傷つくのか説明する。

前記の現象と前記の現象を統治している隠された法については呪いの作用について話す必要が有る。

１６章で呪いについて話すつもりである。

悪人の霊の憑依と、脳に作用する神経の病気の多数は、星の光の異常なつり合いでの同化または放射による、神経系の傷による物である。

意思が異常に不自然に緊張していると悪人の霊に憑依され易く成り神経の病気にかかり易く成る。

強制された禁欲、憎悪、野心、拒絶された性欲は地獄の形と作用を創造する原理である。

パラケルススは「女性の月経の血は霊を大気中に生む」と話した。

前記の観点から、女性の修道院は夢魔のための神学校である。(悪魔は存在しない。悪人の霊は存在する。)

悪人の霊はレルネのヒュドラの頭に例えられるかもしれない。

ヒュドラの頭は自身の傷から流れ出る血の中で永遠に再生し増える。

ユルバン グランディエを死に至らしめたルーダンのウルスラ会修道院の憑依の現象は誤解されている。

ルーダンのウルスラ会修道院の修道女は病的興奮にとりつかれた。

ルーダンのウルスラ会修道院の修道女は、星の光によって神経組織に伝えられた、悪霊払い師の下心を模倣したい狂気にとりつかれた。

ルーダンのウルスラ会修道院の修道女は不運な祭司ユルバン グランディエが呼び出したユルバン グランディエへの全てのうらみの印象を星の光から受容した。

ルーダンのウルスラ会修道院の修道女とユルバン グランディエには星の光による精神的な交流が悪霊的なもの、奇跡的なものに思われた。

前記の様に、ルーダンのウルスラ会修道院の憑依という悲劇的な事件では全ての者が真剣に行動した。

リシュリューの偏見を盲目的に実行したローバルドモンですら自身は正しい裁きの務めを果たしていると信じていた。

ローバルドモンはイエスを処刑したピラトの模倣者である小さな疑いが有る。

放蕩なサン ピエール デュ マルシュの教区司祭ユルバン グランディエはイエス キリストの弟子、殉教者であった。

ルビエの修道女の憑依はルーダンの修道女の憑依の模倣より恐ろしい。

悪人の霊は新しいものを発明する事はほとんど無い。

悪人の霊は相互に盗用し合う。

ゴーフリディとMagdalen de la Palud の場合は犠牲者は自身を告発したという不思議な特徴を持っている。

ゴーフリディは息を鼻に吹きかけて誘惑に対して自身を守る力を多数の女性から奪ったという罪を犯したと話した。

ゴーフリディに息を鼻に吹きかけられた、若く美しい高貴な家の女の子は、奇形のものと競うかの様に、みだらな光景を詳細に記している。

前記は偽りの神秘主義と、すさんだ禁欲にあたりまえの幻覚、妄想である。

ゴーフリディと被害女性たちは一方の悪夢を他方の脳に反映する相互の共通のキマイラの様な妄想にとりつかれた。

マルキド サドは消耗した病んだ性質の者にとって伝染病の様な者ではないか？

はい！　マルキド サドは消耗した病んだ者にとって伝染病の様な者である！

ジラール神父の外聞の悪い裁判は神秘主義の精神錯乱と神秘主義に必然的に伴う異常な神経の病気の新しい証拠である。

カディエールの催眠状態、忘我状態、聖痕は全て現実であった。

ジラールの無分別と多分、無意識の放蕩は全て現実であった。

ジラールがカディエールから手を引こうとしたので、カディエールはジラールを告発した。

若い女性カディエールの改宗はジラールへの報復であった。

なぜなら、悪く成った肉欲ほど無情なものは無い。

異端者に成る可能性が有ったグランディエを破滅させるためにグランディエの裁判に介入した、ある力の有る団体は、修道院の名誉のためにジラールを救った。

さらに、グランディエとジラールは異なる手段によって同じ結果に到達した。

１６章で特に話すつもりである。

人は自身の想像力によって他人の想像力に作用する。

人は自身の星の体によって他人の星の体に作用する。

人は自身の器官によって他人の器官に作用する。

傾向の共感によって、または、憑依の共感によって、人は相互に憑依し合う。

人は作用したい者と共感する。

前記の支配、作用、共感に対する、反作用は最も明らかな反感と成る時が有る。

反作用、反感は共感を強める時が有る。

愛には存在するものを１つにする傾向が有る。

もし二者の性質の深い所に自尊心といった非社交的な傾向が有る場合は、愛の結合力は二者を競い合わせ対立させる時が有る。

２つの一致している魂を対等な自尊心で満たす事は、二者を競い合わせて解体する事である。

　対立は神々の複数性の必然の結果である。

　生きている人を夢で見る時は、星の光の中で、生きている人の星の体が表れているか、生きている人の星の体の反映が表れている。

　生きている人を夢で見た時に受けた印象は生きている人の隠れた気持ちを教える時が有る。

　例えば、愛は一方の星の体を他方に似せる。

　星の体はプシュケと肉体を仲介するものである。

　星の体は魂と肉体を仲介するものである。

　それで、女性の星の体は女性が愛している男性に似る。

　男性の星の体は男性が愛している女性に似る。

　後記の様にカバリストは創世記２章２２節の世に知られていない言葉を説明して、前記の変形を隠された学問で説明しようとした。

「神は男性アダムの胸の中の肋骨を女性エヴァの胸の中に置いて愛を創造した。
神は男性アダムの胸の中の肋骨で女性エヴァの肉を創造した。
女性の胸の底には男性の骨が存在する。
男性の胸の底には女性の肉が存在する」

　(

　創世記２章２２節の例え話で神は男性アダムの肋骨から女性エヴァを創造した。

創世記２章２３節「男性アダムは『女性エヴァは骨の中の骨である。女性エヴァは肉の中の肉である』と話した」

）

前記の例え話は深く美しい。

１３章でカバラの達道者は苦しんでいる魂が生きている者の肉体の中に入り住む状態を「胎児の様に」と呼んでいる事を話した。

完全に死んだ後の人が他の者に憑依する状態は、憑依される者が生存中に、憑依される者の強迫観念または愛着によって始まる時が有る。

エリファス レヴィが知っている、ある若い女性は、両親に脅されていたが、突然、両親に脅されていた行為を罪の無い人にする様に成った。

エリファス レヴィが知っている、別の人は、奇行によって来世で苦しんでいる罪人の女性を呼び出す降霊術に参加した後で、理由も無く、死人の奇行を模倣し始めた。

地上の全ての民は隠された力が原因である親の呪いの畏敬するべき感化力を畏敬している。

本物の達道者の独立に到達していない者である時は魔術の実践は危険である。

愛に本当に存在する、星の体の変形の力は、キルケの杖の例え話の不思議議を説明する。

アプレイウスは黄金のロバでテッサリアの女性の主が鳥に変身したと話している。

黄金のロバでルキウスはテッサリアの女性の主の秘密を知るために女性の召使いの愛を勝ち取った。黄金のロバでルキウスはロバに変身するだけに過ぎなかった。

黄金のロバの例え話は愛の無上の隠された秘密を含んでいる。

さらに、カバリストは、男性がウンディーネ、シルフィード、ノーミードといった女性の四大元素の霊と恋に落ちた時は、女性の四大元素の霊が男性と共に神に成るか、男性が女性の四大元素の霊と共に死ぬしかない、と話している。

４章で四大元素の霊は不完全な未だ死ぬべきである人の霊であると説明した。

前記の話は啓示である。

前記の話は作り話に過ぎないと考えられてきた。

前記の話は愛における精神的な連帯の考えである。

連帯自体が愛の基礎である。

連帯は愛の神聖さの全てを説明する。

連帯は愛の力の全てを説明する。

キルケを敬礼する者たちを豚の群れに変身させるが、(オデュッセウスと妻の愛のきずなといった)愛のきずなに従う、キルケとは何者か？

誘惑術が破壊的である、キルケとは何者か？

古代の遊女である。

全ての時代の無情な女性である。

愛無しに奪う女性である。

近づく全ての男性を堕落させる女性である。

他方、愛を知っている女性は熱意、気高さ、命を満ちあふれさせる。

１９世紀は詐欺師と非難されている達道者カリオストロについての多数の話が存在する。

カリオストロは生前に「神の様な者」と呼ばれた。

カリオストロは降霊術を実践した事が知られている。

シュレプファーを除いて、降霊術でカリオストロを超える者はいない。

※「高等魔術の祭儀」で降霊術のシュレプファーの秘訣と方法を説明するつもりである。

カリオストロは共感を結びつける力が有ると豪語していたと言われている。

カリオストロは大いなる務めの秘密を保有していると豪語していたと言われている。

しかし、カリオストロをより有名にした物は、いくつかの命の若返り薬エリクサーである。

若返り薬エリクサーは若い時の力と心を老いた者にすぐに復活させる。

カリオストロの若返り薬エリクサーという混合物の主成分はマルヴォワジー ワインである。

カリオストロの若返り薬エリクサーはマルヴォワジー ワインにいくつかの動物の精液といくつかの植物の樹液を蒸留して加えた混合物である。

エリファス レヴィはカリオストロの若返り薬エリクサーの処方せんを持っている。

しかし、エリファス レヴィがカリオストロの若返り薬エリクサーの処方せんを与えない理由は容易に理解してもらえるであろう。

１５

サメク

P

黒魔術

神の毒を意味するサマエル

助けに成るもの

黒魔術の神秘に近づこう。

サバトの黒い神、メンデスの畏敬するべきヤギに聖所で大胆に立ち向かおう。

(邪神は存在しない。)

恐怖を感じ易い人々は本書を閉じるべきである。

神経質な印象の犠牲に成る人々は本書から気をそらすか本書を読むのをやめるのが良いであろう。

悪魔の化けの皮をはがす事を務めとする。

悪魔の化けの皮をはがす必要が有る。

第一に、悪魔についての疑問に率直に大胆に取り組もう。

悪魔は存在するのか？

悪魔とは何か？

悪魔は存在するのか？　という疑問に対して、自然科学は沈黙する。

哲学は可能性を否定する。

宗教だけが(一見)肯定的に答える。

悪魔とは何か？　という疑問に対して、宗教は「悪魔は堕天使である」と(いう例え話を)話す。

隠された哲学は「悪魔は堕天使である」という(例え)話を受け取り説明する。

１０章で「悪魔は堕天使である」は例えであると話した。

さらに、ここで、啓示を加えよう。

黒魔術では悪魔は悪い意思によって悪い意図に応用された大いなる魔術の代行者である。

創世記３章の伝説の古い蛇は普遍の代行者、地上の命の永遠の火、地の魂、地獄の生きている源泉(、星の光)である。

星の光は形の貯蔵所であると話した。

理性が呼び出す時は星の光から平和に形はもたらされる。

しかし、狂気が呼び出す時は星の光から形は乱れて奇形で表れる。

星の光が「聖アントニウスの誘惑」の夢魔とサバトの霊の源である。

ゴエティア、悪人の霊の魔術の降霊術と悪人の霊に憑依されているという妄想には実際の結果が有るのか？

はい！　確実に！　議論の余地無く！　伝説で話されているより恐ろしい結果が悪人の霊の魔術には有る！

意図した儀式で悪人の霊を呼び出した時に、悪人の霊は表れ、悪人の霊を見れる。

悪人の霊を見た恐怖から、死ぬ事を免れるためには、強硬症カタレプシーまたは重度の知的障害に成る事を免れるためには、すでに狂っている必要が有る。

グランディエは無信心によって放蕩者であった。

グランディエは多分、疑い深さによって放蕩者であった。

熱心過ぎて、異常な苦行によって、盲信によって、ジラールは堕落した。

「高等魔術の祭儀」の １５ 章で悪人の霊の降霊術と黒魔術の実践について全て話すつもりであるが、利用してもらうためではなく、知ってもらい判断してもらうためであり、黒魔術という狂気による愚行を利用するのを永遠にやめてもらうためである。

１９ 世紀にテーブル ターニングについての著書が少し評判に成った Mirville には本書の黒魔術と黒魔術の問題の解決策は満足な部分と不満な部分が多分有るであろう。

実際、Mirville の様に、エリファス レヴィは黒魔術という事実の実在と不思議な性質を断言する。

Mirville の様に、エリファス レヴィは古い蛇が黒魔術の原因であるとする。

古い蛇は、この世界の隠れた王者である。

し かし 、 Mirville と エリ ファ ス レ ヴィ は盲目の代行者の性質については一致し な

盲目の代行者、星の光は全ての善の道具であると同時に全ての悪の道具である。

星の光は預言者の使いである。

星の光はデルポイの巫女に霊感を与えたものである。

要するに、神の聖霊の魔術師にとって、悪魔とは一時的に誤った力である。

神の聖霊の魔術師にとって、地獄に堕ちる大罪とは非論理的なものへの意思の固執である。

Mirville は千回正しかったが １ 回大きく誤った。

特に、存在の領域から誤った気まぐれ、誤った独断を取り除く必要が有る。

偶然に起こるものは存在しない。

善意または悪意による誤った独断によって起こるものは存在しない。

天には善と悪の両院が存在する。

善と悪の両極性の中で神の知という上院がサタンという下院を制限している。

１６

アイン

Q

呪い

源泉

目

雷

マタイによる福音５章２８節で大いなる主イエスは「性欲を持って女性を見る者は(心の中で)女性を犯している」と話している。

意思し続ける事は行われる。

行動は全ての本当の意思を確証する。

行動によって確証された全ての意思が行動である。

神は全ての行動を裁く。

神の裁きは永遠である。

意思は行動に表れる事は考えである。

意思は行動に表れる事は原理である。

もし行動が意思を確証するのであれば、もし行動が決意を固定するのであれば、善意からであれ悪意からであれ、自身に対しての様に他のものに対して、意思の能力に対応して、行動の範囲内で、意思は間違い無く行われる。

行動は意思から類推可能である。

意思は行動から類推可能である。

傷つける意思を有効にするためには憎悪の行動で意思を確証する必要が有る。

愛を引き起こす意思を有効にするためには愛の行動で意思を確証する必要が有る。

人の魂が抱いた印象は自分の魂の物と成る。

言葉の広い意味で、人が全ての手段で自分の物にした物は自分の体に成る。

人の魂は自分の体、自分の物に行われた全てのものを間接的にか直接的に感じる。

人の魂は自分の体、自分の物に行われた全てのものから間接的にか直接的に影響を受ける。

前記の理由から、倫理道徳と神学は隣人への全ての敵対行為を殺人の始まりであると考える。

呪う事は殺人である。

呪う事は殺人より悪い事である。

なぜなら、呪いの犠牲者は呪いから自身を守れない。

呪いは法の罰をすり抜ける。

人々の良心を自由にするために、弱い器の人々を戒めるために、呪いは可能であるという原理を大胆に断言し、さらに、呪いは可能であるだけではなく、ある意味、呪いは必然で避け難いものであるという原理を大胆に断言しよう。

社会では人は無意識に呪っている。

社会では人は知らないで呪われている。

無意識の呪いは人の命の最も畏敬するべき危険の １ つである。

肉欲の共感は最も熱い欲望を必然的に最も力が有る意思に従わせる。

心の病気は肉体の病気より伝染し易い。

いくつかの精神的な流行は皮膚病やコレラの流行に例えられる。

人は伝染病の保菌者との接触によって死ぬかもしれないのと同様に悪い知識によって死ぬかもしれない。

　最近の世紀のヨーロッパでの愛の神秘への冒涜への報復である、畏敬するべき性病の伝染病は、自然の類推可能性の法の啓示である。

　畏敬するべき性病の伝染病は、日々いかがわしい共感に従っている心の堕落の弱い映像をもたらしているだけである。

　ある嫉妬深い邪悪な男性は、恋敵の男性に復讐するために、不治の伝染病に故意にかかり、天罰として呪いとして、ベッドを共にしていた女性と恋敵の男性に不治の伝染病をうつした、という話が存在する。

　伝染病に故意にかかってうつす話は、全ての神の聖霊の魔術師の話と言うよりはむしろ、呪いを実践している全ての悪人の霊の魔術師の話である。

　悪人の霊の魔術師は他者を毒する事が可能である様に自身を毒する。

　悪人の霊の魔術師は他者を苦しめられる様に自身を地獄に堕とす。

　悪人の霊の魔術師は息で地獄を放射できる様に息で地獄を引き寄せる。

　悪人の霊の魔術師は死を他者に与えられる様に自身を致命的に傷つける。

　しかし、他者を毒し殺すために自身を毒し傷つける不幸の大胆さを持つ者は、邪悪な意思の放射だけで、(他者か自身といった何者かを)毒し殺すであろう事は確かである。

　憎悪と同様に致命的である愛の形がいくつか存在する。

　善意による呪いにも似た祈りは悪人を苦しめる。

　改心を望まない者の改心の祈りを神にささげる事は改心を望まない者に不幸をもたらす。

　すでに話した様に、力を合わせた複数の意思の鎖による流体の流れと戦う事は疲労をもたらすし危険である。

意識的な呪いと無意識の呪いという 2 種類の呪いが存在する。

肉体的な呪いと精神的な呪いという 2 種類の呪いに区別できる。

力は力を引き寄せる。

命は命を引き寄せる。

健全さは健全さを引き寄せる。

力が力を引き寄せる事は自然の法である。

健全さが健全さを引き寄せる事は自然の法である。

もし 2 人の子供が一緒に生きていて、特に一緒に眠っていて、一方の子供は弱いが、他方の子供が強ければ、強い子供は弱い子供から力を奪い、弱い子供は衰弱するであろう。

前記の理由から、子供は独りで眠るべきである事が重要である。

共同生活の神学校では何人かの学徒が他者の知を奪う。

全ての人の輪では他者の意思を応用する個人が速やかに現れる。

流れによる呪いはありふれている。

すでに話した様に。

物理的にと同様に精神的に、大部分の人々は大衆によって流される。

しかし、 1 6 章で特にエリファス レヴィが表したいものは、自身の行動を決定する人の意思のほとんど絶対的な力と、物質的な物で物質的に証明されている感化力である。

いなかでは意識的な呪いはありふれている。

なぜなら、無知な孤立した人々の中を、あらゆる疑い気晴らし気をそらす事による減衰無しに、自然の力は作用できる。

拒絶された肉欲からではない私利私欲からではない率直な絶対な憎悪は、いくつかの条件の下では、死の宣告に成る。

性欲や貪欲が混じっていない憎悪は、いくつかの条件の下では、死の宣告に成る。

なぜなら、欲望は引き寄せる。

欲望の引き寄せる力は憎悪の放射する力を相殺する。

例えば、嫉妬深い人は恋敵を効果的に呪う事はできない。

貪欲な遺産相続人はけちで長生きな伯父さん、叔父さんの命を縮める事はできない。

肉欲から呪うと呪いは呪いをかけた人にはね返ってくる。

肉欲から呪うと呪われた人を傷つけるどころか、呪われた人を敵対行動から自由にする。

肉欲から呪うと呪われた人を傷つけるどころか、呪われた人を呪いから自由にする。

過ぎた言葉や行動は呪いを無効化する。

ゲール語の envoûtement は呪いを意味する。

envoûtement は何ものかを閉じ込める行動を意味する。

呪いは何ものかを明らかにした意思の中に閉じ込める行動を意味する、と言える。

呪いの手段は大いなる魔術の代行者である。

大いなる魔術の代行者は邪悪な意思の下では悪人の霊的なものに成る。

witchcraft は呪いの業である。

呪いの業は呪う意思を持って行動する儀式である。

witchcraft、呪いの業、呪いの儀式は呪う意思を苦労して明らかにし続ける事によって呪いをかける人の意思を固定する作用だけが有る。

苦労する事と続ける事という 2 つの事が意思の力を有効にする。

行動が、より難しいほど、より恐ろしいほど、行動の力はより大きく成る。

なぜなら、行動が、より難しいほど、より恐ろしいほど、行動はより強く想像力に働きかける。

行動は抵抗に比例して努力を確証する。

行動は抵抗に比例して努力を固める。

前記は黒魔術における行動の異常な性質と残忍な性質を説明する。

(正常な人は残忍な行動を嫌う。)

古代と中世の大衆は、地をはう爬虫類、流血、人のいけにえといった異常なものをささげて、悪人の霊のミサ、悪人の霊の聖餐を実践した。

地をはう爬虫類、流血、人のいけにえといったものをささげる事はゴエティア、悪人の霊の魔術、黒魔術の本質である。

地をはう爬虫類、流血、人のいけにえといったものをささげる事はゴエティア、悪人の霊の魔術、黒魔術の現実である。

法の正しい弾圧は流血、人のいけにえをささげる悪人の霊の魔術師を常に打ち倒してきた。

黒魔術は本当に段階的な神への冒涜への一致に過ぎない。

黒魔術は人の意思の永遠の転倒のための殺人である。

黒魔術は生きている人の中に憎むべき悪人の霊を実現するための殺人である。

悪人の霊の魔術は、悪人の霊の宗教、闇の儀式、発作的なものにまで高められた善への憎悪である。

悪人の霊の魔術は、死が人に成ったもの、地獄の絶え間無い創造である。

大衆はカバラをかじったボダンを弱い心と迷信深い精神の持ち主であると誤解している。

ボダンは不信の危うさを人々に警告するために「悪魔憑き」という本を書いた。

カバラの探求によって魔術の本物の秘密に入門した者は、人の邪悪さに身を任せた呪いの力にさらされている社会の危うさを心配する。

前記の様な理由から、１９世紀にMirvilleがテーブル ターニングについての本を書いた様に、ボダンは１５８０年に「悪魔憑き」という本を書いた。

ボダンは解釈無しで呪いについての事実の情報を集めた。

自然科学が呪いに気を使わないにもかかわらず、自然科学が呪い以外のものに気を取られているにもかかわらず、ボダンは、呪いという、隠された感化力の存在と、悪人の霊の魔術の犯罪行為を確認した。

１５８０年の大衆はボダンに注目しなかった様に、１９世紀の大衆はMirvilleに注目しないであろう。

なぜなら、真剣な人々を動かすには、呪いの現象を示し呪いの原因について早まった判断をするだけでは不十分である。

人は呪いの原因を探求し説明し実証する必要が有る。

呪いの原因を探求し説明し実証する事はエリファス レヴィがまさに試みている事である。

呪いの原因を探求し説明し実証する人々はより良い成功と名誉を得られるであろうか？　いいえ！

憎悪による呪いの様に、愛による呪いにも似た祈りによって、人は死ぬ可能性が有る。

息の下にいると吸血鬼の花嫁の様に自身が消耗する様に感じる、他人から力を奪う肉欲が存在する。

悪人が善人を苦しめるだけではなく善人は知らないで悪人を苦しめる。

アベルの思いやりは、カインの激しさにとって、長く苦しい呪いであった。

悪人が善人を憎む源は自己保存しようとする先天的なものである。

(

　悪人は自己保存しようと試みる。

　人が自己保存しようと試みるのは先天的なものである。

　)

　さらに、悪人は善が悪人を苦しめている事を認めないで心の平静のために悪を正当化する。

　カインの目にはアベルは猫をかぶった者に見えた。

　カインの目にはアベルは臆病者に見えた。

　カインの目にはアベルは神への恥ずべき従順によって人性と自尊心を裏切っている者に見えた。

　アベルを殺す前にカインはどれほど苦しんだ事か！

　仮にアベルが悪人は善人によって苦しむ事を理解していれば、アベルは悪人を嫌がったであろう。

　反感は呪いの予感である。

　反感は憎悪による呪いの予感である。

　反感は愛による呪いにも似たものの予感である。

　なぜなら、反感の後に愛が起きる時が有る。

　反発の後に愛が起きる時が有る。

　星の光は、愛や呪いといった感化力が来る事を、多かれ少なかれ知覚できる様に、多かれ少なかれ自発的に、神経組織に作用する事によって、人に知らせる。

　すぐの意気投合といったすぐの共感、電撃的な恋愛は、強力な磁気の電池の放電の様に、正確に数学的に明らかである、星の光の爆発である。

秘伝伝授者ではない人が呪いといったものを実践する事は、見えない火薬の近くで火を絶えずもてあそぶ人を突然の危険が襲うかもしれない様なものである事を理解できる。

星の光は人に浸透している。

星の光で人は満ちあふれている。

人は場所を空けるために星の光を絶え間無く放射して新しい星の光を引き寄せる。

特に、目と手は星の光を引き寄せたり放射する様に創造されている神経の道具である。

親指には手の両極性が存在する。

前記の理由から、いなかで未だに生き残っている魔術的な口伝では、疑わしい人々の集まりにいる時は、親指を 2 つに折りたたんで手の中に隠すべきである。

疑わしい人に視線を固定するのを避けるべきである。

予期しない流体の放射と、引き寄せる視線を避けるために、恐れるべき人を先に見分けるべきである。

固有の同化によって星の光の流れを破壊する力を持つ何種類かの動物が存在する。

同化によって星の光の流れを破壊する力を持つ動物は人に激しい反感を抱く。

同化によって星の光の流れを破壊する力を持つ動物は目にいくらかの呪う力を持っている。

例えば、同化によって星の光の流れを破壊する力を持つ動物はヒキガエル、バシリスク、tard である。

ヒキガエルといった同化によって星の光の流れを破壊する力を持つ動物を、飼いならし生きたまま持ち運び同室させると、星の光による酩酊による幻や誘惑への身代わりに成る。

エリファス レヴィがここで初めて星の光による酩酊という言葉を使った。

星の光による酩酊が抑えられない肉欲、精神的な高まり、愚かさの全ての現象を説明する。

ヴォルテールの弟子は「ヒキガエル、tard を飼え。ヒキガエル、tard を持ち運べ。これ以上馬鹿げた事は書くな」とエリファス レヴィに言うであろう。

エリファス レヴィは答えて後記の様に話すであろう。

エリファス レヴィは、理解できないものを笑いものにしたい誘惑を感じたら、理解できなかった知を持つ人々を愚者または狂人としてあつかいたい誘惑を感じたら、理解できないものについて真剣に考える様にしてきた。

大いなるキリスト教徒のマギであるパラケルススは呪いを呪いに対立させた。

パラケルススは反対の呪いの実践によって呪いを呪いに対立させた。

パラケルススは共感による治療の基礎を成した。

パラケルススは共感による治療を苦しんでいる患者本人にではなく患者の像に応用した。

パラケルススは患者の像を魔術の儀式によって形成し聖別した。

パラケルススの成功は信じられないほど驚くべきものであった。

パラケルススの段階に到達した治療者はいなかった。

パラケルススの治療の不思議に到達した治療者はいなかった。

パラケルススはメスメルより前に動物磁気を見つけた。

パラケルススは動物磁気という光の発見から究極の結果へ到達した。

と言うよりはむしろ、パラケルススは動物磁気という古代人の魔術への入門から究極の結果へ到達した。

古代人は現代人より大いなる魔術の代行者を理解していた。

古代人は星の光、Azoth、賢者の普遍のマグネシアを被造物の個体だけが放射する動物固有の流体であると考えなかった。

隠された哲学で、パラケルススは儀式の魔術に反対している。

パラケルススは確かに儀式の魔術の畏敬するべき力を無視しなかった。

パラケルススは疑わしい黒魔術のための儀式の魔術の実践をとがめようと試みた。

パラケルススは心の隠された磁石によって魔術師の全能性に到達した。

現代の熟練の催眠術師達はパラケルススより自身を上手に言い表せない。

パラケルススは病気を治すために魔術の象徴の応用、特にタリスマンの応用をすすめている。

１８章でパラケルススのタリスマンとガファレルの隠された図像学と古銭学について話すつもりである。

可能な場合は、代償によって、星の光の流れを断絶する事によって、または、星の光の流れをそらす事によって、呪いを治す事が可能である。

可能な場合に、代償によって、星の光の流れを断絶する事によって、または、星の光の流れをそらす事によって、呪いを治す全ての方法についてのヨーロッパのいなかの口伝は見事であり疑う余地無く古代からのものである。

可能な場合に、代償によって、星の光の流れを断絶する事によって、または、星の光の流れをそらす事によって、呪いを治す方法のヨーロッパのいなかの口伝はドルイドの教えの残骸である。

ドルイドは旅していた秘儀祭司によってエジプトとインドの神秘に入門した。

悪人の霊の魔術では、呪い、悪意が有る行動が持続的に確証した悪意は、常に実現する。

悪人の霊の魔術では、呪い、悪意が有る行動が持続的に確証した悪意から手を引いてやめたり、ためらうと、死ぬ危険性が有る。

ある人への呪いをやめたい悪人の霊の魔術師は、別の人を悪意で呪わなければいけない。

さもなければ、悪人の霊の魔術師は、自身の呪いの犠牲として、呪いに打たれて破滅するのは確実である。

星の光の動きは循環性である。

全ての Azoth または磁気の力の放射は、中間物または中間者に出会わない場合は、放射したものの元に戻る。

前記は、マルコによる福音 5 章の、汚れた霊が豚の群れの中に移され、汚れた霊が中に移された豚の群れが湖の中に身を投げた、不思議な話の説明である。

(

マルコによる福音 5 章の汚れた霊は悪意に汚染された星の光の流れの例えである。

豚の群れが身代わりに成ってくれた。

豚の群れが中間者に成ってくれた。

)

マルコによる福音 5 章の天の秘伝伝授の行動は悪意に汚染された磁気の流れを断絶する事である。

マルコによる福音 5 章で汚れた霊にとりつかれた者は直感で「我々の名前は軍団である。なぜなら、多数である」と話す。

悪人の霊による憑依は呪いである。

現在では悪人の霊による憑依は無数に存在する。

現在では呪いは無数に存在する。

Hilarion Tissot は狂人の治療に献身している祭司である。

Hilarion Tissot は、長い経験と絶え間無い実践によって、パラケルススの磁気学を知らないで応用する事によって、多数の狂人の治療に成功している。

Hilarion Tissot は狂気の原因が意思の病気か外からの意思の邪悪な影響であると考える。

Hilarion Tissot は全ての悪行を狂気による行動と考える。

Hilarion Tissot は、悪人を怒らせないで、悪人を矯正不能にしないで、悪人を罰するふりをして、悪人を病人としてあつかう。

Hilarion Tissot が天才と認められるまでに、どれほどの時間が必要であろうか？

１６章を読んだ時に、多数の大衆は、Hilarion Tissot とエリファス レヴィは互いを狂人として、あつかうべきである、と話すであろう！

多数の大衆は、狂人という不治の病のための病院へ入院するべきであると考えられたくないならば、エリファス レヴィはエリファス レヴィの理論の公開をやめるべきである、と話すであろう！

ガリレオは地をふんで「それでも地球はまわっている」と話した。

ヨハネによる福音８章３２節で人の救い主イエスは「あなたが真理を知れば、真理はあなたを自由にする」と話している。

ヨハネによる福音８章３２節「あなたが真理を知れば、真理はあなたを自由にする」に付け加えれば、あなたが正義を愛せば、正義はあなたを健全な人にする。

悪徳は毒である。

悪徳は肉体にとってすら毒である。

本物の徳は長生きを約束する。

儀式の呪いの方法は時間と人と共に変わる。

全ての狡猾な傲慢な人々は呪いの秘訣と呪いの実践方法を論理無しに自身の中に見つける。

狡猾な傲慢な人々は大いなる代行者の霊感の直感に従う。

大いなる代行者は人の悪徳や人の徳に応じる。

自身の傾向の類似によって、特に、自身の欠点の類似によって、大衆は他者たちの意思に従うと言える。

個人の欠点を甘やかす事は欠点を甘やかされた個人を手に入れる事である。

個人の欠点を甘やかす事は欠点を甘やかされた個人を類似した同様の欠点の道具に変える事である。

類似した欠点を持つ弱い者が強い者に従う時、弱い者は強い者の代行者に成る。

弱い者の精神は強い者の精神にとりつかれる。

弱い者は強い者と戦い反抗しようと試みるが、より深い奴隷状態に陥るだけである。

ルイ１３世はリシュリューに対して共謀を企てたが、結局、共謀者に見捨てられてルイ１３世はリシュリューに許しを求めた。

人は支配的な欠点を持っている。

全ての人が支配的な欠点を持っている。

人が持つ支配的な欠点は、魂にとって、罪深い生まれの、へその緒の様なものである。

人は、人が持つ支配的な欠点によって、敵に常にとらえられる。

ある人たちは、うぬぼれによって、敵にとらえられる。

ある人たちは、怠惰によって、敵にとらえられる。

多数の人たちは、利己主義によって、敵にとらえられる。

邪悪な狡猾な精神の持ち主に人が持つ支配的な欠点という罠を応用させれば、人は滅ぶ。

邪悪な精神の持ち主に人が持つ支配的な欠点という罠を応用させれば、人は狂人や愚者にならないかもしれないが、人々は分裂する。

前記の全てを力、星の光が説明する。

邪悪な精神の持ち主に人が持つ支配的な欠点という罠を応用させれば、人は外からの刺激に従う。

邪悪な精神の持ち主に人が持つ支配的な欠点という罠を応用させれば、人は外からの力に従う。

邪悪な精神の持ち主に人が持つ支配的な欠点という罠を応用させれば、人は直感的に理性に連れ戻す全てのものを恐れる。

邪悪な精神の持ち主に人が持つ支配的な欠点という罠を応用させれば、人は夢中に成っているものと正反対のものの言う事は聞かない。

心に自然に作用できる病気が最も危険な病気である。

心に自然に作用する病気、呪い、狂気を治すためには狂気自体を応用する事が唯一の治療方法である。

心に自然に作用する病気、呪い、狂気を治すためには狂人が夢中に成っているものとは正反対の想像上の満足を狂人にもたらす事が唯一の治療方法である。

例えば、天の栄光を求めさせる事によって、俗世のものへの野心を治そうと試みなさい。

神秘の治療。

本物の愛によって、放蕩を治しなさい。

自然な治療。

名誉ある成功を手に入れさせて、うぬぼれを治しなさい。

無私利他、少欲を見せて、貪欲を治しなさい。

名誉ある参加によって合法な利益を思いやりのある企業に手に入れさせて利己主義的な企業を治しなさい。

など。

前記の様に、心に自然に作用する事によって、多数の肉体の病気を治せるであろう。

なぜなら、心は肉体に作用する。

「上のものは下のものから類推可能である」、「下のものは上のものに似る」という魔術の原理の力、徳によって、心は肉体に作用する。

前記の理由から、ルカによる福音 １３章１６節で主イエスは体が曲がったまま麻痺していた女性について「サタンが女性をしばっていた」と話している。(悪魔は存在しない)

肉体の病気の原因は常に肉体的な欠陥、精神的な欠陥か行き過ぎた行為である。

肉体的な悪さの根源には常に精神的な病気が見つかるであろう。

肉体の病気の原因は常に肉体的な欠陥、精神的な欠陥か行き過ぎた行為である事と、肉体的な悪さの根源には常に精神的な病気が見つかる事は、自然の不変の法である。

１７

プフェ

R

占星術

星

ロ

屈曲

古代のマギの知が源である全ての術の中で、占星術は現在最も誤解されている。

自然の普遍の一致を信じる人は大衆には最早いない。

全ての原因と全ての結果の必然の織り交ざりを信じる人は大衆にはいない。

さらに、堕落したギリシャ人とローマ人は、カバラの唯一普遍の考えにつながる、本物の占星術を改悪した。

セフィロトの１０つ１組からもたらされた７つの天体と３つの動力因の考え。

ギリシャとローマの多神教の神々の名前に変えられた、天使、神の聖霊が統治する７惑星の特徴。

相互に作用する天体。

数に結びつけられた運命。

天の位階と人の位階の対応。

天の位階と人の位階のつり合いのものさし。

堕落したギリシャ時代、堕落したローマ時代、中世の、誕生日の星の位置による占いと星占いの創作者たちが本物の占星術を迷信にまで改悪し物質化した。

占星術を原初の純粋さに戻す事は、ある意味、新しい学問全体を創造する事であろう。

より近い結果と共に、本物の占星術の無上の原理を示す事だけを試みよう。

すでに話した様に、星の光は全ての見えるものの印象を受容し保存している。

前記から、天の日々の配置が星の光の中に反映されている。

星の光は命の主な代行者に成る。

星の光は概念に作用する。

星の光は形成に作用する。

星の光が形成に作用するという目的に自然に設計された一連の器官によって、星の光は幼子の誕生に作用する。

もし母の想像や欲望の見える印象を幼子という母胎の結果に伝えるほど星の光に十分な映像の豊富さが有れば、さらに星の光は大気中の印象と様々な全惑星系での星々の固有の配置がもたらす時機の結果の感化を新しく生まれた幼子の、思い通りの形にできる不確定な気質に伝えるであろう。

自然には無関係なものは存在しない。

道の石の多い少ないが偉人や大帝国の運命を破壊するか完全に変えるかもしれない。

空の星の配置は生まれた幼子に感化を与えるであろう。

空の星の配置はまさに生まれた事実によって星の世界の普遍の調和に入った幼子に感化を与えるであろう。

星々をつり合いに保持する、星々を空間の中で統一的に動かす原因である、引き寄せる力によって、星々は相互にしばられている。

全ての天体から全ての天体へ、引き寄せる力という、星の光の不壊の糸が伸びている。

引き寄せる力という、星の光の不壊の糸が結びついていない点は惑星上に存在しない。

まず、占星術の本物の達道者は占う相手が生まれた正確な時間と場所に注意する。

次に、星の光の影響の正確な計算の後に、占星術の達道者は地位による機会の多さ少なさを計算する。

占星術の達道者は運命の成就における地位、血族、相続した傾向、生まれつきの気質によって幼子がいつか出会うであろう利益または障害を計算する。

最後に、占星術の達道者は人の自由と人の自由の自発性を考慮に入れる必要が有る。

占星術の達道者は幼子が本物の人に成って大胆な意思によって運命の鎖から運命的な影響から独立する可能性を考慮に入れるべきである。

占星術の達道者は幼子が本物の大人に成って大胆な意思によって運命の鎖から運命的な影響から独立する可能性を考慮に入れるべきである。

占星術に余地を与え過ぎないが、占星術は疑う余地が無い。

占星術は学問的な魔術的な可能性の計算である。

占星術は天文学と同じくらい古い。

実は、占星術は天文学より古い。

聡明な古代の全ての予見者は自身の確信の最大限を占星術に与えている。

古代人といった大いなる専門家達が保証し支持する全てのものを浅はかに非難し拒絶してはいけない。

長い忍耐強い観察、徹底的な比較、頻繁にくり返された経験が古代の賢者達を占星術という決断に導いたに違いない。

古代の賢者達を論破するには、正反対の立場からの、同じ労力が必要である。

多分パラケルススは最後の大いなる実践的な占星術師であった。

星の感化力の下で形成したタリスマンによってパラケルススは病気を治した。

パラケルススは全ての肉体の上に統治する星の印を認めた。

パラケルススによれば、本物の万能薬、自然についての絶対の知が存在する。

パラケルススによれば、人の過失によって、万能薬、自然についての絶対の知は失われた。

パラケルススによれば、少数の秘伝伝授者だけが、万能薬、自然についての絶対の知を復活させた。

人、動物、植物の上に星の印を認める事はソロモンの本物の自然についての知である。

大衆はソロモンの自然についての知は失われたと話している。

しかし、他の全ての秘密の様に、カバラの象徴の中に、ソロモンの自然についての知の原理は保存されている。

星々を読み取るためには星々自体を知る必要が有ると容易に理解できるであろう。

空のカバラの天を １ ２ 分割した考えによって、星々自体の知は獲得できる。

ガファレルが復活させ説明した天の平面天体図の理解によって、星々自体の知は獲得できる。

ガファレルの平面天体図では、星座はヘブライ文字の形に成っている。

星座の神話の象徴はタロットの象徴に置き換えられている。

ガファレルはガファレルの平面天体図で祖の文字を元として参考にした。

ガファレルはガファレルの平面天体図で第 7 祖エノクのヘブライ文字を元として参考にした。

星の引き寄せる力の鎖に原初の文字ヘブライ文字の無上の線状構造線が良く見つかる。

ガファレルの平面天体図はエノクのヘブライ文字の原形として役立つ。

カバラのアルファベットであるヘブライ文字は空全体の一覧表である。

前記は詩において十分である。特に、前記は可能性において十分である。

学の有るギヨーム ポステルが見抜いた様に、タロットは明らかにエノクの原初の象徴的な作品である。前記を確信するにはタロットの研究で十分である。

賢者達が見つけた様に、星々の反映と引き寄せる力によって星の光の中に記されている印は全ての肉体の上に再生される。

星の光の結合が全ての肉体を形成している。

人は自身の星の印をひたいと手に持っている。

人は自身の星の印を主にひたいに持っている。

動物は自身の星の印を姿全体と個性的な特徴に持っている。

植物は自身の星の印を葉と種に持っている。

鉱物は自身の星の印を鉱脈と模様に持っている。

人、動物、植物、鉱物の星の印の特徴の研究がパラケルススの一生をかけた作業の全てであった。

パラケルススのタリスマンの象徴はパラケルススの人、動物、植物、鉱物の星の印の特徴の研究の結果である。

しかし、パラケルススは人、動物、植物、鉱物の星の印の特徴の鍵を残さなかった。

星のカバラのアルファベットと人、動物、植物、鉱物の特徴の対応は研究されるべきものとして未だ残っている。

知られている事について考えると、慣習にとらわれない魔術的な文字の知はガファレルの平面天体図で止まっている。

占いの真剣なわざは全て人、動物、植物、鉱物の星の印の知に眠っている。

手相占いは手の線の中に星々の文字を読み取るわざである。

人相占いは占う相手の人相に手相占いと同じまたは類似した特徴を探す。

事実、神経の収縮により人の顔に形成される線は運命的に決められている。

神経組織の放射網は星の引き寄せる力の鎖による世界間に形成されている星の光の網に絶対に類似している。

人生の運命は必然的に皮膚のしわに記されている。

見知らぬ人のひたいの上に一目でカバラの平面天体図の神秘の文字ヘブライ文字が 1 つ以上時々明らかに成る。

仮に、ひたいや手にヘブライ文字がギザギザに苦しげに記されているならば、意思と運命の戦いが存在する。

仮に、ひたいや手にヘブライ文字がギザギザに苦しげに記されているならば、最も有力な感情と傾向での、個人の過去全体が魔術師には明らかである。

前記から、未来を類推するのは容易に成る。

もし出来事が占い師の知慮と異なる時が有っても、達道者の超人的な知が占う相手を驚かせ確信を抱かせるであろう。

天体を元に人の頭は形成される。

幼子の受胎において、天体は引き寄せて放射して、人の頭は最初に形成され表れる。

前記の理由から、人の頭は絶対的に星の感化力に従っている。

人の頭は人の頭の様々な隆起によって星々の各自の引き寄せる力を証明する。

骨相占いの究極の言葉は学問的な純粋な占星術の中に見つけるべきである。

占星術を純化するための問題を学者の忍耐力と誠意に指示する。

プトレマイオスによれば、太陽は乾かし月は潤す。

カバリストによれば、太陽は正義の厳しさを表し月は思いやりである。

太陽は優しい大気の圧力の様なものによって嵐をもたらし月は満ち引きまたは海の呼吸の様なものをもたらす。

後記の様に、カバラの大いなる神の書物の １ つである、「光輝の書」には記されている。

「魔術の蛇、太陽の息子が世界を飲み込みかけた時に海、月の娘が魔術の蛇の頭の上に足を置いて魔術の蛇を和らげた」

前記の理由から、古代人には、ヴィーナスは海の娘であった。

ディアナが月であった様に。

前記の理由から、マリアという名前は星または海の塩を表す。

前記のカバラの考えを大衆の信仰の中で聖別するために、創世記 ３ 章 １ ５ 節で神は「女性は、(かかとで)蛇の頭を圧倒するであろう」と話している。

カルダーノは大胆な学徒の １ 人である。

カルダーノは当時の最も熟練した占星術師への反対を超越していた。

もしカルダーノの死の伝説を信じるのであれば、カルダーノは占星術における確信の殉教者であった。

カルダーノは全ての人が自身の人生の全ての年の幸運と不運を予見できる計算方法を残した。

カルダーノの理論はカルダーノ自身の経験に基づいている。

カルダーノは人生の全ての年の幸運と不運を予見できる計算方法が実際と異なった事は無いと保証している。

カルダーノの人生のある年の幸運と不運を予見できる計算方法では、ある年の運命を知るには、４ 年前、８ 年前、１ ２ 年前、１ ９ 年前、３ ０ 年前の出来事を要約する。

数４ は実現の数である。

８ は金星の数または自然のものの数である。

(8 年周期で五芒星を描く様に ５ 回、太陽、金星、地球は一直線に並ぶ。)

１ ２ は木星の周期である。

(木星の公転周期は約 １ ２ 年である。)

１ ２ は成功に対応する。

１ ９ は月と火星の周期である。

(月のメトン周期は １ ９ 年である。)

数３ ０ は土星の数または運命の数である。

(土星の公転周期は約 ３ ０ 年である。)

前記から、例えば、エリファス レヴィは １ ８ ５ ５ 年に自身に起こるであろう事を知りたい。

４ 年前に起きた人生と進歩に決定的な出来事を思い出す。

８ 年前の自然な幸せまたは自然な不運を思い出す。

１ ２ 年前の成功または失敗を思い出す。

１ ９ 年前の人生の変化と不幸または病気を思い出す。

３ ０ 年前の悲劇的な経験または運命的な経験を思い出す。

そして、変更不可能な既成の事実と時の進歩を考慮に入れて、惑星の感化力から類推可能である運を計算する。

後記の様に、エリファス レヴィは結論した。

４ 年前の １８５１ 年にエリファス レヴィは、控えめにしかし十分な報酬の仕事をしていた。

地位によるいくつかの困難が有った。

８ 年前の １８４７ 年にエリファス レヴィは、家族から乱暴に引き離された。

エリファス レヴィとエリファス レヴィの家族は大いなる苦しみを受けた。

１２ 年前の １８４３ 年にエリファス レヴィは、使徒として旅をしていた。

人々に教えを説いた。

悪意有る人々から迫害を受けた。

簡潔に言えば、名誉と迫害を受けた。

３０ 年前の １８２５ 年にエリファス レヴィは、神学校に入学して、家族生活は終わり、知と不運に至る運命的な経路に確かに入った。

１８５５ 年にエリファス レヴィは余生を決定する苦労、貧乏、苦しみ、精神的な国外追放、立場の変化、世に知られる事、反対を経験するであろうと考える。

前記の予想を現在の全ての兆候が認めさせる。

前記の様に、エリファス レヴィは結論する。

エリファス レヴィは １８５５ 年にカルダーノの占星術の計算の正確さを完全に確証する経験をする。

さらに、カルダーノの占星術の計算は古代の占星術師の転換期の年につながる。

「climacteric」、「転換期」という言葉は、「はしごの横木」を意味する。

「七つの第二原因について」でトリテミウスは世界の全ての国々の運の回帰または不運の年の不思議な計算をした。

「高等魔術の祭儀」の ２１ 章でトリテミウスの「七つの第二原因について」の正確な分析について、「七つの第二原因について」より分かり易く、フランス、ヨーロッ

パ、世界の近未来についての、トリテミウスの計算した時代から現代までの計算をトリテミウスの魔術のものさしを応用して話すつもりである。

　占星術の全ての大いなる達道者によれば、彗星は超人的な英雄の星である。

　彗星は大いなる変化を知らせるためだけに地球を訪れる。

　惑星は存在を集団的に統治する。

　惑星は人の運命を集団的に変える。

　太陽以外の恒星は惑星より遠くに存在する。

　太陽以外の恒星の作用は惑星より弱い。

　恒星は個人を引き寄せる。

　恒星は個人の傾向を決定する。

　星々の集団が結びついて １ 人の人の運命に作用する場合が有り、遠くの １ つの恒星の光線が多数の人々の精神を引き寄せる場合が有る。

　人が死ぬと、星が人の心の光を引き寄せる。

　前記の様に、魂は魂の美しさの進歩または退化に対応した星の体という新しい衣を創造して他の世界で再び生きる。

　魂が肉体から分離すると、星の体は星に似て回転する。

　星の体は生きている光の小球体の集合である。

　生きている光は自身のつり合いと自身の本当の動きを復活させるために常に自身の中心を求める。

　しかし、最初に、魂は蛇、未だ清められていない星の光の牢獄から自身を自由にする必要が有る。

　魂の意思の力が未だ清められていない星の光を乗り越えるまで、未だ清められていない星の光は魂を包み込み牢獄と成って牢獄に閉じ込める。

生きている星、魂が死んだ光、未だ清められていない星の光に浸る事は、メゼンティウスの様に苦しめながら徐々に精神的に殺す、恐ろしい苦しみである。

未だ清められていない星の光は魂を凍らせると同時に燃やす。

未だ清められていない魂が、未だ清められていない星の光から自由に成るには、形の流れに再び入って、新しい肉体という外皮をとるしかない。

魂は、魂に光を照らし微笑んでくれる慰めの星へ肉欲への勝利の中を飛んで行くために、死の動きの際に地上的なものである肉欲の鎖を破壊するために、心の自由を強めるために、先天的なものである肉欲と自発的に戦う事に成る。

前記の手がかりから、地獄の火、悪魔の様なもの、古い蛇の性質を理解できる。

人の救いと永遠の罰が星の光に存在すると知る事ができる。

全ての人が要求される。

自身の過失によって永遠の火の中に陥る危険をおかした後で、少数の人の全てが連続して選ばれる。

前記が、マギの大いなる崇高な啓示である。

全ての象徴の母である啓示である。

全ての考えの母である啓示である。

全ての神の教えの母である啓示である。

全ての宗教の母である啓示である。

序文でデュピュイは天文学が全ての宗教の源泉であると誤解したと話した。

正反対に、占星術が天文学の源泉である。

原初の本物の占星術は神のカバラの枝の 1 つである。

本物の占星術は知の中の知、神の知である。

本物の占星術は学問の中の学問、神の学問である。

本物の占星術は宗教の中の宗教である。

タロットの １７ ページ目で見事な象徴が見つかる。

タロットの １７ ページ目には裸の女性が描かれている。

裸の女性は真理、自然、知を表す。

裸の女性は ２ つの器の口を地に向けて一方の器から火を他方の器から水を地上に注いでいる。

裸の女性の頭上には八芒星と ７ つ １ 組の星々が光輝いている。

八芒星は金星である。

(8 年周期で五芒星を描く様に ５ 回、太陽、金星、地球は一直線に並ぶ。)

金星は平和と愛の象徴である。

裸の女性の周りには地の草木が繁栄している。

地の草木の １ つにプシュケの蝶が止まっている。

プシュケ、蝶は魂の象徴である。

よりエジプトの多分より古代のいくつかの写しでは、プシュケの蝶ではなく、鳥が地の草木の １ つに止まっている。

近代のタロットの １７ ページ目の名前は光輝く星である。

タロットの １７ ページ目の象徴はヘルメスの象徴のいくつかと類似している。

タロットの １７ ページ目の象徴は、薔薇十字団の秘密の考えの神秘の多数を表す、メーソンの秘伝伝授者の燃える星に対応している。

１８

ツァーデ

S

誘惑とほれ薬

正義

神秘

犬

魔術の学問の最も嘆かわしい悪用、コルネリウス アグリッパが毒の魔術と呼んでいるもの、と言うよりはむしろ、悪人の霊の魔術に取り組む必要が有る。

教えるためではなく警告するためにエリファス レヴィは悪人の霊の魔術について書く事を理解しなさい。

達道者を迫害する代わりに、もし人の正義が黒魔術の魔術師、人を毒殺する悪人の霊の魔術師だけを迫害していれば、すでに話した様に、正義の厳しさは良い立場に有った事と、悪人の霊の魔術の実践といった犯罪行為への最も厳しい罰は極端ではない事は、確実である。

ひそかに神の聖霊の魔術師のものである、命と死の正義が、憎むべき報復を満たすために、または、より憎むべき金銭への貪欲のために、常に発揮されてきたと考えてはいけない。

古代の世界の様に、中世では、魔術の結社は神秘の暴露者または冒涜者を徐々に打ち倒すか破滅させた。

魔術の剣で打ち倒す事を控える時は、流血が物騒である時は、トファナ水、毒の花束、ネッソスの外衣といった不思議な知られていない致死性の毒が遅かれ早かれ自由な裁きの畏敬するべき刑を執行するために用いられた。

　すでに話した様に、魔術には大いなる話してはいけない秘密が存在する。

　魔術には達道者同士でも話してはいけない秘密が存在する。

　魔術には特に大衆に推測させてはいけない秘密が存在する。

　以前は、魔術の話してはいけない無上の秘密の鍵を暴露するか無思慮な啓示で他人に見つけさせた者はすぐに死ぬべきであると非難され自殺するよう追い込まれる時も有った。

　ラアルプが記述した、カゾットの有名な予言の夕食会は、未だに理解されていない。

　ラアルプは、とても自然に、「話を誇張して詳細にして読者を驚かせたい」という誘惑に屈してしまった。

　ラアルプを除いて、このカゾットの夕食会に出席した全ての者どもは、神秘への入門者達であったが、神秘を暴露した者ども、または、少なくとも神秘を冒涜した者どもであった。

　カゾットの夕食会の全出席者のうち神秘への入門の段階において最高位であったカゾットは、光に照らされた学問の御名において、カゾットの夕食会の出席者どもの死を宣告した。

　そして、カゾットによる死の宣告は、多様に、実に厳しく、実行された。

　ちょうど、数年前に、また、数世紀前に、ヴィラール神父、ユルバングランディエ、その他の多数の者どもに対して起きた同様の死の宣告と同様に。

　革命家の哲学者どもは死んだ。

　宗教裁判によって牢獄に見捨てられたカリオストロの様に。

カトリーヌ テオスの神秘主義の党派者どもの様に。

魔術的な諸勝利と普遍的な陶酔の最中で自殺へと駆られた、無思慮なシュレプファーの様に。

カール サンドに刺された、裏切り者コッツェビューの様に。

突然に血まみれで殺された理由が誰にも分からずに、死体が発見された、その他の非常に多数の者どもの様に。

革命裁判所の裁判長がカゾットを非難した時の、革命裁判所の裁判長によるカゾットへの不思議な配慮をすぐに思い出すだろう。

１７９３年の畏敬するべき劇的事件の「ゴルディアスの結び目」は、未だに、秘密結社の最も暗い聖所に隠されている。

一般人達を自由へと解放しようと試みた善い信念を持った達道者達は、対立している相手達の方法と類似の方法によって戦ってくる、より古くからの口伝に所属している別の党派の達道者達と、対立してしまったのである。

大いなる秘密の実践の理論が暴露されてしまったせいで、大いなる秘密の実践は不可能に成ってしまった。

群衆、大衆は何も理解できなかったし、実に、大衆は全てのものを信じなかったし、大衆は更に落胆してしまった。

大いなる秘密は、以前よりも秘密に成ってしまった。

達道者達は、相互に行き詰まらせてしまって、他人を統治もできないし、自身を解放もできない権力を発揮する事しかできなかった。

達道者達は、相互に、相手を裏切り者として死を宣告し合った。

達道者達は、相互に、国外追放、自殺、ナイフや絞首台に身を任せてしまった。

多分、今日(こんにち)でも、隠された聖所への侵入者や、秘密への裏切り者は、同様の畏敬するべき危険に脅かされているかどうかを私エリファス レヴィに尋ねる事だろう。

好奇心旺盛な者どもの懐疑に対して、どうして私エリファス レヴィが応じる必要が有るであろうか？　いいえ！　不要である！

もし私エリファス レヴィが、大衆へ教えるために、暴力による死の危険を冒しても、確実に、大衆は私エリファス レヴィを助けてくれないだろう。

もし大衆が自身の安全を理由に恐れるのであれば、大衆は無思慮な研究を控えなさい。それが、私エリファス レヴィが話す事ができる全てです。

コルネリウス アグリッパが毒の魔術と呼んでいるものに戻ろう。

「モンテ クリスト伯」でアレクサンドル デュマはコルネリウス アグリッパが毒の魔術と呼んでいるもの、劣悪な学問の実践方法をいくつか明らかにしている。

犯罪の憂鬱な理論をくり返す事による同一の犯罪理論の詳細な説明は不要だろう。

植物を有毒にする方法の記述は不要だろう。

有毒植物を動物に与えて動物の肉を汚染する方法の記述と、有毒な動物の肉を人の食べ物に変えて毒の痕跡を残さずに人に死をもたらす方法の記述は不要だろう。

家の壁に毒を植えつける方法の記述は不要だろう。

セント クロイという所のガラスのマスクを作業者が必要とするほどのガスで大気を汚染する方法の記述は不要だろう。

古代の魔女カニディアと、魔女カニディアの憎悪するべき秘密は横に置きましょう。

また、サガナの地獄の儀式が、女毒殺者ロクスタの技術を、どれほど広めたかを調べるのはやめておきましょう。

次のように話すだけで十分だろう。

前記の最も悪名高い類（たぐい）の犯罪者どもは、伝染病のウィルス、爬虫類（はちゅうるい）の毒、有毒植物の樹液を組み合わせて精製したのである。

犯罪者どもは、きのこから致死性や催眠性の成分を、白花洋種朝鮮朝顔、桃、ビターアーモンドから窒息させる成分を抽出したのである。

前記の毒の一滴を、舌の上や、耳の中に垂らすと、雷光のように一瞬で、最強である、最良の性質を持つ生物でさえ殺してしまうのである。

アオサを牛乳で煮て毒蛇を溺死させた白い液体の毒は、同様の毒である。

犯罪者どもは、マンチニールという有毒な木の樹液や、ジャワという所の致死毒の果実を、長旅から持ち帰ったり、高額な費用で輸入したりした。

cassada による液体も、同様の毒である。

犯罪者どもは、火打ち石を粉々にし、爬虫類(はちゅうるい)の乾燥した粘液による汚れた灰と混ぜ、発情期の雌馬がかかっているウィルスや、雌犬の同様の分泌物によって、憎悪するべき、ほれ薬を作った。

犯罪者どもは、人の血と悪名高い毒薬を混ぜて、ラブレーの小説の人物パニュルジュによるブルボネーズのタルトを連想させる、香気だけで殺せる油を作った。

犯罪者どもは、錬金術の専門用語で、毒の処方せんを隠しさえした。

「ヘルメスの錬金術の書である」と主張している某古書よりも古い本に記されている「溶けている卑金属に投入する賢者の石の粉」の秘密とは、実際には、毒の粉の処方せんを継承させる代物に過ぎない。

「大奥義書」では、特に、「錬金法」という名目の下に非常に薄く偽装して、ある毒の処方せんをもたらしている。

「大奥義書」の毒の処方せんとは、緑青、ヒ素、おがくずを煎じた凶悪な毒薬であり、正しく作れば、浸された枝は急速に衰弱するであろうし、鉄の釘は急速に溶けるであろう。

魔術師ジャン バッティスタ ポルタは、著書「自然魔術」で、ボルジア家の毒の実例を記しているが、ご想像通り、魔術師ジャン バッティスタ ポルタは、(良い意味で)大衆をだましていて、毒関連は非常に危険であるので、真実を暴露していない。

そのため、私達、魔術師達は、魔術書の読者の好奇心を満たすために、魔術師ジャン バッティスタ ポルタの偽の毒の処方せんを記しているかもしれないのである。

ヒキガエル自体には毒は無い。

しかし、ヒキガエルは毒を取り込み易い。

ヒキガエルは動物界のきのこである。

そのため、魔術師ジャン バッティスタ ポルタは「太ったヒキガエルを取って、毒蛇と共に球形の瓶に入れなさい」と話している。

数日間、毒きのこ、植物ジギタリスのうちキツネノテブクロ、毒ニンジンだけを、ヒキガエルと毒蛇に食べさせます。

それから、叩いたり、焼いたり、考えられる全ての方法で苦しめたりして、ヒキガエルと毒蛇を怒らせ、ヒキガエルと毒蛇を死ぬまで怒らせ、飢えさせるのです。

トウダイグサとガラスの粉をヒキガエルと毒蛇の死体に振りかけます。

ヒキガエルと毒蛇の死体を密閉性の高いガラス容器に入れて、火で加熱して水分を全て抽出します。

ガラス容器を冷まします。

ガラス容器の底に残っている、不燃性の塵から、ヒキガエルと毒蛇の死体の灰を分離します。

そうして、(ヒキガエルと毒蛇による、)一方は液体、他方は粉の、2 種類の毒を入手できます。

ヒキガエルと毒蛇による液体の毒は、畏敬するべき Aqua Poffana と同じくらい、十分に効果的な毒です。

ヒキガエルと毒蛇による粉の毒は、ひとつまみを飲み物に混ぜて飲ませれば、どんな人でも、数日間で、まず、衰弱させ、老化させ、次に、恐ろしい苦しみの最中で死なせたり、完全に衰弱死させたりします。

ヒキガエルと毒蛇による毒の処方せんは、最も邪悪で不快な類(たぐい)の黒魔術の様相を呈していて、魔女カニディアと魔女メディアの憎悪するべき毒薬の調合を連想させて人に吐き気を催させる事を認めざるを得ない。

中世の悪人の霊の魔術師はサバトで毒の粉を受け取ったふりをした。

(実際は中世の悪人の霊の魔術師は憎むべき無情な方法で毒を作った。)

中世の悪人の霊の魔術師は毒を悪人や無知な人に高値で売った。

中世の悪人の霊の魔術師が毒を悪人に売った秘密の口伝がいなかに恐怖を広めて、魔術師は呪文という行動で人を殺せるという話に成った。

想像力が一度強まると、神経組織が一度悩ませられると、犠牲者は速やかに衰弱するし、血族や友人の恐怖が犠牲者に作用して犠牲者への損害を確証する。

悪人の霊の魔術師、魔女は長い間忍耐してきたうらみでふくれあがったヒキガエルの様な人である。

悪人の霊の魔術師は貧乏と冷たくあしらわれた事で憎しみに満ちている。

悪人の霊の魔術師が恐怖をもたらすのは悪人の霊の魔術師の慰めであり報復である。

悪人の霊の魔術師は社会に毒された。

悪人の霊の魔術師は社会で塵と悪徳だけを経験した。

社会に毒された悪人の霊の魔術師は悪人の霊の魔術師を恐れる全ての弱い人を毒した。

若さと美に対して悪人の霊の魔術師は自身の呪われた老いとひどい醜さの報復をする。

前記の、悪行と憎むべき秘密の実践が、悪魔との契約と呼ばれていた物である。

　悪に身と心をささげた人が、地獄に例えられる普遍の変更不可能の永遠の罰を当然の報いとして受けるのは、確実である。

　人の魂が悪人の霊の魔術という罪の深淵と狂気に堕ちる事ができるという事は確かに人を驚かせ深く悲しませる。

　しかし、無上の崇高な徳の高さのための基礎として悪人の霊の魔術という悪徳の深淵は必要ではないか？　はい！　悪人の霊の魔術という悪徳の深淵は徳の高さのための基礎として必要である！

　地獄の深さは、正反対のものである、無限の高さと天の崇高さを実証するのではないか？　はい！　地獄の深さは、正反対のものである、無限の高さと天の崇高さを実証する！

　北国では先天的なものである肉欲はより抑圧され生き生きとしている。

　イタリアでは肉欲はより拡散し易く火の様である。

　イタリアでは誘惑と邪視は未だに恐れられている。

　ナポリの大衆は、邪視に立ち向かうと無事ではすまない、と話している。

　ナポリの大衆は、邪視の能力を与えられている人を外見で見分けられる、と話している。

　達道者は「邪視から身を守るためには角を持つ必要が有る」という例え話を話している。

　文字通りに全てのものを受け取る大衆は慌てて小さな角で身を飾り達道者の「邪視から身を守るためには角を持つ必要が有る」という例え話の意味を知ろうとは夢にも思わない。

　ユピテル アモン、バッカス、モーセの特徴である角は心の力または熱意の象徴である。

達道者、魔術師の「邪視から身を守るためには角を持つ必要が有る」という例え話は「邪視から身を守るためには、大いなる大胆さ、大いなる熱意、大いなる思考によって、先天的なものである肉欲の致命的な流れを統治する必要が有る」事を意味する。

前記の様に、ほぼ全ての大衆の迷信は隠された知の大いなる言葉または不思議な秘密を大衆が誤解したものである。

ピタゴラスは、賢者には完全な哲学である見事な例え話を、大衆には一連の新しい虚しい儀式と可笑しい実践をもたらしたのではないか？　はい！

ピタゴラスは「社会的なまたは個人的な思いやりをすすめる」意味を教えるために「テーブルから落ちた(食べ)物を拾ってはいけない(。犬の物だから)。大いなる公道の木を切り倒してはいけない。あなたの庭に落ちた蛇を殺してはいけない」という透明な例え話を話しているのではないか？　はい！

ピタゴラスは「本物の自己認識は不自然な見方や社会の先入観と相反する」という意味を巧みに教えるために「たいまつの明かりによって、鏡の中の自分を見てはいけない」という例え話を話しているのではないか？　はい！

ピタゴラスの他の言葉も同様である。

知の無い偽物の弟子たち、大衆がピタゴラスに文字通りに従った事が良く知られている。

実に、いなかの迷信的な儀式には疑い無くピタゴラスの例え話の原始的な誤解によるものが多数存在する。

「迷信」を意味するsuperstitionの語源はラテン語で「上に立つもの」、「生き残ったもの」を意味するsuperstitioである。

迷信は思考や意味が死んだ後も生き残った象徴、例えである。

迷信は宗教の儀式の死体である。

迷信と秘伝伝授の関係は悪魔の概念と神の概念の関係の様なものである。

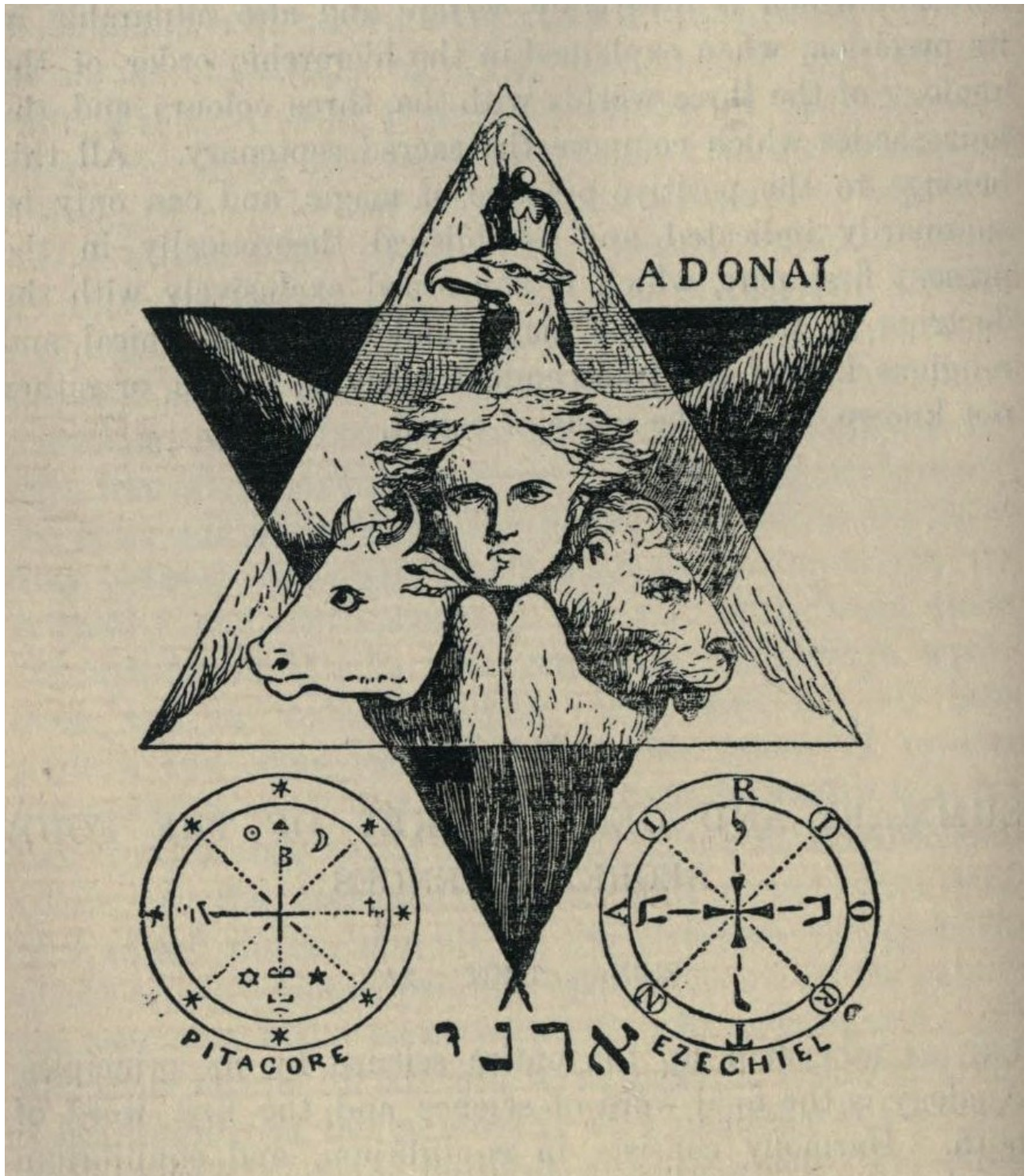
前記の意味で、偶像崇拝は禁止されている。

精神と霊感が失われた時に元は無上の神聖な考えは迷信的なもの、不信心なものに成る。

迷信は、無上の論理である神の様に、神の教えが衣を変えたものである。

迷信は、邪悪な人と無知な人によって、詐欺師に変わった聖職者の金銭への貪欲と悪事によって、古い儀式が見捨てられたものである。

エリファス レヴィは、アミュレットやタリスマンに根拠無しに記された、最早意味が理解されない、魔術の象徴と文字を迷信に含める。

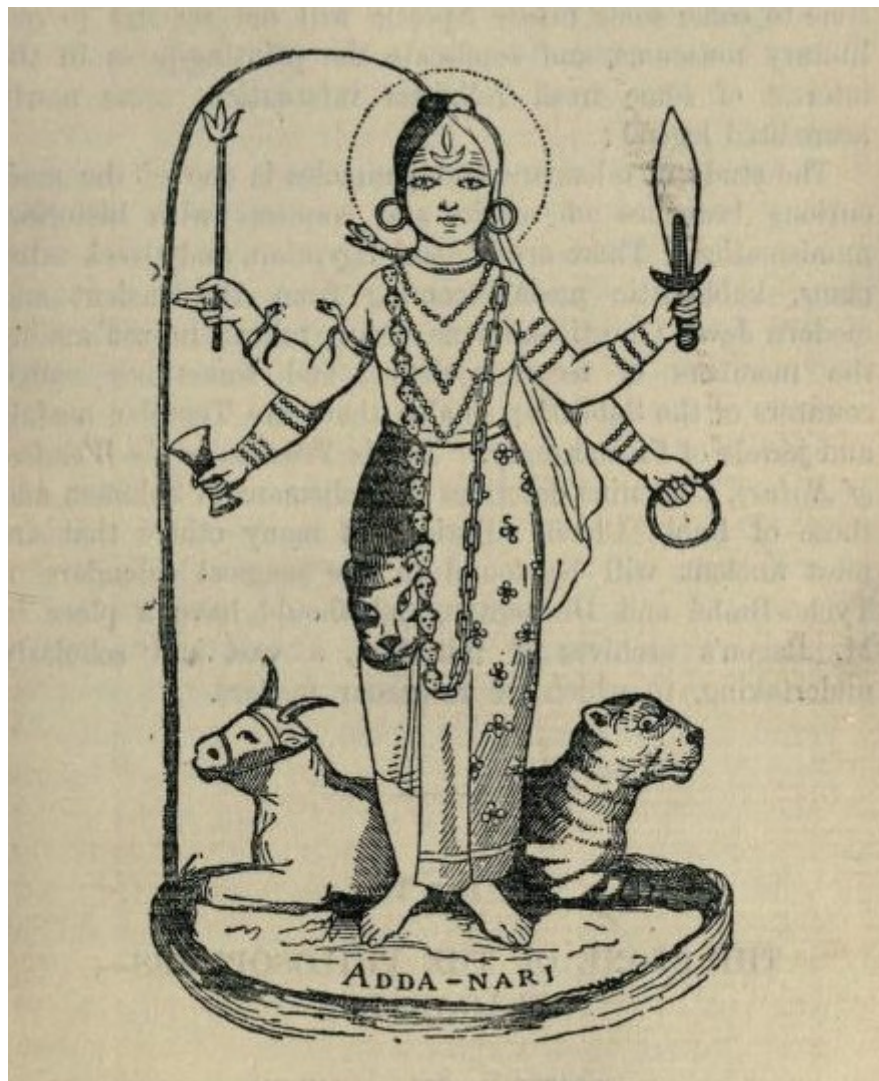
古代人の魔術の象徴は pantacle、カバラの総合であった。

ピタゴラスの車輪はエゼキエルの車輪に似た pantacle である。

ピタゴラスの車輪とエゼキエルの車輪という 2 つの象徴は同じ秘密、意味を含んでいる。

ピタゴラスの車輪とエゼキエルの車輪という 2 つの象徴は同じ哲学によるものである。

ピタゴラスの車輪とエゼキエルの車輪は全ての pantacle の鍵である。

前記についてすでに話した。

スフィンクスの 4 つの獣、と言うよりはむしろ、4 つの獣の頭を持ったスフィンクスである預言者エゼキエルの智天使ケルブは、大いなる秘密にふれた様に、後記の見事なインドの象徴adda nari と同じである。

ヨハネの黙示録で使徒ヨハネは預言者エゼキエルの象徴に従い象徴を創造した。

実に、不思議な書物ヨハネの黙示録の不思議な多数の象徴は魔術の pantacle である。

カバリストはヨハネの黙示録の象徴の鍵を容易に見つけられる。

キリスト教徒の大衆はキリスト教への信仰を広めるために魔術という学問を拒絶する。

キリスト教徒の大衆は魔術という考えの源泉を隠そうと試みた。

キリスト教徒の大衆は全てのカバラの書物と全ての魔術の書物を火で燃やす。

原本を破壊する事は写本を原本にする事である、と言える。

使徒行伝 １９章１９節で、疑い無く、ほめるべき意図から、使徒パウロはエフェソスの大衆が隠された学問の本を燃やすのを止めなかった。

６４２年頃にイスラム教徒のウマル イブン ハッターブはコーランを原本にするためにアレクサンドリアの図書館を破壊した。

新興宗教のために、新興宗教の書物を原本にするために、誰が未来の新興宗教の狂信者が図書館を燃やさないかどうか知るであろうか？

誰が未来の新興宗教の狂信者が印刷機を差し押さえないかどうか知るであろうか？

タリスマンと pantacle の研究は魔術の無上の不思議の１つである。

タリスマンと pantacle の研究は古銭学の歴史につながる。

インドのタリスマン、エジプトのタリスマン、ギリシャのタリスマン、古代ヘブライ人のカバラのメダル、近代のヘブライ人のカバラのメダル、グノーシス主義者のアブラクサスの象徴、秘密結社の隠された象徴、サバトの貨幣と呼ばれる物が存在する。

神殿騎士団のメダルとフリーメーソンの宝石が存在する。

Coglenius は自然の不思議についての論文でソロモンのタリスマンと Rabbi Chaël のタリスマンについて記している。

ティコ ブラーエの魔術のカレンダー、Duchentau の魔術のカレンダーに古代の多数の象徴が見つかる。

巨大な学問的なラゴンが集めた秘伝伝授の古文書を参照するべきである。

１　９

クォフ

T

賢者の石

太陽神を意味するエラガバルス

呼び出す

太陽

金

古代人は、太陽神を意味するエラガバルスまたはヘリオガバルスと呼んだ、黒い石の象徴で、太陽を敬礼した。

黒い石は何を表すのか？

どうして黒い石が太陽といった光を放つ天体の無上の光輝の象徴と成ったのか？

(エリファス レヴィの「魔術の歴史」「オシリスは黒い神である」と話す事によって祖は「子よ、あなたはランプを太陽と誤解している様なものである。しかし、ランプは夜の星の様なものに過ぎない様なものである。本物の太陽が存在する。闇から離れなさい。光を探しなさい」と話している様である。)

ヘルメスの弟子達、錬金術師達は、若返り薬エリクサーによる長命や錬金のための粉を達道者に約束する前に、賢者の石を探す様にすすめる。

賢者の石とは何か？

なぜ石なのか？

マタイによる福音７ 章 ２ ４ 節から ２ ５ 節でキリスト教の大いなる祖イエスはイエスを信じる者達に、もし建てたものが壊れ堕ちる事を望まないのであれば、石、岩の上に建てる様にすすめている。

(マタイによる福音７ 章 ２ ４ 節から ２ ５ 節「イエスの言う事を聞いて行う者は石、岩の上に家を建てた賢者に似ている。雨が降っても洪水が来ても風が吹いても賢者の家は壊れ堕ちなかった。なぜなら、賢者の家は石、岩の上に基礎が有った」)

マタイによる福音２ １ 章 ４ ２ 節でイエスはイエス自身をすみの基礎の石、すみの要石と呼んでいる。

マタイによる福音１ ６ 章 １ ８ 節でイエスは最も信心深い使徒ペトロに「あなたはペトロである。(『ペトロ』は石、岩を意味する。)私イエスはペトロという石、岩の上に教会を建てるであろう」と話している。

錬金術の達道者達は「基礎の石が、Azoth の第 ３ 要素である、本物の賢者の塩である」と話している。

Azoth は大いなるヘルメスの代行者の名前である。

Azoth は本物の賢者の代行者の名前である。

さらに、バシレウス ヴァレンティヌスの １ ２ の鍵に見られる様に、ベルナール トレヴィサンの象徴に見られる様に、賢者の塩、基礎の石は立方体の石の形で表される。

もう １ 度くり返して、基礎の石とは実際に何か？

基礎の石とは絶対の哲学の基礎である。

基礎の石とは無上の論理である神である。

基礎の石とは不動の論理である。

錬金の作業を夢見る前に、人は自身を知の絶対の原理に永遠に固定する必要が有る。

(基礎の石とは知の絶対の原理である。)

人は真理の試金石、基準と成る論理を保有する必要が有る。

(基礎の石とは真理の試金石、基準と成る論理である。)

先入観の奴隷である人は自然の王者に成れない。

先入観の奴隷である人は錬金術師に成れない。

賢者の石が第一に必要である。

しかし、どのようにしたら賢者の石は見つかるのか?

エメラルド板でヘルメスは「あなたは、濃いものから薄いものを、徐々に、大いなる勤勉によって、分離すべきである」と賢者の石の見つけ方を教えて話している。

人は、固定されたものから薄いものを、大いなる苦労と勤勉な集中力によって、分離する必要が有る。

人は、信じているものから確実なものを、分離する必要が有る。

人は、信心の領域から学問の領域を、鋭く切り込んで、区別する必要が有る。

人は知らないもの、知る事ができないものを信じる事を理解する必要が有る。

人は実際に知っているものを信じる事はできない事を理解する必要が有る。

未知のもの、不明なものは信じるしかない。

未知のもの、不明なものは信心の領域のものである。

既知のもの、明らめられたものは知るしかない。

既知のもの、明らめられたものは学問の領域のものである。

学問の基礎は論理と経験である、と類推する必要が有る。

信心の基礎は論理と心である。

言い換えると、賢者の石は、人の思慮が良心的な探求と適切な疑いに確信させた、信心深い熱意が信心にのみ帰する、本物の確信である。

賢者の石は熱意が無い論理には存在しない。

賢者の石は論理が無い熱意には存在しない。

賢者の石は熱意が有る論理に存在する。

賢者の石は論理が有る熱意に存在する。

本物の確信は論理と心が相互に従う事である。

本物の確信は、論理が、信じる心を知る事である。

本物の確信は、心が、知っている論理を信じる事である。

論理と信心の永遠の結合は、論理と信心の解体や分裂からではなく、論理と信心の相互の統治と姉妹の様な一致からもたらされる。

ソロモンの神殿の門の外の屋根を支える 2 つの柱ボアズとヤキンは論理と信心といった 2 つ 1 組のものを表す。

ボアズとヤキンは白い柱と黒い柱である。

ボアズとヤキンは区別されている。

ボアズとヤキンは分離されている。

ボアズとヤキンは正反対に見える。

しかし、盲目の力がボアズとヤキンをくっつけて、いっしょくたにしようと試みると、神殿の門の外の屋根は堕ちる。

ボアズとヤキンは分離されていると、ボアズとヤキンという 2 つの力は一致する。

ボアズとヤキンをいっしょくたにすると、ボアズとヤキンという 2 つの力は相互に破壊し合う。

まさに同じ理由から、宗教的な権力が俗世の権力を奪おうと試みると、宗教的な権力は弱められる。

俗世の権力が宗教的な権力を奪おうと試みると、俗世の権力は宗教的な権力に侵食される。

法王グレゴリウス 7 世は法王の権力を失った。

宗教を解体、分裂しようと試みた権力者は権力を失った。

宗教を解体、分裂しようと試みる権力者は権力を失うであろう。

人のつり合いは両足を必要とする。

引き寄せる力としりぞける力という 2 つの力によって世界は引き寄せ合う。

生物の発生には男性と女性という 2 つの性が必要である。

前記がボアズとヤキンというソロモンの神殿の門の外の 2 つの柱が表すソロモンの秘密の意味である。

錬金術師の太陽と月はボアズとヤキンに対応している。

錬金術師の太陽と月の一致、ボアズとヤキンの一致は賢者の石の完成と安定をもたらす。

太陽は真理の象徴である。

なぜなら、太陽は光の見える源泉である。

黒い原石は安定の象徴である。

前記の理由から、古代人はエラガバルス、ヘリオガバルス、黒い石を太陽の象徴とした。

前記の理由から、中世の錬金術師達は、賢者の金を創造する第一の手段として、賢者の石を強調する。

中世の錬金術師達は、6 つの卑金属を金、太陽、真理、光に変える命の力を変える第一の手段として、賢者の石を強調する。

賢者の石を見つける事は、大いなる務めの第一の絶対必要な務めである。

賢者の石は副次的に応用できる。

本物の錬金術師の塩、水銀、硫黄による、精神的な生きている金の所有者は、賢者の石によって、自然の類推によって、自然の金を見つけられる。

達道者は「賢者の石を見つける事は絶対を見つける事である」と話している。

達道者は「賢者の石を見つける事は神を見つける事である」と話している。

絶対は誤りの余地が無い。

絶対は気化し易いものの固定である。

絶対は想像力の統治である。

絶対は存在の必然である。

絶対は神の必然である。

絶対は論理と真理の不変の法である。

絶対は存在する事である。

絶対、存在する事は人が存在するより前から存在している。

神自体が、存在の論理無しでは、絶対無しでは、存在できない。

神自体が、無上の論理の力によってのみ、必然の論理の力によってのみ、絶対の力によってのみ、存在できる。

無上の論理、必然の論理は絶対の論理である。

もし人が信心のための論理的な堅固な基礎を望むのであれば、人は絶対を信じる必要が有る。

最近の大衆は「神は仮定に過ぎない」と話している。

しかし、絶対の論理は仮定ではない。

絶対は存在するのに必要なものである。

トマス アクィナスは「神が望んだから正しいのではなく正しいから神は望むのである」と話した事が有る。

仮にトマス アクィナスが「神が望んだから正しいのではなく正しいから神は望むのである」という美しい思考から全ての結果を論理的に導き出していたならば、トマス アクィナスは賢者の石を見つけたであろうし、学派の天使に成れたであろうし、宗教改革者に成れたであろう。

神の論理性と論理的な神を信じる事は無神論を不可能にする。

ヴォルテールは「もし神が存在しないのであれば、神を創造する必要が有るであろう」と話した時に、ヴォルテールは神の中の論理性を理解した、と言うよりはむしろ、ヴォルテールは神の中の論理性を感じた。

実際に、神は存在するのか？

神は存在するのか実際に知る事はできない。

しかし、人は神は存在する様に望む。

人は神は存在すると信じる。

論理的な神を信じる事は論理的な信心である。

なぜなら、論理的な神を信じる事は学問に疑う余地を与える。

事実、知る事はできないが可能性が高い様に見えるものだけを信じる事ができる。

「知る事はできないが可能性が高い様に見えるものだけを信じる事ができる」と考えない事は狂う事である。

「知る事はできないが可能性が高い様に見えるものだけを信じる事ができる」と話さない事は、光に照らされた者の様に話す事、啓示を受けた者の様に話す事か、狂信者の様に話す事である。

狂信者には賢者の石は約束されない。

無知な大衆は、盲信を知の代わりにして、妄想を経験の代わりにして、現実離れした非論理的な物を現実の代わりにして、キリスト教を道から逸らした。

多数の時代の宗教裁判官たちは魔術を絶滅させようと戦ってきた。

古代人は人の精神の発見を闇で包み込んだ。

人は自然の現象の鍵を暗中模索している。

唯一不変の法が全ての自然の現象を左右する。

賢者の石は唯一不変の法を表す。

立方体は賢者の石を表す。

(立方体は正方形だけによる立体である。)

カバラでは４つ１組が唯一不変の法を表す。

唯一不変の法は神のテトラグラマトンの全ての神秘をヘブライ人に与えた。

ヨハネの黙示録２１章１６節で天のエルサレムが正方形である様に、あらゆる意味で賢者の石は正方形である、と言えるかもしれない。

立方体の一方の面にはソロモン他方の面には神と記されている。

立方体の一方の面にはアダム他方の面にはエヴァと記されている。

立方体の一方の面にはAzoth他方の面にはINRIと記されている。

立方体の各面にはソロモン、神、アダム、エヴァ、Azoth、INRIと記されている。

Sieur de Nuisementがフランス語に訳した賢者の塩についての書物の最初には立方体の上に立っている地の霊、地上の霊、星の光を表す者が描かれている。

星の光を表す者の舌は火の舌である。

星の光を表す者の男性器はケーリュケイオンである。

星の光を表す者は太陽と月の象徴を右胸と左胸につけている。

星の光を表す者はあごひげを生やしている。

星の光を表す者は王冠をかぶっている。

星の光を表す者は王笏を手に持っている。

立方体の上に立っている星の光を表す者は塩と硫黄の台の上の賢者の Azoth である。

星の光を表す者の頭は象徴的なメンデスのヤギの頭である場合が存在する。

立方体の上に立っている星の光を表す者は神殿騎士団のバフォメットである。

立方体の上に立っている星の光を表す者はグノーシス主義者の神の言葉である。

立方体の上に立っている星の光を表す者という奇形の象徴は、賢者にとって思考の糧を与えた後に、大衆にとって、かかしに成った。

立方体の上に立っている星の光を表す者という思考と信心を表す罪の無い象徴は激しい迫害の口実に成った。

無知な人は何とあわれな者か!

しかし、もし無知な人が知ったら、どんなに無知だった人は自身を嫌う事か!

２　０

　レシュ

　U

　万能薬

　頭

　復活

　輪

　唯一普遍の考えによれば、類推可能性の法の論理によって、心の病気が肉体の病気の多数をもたらす。

　大きな肉欲に身を任せると常に対応する大病にかかる。

　七つの死に至る大罪と呼ばれているものが存在する。

　(

　七つの大罪、七つの死に至る大罪は傲慢、金銭への貪欲、色欲、憤怒、怠惰、暴食、嫉妬である。

　七つの徳は信仰、希望、愛、勇気、思慮、節制、正義である。

　)

　なぜなら、七つの死に至る大罪は肉体の実際の死の原因と成る。

　アレクサンドロス大王は傲慢により死んだ。

　アレクサンドロス大王はふだんは傲慢ではなかった。

　アレクサンドロス大王は傲慢によって死の原因と成った行き過ぎた行いに従った。

　フランソワ１世は色欲により死んだ。

ルイ１５世は「鹿の園」という個人的な娼館により色欲により死んだ。

マラーが暗殺された時、マラーは憤怒と嫉妬により腐敗していた。

マラーは傲慢により狂っていた。

マラーは自分だけが正しい人間であると信じていた。

マラーはマラーではない全ての人を殺そうとしていた。

１８４８年のフランス革命、１８４８年の二月革命の後で数人が堕落した野心により死んだ。

人が意思を道理に反した傾向に変更不可能なほどに固めるとすぐに、人は死んでいる様なものであり、人が当たって砕ける石、岩は遠くない。

(マタイによる福音２１章４４節「イエスという石につまずきイエスという石の上に倒れ堕ちる人は壊されるであろう。イエスという石を倒し堕とした人は下敷きに成り粉々に砕かれるであろう」)

人が「知は命を保ったり長くする」と話している事は正しい。

ヨハネによる福音６章５５節で大いなる主イエスは「私イエスの肉は本物の食べ物である。私イエスの血は本物の飲み物である(。私イエスの血肉、精神を自分の物にしなさい)」と話している。

ヨハネによる福音６章５４節でイエスは「私イエスの肉を食べ私イエスの血を飲んだ人は永遠の命を手に入れる(。私イエスの血肉、精神を自分の物にした人は魂の永遠の命を手に入れる)」と話している。

ヨハネによる福音６章６０節で未だ大衆である弟子たちはイエスの言葉を理解できなくて「物質的に血と肉を食べなさいとはひどい言葉である。聞いていられない」と話した。

ヨハネによる福音６章６３節でイエスは「物質的な肉は精神的には何の役にも立たない。私イエスがあなたに話している言葉が精神であり魂の永遠の命である」と話した。

マタイによる福音２６章２６節から２９節の最後の晩餐で死ぬ前にイエスは、イエスの命の記憶をパンという例えに結びつけ、イエスの精神の記憶をワインという例えに結びつけた。

イエスは、イエスの命の記憶をパンという例えに結びつけて、イエスの精神の記憶をワインという例えに結びつけて、信仰、希望、愛の教会を創造した。

イエスが「イエスの血肉、精神を自分の物にしなさい」と話している様に、ヘルメスの達道者達、錬金術師達は「真理を自分の物にしなさい。真理を日々飲む源泉としなさい。真理を自分の物にすれば、あなたは賢者の魂の不死を手に入れるであろう」という意味で「金を飲み物にしなさい。金を飲み物にすれば、万能薬を手に入れるであろう」と話している。

節制、魂の平静、性格の純粋さ、意思の平静と合理性は人を幸せにするだけではなく強くし健全にする。

論理と善での成長によって人の魂は不死に成る。

人は自身の運命の創造主である。

神は人自身の協力無しでは人を救えない。

賢者には死は存在しない。

死は幻である。

大衆の弱さと無知が死を恐ろしいものにする。

変化は動きの現れである。

動きは命を明らかにする。

もし死体が完全に死んでいるのであれば、死体は分解されないであろう。

全ての死体の要素である分子は生きている。

全ての死体の要素である分子は自由に動く。

全ての死体の要素である分子は分解する。

あなたたちは、死体より先に、精神が、死体から解放されて自由に成って、死んでいるかもしれない、と夢想している！

あなたたちは最も濃い物である肉体が消えない時に思考や思いやりが死ぬと誤って信じている！

もし変化を死と呼ぶのであれば、人は日々死に生まれ変わっている。

なぜなら、人の肉体は日々変化する。

肉体や星の体という魂の衣を汚すのを恐れなさい。

肉体や星の体という魂の衣を引き裂くのを恐れなさい。

しかし、死ぬ時が近づいた時に肉体という魂の衣を葬る事を恐れるな。

死体の防腐保存やミイラ化は自然に反する迷信である。

死体の防腐保存は死を創造する試みである。

死体の防腐保存は命が必要としている物質の無理な石化である。

しかし、死体を急に破壊してはいけない。

自然のわざに突然は無い。

魂を去らせるために肉体と魂のつながりを急に断絶する危険をおかしてはいけない。

人は一瞬で死なない。

眠りの様に、人は徐々に死ぬ。

血が温かい限り、神経が震える限り、人は完全には死んでいない。

もし肉体の器官に致命的な破壊が無ければ、偶然によって、または、強い意思によって、魂を肉体に呼び戻す事ができる。

学者は「死んだ人の復活を信じるよりはむしろ万人の証言を疑う」と話している。

しかし、「死んだ人の復活を信じるよりはむしろ万人の証言を疑う」と話している学者は早まった。

なぜなら、万人の証言を信じて学者は復活の不可能性を信じている。

仮に復活が証明されれば、何が起こるであろうか？

証拠を否定する必要が有るか？

理性を放棄する必要が有るか？

「死んだ人の復活を信じるよりはむしろ万人の証言を疑う」と話す事は非論理的である。

復活は不可能であると考えて誤るよりはむしろ、復活は可能であると類推するべきである。

行われた事から可能性へ到達できる。

復活は可能であると大胆に断言しよう。

復活は思っているより頻繁に起きていると大胆に断言しよう。

法的に死が証明された多数の人が実際は棺の中に入った後で死んでいるのが学問的に見つかっている。

棺の中で明らかに復活した人が学問的に見つかっている。

棺の中で苦痛から逃れるために動脈を切り開くために縛られた手を噛んでいた人が学問的に見つかっている。

医者は「棺の中に入った後で死んだ人は死んでいたのではなく昏睡状態であった」と話すであろう。

しかし、昏睡状態とは何か？

昏睡状態は復活できる不完全な死である。

事実を説明できない時に言葉によって困難から逃げ出す事は簡単である。

感覚によって魂は肉体とつながっている。

感覚が無い時は、魂が肉体から去ろうとしている確実な兆候である。

催眠状態は昏睡状態または思い通りに治せる人為的な死である。

ジエチルエーテルによる麻酔またはクロロホルムによる麻酔は死に至る時が有る本物の昏睡状態である。

肉体から一時的に自由に成って忘我状態に成った魂が意思の努力を完全に自由にする時に、地獄を圧倒する事ができる。

肉体から一時的に自由に成って忘我状態に成った魂が意思の努力を完全に自由にする時に、魂の心の力は星の引き寄せる力を超越する。

墓の中で復活するのは四大元素の霊だけである。

特に墓の中で意に反して復活するのは四大元素の霊だけである。

大いなる人、本物の賢者は生き埋めにされる事は無い。

「高等魔術の祭儀」で復活の理論と実践方法を話すつもりである。

人はエリファス レヴィが死んだ人を復活させた事が有るかどうかたずねるかもしれない。

エリファス レヴィは「もし私エリファス レヴィが死んだ人を復活させた事が有ると肯定して答えて話しても人々はエリファス レヴィを信じないであろう」と話す。

痛みを無くす事が可能かどうか考える。

外科の手術にクロロホルムによる麻酔または催眠術を用いる事が健全であるかどうか考える。

エリファス レヴィの考えでは、自然科学が認めるであろうが、感覚を無くす事によって人は命を弱らせる。

クロロホルムによる麻酔または催眠術で痛みを減らすと死ぬ可能性が高まる。

痛みは命のための戦いに証拠を与える。

エリファス レヴィは麻酔の下で手術した人が傷の手当てで過度に苦しむのを見た。

もし傷の手当てでクロロホルムによる麻酔に頼ると、患者が死ぬか、傷を手当てしている間痛みが復活し痛みが続く。

罰を受けないで自然をおかす事はできない。

痛み無しで自然をおかす事はできない。

２１

シュィン

X

予見

歯

熊手

狂気

本書「高等魔術の教理」の著者エリファス レヴィは人生で多数の事を大胆に行ってきた。

エリファス レヴィは恐怖で思考がとらえられた事が無い。

エリファス レヴィは論理的な畏敬の念を持って魔術の考えの究極に近づく。

ヴェールを外して啓示する事が問題である、と言うよりはむしろ、目覚めさせる事が問題である。

大いなる 秘密。

畏敬するべき秘密。

命と死の秘密。

創世記 ３ 章 ４ 節から ５ 節の「決して、あなた達は死なないであろう。あなた達は善と悪を知って神の様に成るであろう」という蛇の畏敬するべき象徴的な言葉が表すもの。

蛇自体が象徴的である。

創世記 3 章 4 節から 5 節で蛇は女性エヴァに「決して、あなた達は死なないであろう。あなた達は善と悪を知って神の様に成るであろう」と話している。

(

本物の正しい人は死なないであろう。

本物の正しい人は善と悪を知って神の様に成るであろう。

)

大いなる秘密の秘伝伝授者への恩恵の 1 つは、大いなる秘密の秘伝伝授者への恩恵を要約するものは、予見である。

大衆は予見は未知のものの推測を意味すると誤解している。

しかし、予見の本当の意味は崇高で言い表し難い。

予見の本当の意味は崇高で神聖で濫りに口にできない。

予見とは神性を発揮する事である。

ラテン語の divinus という言葉は「神の様なもの」を意味する。

神の様な者は人に成った神である。

神の様な者は神に成った人である。

「神の様なもの」を意味するフランス語の devin は「神」を意味するラテン語の dieu という 4 文字の言葉に文字 N を加えたものである。

文字 N は形がヘブライ文字の最初の文字アレフ、אに対応している。

文字 N、ヘブライ文字の最初の文字アレフ、אは大いなる秘密をカバラ的に象徴的に表す。

ヘブライ文字の最初の文字アレフ、אに対応するタロットの 1 ページ目には魔術師が描かれている。

知、わざ、または、力を究極的に意味する文字 N によって増殖したヘブライ文字の最初の文字アレフ、אの絶対の数の意味を完全に理解する者は、

５ の中の ４ にする様に、 ４ の中の ３ にする様に、 ３ の中の ２ にする様に、２ の中の １ にする様に、「神の様なもの」を意味するフランス語の devin という言葉の ５ 文字を足して原初のヘブライ文字で解釈する者は、

大いなる秘密の隠された名前を書けるであろうし、

神のテトラ グラマトン自体と同じに過ぎない言葉と神のテトラ グラマトン自体の象徴に過ぎない言葉を保有するであろう。

　言葉の力によれば、占い師に成る事は神の様な者に成る事である。

　言葉の力によれば、占い師 diviner に成る事は神の様な者 divine に成る事である。

　占い師に成る事はより神秘的な何者かに成る事である。

　人の神性または神の人性の ２ つの表れは予言と奇跡である。

　予言者に成る事は原因に存在する結果を事前に見る事である。

　予言者に成る事は星の光の中のものを読み取る事である。

　奇跡を起こす事は普遍の代行者に作用する事である。

　奇跡を起こす事は普遍の代行者を意思に従わせる事である。

　人は本書「高等魔術の教理」の著者エリファス レヴィは予言者、奇跡を起こす者であるかどうかたずねるであろう。

　いくつかの出来事が世界で起きる前にエリファス レヴィが書いた全ての書物を思い出しなさい。

　もし超常的な事を話しても、話したり行ったもの以外について、言葉だけで信じるであろうか？　いいえ！

　さらに、予言に必要な条件の １ つは、他人に強制されない事である。

　予言に必要な条件の １ つは、他人に誘惑されない事である。

　言い換えると、予言に必要な条件の １ つは、人に試されない事である。

知の達道者は他人の好奇心に従ってはいけない。

ローマのタルクィニウス王が全 9 巻の「シビュラの書」を適切な価値で評価しなかった時に、シビュラは「シビュラの書」の全 9 巻のうち 6 巻を燃やした。

マタイによる福音 1 6 章で天からの徴を求められた時に大いなる主イエスは天からの徴を表さなかった。

コルネリウス アグリッパは星占いを求められたが断って貧困により死んだ。

知の存在を疑う人に知の証拠を与えるのは、資格が無い人に秘伝伝授してしまう事である。

知の存在を疑う人に知の証拠を与えるのは、聖所の金を冒涜する事である。

知の存在を疑う人に知の証拠を与える者には賢者からの破門、除名がふさわしい。

知の存在を疑う人に知の証拠を与える裏切者には死がふさわしい。

知の全ての象徴は、予言の実在、大いなる魔術の秘密を表す。

予言の実在、大いなる魔術の秘密は、エメラルド板のヘルメスの唯一の古い考えに親密につながる。

エメラルド板の考えは、絶対の確信を哲学にもたらす。

エメラルド板の考えは、信心の普遍の秘訣を宗教にもたらす。

エメラルド板の考えは、混合物、分解、再構成、実現を自然科学にもたらす。

エメラルド板の考えは、賢者の水銀の応用を自然科学にもたらす。

錬金術師達は賢者の水銀を Azoth と呼んでいる。

エメラルド板の考えは、力学では、永久機関の力によって、人の力を増やす。

エメラルド板の考えは、神秘的、哲学的、物質的である。

エメラルド板の考えは、3 つの世界に対応している結果をもたらす。

(

自然科学、哲学、神の教え。

自由意思といった神だけの領域、概念の領域、形の領域。

神だけの楽園、霊の冥界、この世界。

)

エメラルド板の考えは、思いやりを神にもたらす。

エメラルド板の考えは、真理を知にもたらす。

エメラルド板の考えは、金を(心が)富んでいる人達にもたらす。

なぜなら、錬金は例え話であると同時に事実である。

全ての本物の知の達道者達が完全に良く理解している様に。

イエス。

賢者の石によって金を創造する事が実際に物質的に可能である。

賢者の石は、三重の昇華と三重の固定によって、塩、硫黄、水銀の混合物を 3 回 Azoth に結合したものである。

イエス。

錬金は易しい場合が有る。

錬金は 1 日で終わる場合が有るかもしれない。

錬金は一瞬で終わる場合が有るかもしれない。

錬金に何か月間か必要な場合が有る。錬金に何年間か必要な場合が有る。

しかし、大いなる務めを果たすには、錬金という大作業に成功するには、神の様な者に成る必要が有る。

金銭、利益を施す者に成るために、私事を犠牲にして、金銭、利益をあきらめる事が絶対に必要である。

ライムンドゥス ルルスは金を権力者たちに与えた。

ライムンドゥス ルルスはヨーロッパに施設を建てた。

ライムンドゥス ルルスは貧しいままにとどまった。

ニコラ フラメルは肉体が不死に成ったという大衆の伝説とは異なり肉体は死んだ。

ニコラ フラメルは禁欲によって金銭欲から完全に離れた時に錬金という大作業に到達した。

ニコラ フラメルは Asch Mezareph という書物を突然理解した事によって秘伝伝授者に成った。

カバリストのアブラハムがヘブライ語で Asch Mezareph を書いた。

多分カバリストのアブラハムは「形成の書」の編集者である。

ニコラ フラメルが Asch Mezareph という書物を突然理解した事は、当然の報いの直感によるものである、と言うよりはむしろ、金銭欲の禁欲という達道者に成るための個人的な用意が可能にしたものである。

エリファス レヴィはエリファス レヴィが十分に話したと信じる。

予見は直感である。

予見の鍵、直感の鍵は、類推可能性という普遍の魔術の考えである。

類推可能性によって、魔術師は夢といった予見したものを解釈する。

創世記 ４ ０ 章から ４ １ 章でエジプトで ２ ４ 祖ヨセフが他人の夢を解釈した様に。

星の光の反映からの類推は、太陽光の 7 色のスペクトルの色合いと同じで、正確である。

大いなる正確さで星の光の反映からの類推を計算し説明する事ができる。

しかし、夢を見た人の知的な人生の段階を知る事が絶対に必要である。

夢を見た人は夢の内容によって夢を見た人の知の段階を深く驚くくらい完全に明らかにする。

催眠、予感、予見は、偶然にまたは人為的に、意識が有る起きたままの眠りの中で、夢を見る傾向である。

催眠、予感、予見は、偶然にまたは人為的に、星の光の反映からの類推を知覚する事である。

「高等魔術の祭儀」で催眠を適切にもたらし導く待望の方法を与えて催眠について話すつもりである。

予言の手段としては予言者と相談者の交流が簡潔な手段である。

予言者と相談者の交流は、予言者の意思と相談者の意思という 2 つの意思を 1 つの象徴に固定するのに役立つ。

どうともとれる、複雑な、変化する形は星の流体の反映に集中する助けに成る。

杯の底に残ったコーヒーの模様、霧、卵白、などは、透明なもの、想像をもたらす。

杯の底に残ったコーヒーの模様、霧、卵白、などは、予見者の透明なものの中にだけ存在する、予見者の想像力の中にだけ存在する、予言の形をもたらす。

視神経のくらみと疲労が映像を水の中にもたらす。

視神経のくらみと疲労は見る機能を透明なものである想像力に任せる。

視神経のくらみと疲労は、星の光の反映である、現実の映像に解釈できる、幻を脳にもたらす。

前記の理由から、視力が弱く想像力が豊かである神経質な人が前記の様な占いに最も適している。

幼子が行う時に前記の様な占いは最も成功する。

(幼子は前記の様な占いに適している。)

予言のわざにおける想像力の機能を誤解しないようにしよう。

想像力によって人は見る。

想像力によって人が見る事は奇跡の自然な姿である。

しかし、想像力によって人は真実のものを見る。

想像力によって人が真実のものを見る事は自然のわざの不思議な姿である。

エリファス レヴィは全ての本物の達道者の経験を強調する。

本書「高等魔術の教理」の著者エリファス レヴィは全ての種類の占いを試した。

エリファス レヴィは自然科学的な作業の厳しさと相談者の誠意に比例した結果を常に手に入れた。

タロットは、古代の全ての神聖な書物に霊感を与えた奇跡の作品である。

タロットは、絵と数の正確な類推の論理によって、占いの無上の完全な道具に成る。

タロットは、絵と数の正確な類推の論理によって、完全な確信を持って占いに用いる事ができる。

少なくとも、ある意味で、タロットの神託は常に厳密に真実である。

タロットを占いに用いない場合ですら、タロットは秘密を明らかにする。

タロットは最も賢明な助言を相談者にもたらす。

１８世紀のアリエットは理髪師からカバリストに成った。

アリエットはエッティラとカバラ的に名乗った。

エッティラ、Etteilla はアリエット、Alliette をヘブライ語の様に逆に読んだものである。

エッティラは、タロットを ３０ 年間研究して、タロットという驚くべき作品に隠された全てのものの復活に近づいた。

しかし、エッティラはタロットという鍵を置き違えた。

(エッティラはタロットの絵と数の対応を誤った。)

エッティラはタロットを正確に理解していなかった。

(例えば、エッティラはタロットの １２ ページ目の吊るされた男を片足立ちの男と誤解した。)

エッティラはタロットの絵と数の対応を誤った。

エッティラはタロットの特徴を誤った。

エッティラはタロットの類推可能性は完全に壊せなかった。

それほど、タロットの共鳴と対応は大いなるものである。

エッティラの書物は現在は非常に稀である。

エッティラの書物は曖昧である。

エッティラの書物は読むのに疲れる。

エッティラの書物は洗練されていない。

エッティラの書物は全てが印刷されたわけではない。

エッティラは近代のタロット占い師の父である。

あるパリの本屋がいくつかのエッティラの手書きの原稿を持っている。

あるパリの本屋はいくつかのエッティラの手書きの原稿をエリファス レヴィに見せてくれた。

エッティラの書物の注目すべき点は著者エッティラの固執した自説と議論の余地が無い誠意である。

エッティラは人生の全てで隠された学問の偉大さを理解していた。

しかし、エッティラはヴェールの裏を見通す事無く聖所の入口で死んだ。

エッティラはコルネリウス アグリッパを少し尊敬していた。

エッティラは Jean Belot を尊敬した。

エッティラはパラケルススの哲学を知らなかった。

しかし、エッティラは高く鍛えられた直感を持っていた。

エッティラは最も忍耐強い意思を持っていた。

しかし、エッティラは思慮分別より気まぐれな思いつきの妄想が強かった。

エッティラは魔術師に成る資格が不十分であった。

(しかし、)エッティラの才能は、低俗な段階の熟練の公認の占い師に必要な才能以上ではあった。

エッティラのタロットは流行した。エッティラは成功した。

エッティラよりも熟達している魔術師がエッティラのタロットを完全に廃棄するのは多分に誤りだろうが、エッティラよりも熟達している魔術師は確実にタロットについてのエッティラのような誤った説明は断言しないだろう。

「高等魔術の祭儀」の 22 章で、タロットについて最終的な言葉を話す時に、タロットを完全に読み取る方法を話すつもりである。

「高等魔術の祭儀」の 22 章で、神の 7 つ 1 組を構成する 3 つの色と 4 つの色合いで、3 つの世界の類推可能性の位階を説明する時に、運命の可能性が高い機会だけではなく特に哲学と宗教の問題について、タロットがもたらす常に確実な見事な正確さの解決を話すつもりである。

前記の全ては魔術の実践である。

隠された学問という名前の下で知られている、というよりはむしろ、知られていない超越的な知の哲学的な宗教的な鍵と、超越的な魔術の教理についてだけの本

書では、魔術の実践の要約を示すだけにする。魔術の実践の理論を確立するだけにする。

２２

タウ

Z

４ つの秘密の知の要約と普遍の鍵

徴

トート

パーン

原理によって知の全てを要約しよう。

類推可能性は知の究極の言葉である。

類推可能性は信心の無上の言葉である。

調和はつり合いに存在する。

一致はつり合いに存在する。

つり合いは正反対のものの類推可能性に存在する。

絶対の統一性はものの無上の究極の論理である。

絶対の統一性という論理は唯一の人格でもないし ３ つの人格でもない。

絶対の統一性は唯一の人格でもないし ３ つの人格でもない事は論理である。

絶対の統一性は唯一の人格でもないし ３ つの人格でもない事は大いに論理である。

つり合いを創造するには、分離と統一が必要である。

つり合いを創造するには、両極による分離と中央による統一が必要である。

信心について推測する事は信心を壊す事である。

哲学に神秘主義を創造する事は論理を非難する事である。

　哲学に神秘的な直感によってのみ知る事ができるという神秘主義を創造する事は論理を非難する事である。

　論理と信心は自然に相互にしりぞけ合う。

　類推可能性は論理と信心を統一する。

　類推可能性は有限と無限を唯一仲介可能なものである。

　考えは仮定できるつり合いが常に向上していく仮定である。

　無学な人にとっては、類推可能性による論理と信心の統一は絶対の肯定である仮定である。

　類推可能性による論理と信心の統一は仮定である絶対の肯定である。

　知には仮定が必要である。

　類推可能性による論理と信心の統一という仮定の理解を探求する者は、信心を小さくする事無しに、知を大きくする。

　なぜなら、信心の向こう側は無限である。

　人は、知らないが論理が認めさせるものを信じる。

　人は、知る事はできないが論理が認めさせるものを信じる。

　信心のものを限定し定義する事は未知のものを定義する事である。

　信仰告白は人の無知と希望を明らかに話す事である。

　知の原理は人の勝利の記念碑である。知の原理は人が獲得したものの記念碑である。

　神を否定する人は狂っている。

　神を誤り無く定義できると考える人が狂っている様に。

　神ではないものを全て数え上げる事によって人は神を定義する。

　小さなものから大きなものを類推する事によって人は神を創造する。

前記から、人による神の概念は常に無限である人の概念である。

人は神を人を無限に拡大したものとして考える。

無限である人の概念は人を有限の神にする。

神を人を無限に拡大したものとして考える人は人を有限の神であると考える。

人は知というものさしによって信じているものを実現できる。

人は知らないが論理が認めさせるものによって信じているものを実現できる。

人は知る事はできないが論理が認めさせるものによって信じているものを実現できる。

人は信心というものさしによって意思する全てのものを行う事ができる。

人は知っている論理によって意思する全てのものを行う事ができる。

正反対のものの類推可能性とは光と影のつながりである。

正反対のものの類推可能性とは上のものと下のもののつながりである。

正反対のものの類推可能性とは空間と充満のつながりである。

例えは全ての考えの母である。

例えは封印の代わりに印象をもたらす。

例えは現実の代わりに映像をもたらす。

真実の例え話。

例え話の真実。

魔術師は考えを発明したわけではない。

魔術師は神の教えを発明したわけではない。

魔術師は真理に例えというヴェールをかけた。

魔術師は真実に例えというヴェールをかけた。

弱い目のために例えという影がもたらされている。

祖は例えでだましているわけではない。

祖は例えで明らかにした。

ラテン語 re-velare は「ヴェールを外して明らかにする」を意味する。

re-には「再び」という意味も有る。

ラテン語 velare は「ヴェールで覆い隠す」を意味する。

ラテン語 re-velare は「再びヴェールで覆い隠す」という意味に解釈できる。

祖は再び例えというヴェールで覆い隠した。

祖は例えという新しい影を創造した。

類推可能性は自然の全ての秘密の鍵である。

類推可能性は全ての啓示の唯一の基礎の論理である。

類推可能性という理由から、類似という理由から、神の教えは天に記されている。

神の教えは自然の全てに記されている。

神の教えは自然の全てに記されているはずである。

なぜなら、神の作品は神の書物である。

神が書いたものの中に神の思考の表れが見つかるはずである。

神の作品の中に神の思考の表れが見つかるはずである。

結果として、神が書いたものの中に神の存在の表れが見つかるはずである。

結果として、神の作品の中に神の存在の表れが見つかるはずである。

だから、人は神を無上の思考として理解する。

デュピュイとヴォルネイは自然という光輝く類推可能性の中に盗用の様なものだけを見た。

類推可能性は普遍性に導く。

類推可能性はデュピュイとヴォルネイを普遍性に導いたかもしれなかった。

普遍性は類推可能性によって啓示される古代の唯一の魔術とカバラの不変の考えの普遍性である。

類推可能性は自然の全ての力を魔術師に与える。

類推可能性は賢者の石の第 5 元素である。

類推可能性は永久機関の秘密である。

類推可能性は円積問題の解決である。

類推可能性はボアズとヤキンという 2 つの柱の上に休んでいる神殿である。

類推可能性は大いなる秘密の鍵である。

類推可能性は命の木の根である。

類推可能性は善と悪の知である。

知によって見えるものの中に類推可能性という正確なものさしを見つける事は、信心の基礎を固定する事である。

知によって見えるものの中に類推可能性を見つけて信心の基礎を固定した人は、奇跡を起こす杖を持つ様に成る。

原理と正確な言葉が存在する。

原理と正確な言葉とは大いなる秘密である。

賢者は大いなる秘密を探さない。

なぜなら、賢者はすでに大いなる秘密を見つけている。

大衆は大いなる秘密を永遠に探す。

大衆は大いなる秘密を見つけられないであろう。

精神的な錬金と物質的な錬金は類推可能性の実際的な鍵によって行われる。

隠された薬は命の源泉に応用された意思である。

隠された薬は星の光に応用された意思である。

星の光の存在は事実である。

星の光は大いなる魔術の秘密の上昇と下降のものさしである類推可能性に従って動く。

タロットの ２ ２ ページ目に描かれている裸の女性は、普遍の秘密、超越的な秘伝伝授の究極の永遠の秘密を表す。

裸の女性は片足立ちである。裸の女性は片足だけが地上にふれている。

裸の女性は右手に １ 本の磁気の杖、左手に １ 本の磁気の杖を持っている。

裸の女性は王冠の中を走っている様に見える。

天使、ワシ、牛、ライオンが王冠を持ち上げている。

(

人、ワシ、牛、ライオンが王冠を持ち上げている。

男性、ワシ、牛、ライオンが王冠を持ち上げている。

)

基本的に人、ワシ、牛、ライオンはエゼキエルの智天使ケルブに似ている。

人、ワシ、牛、ライオンはインドの象徴 adda nari、Addhanari に似ている。

adda nari、Addhanari はエゼキエルのアドナイの象徴に似ている。

(

アドナイは主を意味する。

アドナイは主である神を意味する。

)

タロットの ２ ２ ページ目の絵の理解は全ての隠された知の鍵である。

本書の読者は、カバラの象徴を知っていれば、タロットの ２ ２ ページ目を哲学的に理解したはずである。

大いなる務め、大作業の第 ２ のより重要な作業を理解する。

大いなる務め、大作業の第 １ の作業は、疑い無く、賢者の石を見つける事である。

しかし、どのようにして賢者の石を錬金のための粉にするのか？

魔術の杖はどのように用いるのか？

カバラの神の名前の実際の力は何か？

秘伝伝授者は知っている。

エリファス レヴィが正確に示した多数のものによって、もし大いなる秘密を見つければ、秘伝伝授にふさわしい人は知るであろう。

なぜ簡潔な純粋な真理を永遠に隠す必要が有るのか？

なぜなら、理解力を持っている神に選ばれた民は地上では常に少数である。

理解力を持っている神に選ばれた民は愚者と邪悪な者に囲まれている。

ダニエル書 ６ 章のライオンの穴の中の預言者ダニエルの様に。

さらに、類推可能性は位階の法を教える。

絶対の知は全能である。

絶対の知は最もふさわしい者だけが持つ必要が有る。

位階の混乱は社会を実際に破壊した。

マタイによる福音 １ ５ 章 １ ４ 節で主イエスは「もし盲人が盲人を導けば、盲人は諸共に穴に堕ちるであろう」と話している。

王者と祭司への秘伝伝授を復活させる事。

位階の秩序を再びもたらす事。

前記を、エリファス レヴィは秘伝伝授に最もふさわしい人に求める。

エリファス レヴィは全ての危険と啓示者を脅す呪いにさらされている。

エリファス レヴィは人性の中に生きている神の息を社会の混沌へ吹き込むのに大いに役に立つ事を行ったと信じている。

エリファス レヴィは世界の未来のために王者と祭司を創造するのに役に立つ事を行ったと信じている。

学派の天使トマス アクィナスは「神が望んだから正しいのではなく正しいから神は望むのである」と話している。

トマス アクィナスは「神が望んだから正しいのではなく正しいから神は望むのである」と話して「神は論理的である」と話しているかの様である。

論理は自立して存在している。

論理は私が思考するから存在するのではなく、論理は存在するから存在する。

(デカルトは「私は思考する。だから、私は存在する」と話している。)

論理が存在するか何も存在しないかのどちらかである。

あなたは何ものかが論理無しで存在する事を望むであろうか？

狂気自体が論理無しでは存在しない。

論理は必然である。

論理は法である。

論理は全ての自由の法である。

論理は全ての先導する自発性を導くものである。

もし神が存在するのであれば、神は論理によって存在する。

神は論理的に存在する。

論理とは無関係の絶対的な神が存在するという概念は黒魔術の偶像である。

論理とは無関係の絶対的な神が存在するという概念は誤っている。

論理とは無関係の絶対的な神が存在するという概念は悪人の霊の幻である。

悪人の霊は論理とは無関係の絶対的な神が存在すると誤解している。

悪魔は命という衣を脱ぎ捨てた見せかけの虚構の死である。

悪魔は堕落した文明の残骸の王座に座ったHirrenkeseptの幻である。

悪魔は人に成った神ヴィシュヌの救いを拒絶して憎むべき裸を隠す。